



第
469
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第469集

山
田
(2)
遺
跡

山田(2)遺跡

—国道280号道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

二〇〇九・三

2009年3月

青森県教育委員会

青森県教育委員会

山田（2）遺跡

－国道280号道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2009年3月

青森県教育委員会



山田(2)遺跡空中写真

(坂元(2)遺跡上空から、南方向を望む。対岸の伐採部分が山田(2)遺跡、左が陸奥湾。)



縄文時代中期末葉から後期初頭の土器



剥片石器・石核・剥片類

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成18年度から国道280号道路改築事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。平成18年度は蓬田村の山田(4)・山田(1)・山田(2)・坂元(2)の4遺跡の確認調査を実施し、平成19年度には滝沢・坂元(3)・山田(2)・山田(4)遺跡の本発掘調査を実施しました。

山田(2)遺跡は、平成18・19年度の調査結果から、縄文時代前期末葉から後期初頭を主体とする大規模な集落跡であることが判明しました。山田(2)遺跡の縄文時代の集落で最も特徴的なのは、石器の原材料、石器の加工の際に生じる石屑など、石器製作に係わる遺物が大量に出土したことです。県内の他地域の遺跡と比較するとその出土量は飛び抜けて多く、本遺跡では石器製作が大規模に行われていたことが分かります。

また、山田(2)遺跡では平安時代の集落跡も発見されました。陸奥湾西岸では平安時代の集落として蓬田大館遺跡が知られていますが、他の遺跡はあまり調査が進んでいないので、本遺跡の事例は、今後同地域の平安時代の実態を解明する上で貴重な資料となりうるものであります。

本報告書は、山田(2)遺跡の調査成果の一部をまとめたものです。調査対象面積が1万m²を超える、遺構・遺物の出土量が多いことから、平成20年度以降も調査が継続されています。遺跡全体の詳細はまだ明らかになっていませんが、今後この地域の歴史を考える上で、本報告書が貴重な情報を提供することを確信しております。

最後になりましたが、平素より埋蔵文化財の保護と活用に御理解と御協力をいただいている青森県県土整備部道路課をはじめとして、発掘調査から報告書の刊行まで御指導・御協力を賜った関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 伊藤博文

例 言

- 1 本報告書は、国道280号道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成18・19年度に発掘調査を実施した蓬田村山田(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 山田(2)遺跡の所在地は、青森県東津軽郡蓬田村大字瀬辺地字山田522外、青森県遺跡番号は12017である。
- 3 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は青森県埋蔵文化財調査センター職員が担当し、執筆者の氏名は文末に記した。依頼原稿は執筆者名を文頭に記した。
- 4 発掘調査は平成20年度にも実施し、平成21年度も継続する予定であるので、本報告書では平成18年度・19年度に実施した調査のうち、遺構の精査内容とその出土遺物を掲載している。
- 5 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 6 石器の石質鑑定、一部の遺物の実測、自然科学的手法による各種遺物の分析は、下記のとおり委託した。

石器の石質鑑定 国立大学法人弘前大学理工学部教授 柴 正敏

青森県立郷土館学芸主査 島口 天

石器の実測 株式会社 アルカ

放射性炭素年代測定 加速器分析研究所

出土木材の樹種同定 木工舎「ゆい」

炭化種子の同定 古代の森研究舎

- 7 本報告書に掲載した遺跡位置図には、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図『蟹田』・『油川』を複写して使用した。

- 8 基本層序及び遺構の土層注記には、農林水産省農林水産技術会議事務室監修『新版標準土色帖』(小山忠正・竹原秀雄 編 1993)を使用した。

- 9 遺構の表記は、下記の略号を使用している。

S B 堀立柱建物跡 S D 溝跡 S E 井戸跡 S I 住居跡

S K 土坑 S N 焼土遺構 S Q 配石・集石遺構 S R 土器埋設遺構

S T 捨て場 S V 溝状土坑 S X その他の遺構

- 10 挿図中の北方位は、座標北である。

- 11 測量法の改正により經緯度の記載方法が旧日本測地系から日本測地系2000に変更となったため、抄録では両者の数値を併記しているが、挿図・本文には全て旧日本測地系を使用している。

- 12 挿図のうち遺構図の縮尺は、各挿図にスケールとともに示した。ただし、座標の表示のあるものについてはスケールを示していない場合がある。

- 13 遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。ただし、例外的に縮尺が異なる場合はその都度指示してある。

土器・羽口 : 1/4 土偶・土製品 : 1/2 剥片石器 : 1/2 (ただし、石核類 : 1/3) 穰石器 : 1/4

14 挿図内で用いたスクリーントーンは次のとおりである。例外的なものはその都度指示してある。

遺構：	焼土	[■]	炭化物	[■]	床面	[■]				
遺物：	タタキ	[■]	スリ	[■]	火ハジケ	[■]	被熱	[■]	剥片石器の付着物	[■]

15 繩文原体の基本的な分類は『日本先史土器の繩文』(山内清男、1979年)に従ったが、観察表中ではその名称を一部略記した場合がある。

16 遺物写真の縮尺は、以下のとおりである。ただし、例外的に縮尺が異なる場合はその都度指示してある。

土器・羽口：約1/3 土製品：約1/2 石器：図版中に指示

17 本文中における遺物の記載・図版作成は、土器・土製品を担当者のうち中村が、石器・石製品を担当者のうち宮嶋が行った。

18 発掘調査および報告書作成における出土品、実測図、遺構・遺物の写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

序・凡例

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査の方法	2
第4節 調査の経過	4
第2章 遺跡周辺の地形地質と遺跡の層序	5
第3章 検出遺構と出土遺物	6
第1節 発掘調査と検出遺構の概要	6
第2節 検出された遺構と遺物	10
第3節 出土遺物の分類	91
第4章 理化学的分析	114
第1節 山田(2)遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	114
第2節 蓬田村山田(2)遺跡出土炭化材の樹種	120
第3節 山田(2)遺跡縄文時代より出土した炭化種実	125
第4節 山田(2)遺跡使用痕並びに剥離技術について	128
第5章 まとめ	140
写真図版	141
抄録	
奥付	



遺跡番号	遺跡名	時代
10001	丑ヶ沢(1)遺跡	縄文(後)
10002	長坂遺跡	縄文(後)
10003	坂元(1)遺跡	縄文(後)
10004	大平山元(1)遺跡	縄文(草創期・後)
10005	大平山元(2)遺跡	旧石器
10006	上小国遺跡	平安
10007	大平墓地公園遺跡	縄文(前・中)
10008	山本遺跡	平安
10009	館下遺跡	縄文(後・晩)
10010	丑ヶ沢(2)遺跡	縄文(後)
10011	南沢遺跡	平安
10012	大平山元(3)遺跡	縄文(前)
10013	大平山元(4)遺跡	縄文(前・後)

遺跡番号	遺跡名	時代
10014	根闊山館	中世
10015	鶴ヶ沢遺跡	縄文(晚)
12002	小頭(1)遺跡	縄文(後)、平安
12003	沙越(1)遺跡	縄文(後)
12004	蓬田大館遺跡	縄文(後・晩)
12005	玉松台(1)遺跡	縄文(晚)
12006	玉松台(2)遺跡	縄文(中)
12007	瀬辺流れ遺跡	縄文(早・前・中)
12008	田浦遺跡	縄文(前・中・後) 平安
12009	池田(1)遺跡	縄文(中・後)
12013	沙越(2)遺跡	縄文
12014	宮元(1)遺跡	平安

遺跡番号は『青森県遺跡地図』(青森県教育委員会 1998)に基づく。

図1 遺跡位置図 (\$=1/50,000)

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

青森県国土整備部道路課が昭和53年度から実施している国道280号道路改築事業（青森～蟹田間のバイパス整備）は、平成14年度までに油川～蓬田工区18.6kmが共用され、平成15年度から蓬田村瀬辺地～外ヶ浜町蟹田石浜の全長7.15kmの工事計画（蓬田～蟹田バイパス）が進められた。平成16年10月に、道路課から青森県教育庁文化財保護課へ当該事業予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、平成17年6月と8月に、バイパス整備事業を担当する青森県土整備事務所道路整備課（現 東青地域県民局地域整備部道路施設課）と文化財保護課が現地調査（分布調査）等について協議した。現地調査は同年9月から、道路整備課、外ヶ浜町教育委員会社会教育課、蓬田村教育委員会教育課、文化財保護課の4者により実施され、10月には青森県埋蔵文化財調査センターも加わって全工区の現地確認と打合せを行った。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地も含めて9か所の工区が調査対象区域として確定した。発掘調査は、平成18年度から埋蔵文化財調査センターと外ヶ浜町教育委員会が担当して実施することになったが、発掘調査に先立って、道路整備課から全9工区を対象とした確認調査の実施と本発掘調査の対象範囲の確定を優先して欲しい旨の要望があり、関係機関で協議した結果、平成18年度は埋蔵文化財調査センターと外ヶ浜町教育委員会が分担して確認調査を行うことになった。埋蔵文化財調査センターは蓬田村管内に所在する南側の工区から順に確認調査を進め、外ヶ浜町教育委員会は主として外ヶ浜町管内に所在する北側の3工区の確認調査を実施した。確認調査の結果、周知の山田(1)(2)遺跡、坂元遺跡、丑ヶ沢(1)(2)遺跡に加えて、山田(4)遺跡、坂元(2)遺跡、滝沢遺跡が新規登録され、未買収地を除いて本発掘調査の範囲がほぼ確定した。平成18年9～10月には関係機関が繰り返し協議し、平成19年度の発掘調査計画等についての打合せを行ったが、その結果、埋蔵文化財調査センターは山田(2)遺跡と滝沢遺跡の本発掘調査及び滝沢遺跡の南側に位置する工区の確認調査を平成19年度に実施することになった。山田(2)遺跡の本発掘調査については、平成19年4月に道路整備課、文化財保護課、埋蔵文化財調査センターの3者が調査前の現地確認を行い、未買収地の取扱いや調査の進め方等について協議した。なお、山田(2)遺跡に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成18年3月に青森県土整備事務所長名で提出され、同年同月に文化財保護課から当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。（工藤 大）

第2節 調査要項

1 調査目的

国道280号道路改築事業の実施に先立ち、当該地区に所在する山田(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成18年5月30日から同年8月4日まで

平成19年4月23日から同年10月26日まで

3 遺跡名及び所在地 山田(2)遺跡（青森県遺跡番号 12017）

青森県東津軽郡蓬田村大字瀬辺地字山田522、ほか

- 4 調査面積 平成18年度 620m²
平成19年度 2,200m²
- 5 調査委託者 青森県県土整備部道路課
- 6 調査受託者 青森県教育委員会
- 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査体制
- 平成18年度
- 調査指導員 藤沼 邦彦 国立大学法人弘前大学人文学部教授(考古学 平成20年3月退官)
- 調査員 小林 謙一 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館助教(分析化学 現中央大学准教授)
- 調査員 島口 天 青森県立郷土館学芸主査(地質学)
- 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
- 所長 白鳥 隆昭(現青森県立郷土館館長)
- 次長 三浦 圭介(平成19年3月退職)
- 総務G L 櫻庭 孝雄
- 調査第二G L 工藤 大
- 文化財保護主査 中村 哲也
- 文化財保護主査 宮嶋 豊
- 調査補助員 鹿内 一史(平成18年3月退職) 成田 梢(平成19年3月退職)
山田真太郎 斎藤 良尚(平成19年9月退職)
- 平成19年度
- 調査指導員 藤沼 邦彦 国立大学法人弘前大学人文学部教授(考古学 平成20年3月退官)
- 調査員 島口 天 青森県立郷土館学芸主査(地質学)
- 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
- 所長 末永 五郎(平成20年3月退職)
- 次長 三宅 徹也(平成20年3月退職)
- 総務G L 櫻庭 孝雄
- 調査第二G L 工藤 大(現調査第一G L、次長)
- 文化財保護主査 中村 哲也
- 文化財保護主査 宮嶋 豊
- 調査補助員 佐々木将道(平成19年6月退職) 工藤 倫子(平成20年3月退職)
成田明日美(平成20年9月退職) 斎藤 良尚(平成19年9月退職)
- (平成19年10月16日～平成19年10月25日)
- 総括主幹 成田 澄彦(現副参事)
- 調査補助員 梅田 裕哉 小幡 郁恵

第3節 調査の方法

調査範囲の絞り込み：調査対象区域にトレンチを設定・掘削して、遺構・遺物の有無を確認し、調

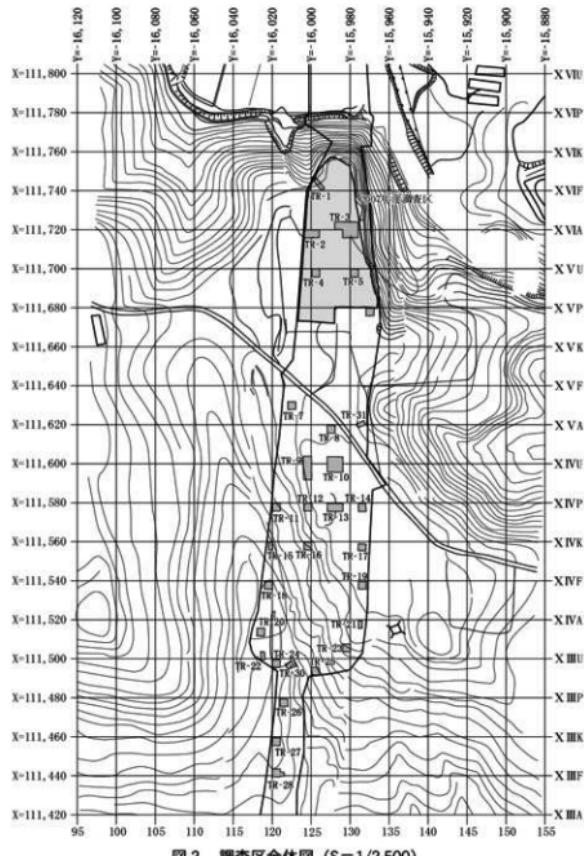


図2 調査区全体図 (S=1/2,500)

査対象範囲を絞り込んだ。トレチは後述するグリッドに則した位置に設定するよう努めたが、調査工程上の問題でできなかつた部分もある。この際も分層発掘につとめた。グリッド：昭和43年建設省告示第3059号による平面直角座標系第X系を基準としたグリッドによる分層発掘を実施した。1グリッドは4m四方とし、北から南に向かってローマ数字とアルファベット（A～Yの25文字）の組み合わせでIA、IB…IY、IIA…のごとく、西から東に向かって算用数字で0、1、2、3…のごとく表記した。グリッドライン交点は南北ライン名と東西ライン名を-（ハイフン）でつなぎ、これを呼称とした。グリッド名は南西隅のグリッドライン交点の呼称をもって代表させた。蓬田村管内の国道280号線道路改築事業用地内の調査対象区域をすべてを覆うように、グリッド起点（交点名 IA-0）は、座標値X=110,200 Y=-16,500の地点とした。土層の掘削：平成18年度は遺構・遺物の分布状況を把握するためトレチを設定し、人力で表土を除去した。平成19年度は重機により除去したが、

調査工程上、一部は人力で掘削を行った。**遺構精査**：大きさにより適宜二分法・四分法を用い、堆積土を上位から順に掘削した。遺物は適宜、3次元の座標を記録して取り上げた。**遺物の取り上げ** グリッド毎・層毎の取り上げとし、適宜トータルステーションにより3次元の位置を記録して取り上げた。**遺構名**：種類毎・検出順に付し、調査の結果、遺構でないと判断したものは欠番とした。**層序名**：遺構外にローマ数字、遺構内の土層に算用数字を用い、上位から順に付した。**写真撮影** 主に35mmカメラでを行い、カラーリヴァーサルフィルム、モノクロネガフィルムを用いた。メモ用にデジタルカメラを用いた。

第4節 調査の経過

平成18年度 遺構・遺物の分布状況を把握する事を目的として発掘調査を実施した。5月30日、山田(4)遺跡（当時は山田(1)遺跡隣接地と呼称）から機材を搬入、調査区内の雑木等を人力で移動する。6月2日からトレント設定を開始した。6月6日、トレント掘削を開始。表土が薄いため、トレント掘削を開始してまもなく縄文時代の土器・石器が出土し始める。特に、フレーク・チップ類は表面採集でもかなりの量が採集できた関係で、面積の割に多量に出土した。6月15日～16日、付近の工事現場からB.M.を移動した。トレントを地山面まで掘り下げるため、6月28日以降、トレント内で検出された埋設土器遺構の精査を実施し、順次トレントを掘り下げていった。7月後半には各種遺構の存在を確認したが、後の知見から考えると、遺構堆積土が地山に類似するものが多く、遺構を確認できなかったトレントも多い。7月19日、いわゆる「捨て場」の存否を確認するため、瀬辺地川の河谷平野に面した北側斜面に幅約2mのトレントを設定し、掘削を開始した。程なく、捨て場の存在を確認した。8月4日、一部トレントを人力で埋め戻して大半の精査を終了した。埋め戻しきれなかったトレントは後に重機で行うこととし、山田(1)遺跡へ移動する準備を行った。ただし、北側斜面部の「捨て場」に設定したトレントは堆積層の厚さを把握しきれなかったため、山田(1)遺跡を拠点として調査を継続した。しかし、縄文時代後期初頭～縄文時代中期末葉の層準まで深さが1mを超える、約2mのトレント幅で掘り下げるのは危険なため、更に下位の層準はサブトレントにより縄文時代中期前半の遺物を包含することを確認するにとどめ、土囊により埋め戻しを行い、8月11日調査を終了した。

平成19年度 4月23日、機材を搬入。調査を開始した。当初は工程の都合上、人力により表土除去を行った。測量基準点は委託により新設し、5月8日からグリッド杭打設を開始した。5月11日からは遺構検出を実施した。しかし、表土が薄く、遺構堆積土の土色が地山と極めて類似していること、激しい重複が想定されたこと、木根による攪乱がしばしば見られることから、遺構の平面形を確認するのは困難を極め、多大な時間を要した。好天日が多く、土壤が乾燥し土色の微妙な相違がわかりにくかった事も一因である。5月22日からは、確認できた遺構の精査を順次開始したが、土色の判別が難しいことから、各遺構の精査は思うようにはかどらなかった。7月25日には親子発掘体験が実施され、約30人の参加者があった。その後も好天日が多く、土色の判別が困難を極め、実調査面積は2,200m²で、すべての遺構精査を終了した面積は80m²にとどまった。10月26日、遺構面の養生を行い、平成19年度の調査を終了した。(中村)

第2章 遺跡周辺の地形地質と遺跡の層序

本遺跡は陸奥湾西岸、東津軽郡蓬田村大字瀬辺地字山田に所在する。海岸段丘上に立地し、眼下に待腰岳・玉清水山の東麓に源を発し、陸奥湾へと東流する小川平川、瀬辺地川を望むことができる。二つの河川を夾んで北側の台地上には坂元(2)遺跡が所在する。

遺跡の所在する蓬田村周辺の地形・地質の詳細については、『坂元(2)遺跡』(青森県埋蔵文化財調査報告書第447集 青森県教育委員会 2008)に詳しいので、参照されたい。また、坂元(2)遺跡の標高は20~25m前後で、本遺跡と同程度の標高であることから、同一の段丘面上に立地すると思われる。従って、本遺跡の基盤をなす層は坂元(2)遺跡と同様と考えられるので、この点も同書を参照されたい。

遺跡の現況は、造林地・畑地であった。

次に遺跡内の層序について述べる。

第1章第4節でも述べたように、平成18・19年度の調査では遺構の確認が困難を極めたため、多くは無遺物層まで掘り下げないまま調査を終了したので、本書では、表土から遺構検出面となった土層まで述べることとする。

第I層 (表土) 10YR2/3~3/3黒褐色シルト しまりがなく、ぼそぼそしている。草木根が多量に進入している。

第II層 10YR3/3黒褐色シルト 遺構堆積土上部などに部分的に見られるにとどまる。

第III層 10YR3/3黒褐色~4/6褐色シルト 遺構が検出されると同時に、多量の遺物も含む。遺構堆積土や遺構掘り上げ土によって構成されるものと思われる。

台地平坦面上では第II層が欠如する部分がほとんどで、造林や畑地の開墾の際に削平を受けていると思われる。(中村)

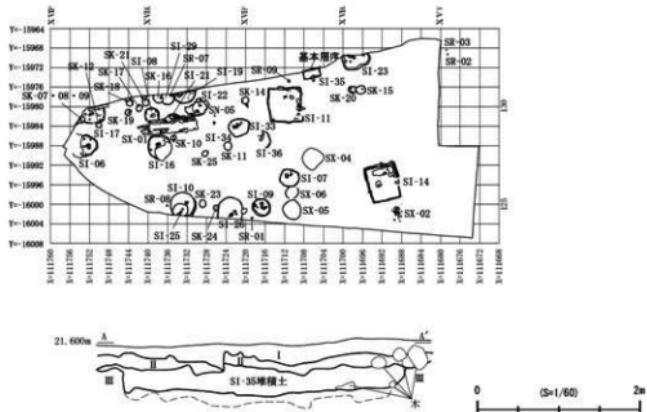


図3 基本層序

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 発掘調査と検出遺構の概要

平成18年度 遺構・遺物の分布状況を把握し、調査対象範囲を絞り込み、さらには遺構の時期を把握する目的で調査を実施した。そのため、遺跡登録範囲のうち国道280号線改良工事用地にかかる部分全面を対象としてトレンチを設定し、遺構確認時点での掘削を終了することを基本とした。そのうち、いくつかのトレンチでは埋設土器遺構あるいは焼土が検出されたが、これより下位に遺構が存在するか否かを確認するため埋設土器遺構・焼土の精査を行った。また、調査区北西端斜面では、遺物等の捨て場の存否を確認するためのトレンチ(Tr-1)を設定し、掘削を行った結果、捨て場が存在することが判明した。そこで、捨て場の土層の堆積状況を把握するため、遺物を取り上げながら基底部まで掘削することを目標とし、深さ1.5m程度まで掘り下げたが、更に遺物を含む土層が下位に続くことが明らかとなつたため、調査期間および安全確保上の問題から精査を終了することとした。

本書では平成18年度に精査を完了した埋設土器遺構について、第2節で報告する。

平成19年度 調査対象区域のうち、8,000m²を対象に調査を開始したが、土色の判別が困難なため、遺構確認・精査に多大な時間を要し、調査区北部の約2,200m²を精査するにとどまった。平成18年度の調査で存在が判明した捨て場についても精査を開始したが、遺構精査との兼ね合いから、表層を一部取り除いた時点で精査を中断し、遺構精査に注力した。しかし、精査を完了できなかつた遺構もある。本書では精査を完了した遺構について報告を行う。

本書で報告を行う遺構は次表のとおりである。規模や位置など基礎的な情報は表に記載し、表に記載できない情報は個別に述べることとする。なお、平成18年度に遺構名を割り振つた遺構のうち、住居跡・土坑はトータルステーションによる記録の都合上遺構名を割り振つたに過ぎず、平成18年度の精査の際にはSI-1~5、SK-1~6を欠番扱いとして、改めて遺構名を割り振つた。(中村)

表2 遺構一覧

* >● : ●より新しい <● : ●より古い ()内は残存値 フラスコ状土坑の長軸・短軸は底面径

遺構名	略号	時代	時期	位置	計測値			重複	備考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
第6号住居跡	SI-6	縄文	中前期～後期初頭	XVII・N-127・128	(3.38)	4.28	0.46	(9.29)	
第7号住居跡	SI-7	縄文	中前期	XVII・D-125・126	3.94	3.53	0.23	10.29	>SX-6
第8号住居跡	SI-8	縄文	中前期～後期初頭	XVII・K-129	(2.56)	2.84	0.11	(5.68)	<SX-1
第9号住居跡	SI-9	縄文	中前期～後期初頭	XVII・E-124・125	3.69	3.39	0.32	8.12	>SI-20
第10号住居跡	SI-10	縄文	後期初頭	XVIII・I-124・125	(4.75)	4.91	0.25		>SI-25-SI-31
第11号住居跡	SI-11	平安		XVII・D-129・130	7.15	6.74	—	41.04	
第12号住居跡	SI-12	縄文	中前期～後期初頭	XVII・F-130	—	—	—	—	炉のみ
第13号住居跡	SI-13								欠番
第14号住居跡	SI-14	平安		XVII・X-125～127	7.56	6.38	0.29	43.66	
第15号住居跡	SI-15								欠番
第16号住居跡	SI-16	縄文	中幕初頭(円筒上層a式)	XVII・J-127・128	4.95	4.48	0.44	(16.23)	
第17号住居跡	SI-17	縄文	中前期～後期初頭	XVII・H-129・130	(4.22)	(3.06)	0.31	(11.01)	<SK-12
第18号住居跡	SI-18								欠番
第19号住居跡	SI-19	縄文	中前期	XVIII・I-130・131	4.78	(2.52)	0.36	(7.68)	<SI-29

遺構名	略号	時代	時期	位置	計測値			重複	備考
					長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)		
第20号住居跡	SI-20	縦文	中期末葉～後期初頭	XVII-E-124・125	-	-	-	-	SI-9 印のみ
第21号住居跡	SI-21	縦文	中期後葉～末葉	XVII-J-128・129	4.95	3.51	-	(9.14)	(SK-1・SK-3)
第22号住居跡	SI-22	縦文	不明	XVII-H-129・130	(2.87)	2.92	0.90	(6.43)	
第23号住居跡	SI-23	縦文	中葉(円筒上層式)	XVI-XVII-D-131・132	(2.88)	5.66	0.35	(10.88)	
第24号住居跡	SI-24								SI-45に変更、欠番
第25号住居跡	SI-25	縦文	中期末葉～後期初頭	XVIII-I-124	3.06	(2.60)	0.13	(6.48)	SI-10・SI-25/SI-31
第26号住居跡	SI-26	縦文	後期初頭	XVII-F-G-124・125	(4.35)	4.35	0.37	18.75	SK-24
第27号住居跡	SI-27								遺構実況につき未記載
第28号住居跡	SI-28	縦文	中期末葉～後期初頭	XVII-F-129	-	-	-	-	SI-33 印のみ
第29号住居跡	SI-29	縦文	中期末葉～後期初頭	XVII-I-J-130	(2.17)	(2.90)	0.18	(4.70)	SI-19
第30号住居跡	SI-30								SI-19に統合、欠番
第31号住居跡	SI-31	縦文	不明	XVII-I-124・125	-	-	-	-	SI-10・SI-25/SI-31
第32号住居跡	SI-32								SI-31に統合、欠番
第33号住居跡	SI-33	縦文	中期末葉～後期初頭	XVII-E-F-128・129	4.22	3.51	0.06	11.24	(SI-29)
第34号住居跡	SI-34	縦文	不明	XVII-G-129	-	-	-	-	SI-45に変更、印のみ
第35号住居跡	SI-35	平安		XVII-B-C-131	(1.52)	3.45	0.25	(4.61)	
第36号住居跡	SI-36	縦文	中期末葉～後期初頭	XVII-D-E-127・128	-	-	0.15	-	
第7号土坑	SK-7	縦文	不明	XVII-N-128・129	1.54	-	0.57	-	SK-49・SK-7
第8号土坑	SK-8	縦文	中期末葉～後期	XVII-N-129	1.14	-	1.03	-	SK-49・SK-7
第9号土坑	SK-9	縦文	不明	XVII-N-129	1.13	-	0.96	-	SK-49・SK-7
第10号土坑	SK-10	縦文	不明	XVII-I-128	0.93	-	0.24	-	
第11号土坑	SK-11	縦文	不明	XVII-F-G-127・128	1.72	1.54	0.71	-	
第12号土坑	SK-12	縦文	後期初頭	XVII-W-128・129	1.67	1.06	0.22	-	SI-17
第13号土坑	SK-13								欠番
第14号土坑	SK-14	縦文	後期初頭	XVII-E-F-130	1.52	1.39	0.26	-	
第15号土坑	SK-15	縦文	不明	XV-X-Y-130・131	2.12	2.04	1.26	-	(SK-20)
第16号土坑	SK-16	縦文	中期末葉～後期初頭	XVII-J-130	1.46	1.34	1.11	-	
第17号土坑	SK-17	縦文	後期初頭	XVII-K-L-129・130	1.28	1.11	0.77	-	
第18号土坑	SK-18	縦文	後期初頭以降	XVII-K-L-129・130	1.81	1.62	0.79	-	
第19号土坑	SK-19	縦文	後期初頭	XVII-K-L-129	1.31	1.20	0.36	-	
第20号土坑	SK-20	縦文	不明	XV-Y-130・131	1.52	1.34	0.42	-	SK-15
第21号土坑	SK-21	縦文	中期末葉～後期初頭	XVII-J-K-129・130	1.43	1.34	1.20	-	
第22号土坑	SK-22								SI-7に変更、欠番
第23号土坑	SK-23	縦文	後期初頭	XVII-H-124・125	1.52	1.29	0.42	-	
第24号土坑	SK-24	縦文	中期末葉～後期初頭	XVII-G-124	1.17	1.04	0.39	-	(SI-26)
第25号土坑	SK-25	縦文	不明	XVII-G-H-127	-	-	-	-	
第1号後土遺構	SN-1								欠番
第2号後土遺構	SN-2								欠番
第3号後土遺構	SN-3								欠番
第4号後土遺構	SN-4	縦文	中期末葉～後期初頭	-	-	-	-	-	(SI-26)に変更、印のみ
第5号後土遺構	SN-5								
第1号埋立土器遺構	SR-1	縦文	中期末葉～後期初頭	XIV-E-124	0.24	0.20	0.16	-	
第2号埋立土器遺構	SR-2	縦文	前期末葉	XV-T-132	0.31	0.26	0.11	-	
第3号埋立土器遺構	SR-3	縦文	後期前葉	XV-T-132	0.15	0.15	0.07	-	
第4号埋立土器遺構	SR-4								
第5号埋立土器遺構	SR-5	縦文	後期前葉	XVI-J-131	0.10	0.10	0.08	-	
第6号埋立土器遺構	SR-6	縦文	前期末葉	XIV-Y-124	0.29	0.26	0.05	-	
第7号埋立土器遺構	SR-7								
第8号埋立土器遺構	SR-8	縦文	中期前葉～中葉	XVII-J-124	0.22	0.13	0.24	-	
第9号埋立土器遺構	SR-9	縦文	後期初頭	XVI-C-131	0.35	0.27	0.37	-	SI-24から変更
第1号不明遺構	SI-1	不明			12.50	3.10	0.40	-	SI-8・SI-21
第1号石造遺構	SK-2	縦文	中期末葉～後期初頭	XV-X-Y-124・125	3.05	1.98	-	-	
第3号不明遺構	SK-3	不明			1.22	1.05	0.19	-	SI-21
第4号不明遺構	SK-4	縦文			4.49	4.50	0.27	-	
第5号不明遺構	SK-5	縦文	中期末葉かそれ以降	XVII-C-D-124・125	3.88	3.56	0.23	-	SX-6
第6号不明遺構	SK-6	縦文	後期初頭かそれ以降	XVII-C-125	2.74	(2.36)	0.19	-	(SI-7・SK-5)

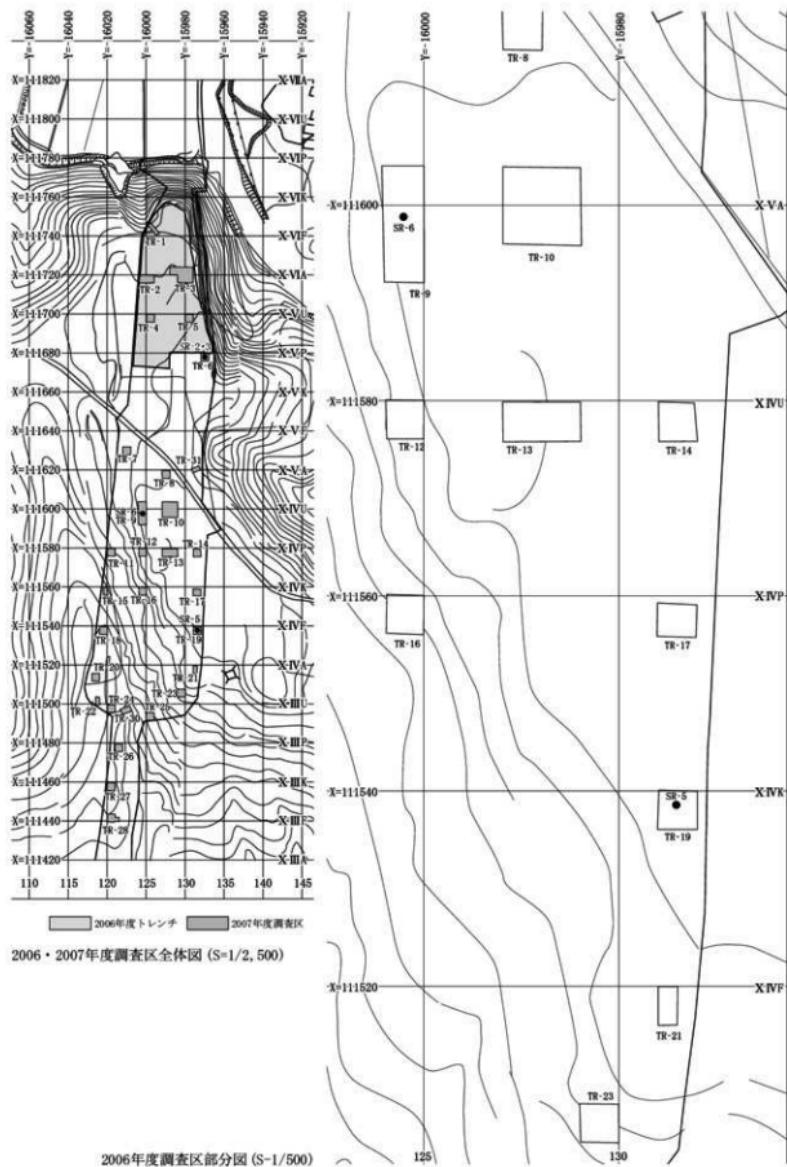
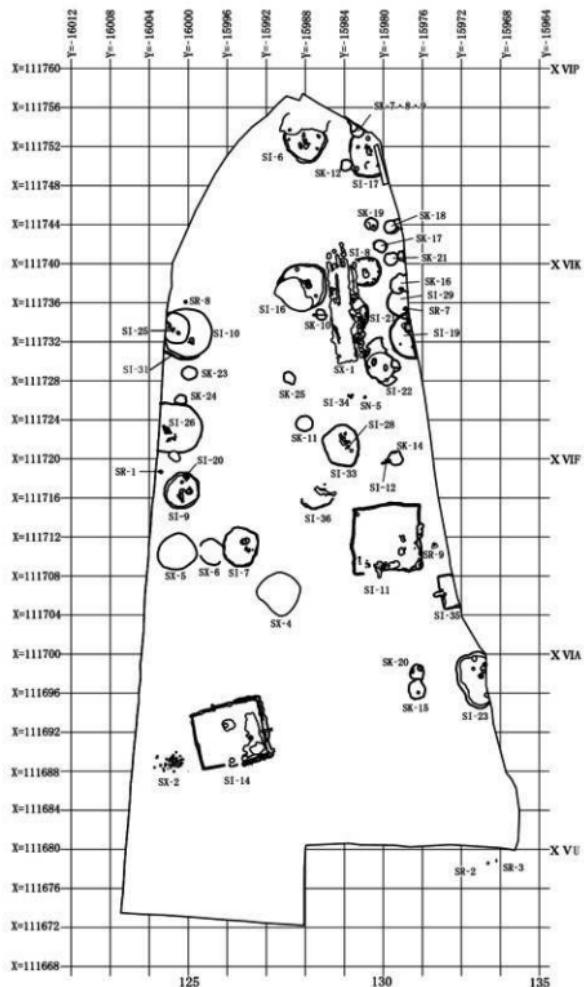


図4 造構配置図（1）



2007年度調査区造構配置図 (S-1/500)

図5 遺構配置図(2)

第2節 検出された遺構と遺物

第6号住居跡 [SI-6] (図6～9)

【形状】北側半分は搅乱を受けているため全体の形状は不明であるが、梢円形を呈すると思われる。【床面】黄褐色の火山灰土を床面とする。全体に平坦で炉の南側に硬化した床面が確認された。【柱穴】床面で3基の小穴を確認した。ピット1は主柱穴を構成すると思われるが、他の2基は規模から考えて主柱穴を構成するとは考えにくい。【炉】床面中央付近に白色粘土を貼った炉が検出された。西側と北側は周堤状に盛り上がっている。木根による搅乱を受けていたため不連続な状態で検出したが、本来連続していた可能性が高い。【堆積土】15層に分層した。褐色から暗褐色のシルトを主体とするが、黄褐色のシルトを含む土層も認められ、遺構掘り上げ土などの人為堆積と思われる。【出土遺物】土器は堆積土・ピット堆積土中から、491片 (6560.3 g) が出土した。床面から遺物は出土しなかった。ピット堆積土から出土した土器片と覆土から出土した土器片が接合した事例があり、ピットから出土した土器も住居廃絶ないしは廃絶後にピット覆土に混入したものと思われる。石器1点、異形石器1点を含む剥片石器104点、礫石器9点が出土し、そのうち21点を図示した。【時期】堆積土から出土した土器は縄文時代中期末葉～後期初頭の土器、Pit1から出土した土器は縄文時代後期初頭の土器であり、また、堆積土中から後期初頭の復元個体が出土している事から、堆積土の形成時期は縄文時代後期初頭ないしはそれ以降と考えられる。堆積土中からは十腰内I式の破片が少量出土しており、この時期までには埋没したと考えられる。(中村)

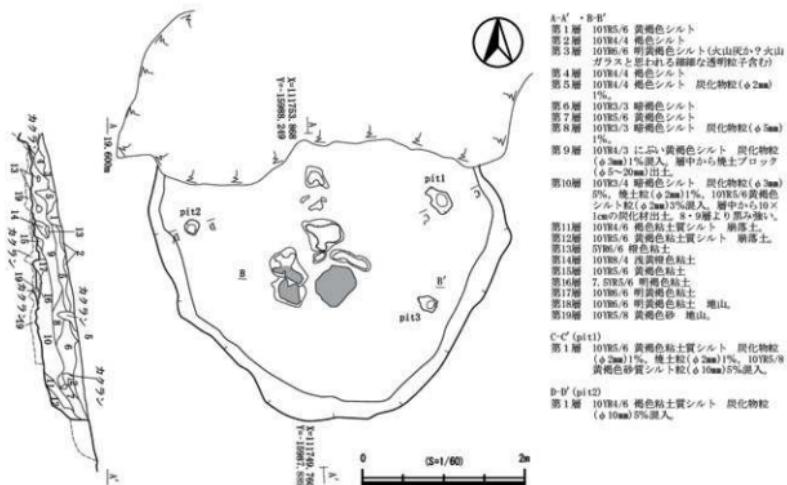


図6 第6号住居跡(1)

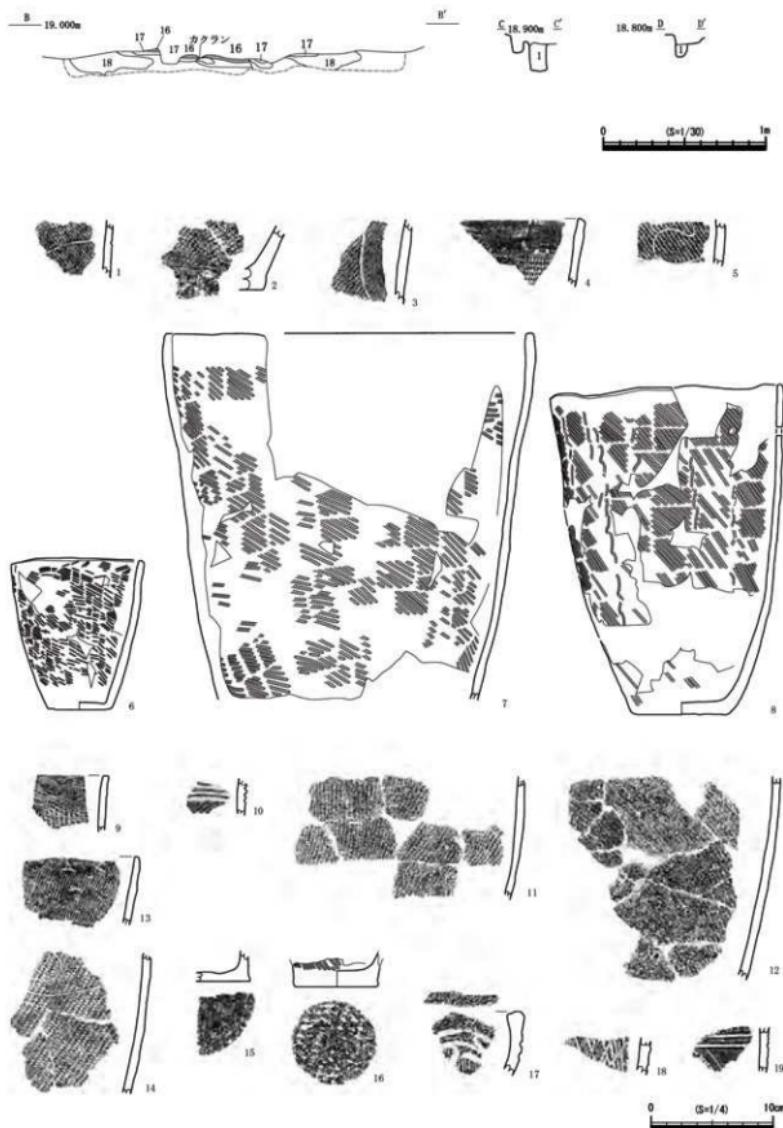


図7 第6号住居跡(2)



図8 第6号住居跡(3)

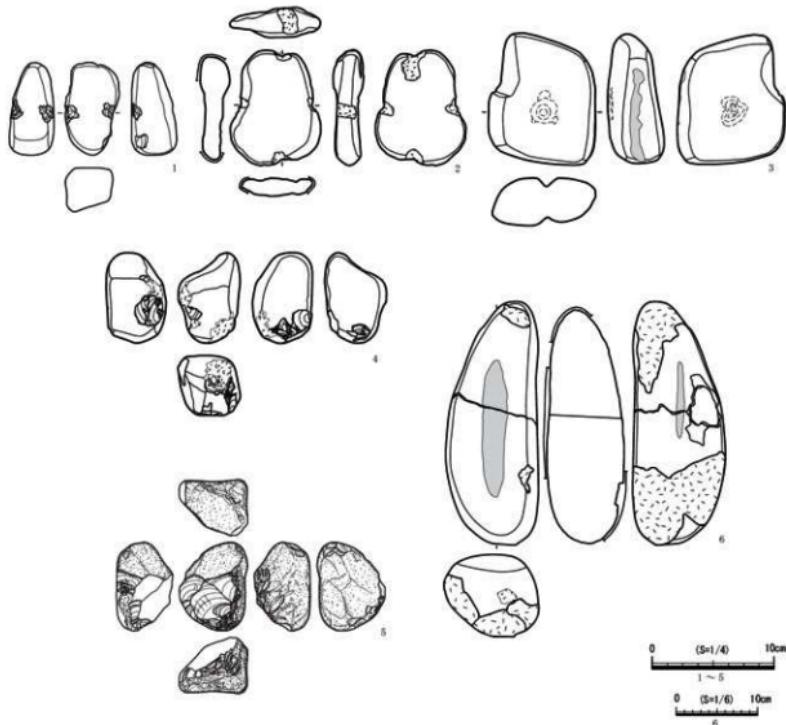
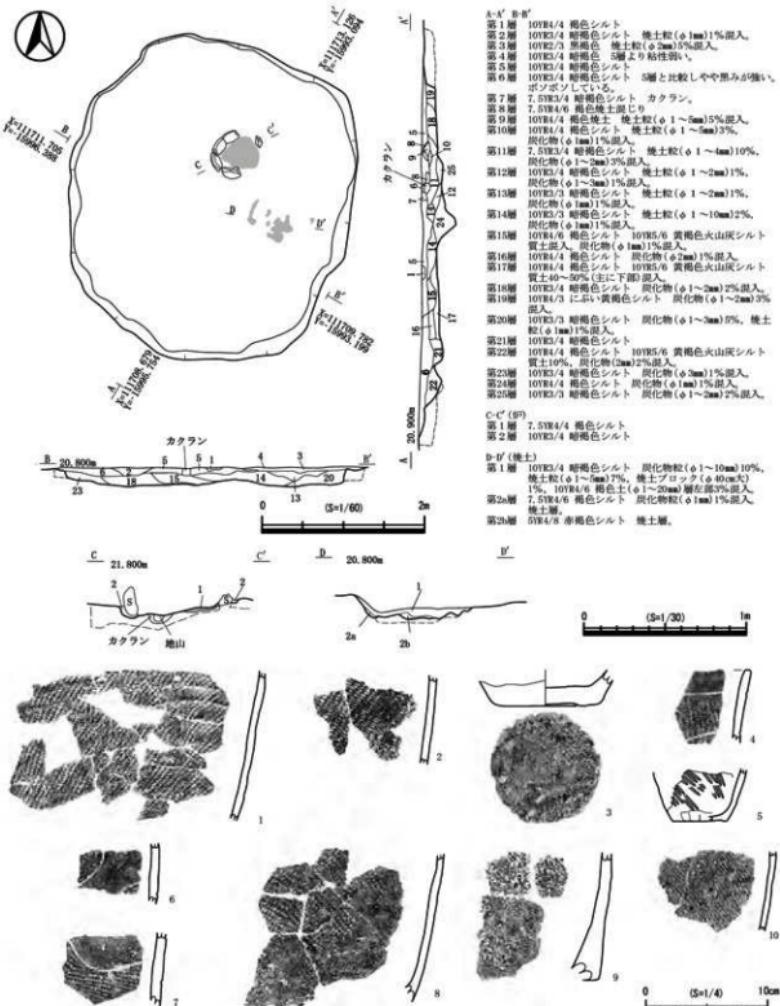


図9 第6号住居跡(4)

第7号住居跡 [SI-7] (図10~12)

〔形状〕楕円形を呈する。〔床面・柱穴〕床面は木根による搅乱を受けたためか凹凸がある。硬化面は確認されなかった。柱穴は検出されなかった。〔炉〕床面長軸上の北東壁寄りに石閉炉が検出された。炉石は扁平な川原石を短軸方向が垂直になるように設置され、西側半分は連続的であるが、東側半分には1個だけ配置されている。また、炉の南東側に焼土が検出された。床面に暗褐色土の落ち込みを検出し、異なる構造と認識して調査を開始した。しかし、半截時、数cmの深さで焼土が検出され、断続的に確認面まで続くことが明らかとなったため、本遺構に伴う可能性のあるものとして扱った。ただし、暗褐色シルト中に断続的に認められ、木根等による搅乱を受けたものと思われる。〔堆積土〕25層に分層した。褐色～暗褐色のシルトが主体である。木根等による変色などの影響もあると思われるが、全体にレンズ状の堆積は示さず、人為的な要因で堆積した可能性が高い。〔出土遺物〕土器が床面・堆積土から465片 (5953.2g) 出土した。石器は石鏃2点、石錐2点、磨製石斧1点を含む剥

片石器163点、礫石器7点が出土し、そのうち10点を図示した。磨製石斧（図12-1）は下端が割れ、刃部が欠損している。床面から出土した土器が少量あるが、堆積土出土土器と接合しており、本遺構廃絶後に廃棄されたものと考えられる。そのほかに土偶1点が出土した。出土した土器は縄文時代中期末葉のものである。【時期】堆積土から出土した土器、遺構の形態から考えて縄文時代中期末葉と考えられる。（中村）



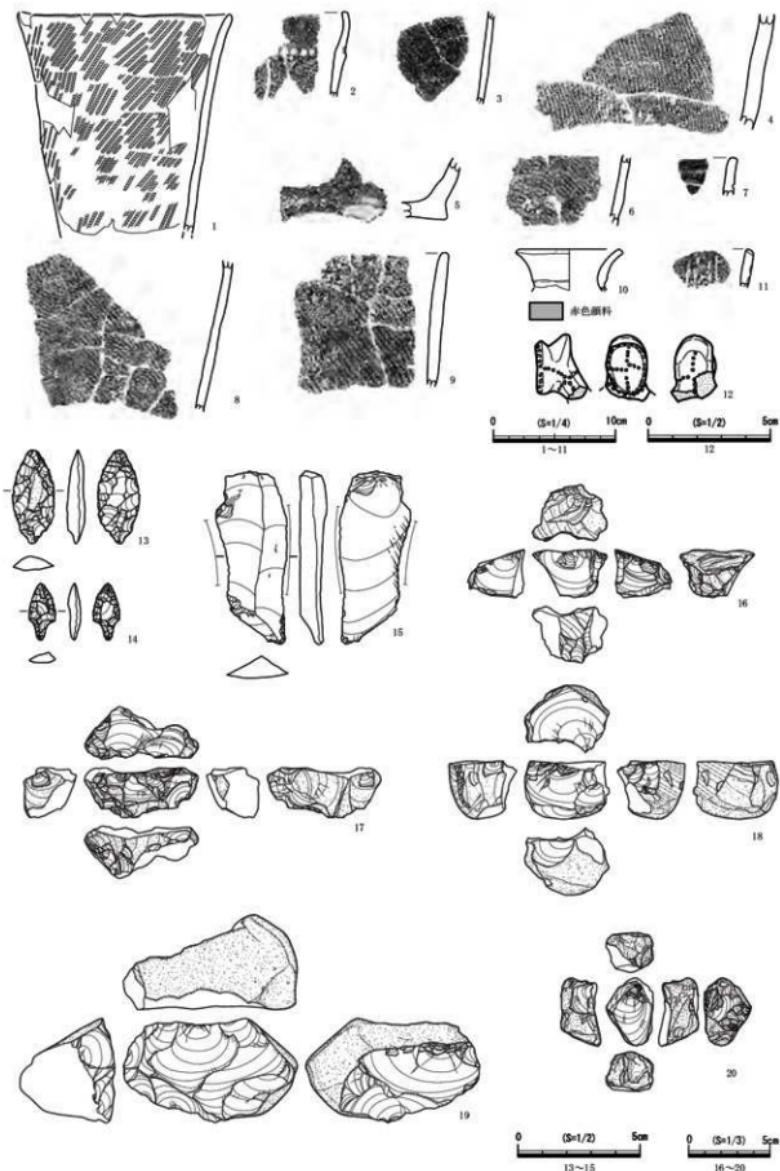


図11 第7号住居跡(2)

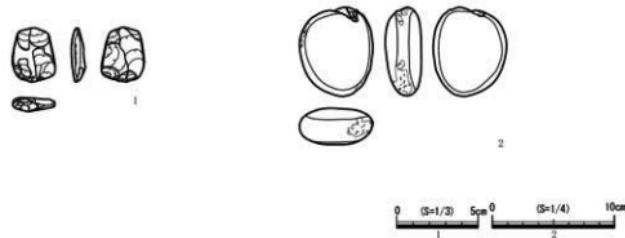


図12 第7号住居跡(3)

第8号住居跡 [SI-8] (図13~15)

[形状] 円形を呈する。[床面・柱穴] 第III層を床面とし、硬化面は認められなかった。壁際に7基の小穴を確認したが、いずれも主柱穴とはなり得ない規模である。[炉] 床面中央に炉が検出された。粘土を厚く貼り付けている。下部には掘り込みがあり、この中にも粘土が充填されている。[堆積土] 2層に分層した。自然堆積か人為堆積かは不明である。[出土遺物] 土器が床面・覆土から175片(3737.1g)出土した。いずれも本住居廃絶後のものである。石器は石鏃2点、石錐2点、石核7点を含む剥片石器46点、鍛石器8点が出土し、そのうち11点を示した。出土した土器は縄文時代後期初頭のものである。また、床面南東隅に剥片集積が検出された。[時期] 本住居跡に伴う遺物はなく詳細は不明であるが、縄文時代中期末葉～後期初頭の可能性が考えられる。(中村)

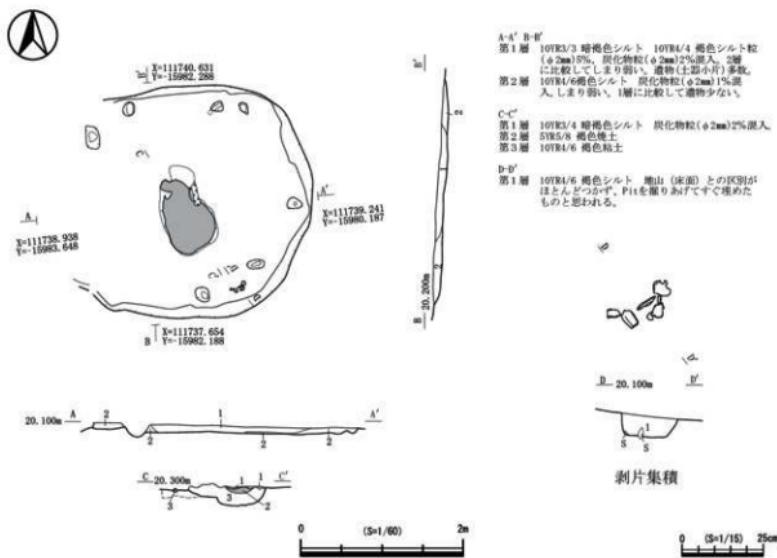


図13 第8号住居跡(1)

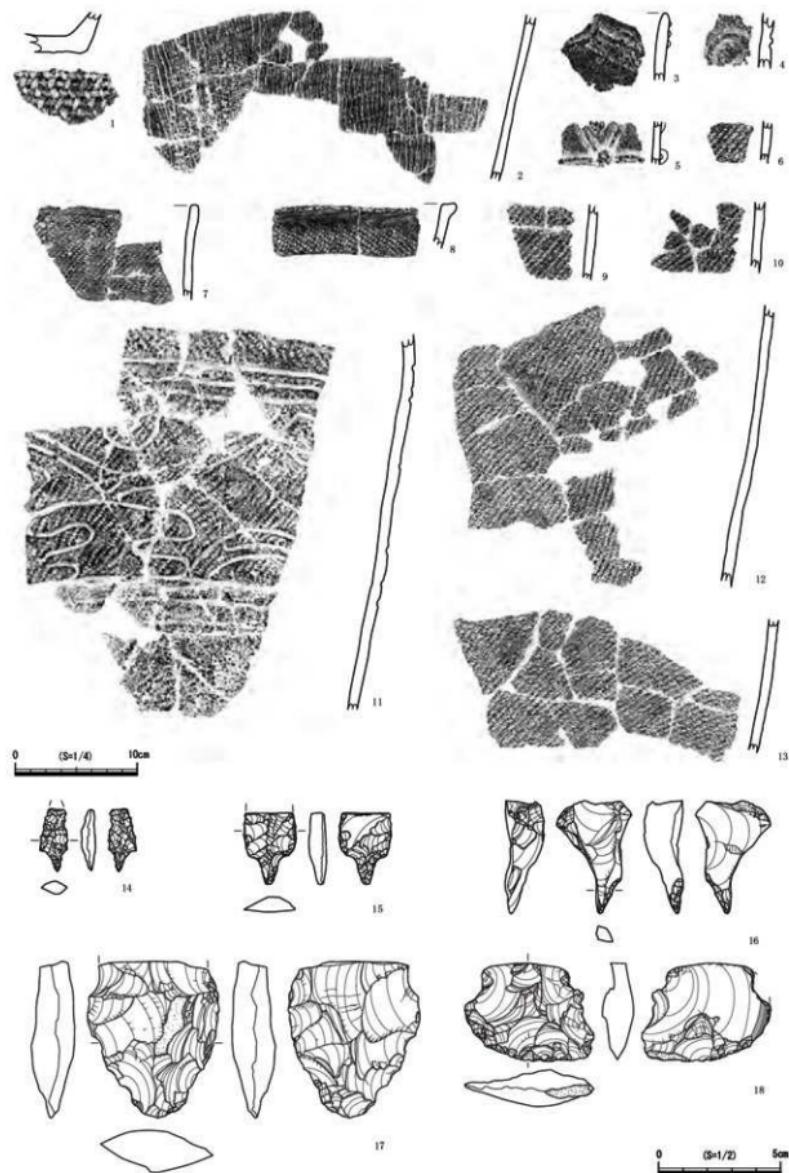


図14 第8号住居跡(2)

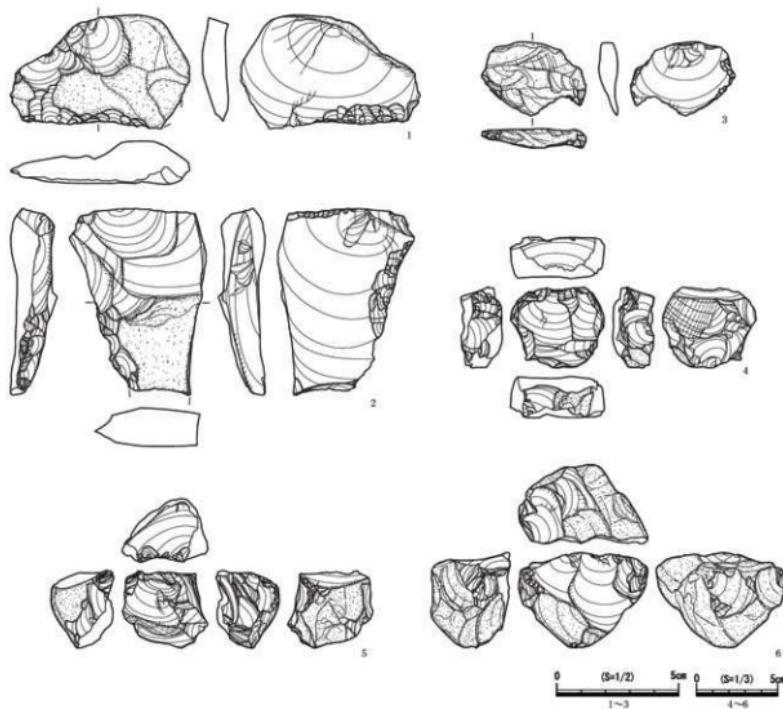


図15 第8号住居跡(3)

第9号住居跡 [SI-9] (図16~19)

〔形状〕 楕円形を呈する。〔床面・柱穴〕 第III層下の黄褐色土を床面とする。床面はほぼ平坦である。炉南西脇に隆起が見られるが、搅乱によるものと思われる。柱穴は検出されなかった。小穴が1基検出され、底面から磨製石斧1点・削器1点、自然縫1点が出土した。〔炉〕 床面中央に焼土、その東側に石囲炉が検出された。石囲炉は扁平な川原石を、短軸が垂直になるよう設置しており、東南東～西北西にかけて、周囲の約二分の一を囲んでいる。東側～北側にかけては土器（図17-1）を配置している。〔堆積土〕 13層に細分した。褐色～黄褐色のシルトを主体としており、レンズ状の堆積を示さないことから人為的な要因で堆積したものと思われる。〔出土遺物〕 土器は炉辺から一個体、堆積土中から650片（4353.9）が出土した。炉辺の土器（図17-1）は縄文時代中期末葉～後期初頭のものである。石器は石鏃3点、横型石匙1点、石核18点、ハンマー3点を含む剥片石器126点、縮石器15点が出土し、そのうち20点を図示した。土器は中期末葉～後期初頭のものが多い。〔時期〕 炉辺から出土した土器により縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。（中村）

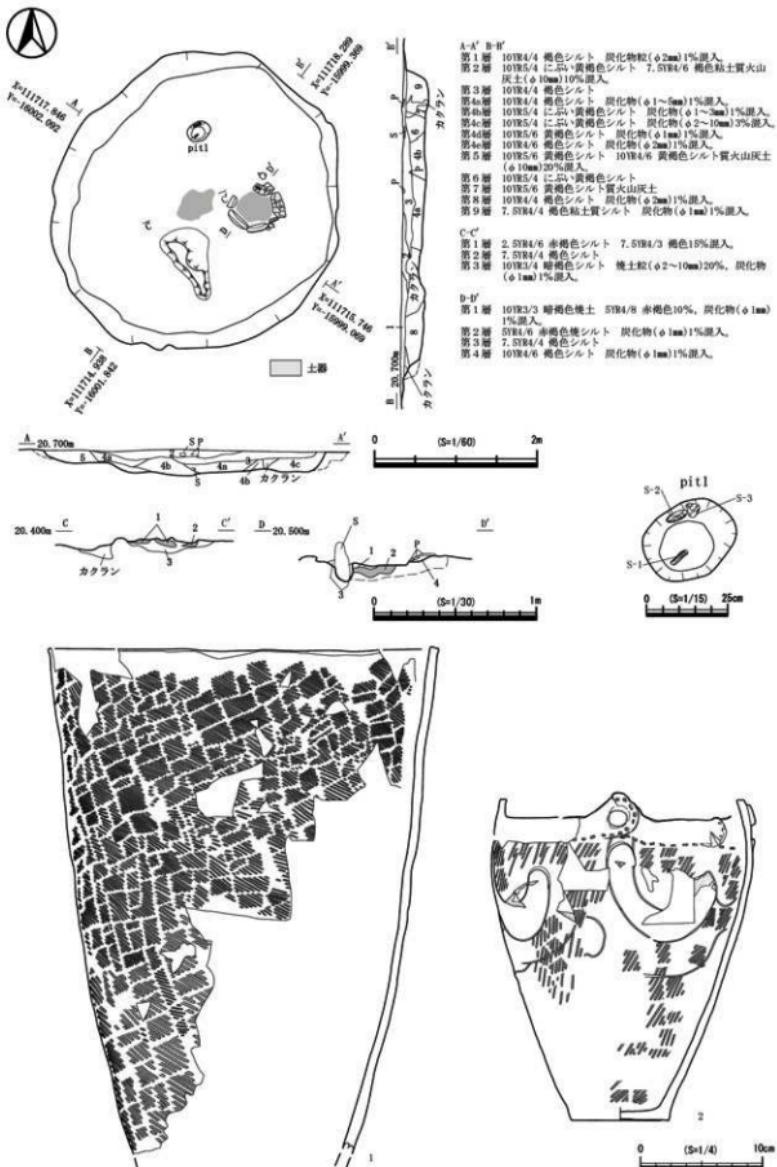


図16 第9号住居跡(1)

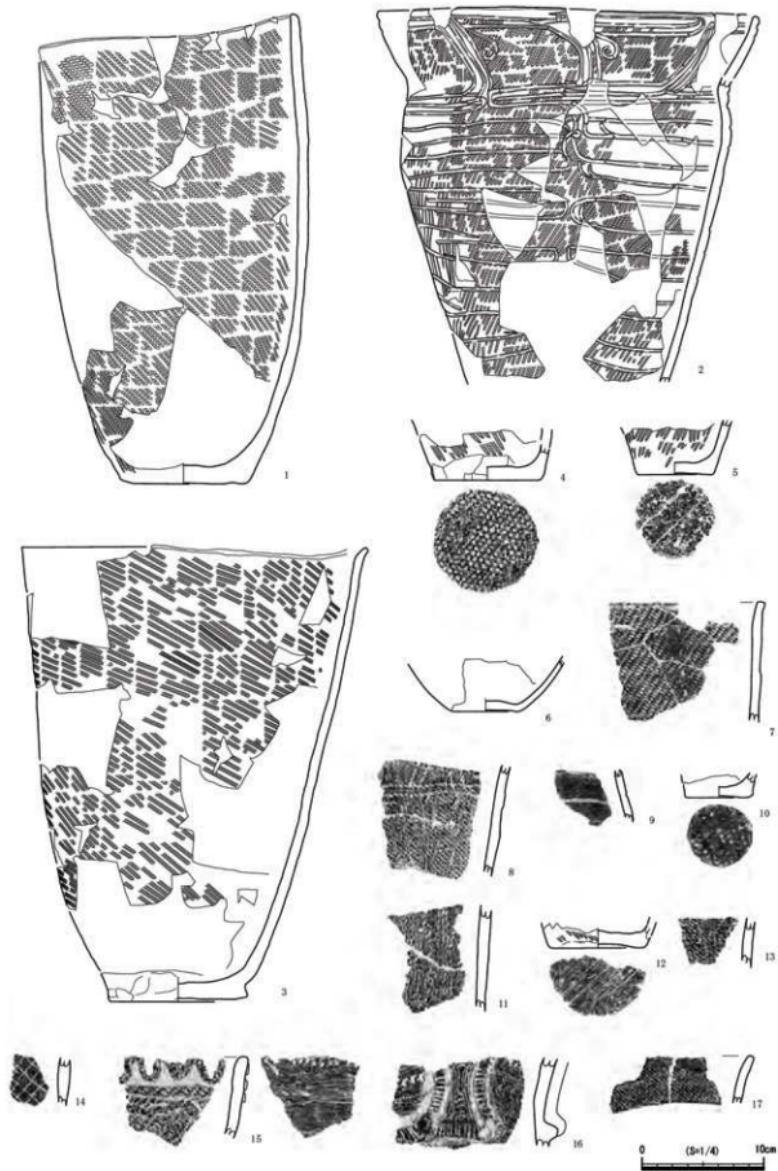


図17 第9号住居跡(2)

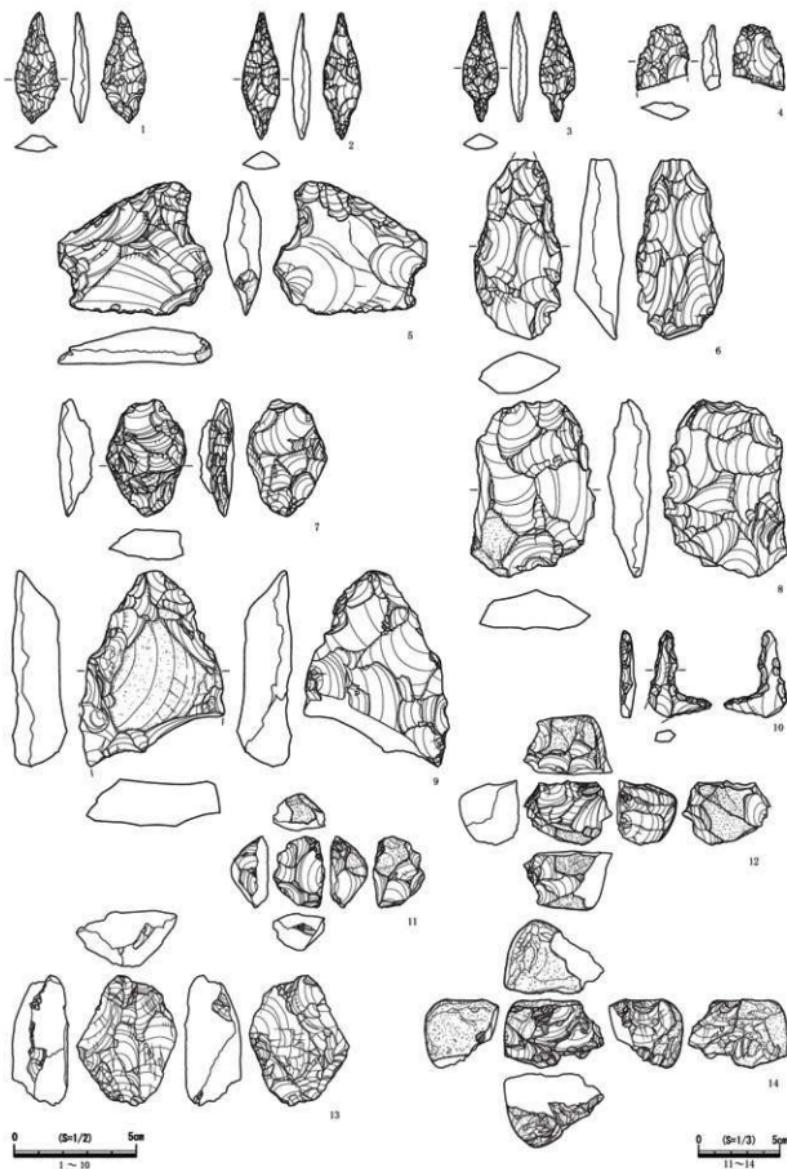


図18 第9号住居跡(3)

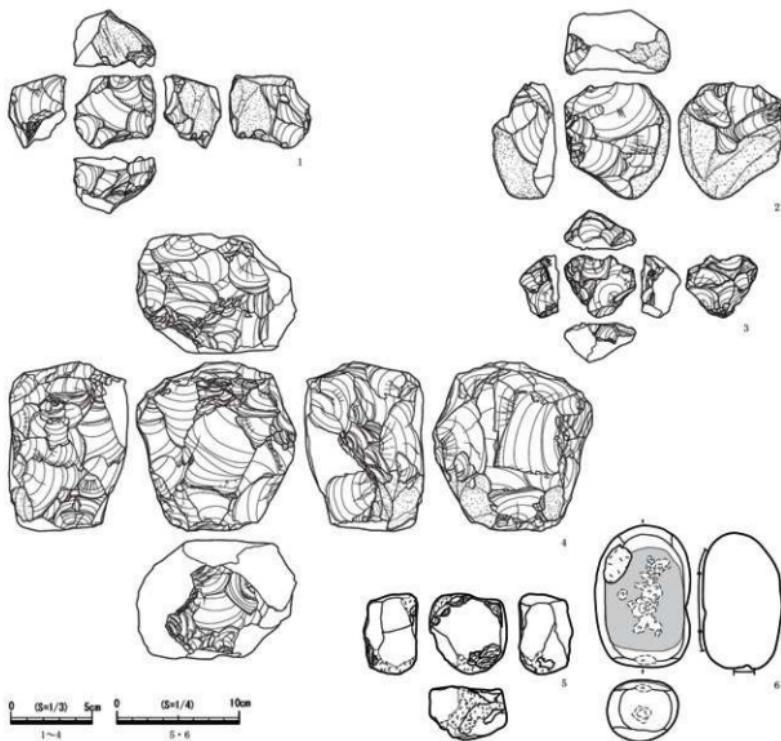


図19 第9号住居跡(4)

第10号住居跡【SI-10】(図20~25)

【確認】第III層を掘削中に炉と床面を検出した。【形状】詳細は不明であるが、円形ないし楕円形を呈するものと思われる。【床面・柱穴】確認できた貼り床の範囲は不整形を呈していた。柱穴は検出されなかった。【炉】斜位土器埋設炉と焼土が検出された。斜位土器埋設炉は、深鉢形土器が口縁部方向を上に斜位に埋設され、口縁部周辺に焼土が形成されている。口縁部は欠失していた。土器内に焼土は検出されなかった。土器内には熱による赤化や器肌のあれなどは確認できない。外面は埋設時の上半部にあたる部分が赤化している。【堆積土】調査区境界のセクションベルトで2層に分層した。

【出土遺物】土器は堆積土中から944点(4055.4 g)・貼床中・床下から228点(2587.8 g)が出土した。石器は石鏃4点、尖頭器3点、石核28点、打製石斧1点を含む剥片石器195点、礫石器12点が出土し、そのうち37点を図示した。ただし、当初は貼り床を第25号住居跡の土層と識別できていなかったため、第25号住居跡の遺物も混在する。出土した土器は縄文時代中期初頭のものも若干あるが、ほとんどは縄文時代後期初頭である。【時期】炉体土器は縄文時代後期初頭のものであり、貼床中、また堆積土

から出土した土器も縄文時代後期初頭が主体であるため、縄文時代後期初頭と考えられる。(中村)

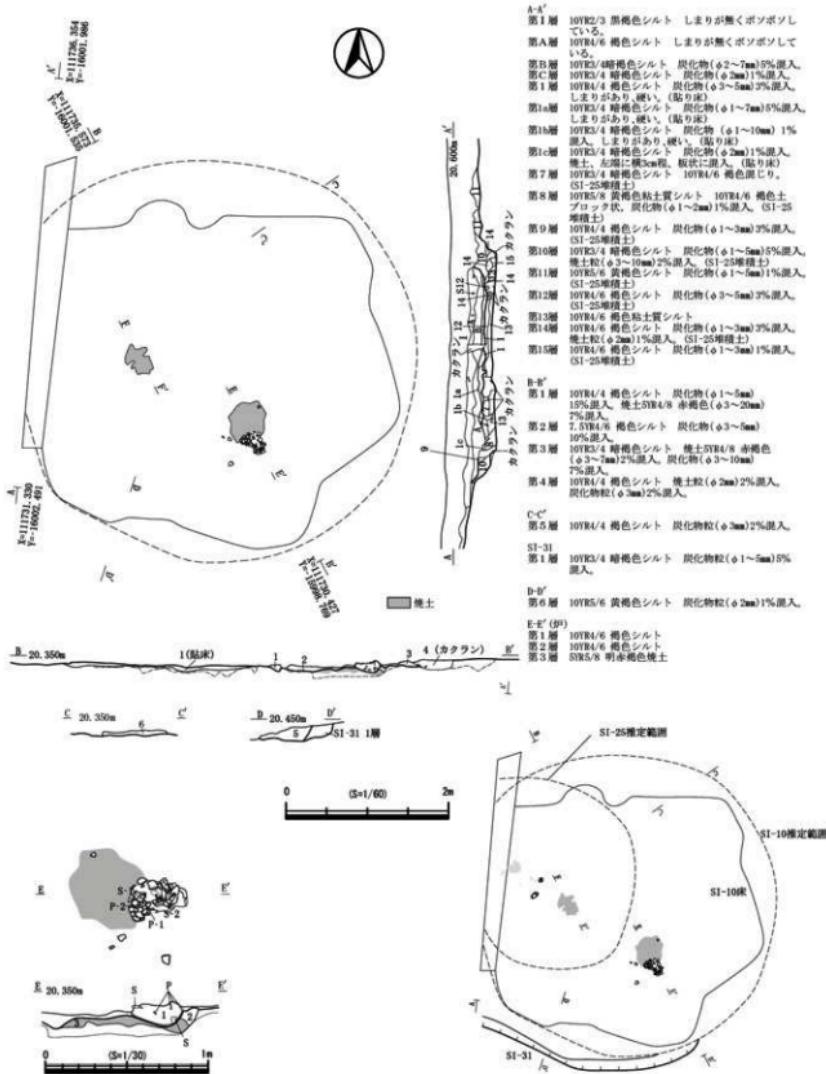


図20 第10号住居跡(1)

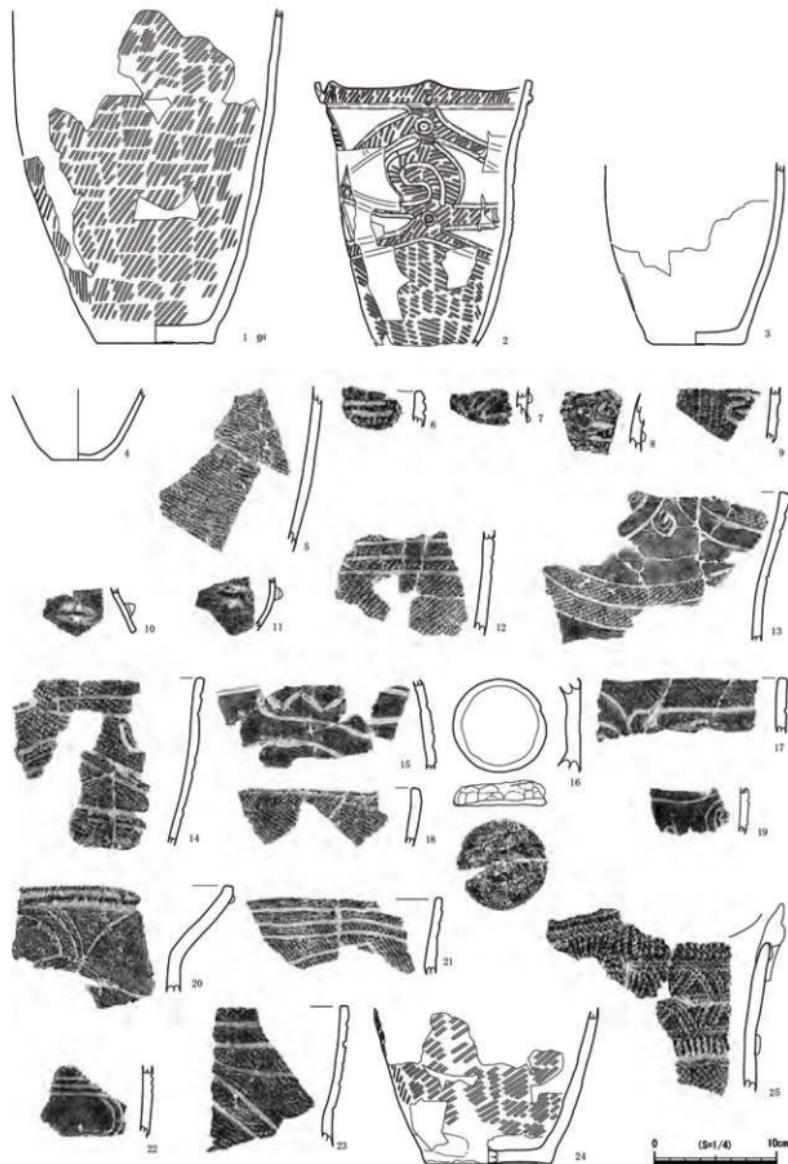


図21 第10号住居跡(2)

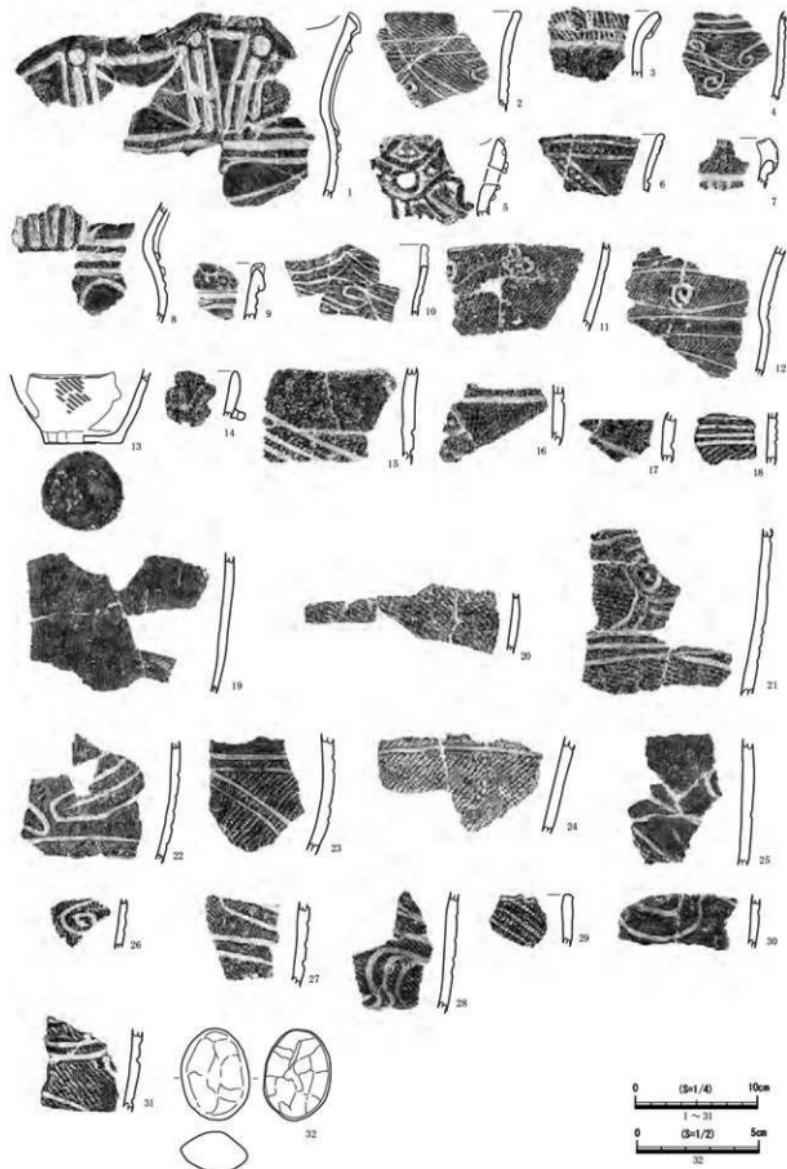


図22 第10号住居跡(3)



図23 第10号住居跡(4)

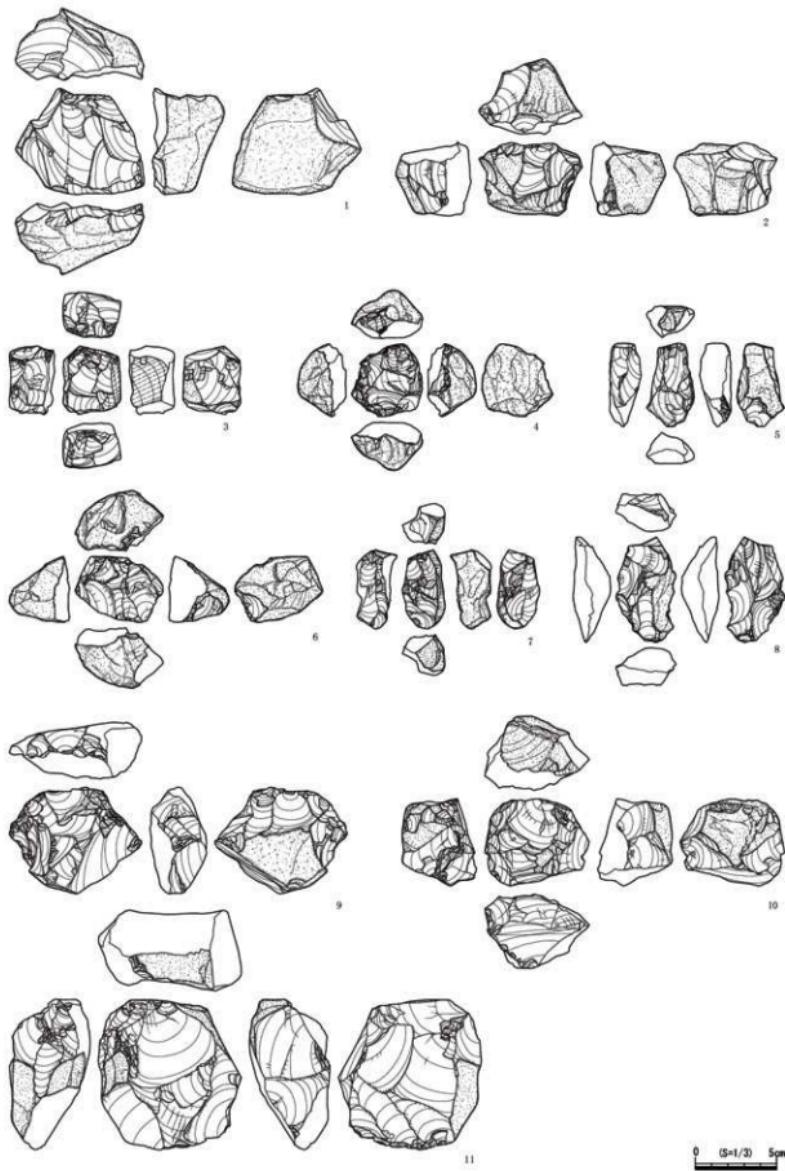


図24 第10号住居跡(5)

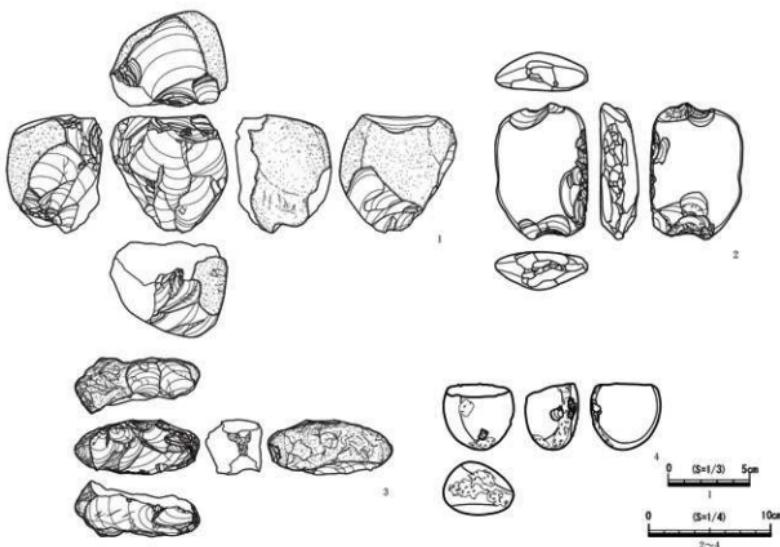
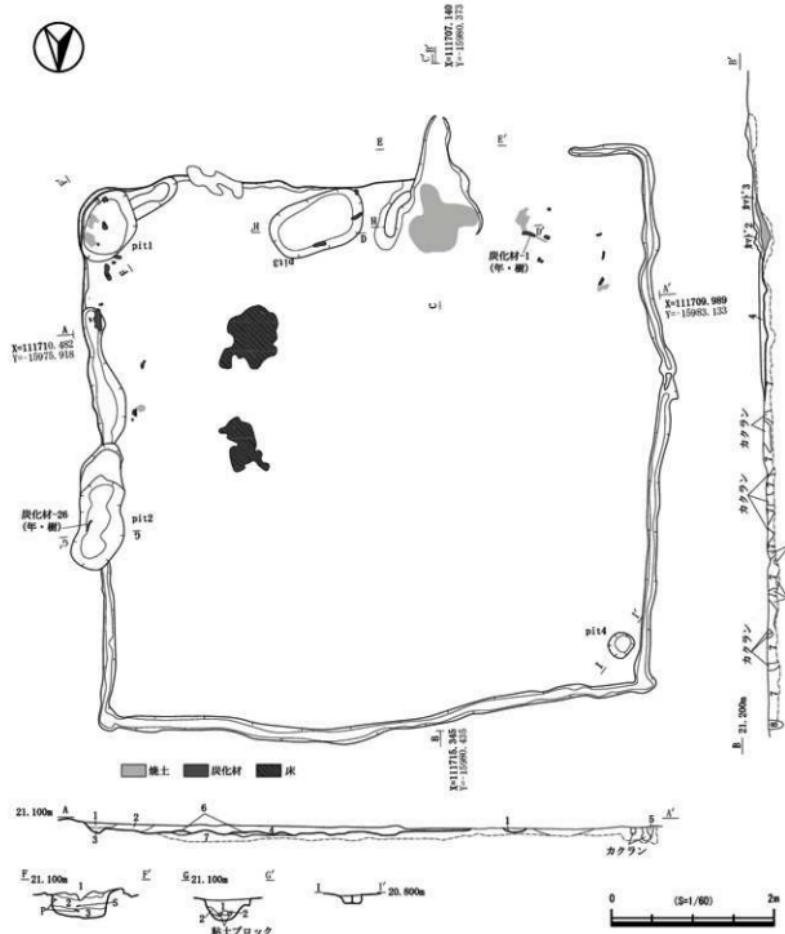


図25 第10号住居跡(6)

第11号住居跡 [SI-11] (図26~28)

【確認】第Ⅰ層除去後、第Ⅲ層掘削開始後まもなく、硬化した床面の一部を検出し、精査をおこなった。

【形状】方形を呈する。【床面・柱穴】床面は攪乱を受けていた部分も多く、一部を除いて残存していないかった。北西隅に小穴が1基検出されたが、明確な柱穴は検出されなかった。【カマド】南壁中央から若干西に寄った位置に敷設されている。半地下式で、袖は残存していなかった。カマド東側に若干の地山（第Ⅲ層）の盛り上がりが認められた。【周溝】南壁のカマド付近を除いて周溝が廻る。【付属施設】東壁中央、南東隅、カマド脇に梢円形の土坑が認められ、それぞれピット1、ピット2、ピット3とした。ピット1は覆土に焼土ブロックを含む。ピット2の堆積土中から炭化材が出土した。ピット3は堆積土中に炭化材が累重した状態で出土した。【堆積土】検出時点ではほとんどが床面ないし床面下であったため、堆積土はわずかに残っていたに過ぎない。暗褐色のシルトである。堆積土中には炭化材が点在した。炭化材周辺には焼土が認められる場合もあり、焼失住居と考えられる。堆積土およびピット中から出土した炭化材の10点については樹種同定を実施した（第4章第2節）。それによれば、アスナロが多く、他にモクレン属・ブナ属・クリが確認された。【出土遺物】土師器101片、擦文土器21片、支脚1点が出土した。そのほかに縄文時代の土器・石器も出土している。石器は石鏃3点、縦型石匙1点、搔器1点を含む剥片石器86点、礎石器5点が出土し、そのうち10点を図示した。遺構構築時さらにはそれ以後に堆積土と共に進入したものと思われる。【時期】平安時代、10世紀代である。放射性炭素年代測定では、較正暦年代でpit2から出土した07YAMADA(2)-9が11~13世紀、pit3から出土した07YAMADA(2)-10が9世紀末~11世紀初頭の値が得られた（第4章第2節）。（中村）



A-A'・B-B'

第1層 10YR2/2 黒褐色シルト
第2層 10YR4/4 暗褐色シルト
第3層 10YR4/4 暗褐色シルト 炭化物粒(φ 2mm)5%混入。
第4層 10YR3/3 暗褐色シルト(貼り土)
第5層 10YR2/2 黑褐色シルト 炭化物粒(φ 3mm)2%混入。
第6層 10YR4/4 暗褐色シルト 10YR2/1 黑色土30%、壤土(φ 1~3mm)1%混入。
第7層 10YR2/2 黑褐色シルト 炭化物粒(φ 1~3mm)2~3%混入。(柱下、
古文時代の柱跡)
第8層 10YR2/2 黑褐色シルト

F-F' (Piti)

第1層 10YR3/4 喀褐色シルト 壤土粒ブロック20%、炭化物粒(φ 1mm)10%混入。
第2層 10YR4/6 暗褐色シルト 炭化物粒(φ 1mm)2%混入。
第3層 7. 10YR3/4 喀褐色シルト 壤土粒ブロック(5YR5/8 喀褐色φ 1~25mm)40%,
炭化物粒(φ 1~8mm)2%混入。

G-G' (P12)

第1層 10YR4/6 暗褐色シルト 炭化物粒(φ 1~15mm)3%、壤土粒(φ 1mm)1%混入。
第2層 10YR4/6 暗褐色シルト 炭化物粒(φ 1~8mm)10%、炭化物粒(φ 20~30mm)
7%、壤土(φ 1~5mm)2%、粘土ブロック(7.5YR5/6 明褐色φ 30~40mm)
ブロック内純土器石側ブロック左上に幅1cm幅5cm幅に混入。

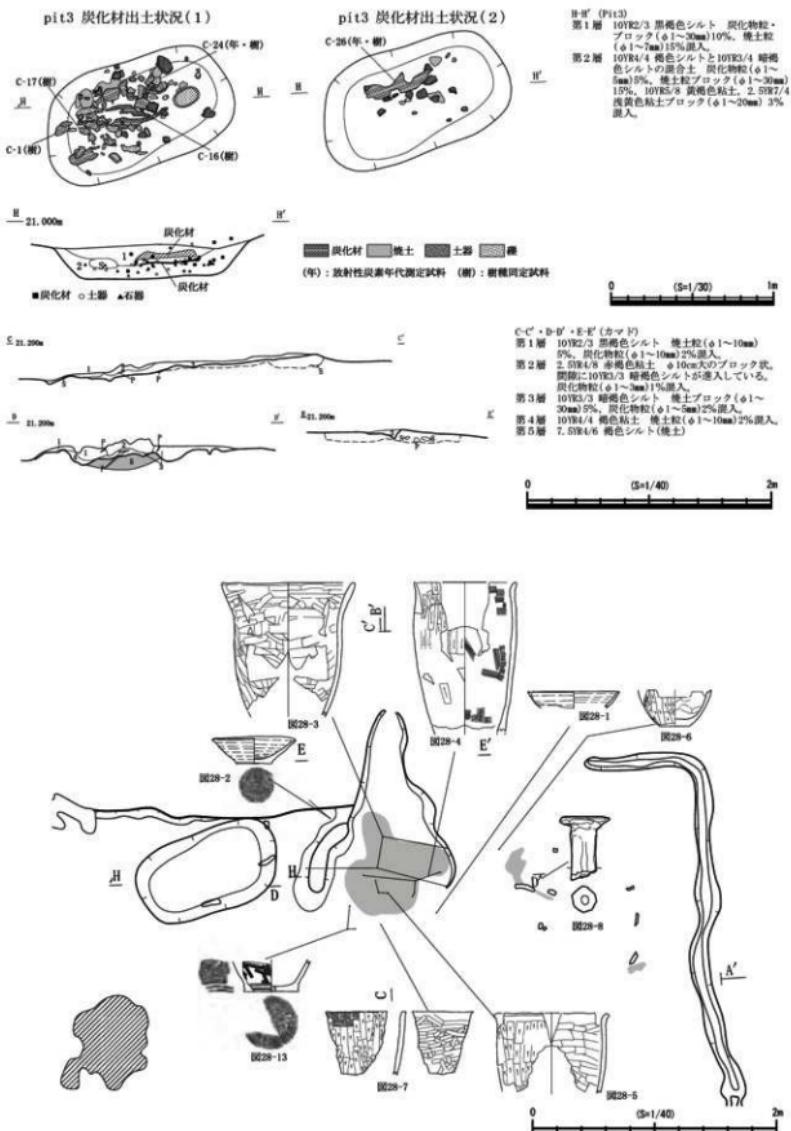
I-I' (P14)

第1層 10YR3/4 喀褐色シルト 炭化物粒(φ 1~2mm)2%混入。

S1-1NP1 (5YR4/4)

5YR4/4 暗褐色シルト 炭化物粒(φ 1~2mm)1~2%、10YR5/6 黄褐色土
(φ 1mm)1%混入。

図26 第11号住居跡(1)



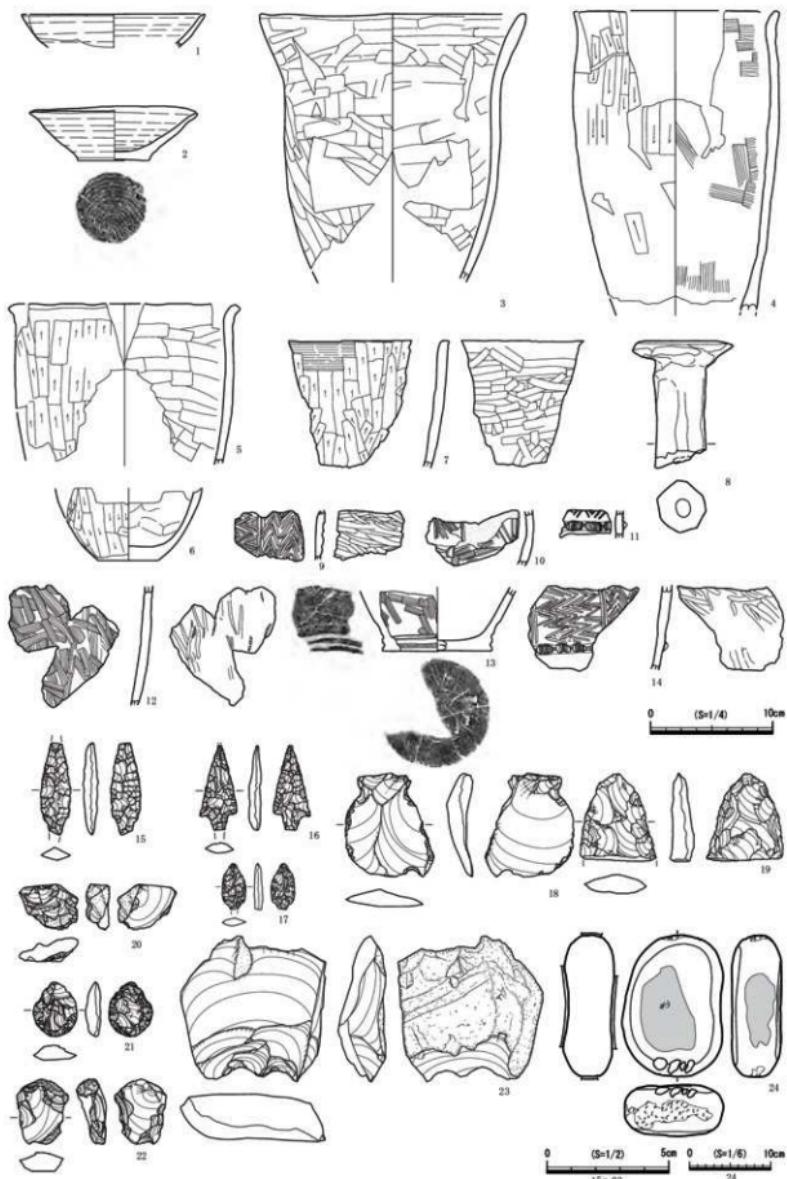


図28 第11号住居跡(3)

第12号住居跡 [SI-12] (図29)

[確認] 第III層で遺構検出作業中、炉のみを検出した。[形状・床面・柱穴] 炉のみの検出であるため不明である。[炉] 斜位土器埋設炉である。深鉢形土器が斜位に埋設されていたが、上半部は失われていた。土器の南側外縁に焼土が形成されていた。[堆積土] 土器内3層、掘方1層に分層した。土器内には焼土は検出されなかった。土器内面に明瞭な被熱痕跡は確認できない。[出土遺物] 土器内から縄文土器片が7点出土した。[時期] 炉体土器から、縄文時代中期末葉から後期初頭である。(中村)

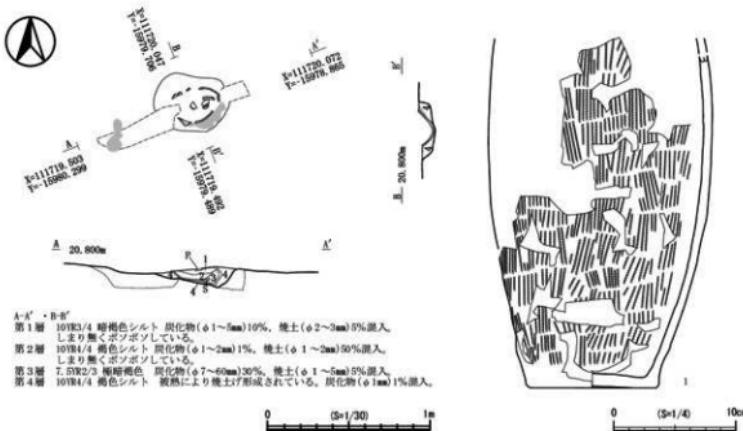
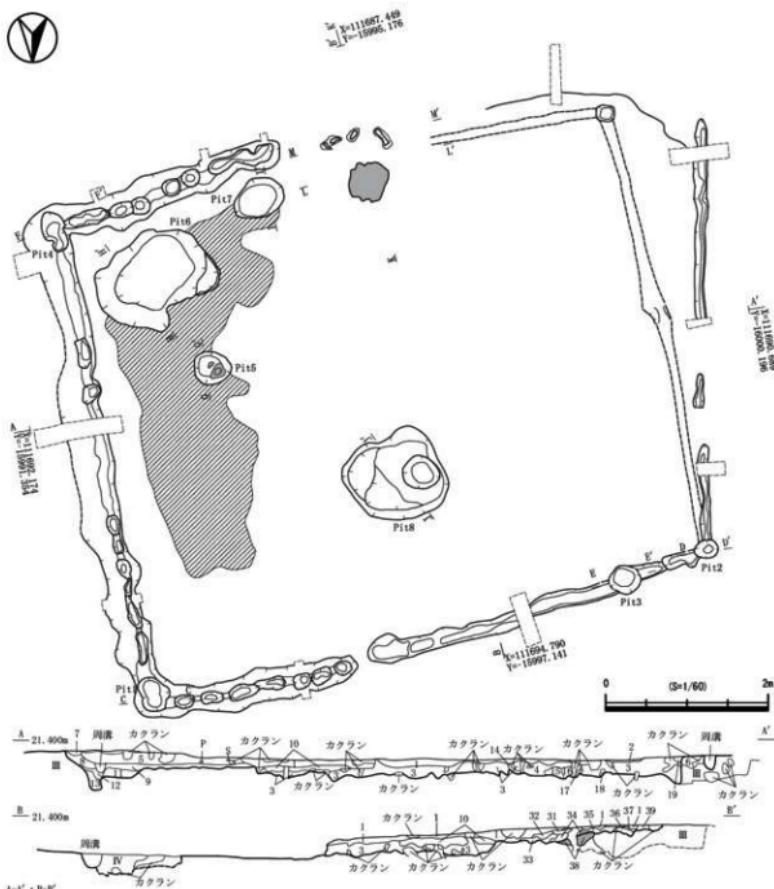


図29 第12号住居跡

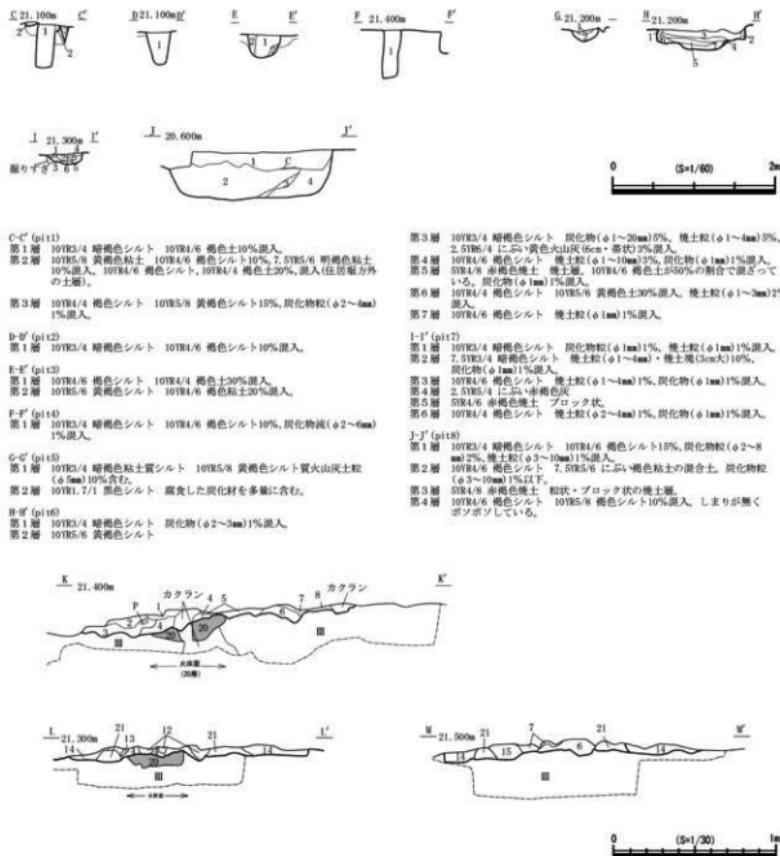
第14号住居跡 [SI-14] (図30~33)

[確認] 第I層除去後、第III層掘削中に硬化した床面の一部を検出し、精査をおこなった。[形状] 方形を呈する。[床面・柱穴] 床面は搅乱を受けていた部分が多く、住居西側半分は遺存状況が思わしくなかった。カマド東脇から住居南東隅、東壁寄りにかけて硬化面を検出した。また北西隅とその少し東寄り、北東隅及び南東隅に明確な柱穴(ピット1~4)を検出した。[カマド] 南壁中央から若干西に寄った位置に敷設されている。半地下式で袖はごく一部しか検出できなかった。[周溝] 南壁のカマド付近を除いて周溝が廻るが、西壁側と南壁側カマド以西は土層の搅乱の影響が強く検出できなかった。[付属施設] 住居中央東寄り、南東隅、カマド脇、住居中央北寄りに円形もしくは不整形の土坑が認められ、それぞれピット5、ピット6、ピット7、ピット8とした。ピット5では炭化材が層をなし第2層を形成する。ピット6は堆積土中に多量の焼土粒を含む。ピット7は覆土に多量の焼土ブロックを含む。ピット8は第3層中にブロック状の焼土が多量に出土した。[堆積土] 検出時点で床面下であった部分もあり、住居北半分の堆積土はほとんど消失している。黄褐色もしくは褐色のシルト主体である。住居西側は遺存状況が悪く明確な壁面を検出できなかった。ピット8堆積土中から出土した炭化材のうち1点は樹種同定を実施し、アスナロであると確認された(第4章第2節)。



- A-A'・B-B'
- 第1層 黒褐色シルト 10YES/2 明褐色シルト 20%、10YES/2 黑褐色シルト 1%、10YES/2 黄褐色シルト 1%、10YES/2 黄褐色シルト 1%～3%、10YES/2 黄褐色粘土 1%混入。堆積土。
- 第2層 10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色粘土 1%～3%、10YES/6 黄褐色粘土 1%混入。床材。
- 第3層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色粘土 1%～3%、10YES/6 黄褐色粘土 1%混入。床材。
- 第4層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色粘土 40%、10YES/6 黄褐色シルト 1%～3%、10YES/6 黄褐色粘土 1%～2%混入。床材。
- 第5層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 10%粘状に混入。10YES/6 黄褐色粘土 1%～4%混入。堆積土 (δ 1～5mm)。堆積土 (δ 1～2mm)。堆積土 (δ 1～5mm)。堆積土 (δ 1～5mm)。10YES/6 黄褐色シルト 20%、堆積土 (δ 1～5mm) 1%混入。壁外側 (うつみめ)。
- 第6層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色粘土 20%、堆積土 (δ 1～5mm) 1%混入。壁外側 (うつみめ)。
- 第7層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 10%粘状に混入。10YES/6 黄褐色粘土 1%～5mm) 1%混入 (くらがめの下層に相当)。
- 第8層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 40%、10YES/6 黄褐色粘土 1%～3%、10YES/6 黄褐色粘土 1%～2%混入。床材。
- 第9層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 10%ブロック状に混入。10YES/6 黄褐色粘土 1%～2% (δ 2～8mm) 1%混入。床材。
- 第10層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色粘土 1%～2% (δ 2～8mm) 1%混入。床材。
- 第11層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 5%、10YES/6 黄褐色粘土 1%～2% (δ 2～8mm) 1%未確認混入。
- 第12層 10YES/3/4 黄褐色シルト 10%、10YES/8 黄褐色シルト 25%粘状に混入。10YES/6 黄褐色粘土 1%～5mm) 1%混入。周溝部。
- 第13層 10YES/3/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 1%～6mm) 1%混入。周溝部。
- 第14層 10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色粘土 1%～2% (δ 2～8mm) 1%混入。床材内。
- 第15層 10YES/4/5 黄褐色シルト 22層より少しだけ暗い。床材内。
- 第16層 10YES/4/5 黄褐色シルト 22層より少しだけ暗い。床材内。
- 第17層 10YES/4 黄褐色シルト 22層より少しだけ暗い。床材内。
- 第18層 10YES/4 黄褐色シルト 22層より少しだけ暗い。床材内。
- 第19層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 3%粒状に混入。10YES/6 黄褐色粘土 1%～2% (δ 2～8mm) 1%混入。
- 第20層 7.5YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 3%粒状に混入。10YES/6 黄褐色粘土 1%～2% (δ 2～8mm) 1%混入。
- 第21層 10YES/3/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 3%粒状に混入。10YES/6 黄褐色粘土 1%～2% (δ 2～8mm) 1%混入。
- 第22層 10YES/6 黄褐色カド壁体ブロック (δ 2～8mm) 1%混入。
- 第23層 10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 1～2mm) 1%混入。
- 第24層 7.5YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 1～2mm) 1%混入。
- 第25層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 2～4mm) 3%混入。
- 第26層 10YES/5/6 黄褐色粘土 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 2～4mm) 5%混入。
- 第27層 7.5YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 2～4mm) 10%混入。
- 第28層 10YES/6 黄褐色堆土土 (δ 2～4mm) 1%混入。
- 第29層 10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色堆土土 (δ 1～2mm) 1%混入。
- 第30層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 15%粒状に混入。
- 第31層 10YES/5/6 明赤褐色堆土土 (δ 3～5mm) 10%混入。
- 第32層 10YES/3/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 3～5mm) 10%混入。
- 第33層 10YES/6 明赤褐色カド壁体ブロック (δ 2～8mm) 10%混入。
- 第34層 7.5YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 1～2mm) 10%混入。
- 第35層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 2～4mm) 3%混入。
- 第36層 10YES/5/6 黄褐色粘土 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 2～4mm) 5%混入。
- 第37層 7.5YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 2～4mm) 10%混入。
- 第38層 10YES/6 黄褐色堆土土 (δ 2～4mm) 1%混入。
- 第39層 10YES/6 黄褐色シルト 10%、10YES/6 明赤褐色堆土土 (δ 1～2mm) 1%混入。
- 第40層 10YES/4 黄褐色シルト 10%、10YES/6 黄褐色シルト 15%粒状に混入。
- 床2・3・4及び9・10・11層上面に床材と判断したが、硬化面以外は明瞭な床面が確認できない。
- 床30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41層は板下ためのセクション図及び土層記述から除外した。

図30 第14号住居跡(1)



- S1-14カタ K-K'・M-M'・N-N'
- 第1層 7.5YR4/6 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土質(φ3~10mm)10%混入。
- 第2層 10YR2/4 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ3~10mm)20%, 5YR6/8 暗褐色粘土(φ2~8mm)15%, 5YR6/8 暗褐色カマド堅体ブロック(φ20mm)5%混入。
- 第3層 10YR2/4 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)10%, 5YR5/6 明赤褐色カマド堅体ブロック(φ10~30mm)10%, 炭化物粒(φ1~4mm)2%混入。
- 第4層 7.5YR4/4 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)5%混入。
- 第5層 7.5YR4/4 暗褐色シルト 10YR5/8 黄褐色粘土(φ1~2mm)10%混入。
- 第6層 7.5YR4/6 暗褐色シルト 10YR5/8 黄褐色粘土(φ1~2mm)10%混入。
- 第7層 7.5YR4/6 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ3~10mm)1%混入。
- 第8層 7.5YR3/4 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)10%混入。
- 第9層 7.5YR3/4 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)5%混入。
- 第10層 7.5YR4/4 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)10%混入。
- 第11層 7.5YR4/4 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)5%混入。
- 第12層 7.5YR4/4 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ3~10mm)5%混入。
- 第13層 10YR5/8 黄褐色粘土 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)10%混入。
- 第14層 10YR4/6 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)2%混入。
- 第15層 10YR4/6 暗褐色シルト 5YR5/6 明赤褐色粘土(φ1~2mm)3%混入。
- 第20層 5YR4/8 明赤褐色粘土 土床面。しまり有り。
- 第21層 10YR2/4 暗褐色シルト 10TR4/6 黄褐色粘土(φ1~2mm)3%, 炭化物粒(φ1~3mm)1%混入。ソテ。

串9~11・16~19・22層は重力下のため、セクション図及び土層記号から除外した。

図31 第14号住居跡(2)

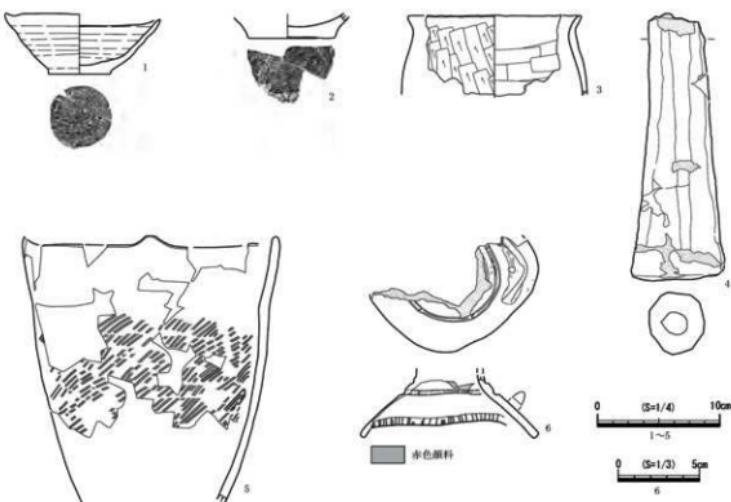


図32 第14号住居跡(3)

〔出土遺物〕 カマド・堆積土・ピット覆土から土師器184片、支脚1点が出土した。ピット5半截後に回収した堆積土から鍛造剥片(29.6g)・鉄滓(0.6g)・粒状滓(0.1g以下)が出土した。そのほかに縄文時代の土器・石器も出土している。石器は石鏃5点、石核6点、打製石斧1点を含む剥片石器59点、礫石器11点が出土し、そのうち14点を図示した。図33-13・14は性格・用途不明な石製品で、凝灰岩の器体上面と下面に幅1cm深さ5mmほどの十字状の溝が観察できる。溝に沿って割れ面があることから分割のために穿たれた溝であるとも考えられる。縄文時代の遺物は遺構構築時さらにはそれ以後に堆積土と共に進入したものと思われる。〔時期〕 平安時代・10世紀代である。放射性炭素年代測定では、較正暦年代でピット8から出土した07YAMADA(2)-3が8世紀初頭～10世紀中葉、07YAMADA(2)-4が8世紀初頭～9世紀末葉の値が得られた（第4章第2節）。（宮嶋）

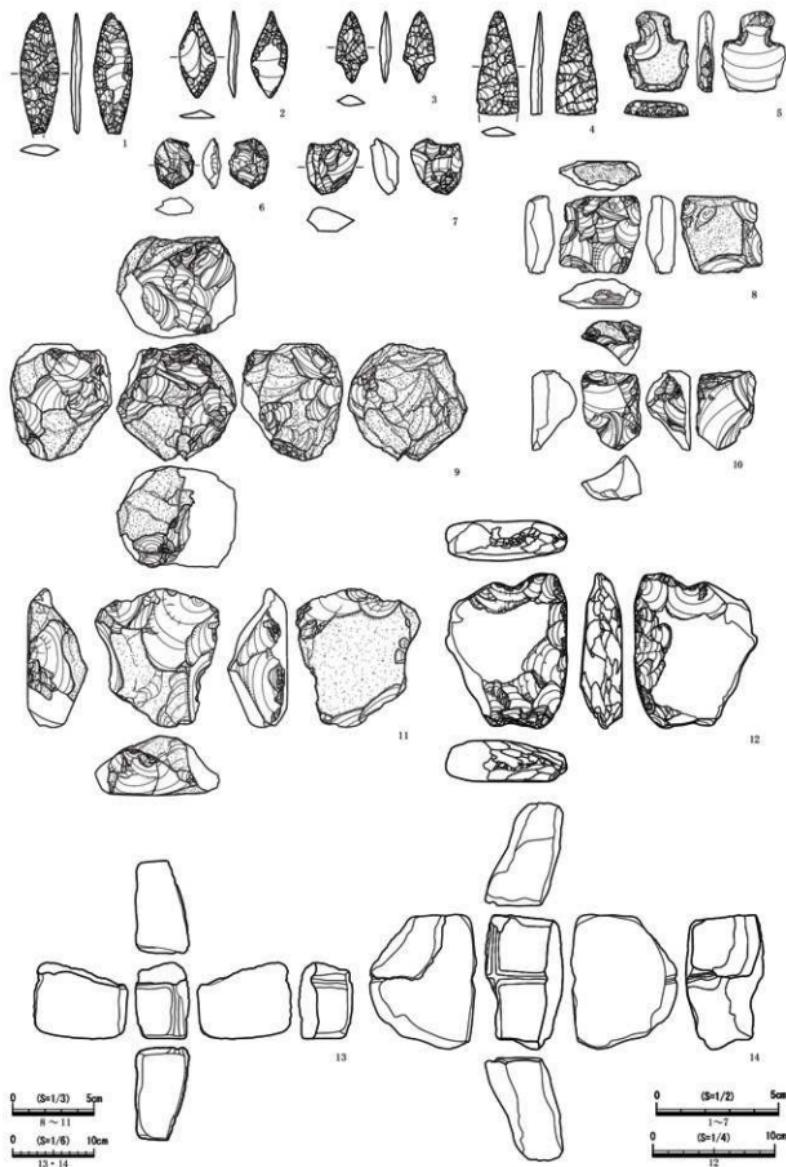


図33 第14号住居跡(4)

第16号住居跡 [SI-16] (図34~37)

〔形状〕南西側が搅乱を受けているが、円形を呈するものと思われる。〔床面・柱穴〕木根による搅乱を受けていることもあり、起伏がある。明瞭な硬化面は認められなかった。床面から6基の小穴を確認した。〔炉〕土器埋設炉が新旧2基検出された。新しい段階の炉1は底部を欠く深鉢形土器を埋設し土器内に破片を敷き詰めていた。内部に焼土は確認されなかった。旧段階の炉2は深鉢形土器が半周分のみ残存していた。〔堆積土〕7層に分層した(3~6層、3b層)。その他は搅乱である。〔出

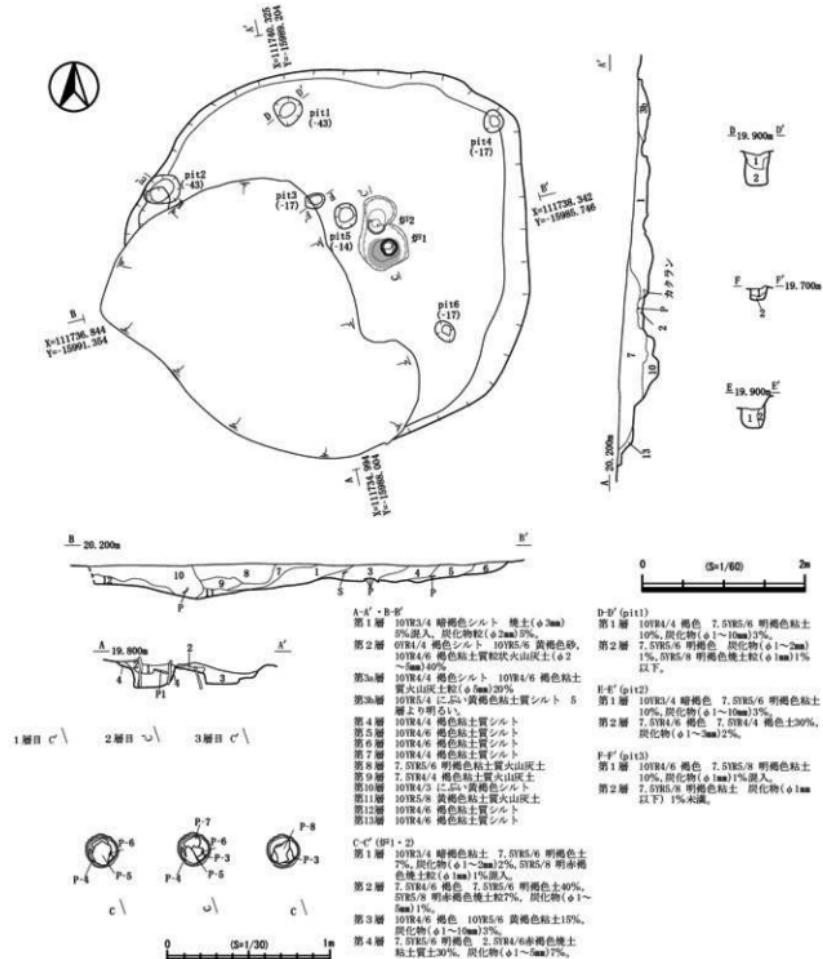


図34 第16号住居跡(1)

土遺物】土器は堆積土から347片（4122.1g）が出土した。本来この住居跡に伴うと判断された土層からは縄文時代中期初頭の土器が出土した。石器は石錐5点、尖頭器6点、石核11点、半円状扁平打製石器1点を含む剥片石器151点、礫石器8点が出土し、そのうち26点を図示した。図37-7は扁平な凝灰岩を素材とし、器体両面のほぼ中心線の通る位置に凹み痕のある敲磨器である。【時期】炉体土器から、円筒上層a式と考えられる。(中村)

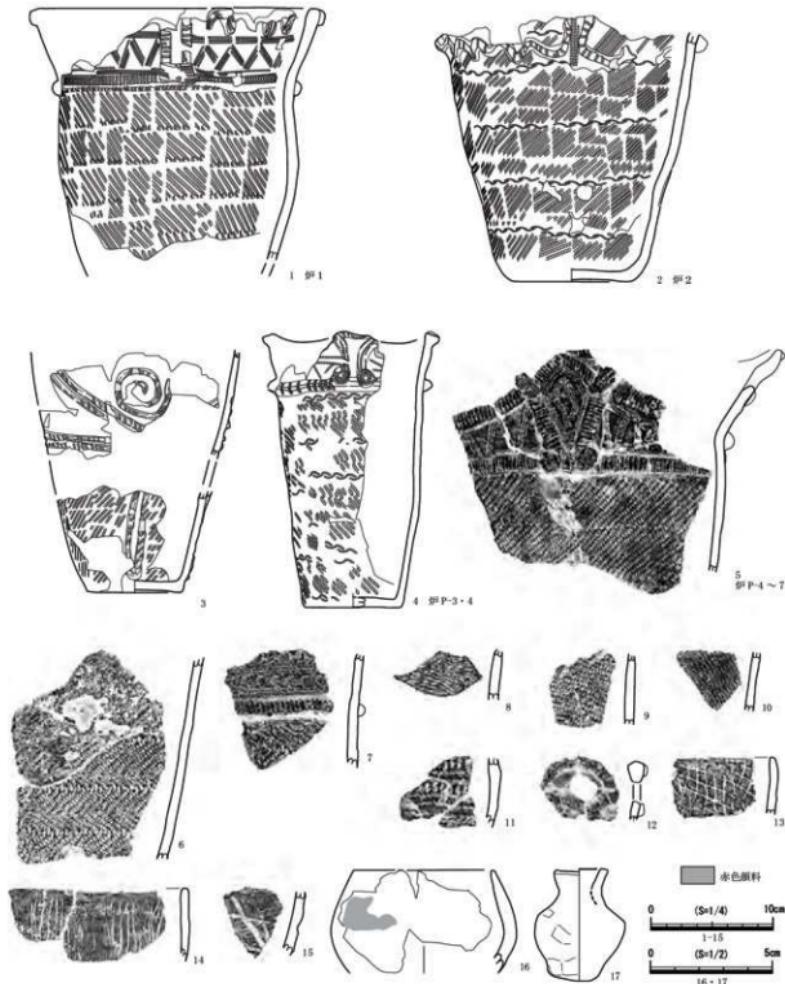


図35 第16号住居跡(2)

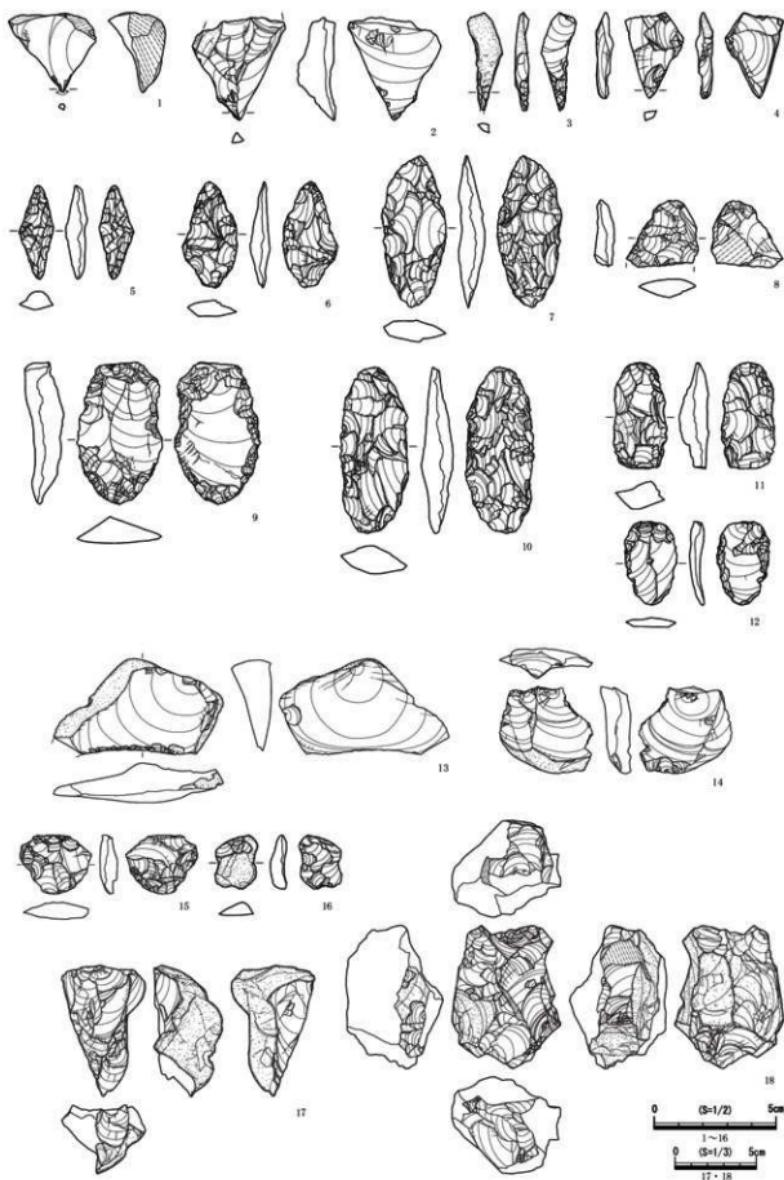


図36 第16号住居跡(3)

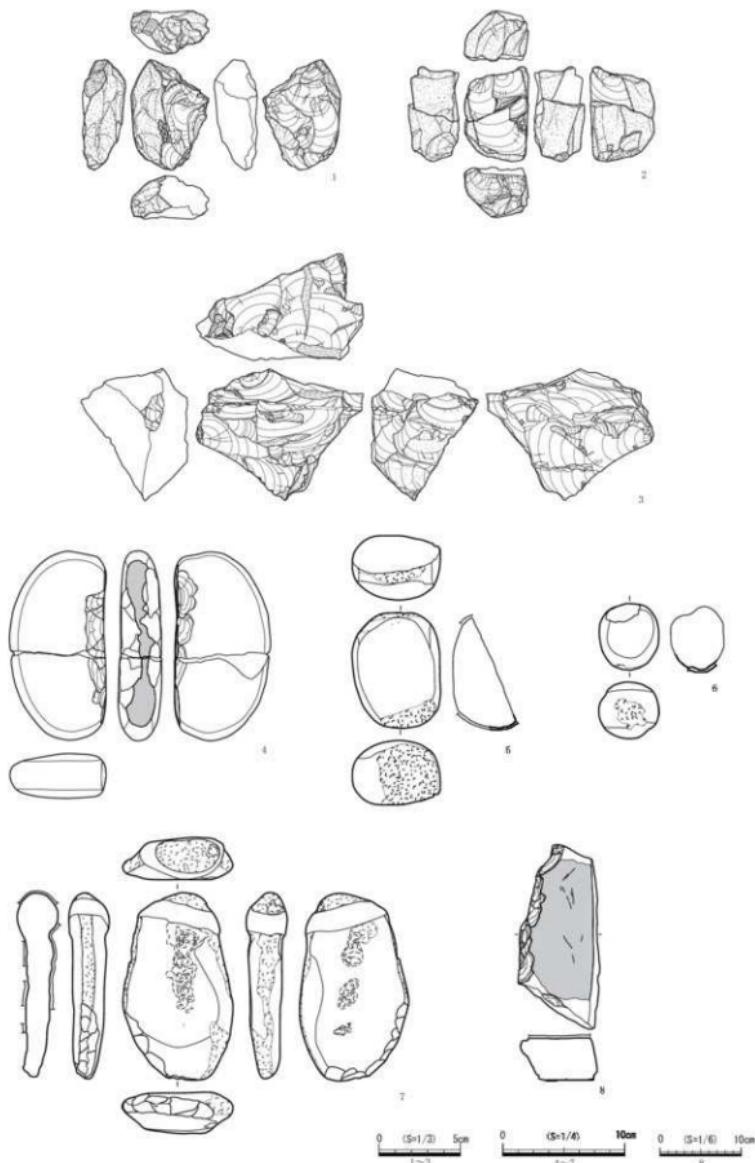


図37 第16号住居跡(4)

第17号住居跡〔SI-17〕(図38・39)

〔形状〕楕円形を呈すると思われる。〔床面・柱穴〕第III層下の黄褐色粘土質火山灰土を床面とする。床面上からは4基の小穴を検出した。〔炉〕扁平な川原石が3個、短軸を垂直方向に向け、やや間隔を置いて埋設されており、その北側に弱い焼土が検出された。〔堆積土〕5層に分層した。暗褐色～黄褐色シルトである。〔出土遺物〕土器は堆積土中から108片(1610.3g)が出土した。石器は石核1点、敲磨器類3点を含む剥片石器17点、礫石器6点が出土し、そのうち4点を図示した。〔時期〕堆積土から出土した土器は縄文時代中期末葉のものが主体であるが、いずれも小破片で、本遺構に伴うものではなく、土壤に混入していたものが土壤と共に堆積した可能性が考えられる。炉の形態からは中期末葉～縄文時代後期初頭の可能性が考えられる。(中村)

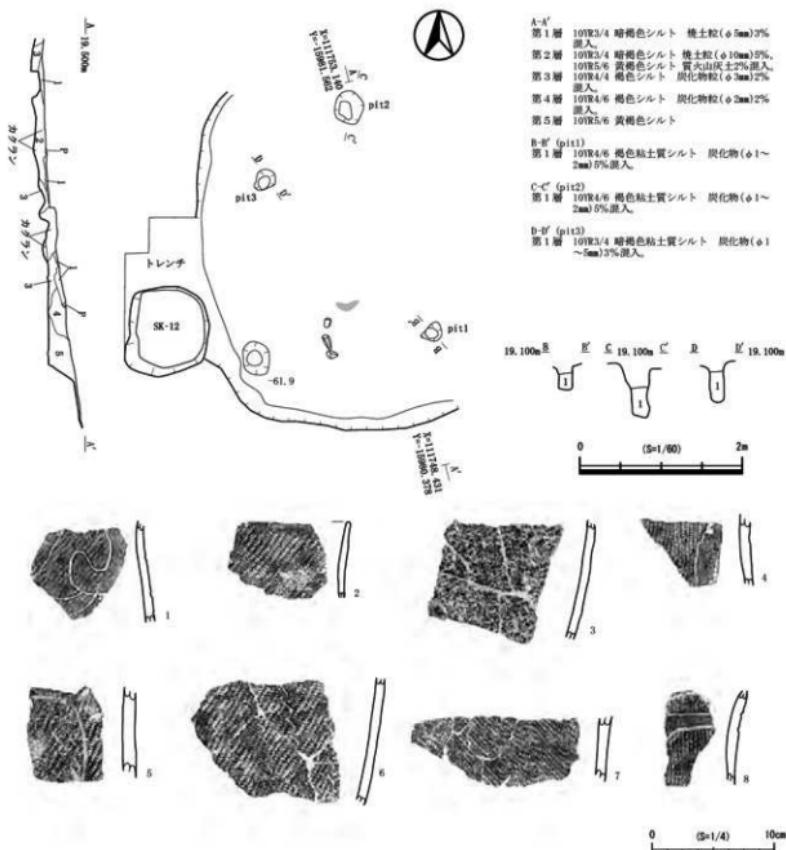


図38 第17号住居跡(1)

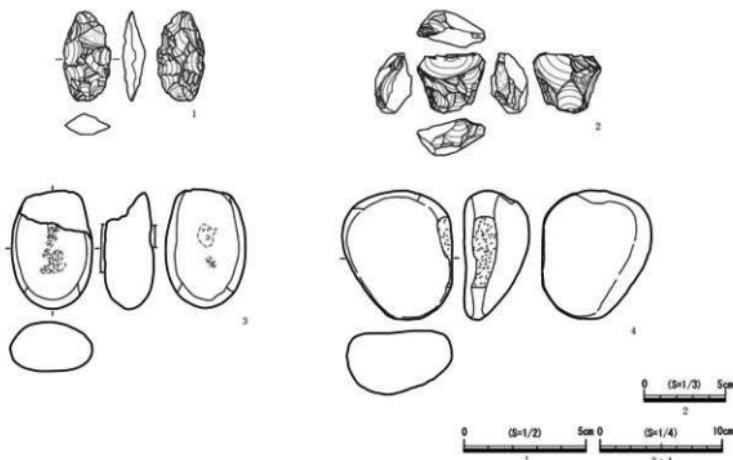


図39 第17号住居跡(2)

第19号住居跡 [SI-19] (図40~44)

【確認】第1層直下で縄文時代後期初頭を主体とする遺物集中（後述：85頁）を取り上げた後、第III層で暗褐色の落ち込みを確認した。床面まで掘り下げ、土層を検討した結果、想定した住居の範囲の外側に更に住居があることがわかった。この段階では同一の住居であるか別の住居であるのかが判断できなかったため、新たにSI-30として精査した。最終的には、これらは同一の住居であることが判明したため、整理段階で第30号住居跡を第19号住居跡に統合した。【形状】少なくとも全形の二分の一は調査区外にあるため、詳細は不明だが、円形を呈するものと思われる。【床面・柱穴】第III層下の黄褐色粘土質火山灰土を床面とする。硬化面は認められなかった。床面からは4基の小穴を検出した。pit6は炉1下位から検出した。【炉】床面中央に地床炉、西壁際に土器埋設炉が検出された。床面中央の地床炉は新旧2時期認められる。炉1が新しく、炉2が古い。炉2の焼土周辺には1~2cm大の炭化材が複数認められたため、採取して3点を放射性炭素年代測定に供した（第4章第1節）。炉3は径4cm程度の小形の土器底部を埋設し、周囲に径20cm弱の焼土が形成されていたが、その規模から考えて主体的な炉とは考えにくい。【堆積土】30層に分層した。レンズ状の堆積とはいえず、人为的な要因により堆積したと思われる。【出土遺物】土器は堆積土中から709片（9760.6g）出土した。縄文時代中期末葉の大木10式併行期が主体である。また、炉3に使用された小形土器底部も製作技法からは縄文時代中期末葉～後期初頭のものと判断された。石器は石鏃7点、尖頭器5点を含む剥片石器185点、礫石器10点が出土し、そのうち23点を図示した。【時期】堆積土から出土した土器は縄文時代中期末葉のものである。また炉3に使用された土器は、縄文時代中期末葉～後期初頭のものと思われる。炉2から採取した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は、較正歴年代で、2630BC-2469BCの年代に含まれる可能性が高く、土器編年と矛盾しない。（中村）

A-A'	
第1層	10YR2/3 黒褐色シルト 茎木質多く、根入。
第2層	10YR2/4 單面シルト 土木質多く、根入。
第3層	10YR4/3 にぶい 黃褐色シルト 炭化物(φ1~3mm)1%, 焙土(φ1mm)1%混入。
第4層	10YR4/3 にぶい 黃褐色シルト 炭化物(φ1mm)1%, 焙土(φ1mm)1%混入。
第5層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1mm)3%、焙土(φ1mm)1%混入。
第6層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1~3mm)3%、焙土(φ1mm)1%混入。
第7層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1mm)1%、焙土(φ1mm)1%混入。
第8層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1~3mm)3%、混入。
第9層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ2~5mm)5%混入。
第10層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1~10mm)5%、焙土(φ1~3mm)1%混入。
第11層	10YR4/4 梅色シルト 黄褐色土質火山灰土粒(φ1~3mm)5%混入。
第12層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1~3mm)5%混入。
第13層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ2~5mm)5%混入。
第14層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ3~10mm)10%、10YR5/6 黄褐色火 山灰土粒(φ1~3mm)10%混入。
第15層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ2~5mm)5%混入。
第16層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1~3mm)5%混入。
第17層	10YR4/4 梅色シルト 10YR5/6 黄褐色粘土質火山灰土粒(φ3mm)10% 混入。
第18層	10YR4/4 黄褐色シルト 10YR5/4 明褐色粘土質シルト 炭化物(φ2~5mm)5%混入。
第19層	10YR4/6 梅色シルト 炭化物(φ3~10mm)5%、10YR5/6 黄褐色粘土質 火山灰土粒(φ1~10mm)10%混入。
第20層	10YR4/6 梅色シルト 炭化物(φ3~10mm)5%、10YR5/6 黄褐色粘土質 火山灰土粒(φ1~10mm)10%混入。
第21層	10YR4/6 梅色シルト 炭化物(φ2~5mm)5%、焙土(φ1mm)1%混入。
第22層	10YR4/6 梅色シルト 7.5mmの黄褐色土質火山灰土粒(φ1mm)1%混入。
第23層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1mm)1%混入。
第24層	10YR3/3 單面シルト 炭化物(φ1mm)1%混入。
第25層	10YR4/6 單面シルト 炭化物(φ1~10mm)5%混入。

第25層	10YR4/6 單面シルト 炭化物(φ1~10mm)5%混入。
第26層	10YR4/6 黄褐色シルト 土木質(1層2mm厚)10YR4/4 單面シルト混入。
第27層	10YR4/4 梅色シルト 炭化物(φ1~5mm)5%混入。
第28層	SYR4/8 黄褐色土 壤土層。7.5mE/4 單面シルト 炭化物(φ1~5mm)1%混入。
第29層	SYR4/8 黄褐色土 7.5mE/4 單面シルト 炭化物(φ1~5mm)2%、 炭化物(φ1~3mm)1%混入。
第30層	10YR5/6 黄褐色粘土 焙土粒(φ1~5mm)1%、炭化物(φ1~8mm) 1%混入。
第31層	SYR5/8 黄褐色シルト 灰灰土層。中間に5cmの薄い土厚さ3cmの層状 に混入。炭化物(φ1~20mm)2%混入。
第32層	SYR4/8 黄褐色 焙土粒 SI-19P9R9、炭化物(φ1~3mm)1%混入。 7.5mW/4 黄褐色土 焙土粒(φ1mm)1%混入。
第33層	SYR4/8 黄褐色 焙土粒 SI-19P9R9、炭化物(φ1~3mm)1%混入。 7.5mW/4 黄褐色土 焙土粒(φ1mm)1%混入。
第34層	SYR4/8 黄褐色土 焙土粒(φ1mm)1%混入。 7.5mW/4 黄褐色土 焙土粒(φ1mm)1%混入。
第35層	SYR4/8 黄褐色土 焙土粒(φ1mm)1%混入。

C-C'(SP3)

第1層	10YR4/6 梅色シルト 上面が弱く焼成化している。
第2層	7.5YR4/6 梅色粘土 焙土。

D-D'(p12)

第1層	10YR5/6 黄褐色シルト 炭化物(φ1mm)1%混入。
第2層	10YR4/6 梅色シルト 炭化物(φ1~5mm)7%混入。

E-E'(p13)

第1層	10YR3/3 單面シルト 炭化物(φ1~3mm)2%混入。
-----	--------------------------------

F-F'(p14)

第1層	10YR4/6 梅色シルト
-----	---------------

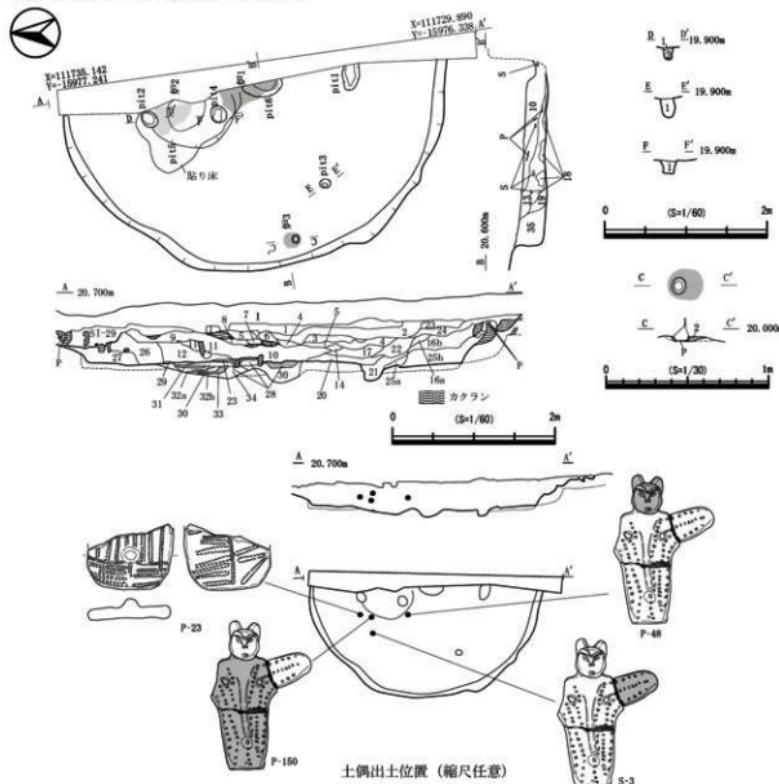


図40 第19号住居跡(1)

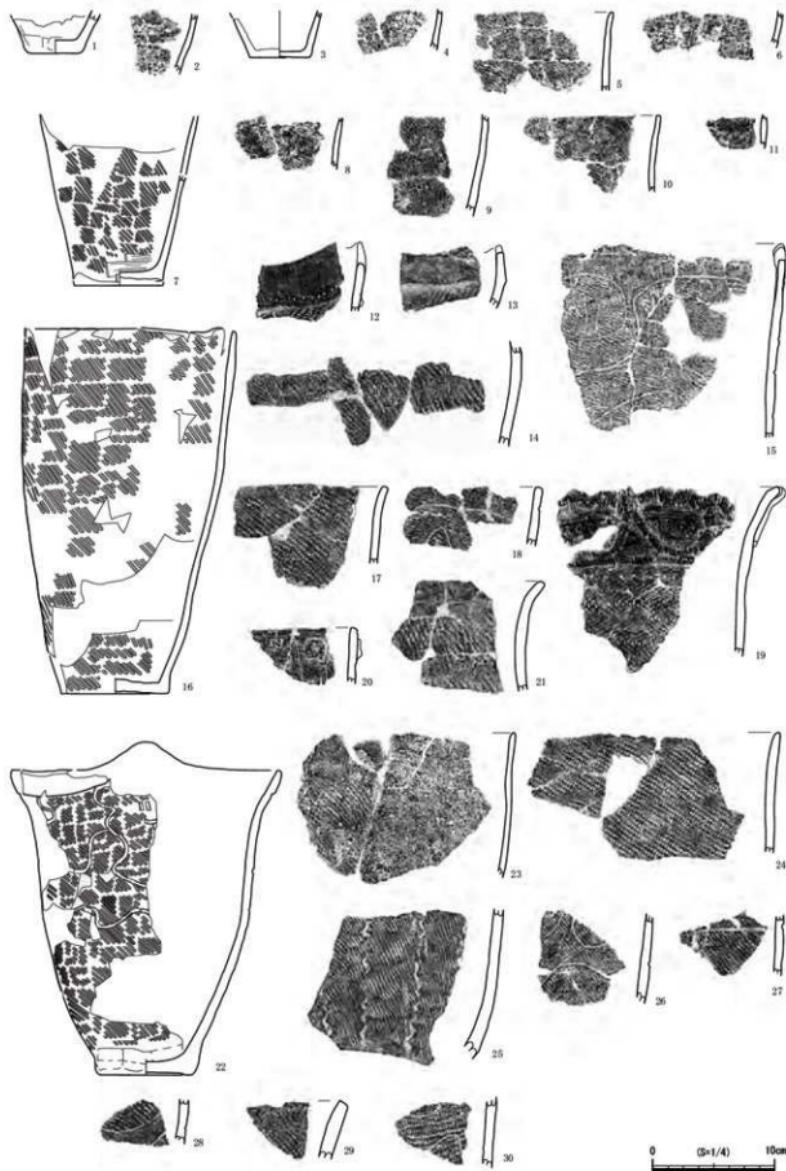


図41 第19号住居跡(2)

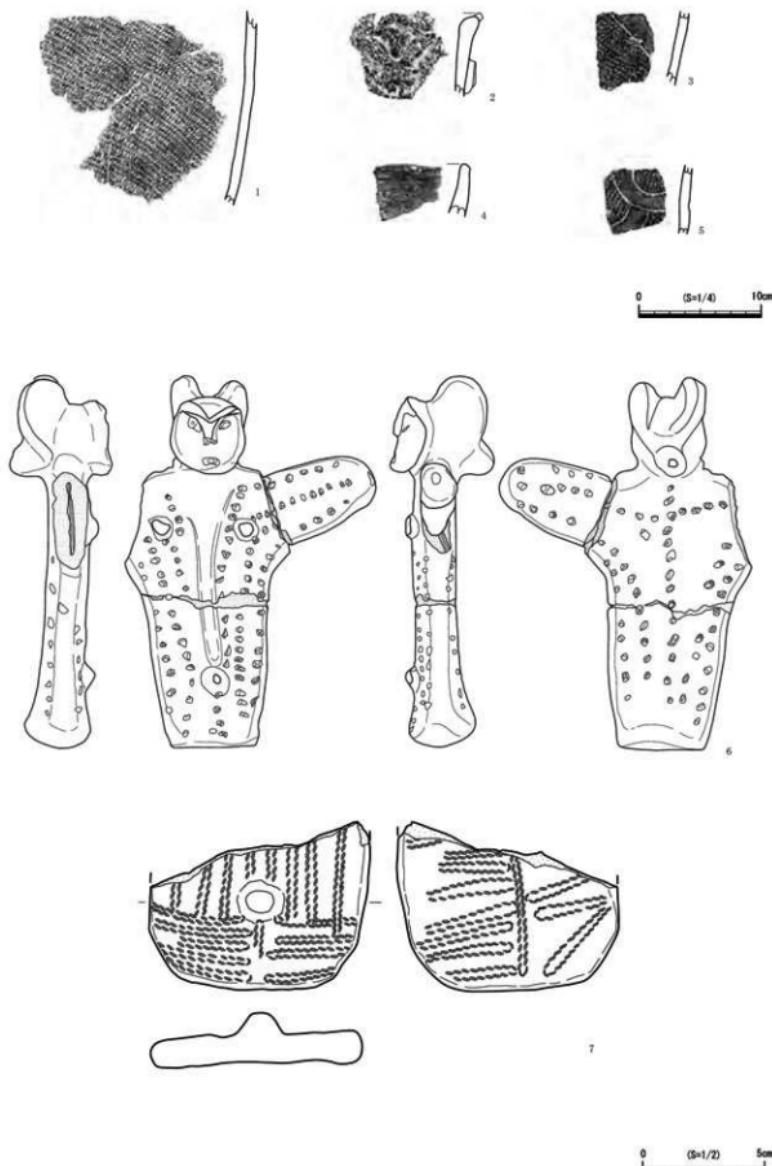


図42 第19号住居跡(3)

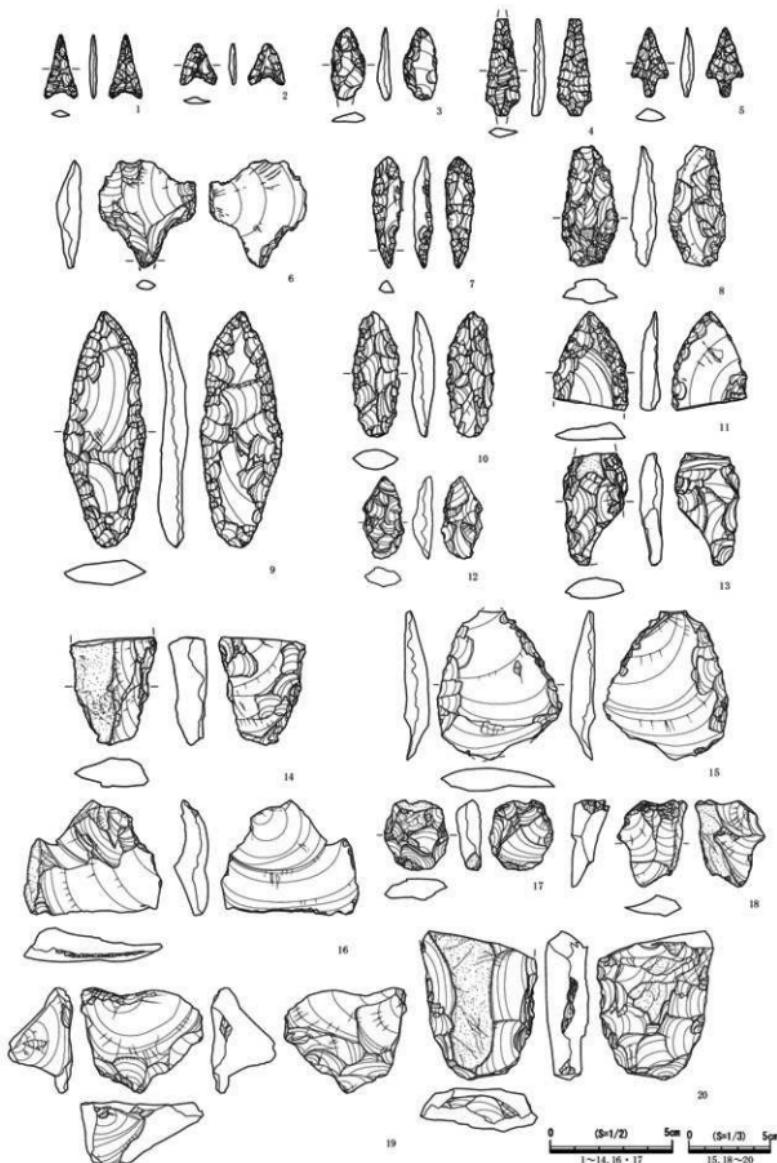


図43 第19号住居跡(4)

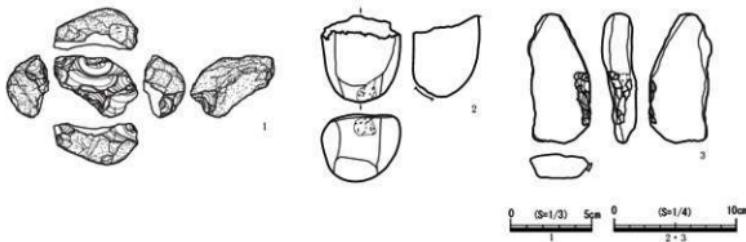


図44 第19号住居跡(4)

第20号住居跡 [SI-20] (図45)

[確認] 第9号住居跡検査中に炉のみを検出した。[床面・柱穴] 床面・柱穴共に確認できなかった。
 [炉] 斜位土器埋設炉である。斜位に埋設された深鉢形土器の上部は欠失していた。土器口縁部の外周には焼土が形成されていた。[堆積土] 土器内堆積土を3層に、掘方堆積土を3層に分層した。土器内には焼土は認められなかった。[出土遺物] 炉体に用いられた深鉢形土器のみである。全面縄文が施される。縄文時代中期末葉から後期初頭のものと考えられる。土器内面には、埋設時の上面側の一部に軽いハジケが認められ、上面側は全体に明るい色調を呈する。一方、下面側には暗色帯が形成されており、その周縁は埋設時の角度に器体をあわせるとおおむね水平に近くなる。上下で色が異なる現象は外面にも認められ、炉としての使用法に起因する可能性が考えられる。[時期] 炉体土器により縄文時代中期末葉から後期初頭である。(中村)

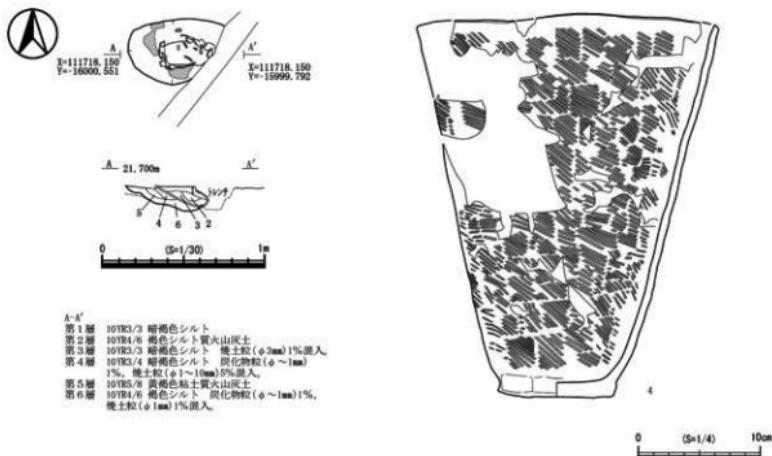


図45 第20号住居跡

第21号住居跡〔SI-21〕(図46・47)

〔形状〕 楕円形を呈する。〔床面・柱穴〕 床面の大半は第1号不明遺構に破壊されていたため、詳細は不明である。外周に周溝があり、周溝上にピットが敷設される。〔炉〕 東壁際に地床炉を検出した。床面中央付近にも焼土を検出したが、第1号不明遺構に破壊された地床炉の残存部であると思われる。〔堆積土〕 ほとんどが第1号不明遺構に破壊されており、詳細は不明である。〔出土遺物〕 土器は覆土から43片(749.5g)、床面・周溝・ピットから31片(574.4g)出土した。石器は石錐1点、石核1点を含む剥片石器13点、礫石器1点が出土し、そのうち4点を図示した。土器は縄文時代中期末葉の大木10式併行期～後期初頭のものである。〔時期〕 遺構形態は最花式に多い形態である。ただし、覆土からは大木10式併行期～後期初頭の土器が出土しているので、最花式～大木10式併行期の可能性が高い。(中村)

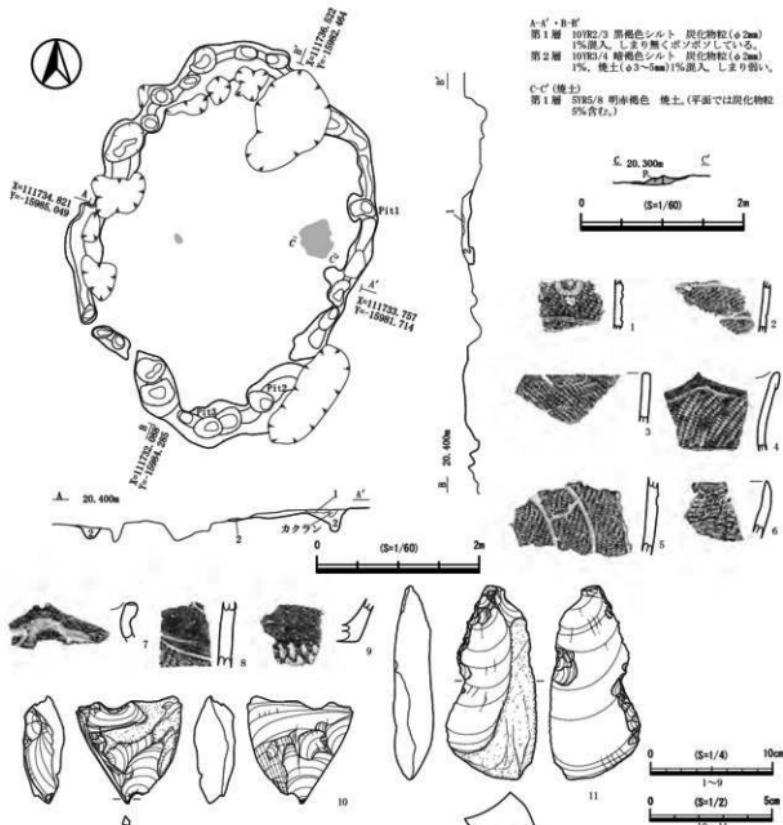


図46 第21号住居跡(1)

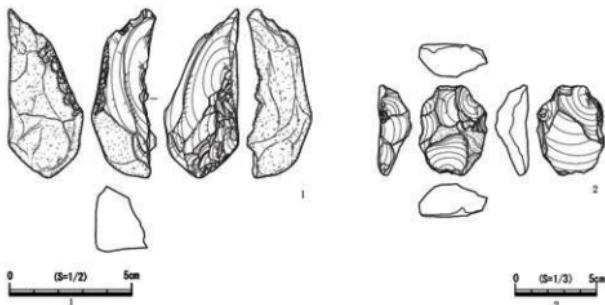


図47 第21号住居跡(2)

第22号住居跡 [SI-22] (図48・49)

【形状】搅乱を受けている部分が多いが、円形を呈すると思われる。〔床面・柱穴〕床面は搅乱を受けている部分が多いため、凹凸が激しい。硬化面は検出されなかった。柱穴も検出されなかった。〔炉〕床中央から東に寄った位置に地床炉を検出した。〔堆積土〕2層に分層した。褐色・暗褐色のシルトである。〔出土遺物〕堆積土中から土器111片 (1021.1 g) が出土した。石器は石錐2点、尖頭器1点を含む剥片石器86点、礫石器6点が出土し、そのうち9点を図示した。土器は縄文時代後期初頭のものが中心である。〔時期〕本遺構に伴う遺物ではなく、また、覆土から出土した遺物も、搅乱を受けている部分が多いので、堆積土の形成時期を表すと考えるには問題が多い。詳細な時期は不明である。(中村)

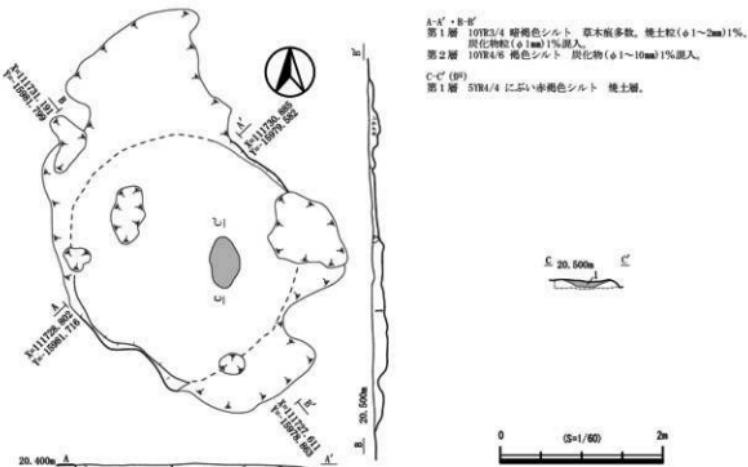


図48 第22号住居跡(1)



図49 第22号住居跡(2)

第23号住居跡 [SI-23] (図50~54)

〔形状〕およそ二分の一が調査区外にあるため、推定ではあるが、橢円形を呈すると思われる。〔床面・柱穴〕第Ⅲ層下位の暗赤褐色粘土質火山灰土を床面とする。硬化面は認められなかった。床面上で小穴を4基検出したが、いずれも柱穴とは考えにくい。〔炉〕床面中央に土器埋設炉を検出した。埋設された土器は口縁部・底部とも欠失している。土器内に焼土は検出されなかった。変色帯は確認できないが、上部1/4は摩耗が激しく、熱を受けた可能性が考えられる。胴部には羽状繩文が施されている。繩文時代中期円筒上層式のものである。〔堆積土〕3層に分層した。全体にレンズ状の堆積を示すが、人為堆積とも自然堆積とも判別しがたい。〔出土遺物〕堆積土から土器が436片(5980.0g)、pit3から2片(22.0g)出土した。石器は石鏟4点、尖頭器4点、磨製石斧2点、北海道式石冠1点を含む剥片石器328点、礫石器17点が出土し、そのうち44点を図示した。図54-3は機能面を複数持つ敲磨器である。正面の長軸・短軸上に敲打による浅く短い溝が作出されている。〔時期〕炉体に用いられた土器から繩文時代中期円筒上層式である。(中村)

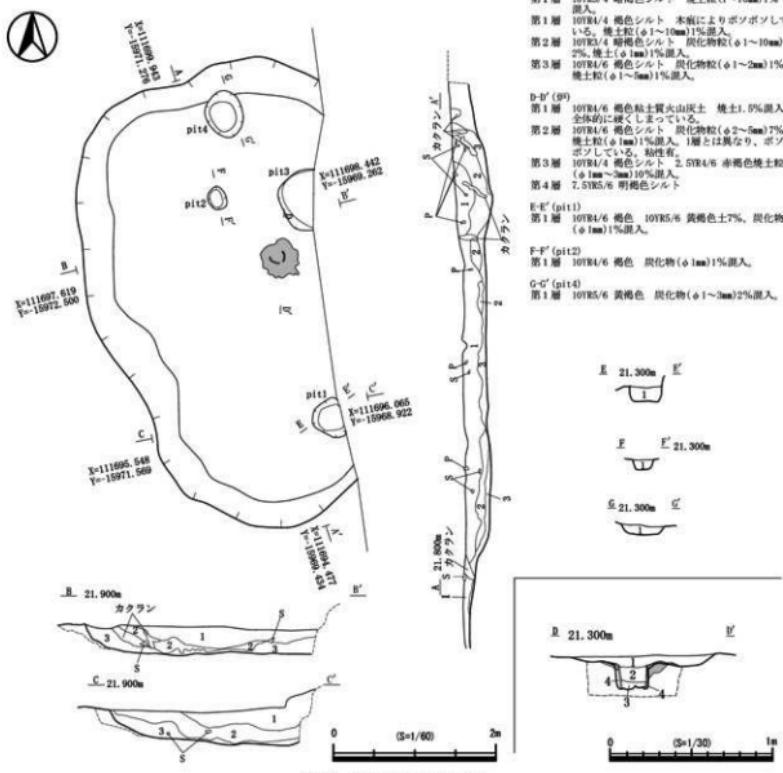


図50 第23号住居跡(1)

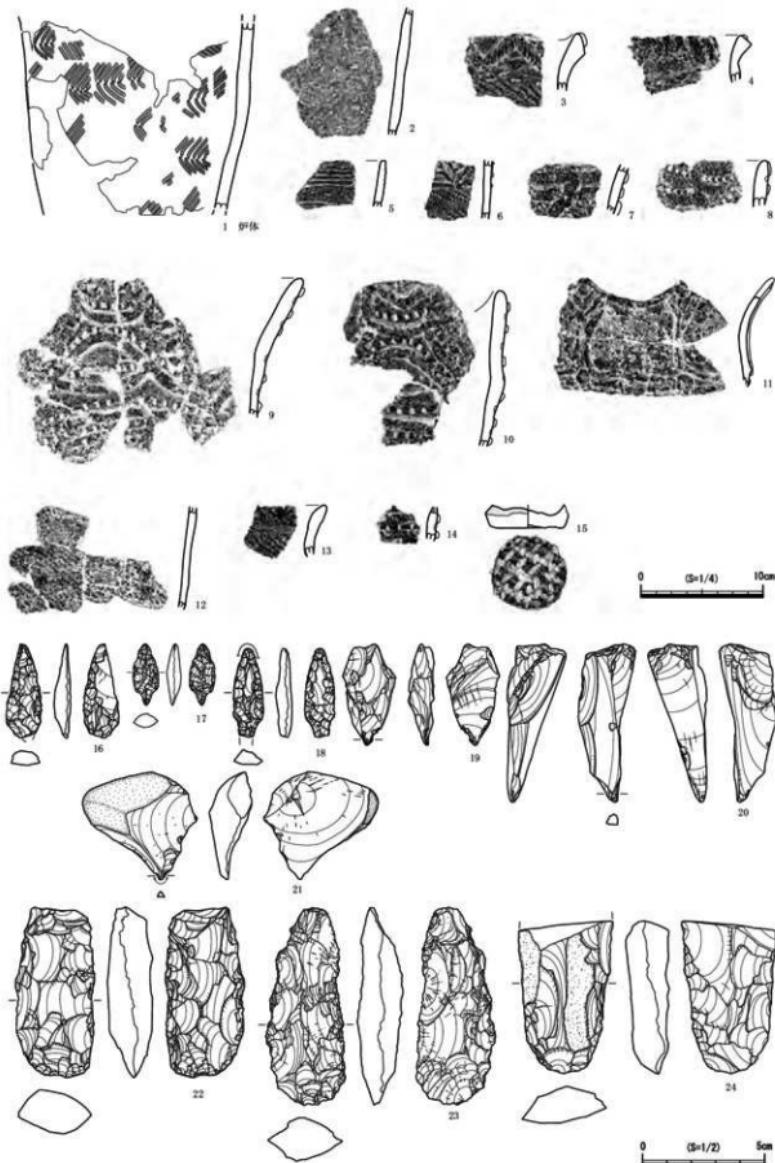


図51 第23号住居跡(2)

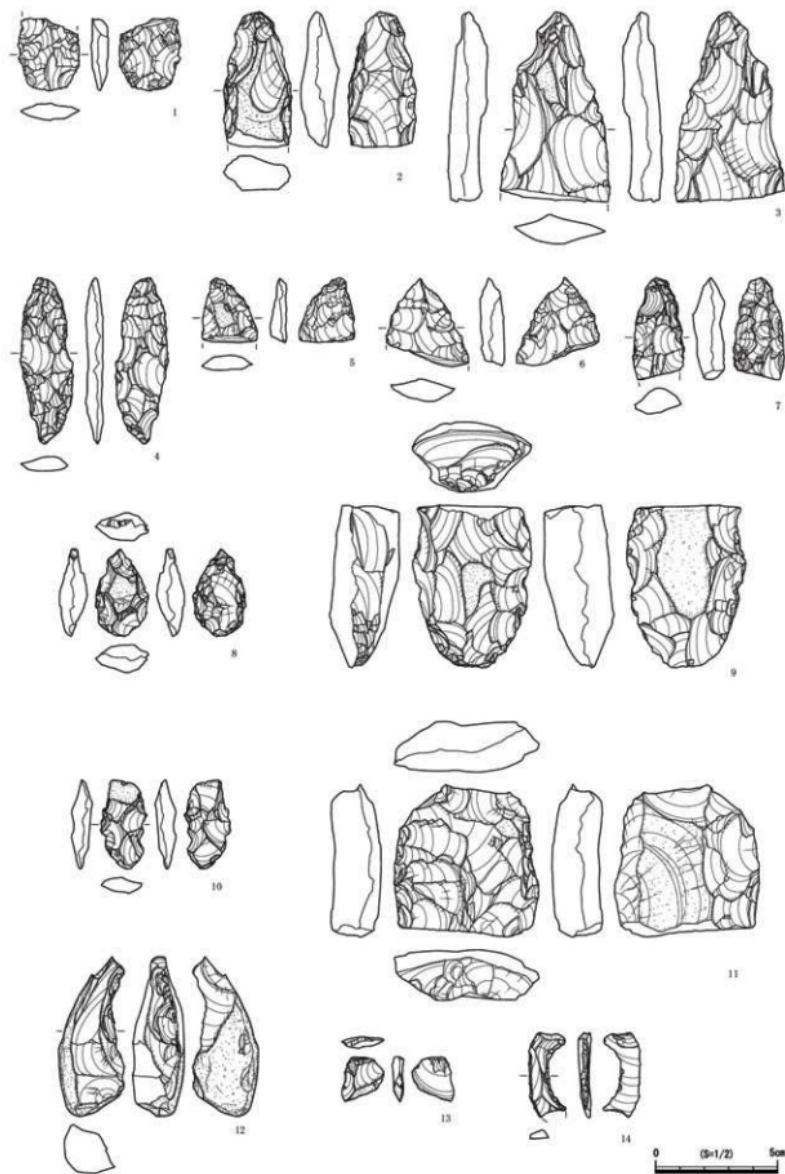


図52 第23号住居跡(3)

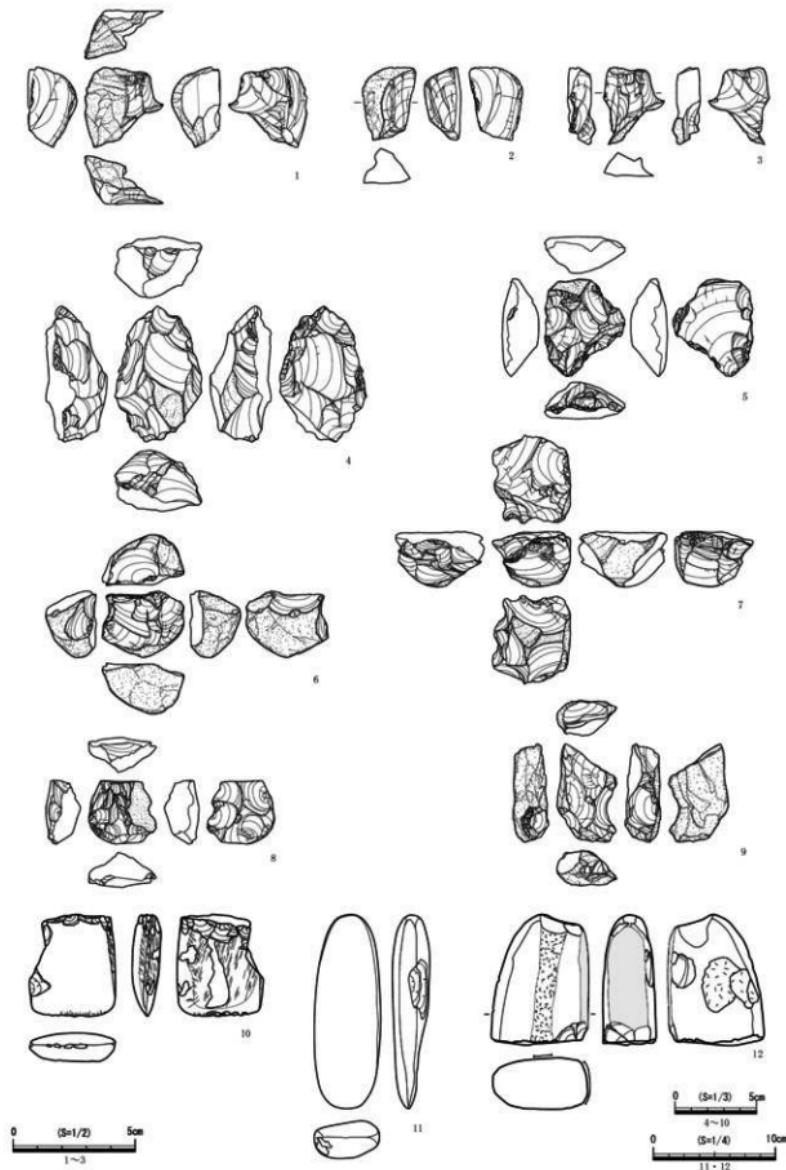


図53 第23号住居跡(4)

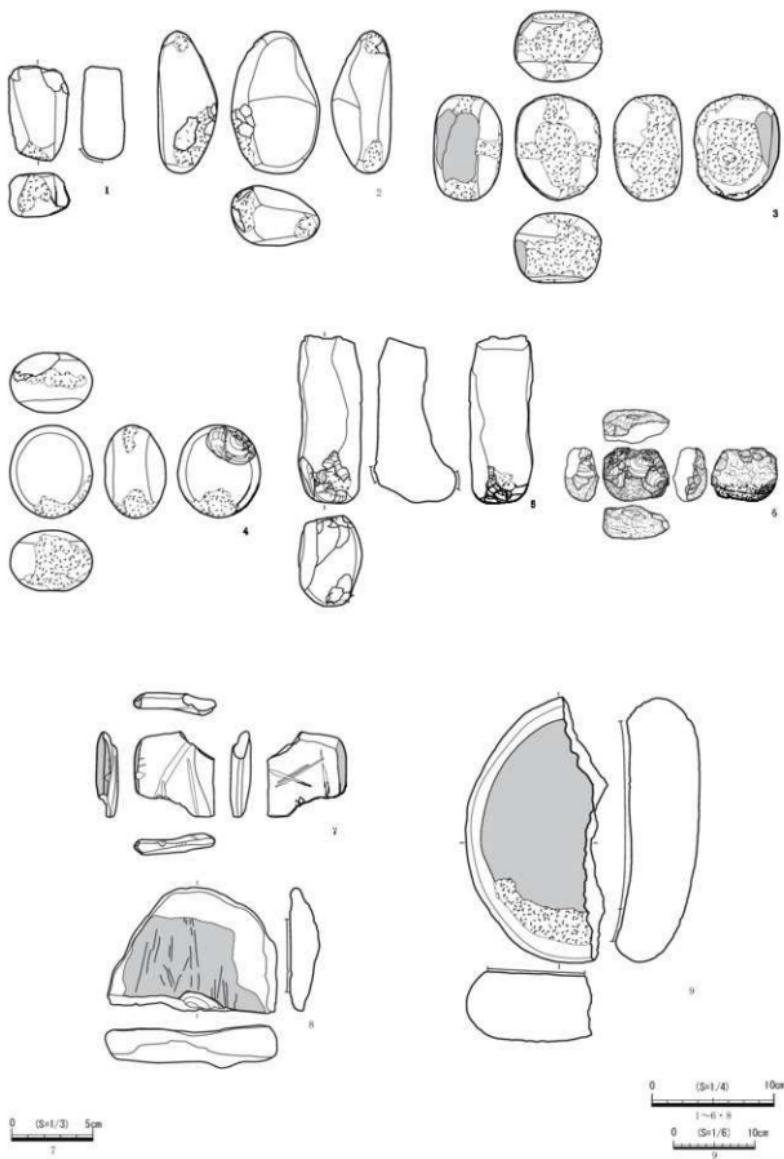
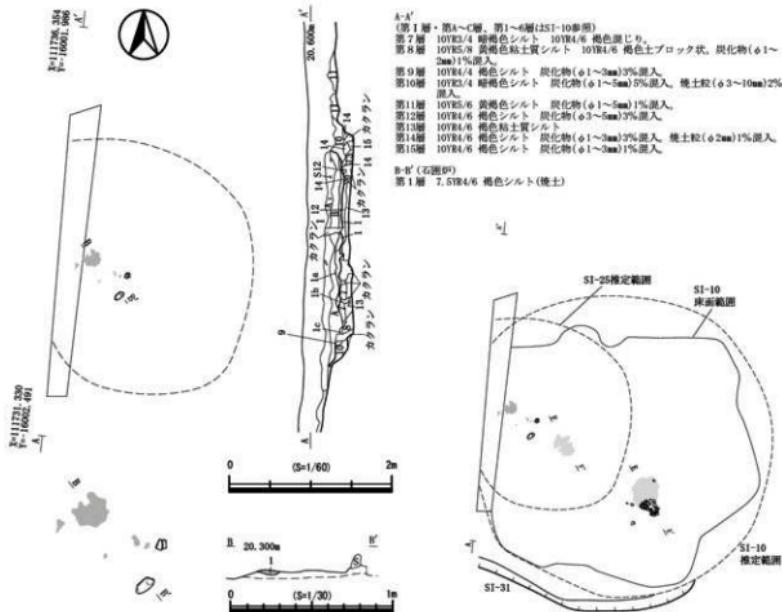


図54 第23号住居跡(5)

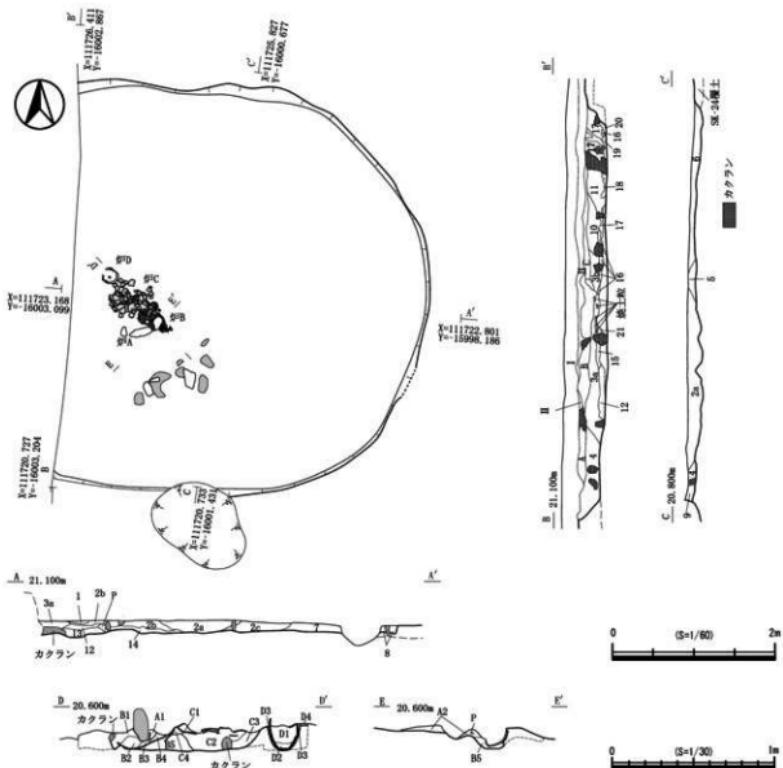
第25号住居跡 [SI-25] (図55)

[確認] 第10号住居跡の柱穴を確認するため、床面を精査中に本住居跡に伴う炉を検出した。[形状] 大半が調査区外に位置するため推定ではあるが、円形または楕円形を呈すると思われる。[床面・柱穴] 第III層下の黄褐色火山灰土を床面とする。[炉] 小形の礎を埋設し、その北西側に焼土が形成されている。[堆積土] 調査区境界西壁で、6層に分層した。[出土遺物] 調査時には第10号住居跡の遺物と識別できなかつたため、第10号住居跡出土物と混在している。縄文時代後期初頭の土器が主体になると思われる。[時期] 詳細は不明であるが、縄文時代中期末葉から後期初頭のいずれかと思われる。(中村)



第26号住居跡 [SI-26] (図56~58)

[形状] かなりの部分が調査区外に位置するため詳細は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。[床面・柱穴] 硬化面は確認できなかった。[炉] 近接した位置に4基の炉を確認し、それぞれA号、B号、C号、D号炉とした。A号炉は石圍炉で、扁平な川原石を單軸方向が垂直になるよう設置している。B号炉は斜位土器埋設炉、C号炉は土器片敷土器片圍炉、D号炉は土器埋設炉である。炉Bと炉Cは整理作業の結果、炉体に用いられた土器が接合し、同時に存在したものと考えられる。炉Dは、炉B・Cの軸線状に位置しており、同時に機能した可能性も考えられる。また、炉Aの南東に炉石の可能性のある礎と若干の硬化面を検出した。[堆積土] 調査区西壁で確認した土層も含めて17層に分層した。[出土遺物] 土器が堆積土から216片 (2247.5g) 出土した。石器は石鏃3点、石錐4



A-A'・B-B'・C-C'
 第A層 10TR4/4 黄褐色シルト 塗化物(φ 1mm)1%混入。
 第B層 10TR2/4 塗褐色シルト 塗化物(φ 1mm)5%混入。
 第C層 10TR3/6 黄褐色シルト(φ 1mm)5%混入。
 第D層 10TR2/3 黄褐色シルト
 第E層 10TR2/2 黒褐色シルト
 第F層 7. 10TR4/4 塗褐色シルト 塗土。
 第G層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第H層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第I層 10TR3/4 塗褐色シルト 10TR5/6 黄褐色シルト(φ 1mm)10%混入。
 第J層 7. 10TR4/4 塗褐色シルト 塗土粒(φ 3cm)10%混入。
 第K層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第L層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第M層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第N層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第O層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第P層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第Q層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第R層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第S層 7. 10TR4/4 黄褐色シルト
 第T層 10TR3/4 塗褐色シルト
 第U層 10TR3/4 塗褐色シルト
 第V層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第W層 10TR3/4 塗褐色シルト
 第X層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第Y層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第Z層 10TR5/6 黄褐色シルト 13層よりやや暗い。 塗化物粒(φ 1~5mm)5%, 塗化物フロック(φ 10mm)1%混入。 10TR4/6 黄褐色シルト(φ 1~5mm)5%, 塗化物シルト(φ 10mm)1%混入。
 第AA層 7. 10TR4/4 黄褐色シルト
 第BB層 10TR3/4 塗褐色シルト
 第CC層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第DD層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第EE層 10TR3/4 塗褐色シルト
 第FF層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第GG層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第HH層 10TR4/4 黄褐色シルト
 第II層 10TR5/6 黄褐色シルト 10TR4/4 層上面に40%, 塗化物(φ 2mm)1%混入。 塗り土。

D-D'・E-E'・F-F' (PA-A→B) *図中にPAは△層、PBは○層のように表記。
 PA
 第1層 10TR4/4 塗褐色シルト 塗化物(φ 1~3mm)2%, 塗土粒(φ 1~3mm)7%混入。
 第2層 10TR3/4 黄褐色シルト 塗化物(φ 1~2mm)2%, 黄褐色土(φ 1~3mm)2%混入。
 PB
 第1層 10TR4/6 黄褐色シルト 塗化物(φ 1~2mm)1%, 塗土粒(φ 1mm)1%混入。
 第2層 10TR4/6 黄褐色シルト 塗化物(φ 1mm)1%, 10TR5/8 黄褐色土(φ 1~3mm)粒状
 構造に2%混入。
 第3層 10TR4/4 塗褐色シルト 塗土粒(φ 1~2mm)1%, 10TR5/8 黄褐色土(φ 1~3mm)
 粒状に2%混入。
 第4層 10TR4/4 塗褐色シルト 塗化物(φ 1~5mm)2%, 塗土粒(φ 1~5mm)5%混入。
 第5層 10TR4/6 黄褐色シルト 塗化物粒(φ 1~2mm)1%, 塗土粒(φ 1~5mm)2%混入。
 PC
 第1層 7. 10TR4/6 黄褐色シルト 塗化物粒(φ 1mm)1%, 塗土粒(φ 1~5mm)2%混入。
 第2層 10TR4/6 黄褐色シルト 塗化物(φ 1~3mm)2%混入。
 第3層 10TR4/4 塗褐色シルト 塗化物(φ 1~2mm)2%混入。
 第4層 10TR3/3 黄褐色シルト 塗化物(φ 1~2mm)2%混入。
 PD
 第1層 10TR4/4 塗褐色シルト 塗化物粒(φ 1~5mm)5%, 塗土粒(φ 1~3mm)5%混入。
 第2層 10TR3/6 黑褐色シルト 塗化物(φ 1~5mm)5%, 塗土粒(φ 1~3mm)5%
 2. 4TR6/4 に上る(黄色粘土状灰土(φ 1~20mm)2%混入。 塗土粒(φ 1~3mm)5%
 第3層 10TR4/6 黄褐色シルト 塗化物(φ 2mm)1%混入。
 第4層 10TR4/6 黄褐色 塗化物(φ 1mm)1%混入。

図56 第26号住居跡(1)

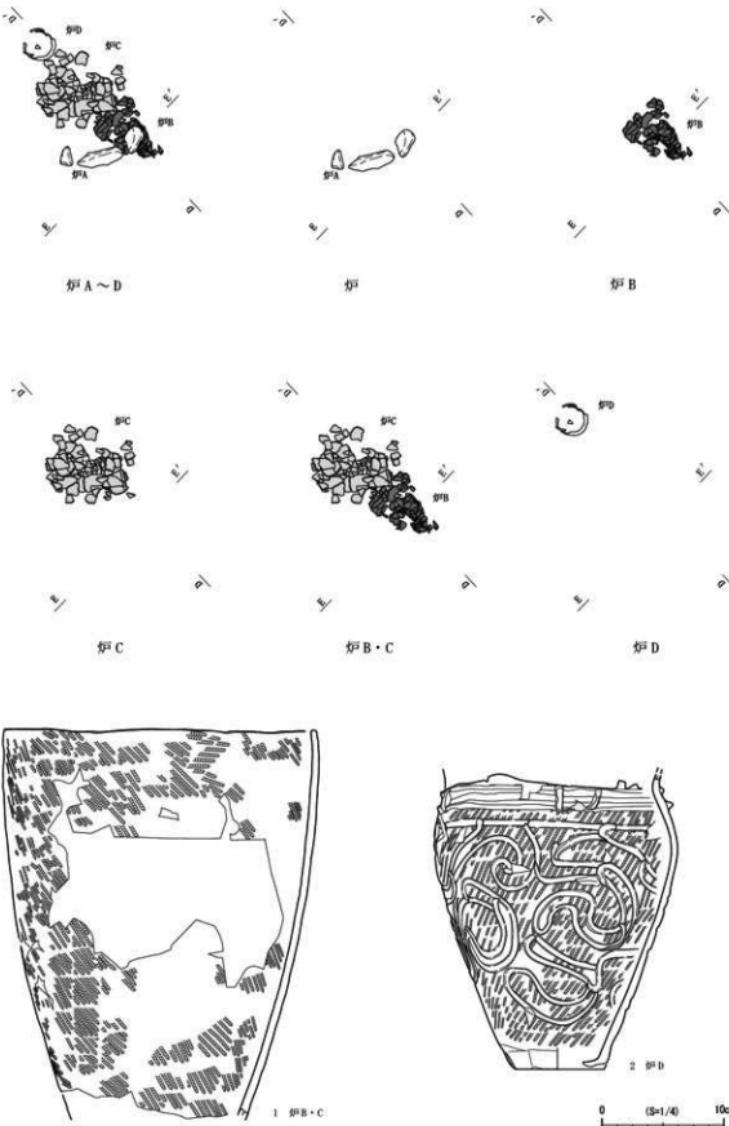


図57 第26号住居跡(2)

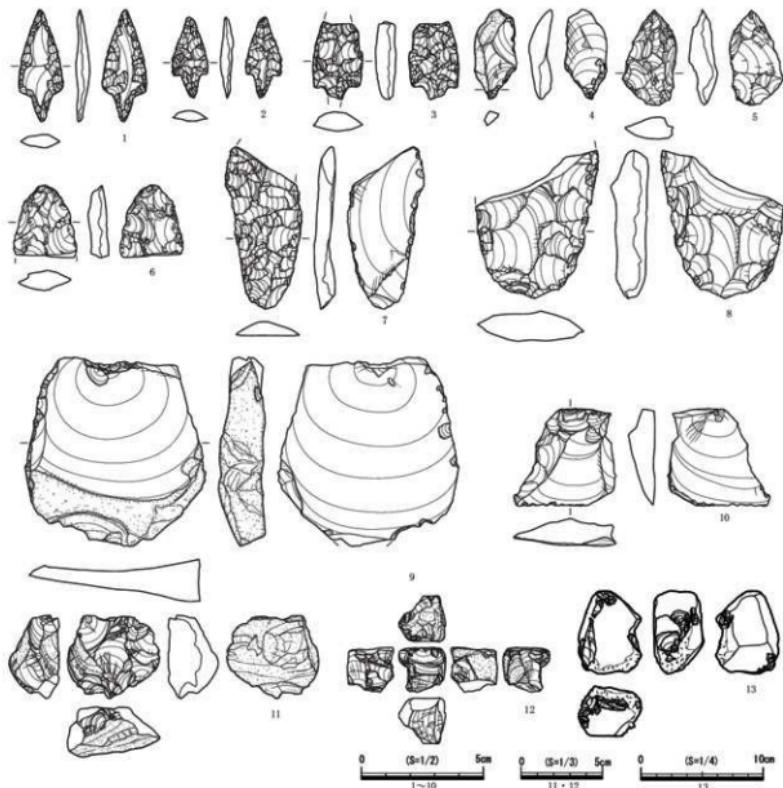


図58 第26号住居跡(3)

点を含む剥片石器104点、礫石器6点が出土し、そのうち13点を図示した。〔時期〕炉Dは縄文時代後期初頭の土器が用いられているので、後期初頭と考えられる。炉B・Cおよび炉Aは縄文時代中期末葉～後期初頭のいずれかである。(中村)

第28号住居跡 [SI-28] (図59)

〔確認〕第III層中で遺構確認作業中に炉と硬化面を検出した。〔形状〕炉と硬化面のみの検出のため不明である。〔柱穴〕柱穴は確認できなかった。〔炉〕斜位土器埋設炉である。深鉢形土器が斜位に埋設されているが、検出時点では上半部は失われていた。〔堆積土〕土器内は2層、掘方は1層に分層した。土器内から焼土は検出されなかった。土器は剥落や摩耗が激しく、被熱痕跡は確認できない。〔出土遺物〕土器内から縄文土器片9片(111.5g)が出土したが、炉体とは別の個体である。石器は削器2点、石核1点が出土した。〔時期〕炉体に用いられた土器から縄文時代中期末葉～後期初頭のいずれかである。(中村)

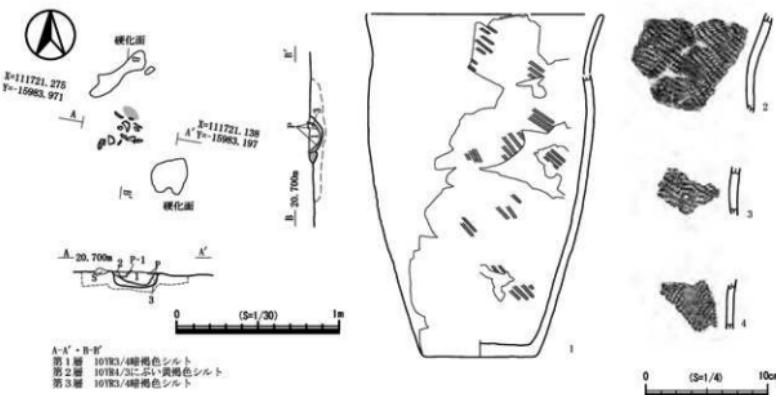


図59 第28号住居跡

第29号住居跡 [SI-29] (図60~61)

[確認] 第III層で遭構検出作業中に焼土を検出したため、調査区境界東壁で土層の堆積状況を検討し、住居跡として確認した。[形状] 南側が第19号住居跡、北側が第16号土坑と重複し、東側が調査区外に位置するため、詳細は不明である。[床面・柱穴] 第III層を床面とする。表土からの深さが浅いため木根等の搅乱を受けており、凹凸が激しい。硬化面は検出されなかった。[炉] 地床炉である。[堆積土] 調査区境界東壁で5層に分層した。[出土遺物] 土器82片 (1939.21 g) が堆積土から出土した。縄文時代中期中葉、中期末葉、後期初頭の各時期のものがある。石器は石核5点を含む剥片石器14点、礫石器3点が出土し、そのうち3点を図示した。[時期] 第19号住居跡より新しく、縄文時代中期末葉の大木10式併行期から後期初頭である。(中村)

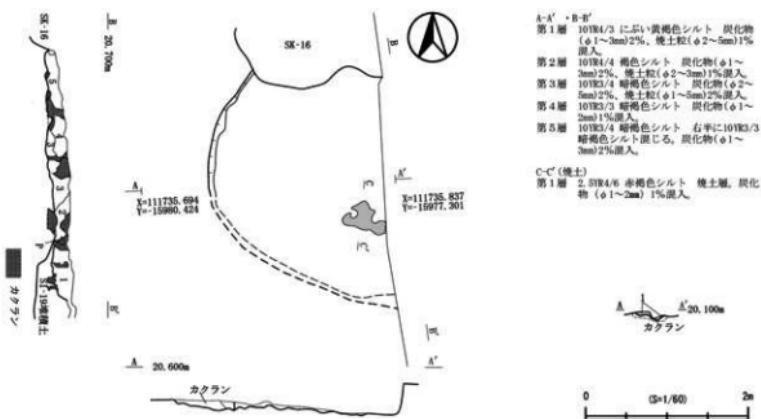


図60 第29号住居跡(1)

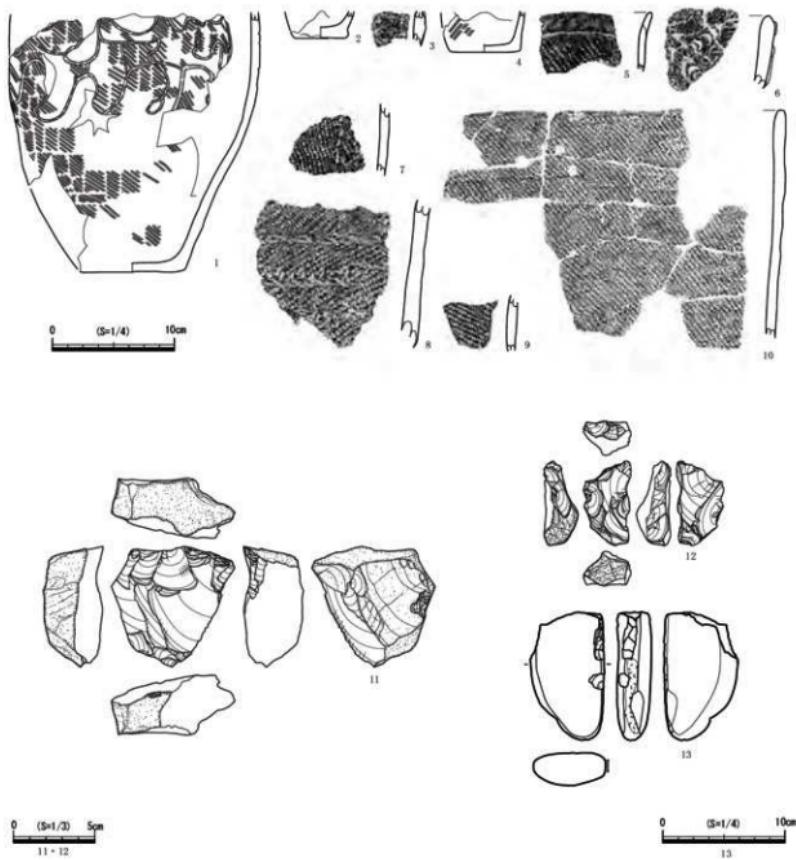


図61 第29号住居跡(2)

第31号住居跡【SI-31】(図62)

【確認】第10号・25号住居跡精査中に第III層中で確認確認した。【形状】大部分が第10号・25号住居跡で破壊されており、また調査区外に続くため、不明である。【床面・柱穴】第III層下の黄褐色土を床面とする。【炉】調査できた範囲では検出されなかった。【堆積土】1層である。堆積要因は不明である。【出土遺物】土器55片(752.6g)が堆積土中から出土した。石器は石核4点を含む剥片石器14点が出土し、石核1点を図示した。出土した土器は縄文時代中期末葉から後期初頭のものである。【時期】堆積土出土土器から、後期初頭かそれ以前と考えられる。(中村)

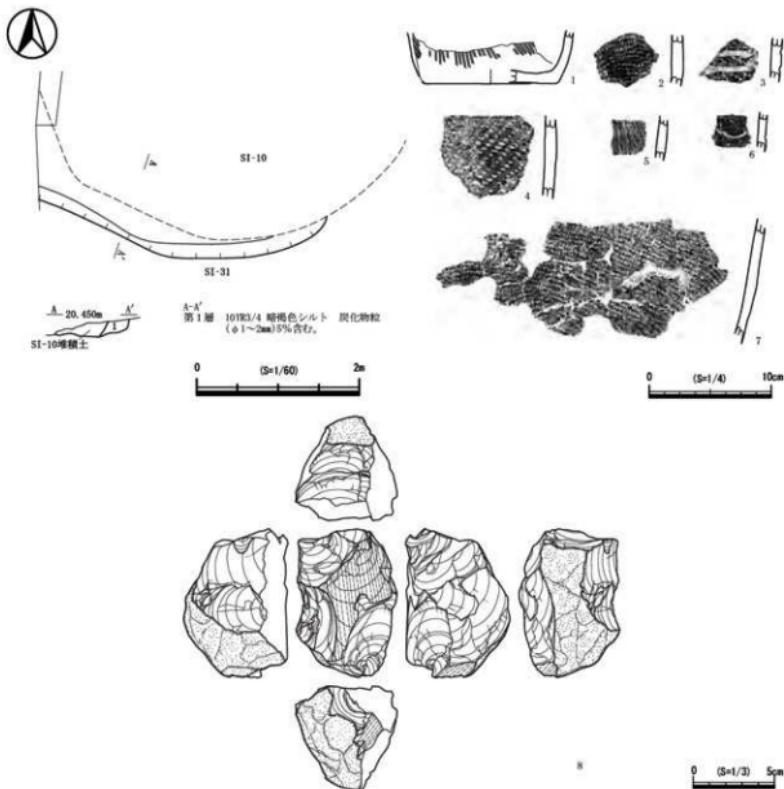


図62 第31号住居跡

第33号住居跡【SI-33】(図63)

〔確認〕第III層中で遺構確認作業中、炉と床面を検出した。〔形状〕不整な楕円形を呈する。〔床面・柱穴〕炉周辺で、硬化面を検出した。硬化面の範囲は 2.6×1.9 m程度である。〔炉〕住居北側に扁平な川原石が2個、短軸を鉛直方向に向けて埋設されており、その西側に接して $20\text{cm} \times 10\text{cm}$ の炭化物集中範囲が認められた。焼土はその南東側、 1.2×0.6 mの範囲に認められるが、全体に形成の程度は弱い。〔堆積土〕6層に分層したが、検出時点ではごく薄く、堆積要因等は不明である。〔出土遺物〕土器が堆積土から58点(595.4g)出土した。出土した土器は縄文時代前期末葉の円筒下層d1式、中期中葉、中期末葉の大木10式併行期のものがある。石器は石核1点、削器19点が出土し、削器1点を図示した。

〔時期〕本遺構に伴う遺物がなく詳細は不明であるが、炉形態から縄文時代中期末葉から後期初頭のいずれかと思われる。(中村)

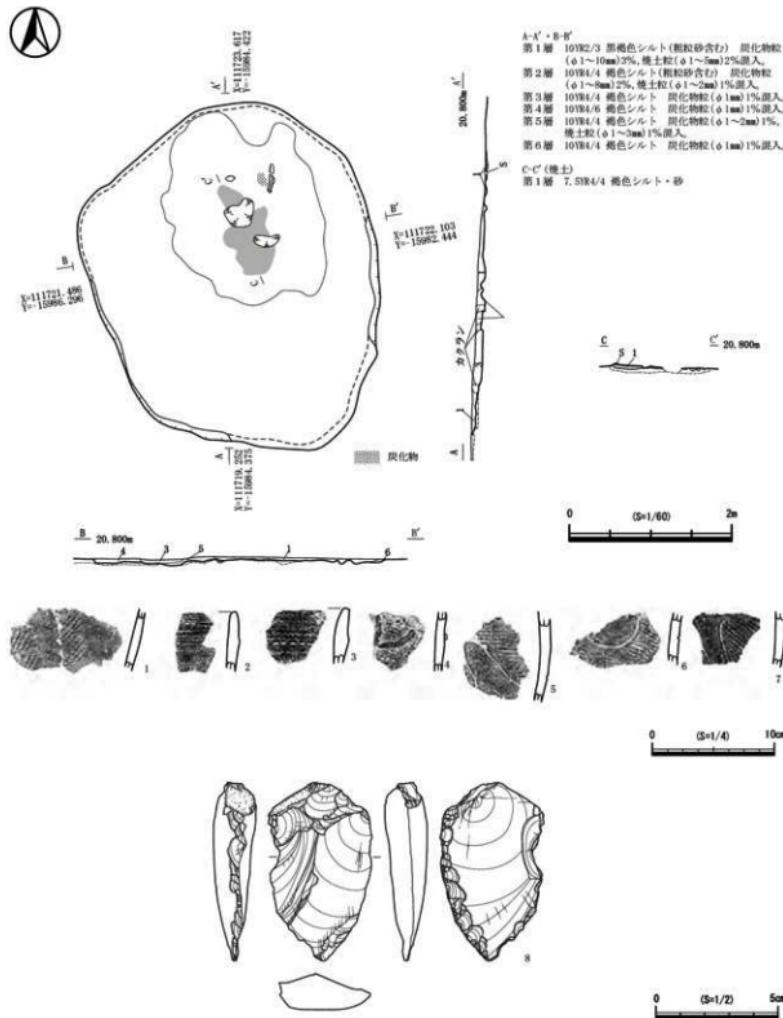


図63 第33号住居跡

第34号住居跡 [SI-34] (図64)

[確認] 第III層で遺構確認作業中に炉のみ検出した。[形状] 炉のみ検出したため不明。[床面・柱穴] 第III層を床面とすると思われるが、硬化面は検出されなかった。[炉] 断面方形の角礫が埋設され、その西側には焼土が形成されている。[堆積土] 不明。[出土遺物] 本遺構に伴う遺物と確認できたものはない。[時期] 本遺構に伴う遺物はないが、炉形態から縄文時代中期末葉から後期初頭のいずれかと思われる。(中村)



図64 第34号住居跡

第35号住居跡 [SI-35] (図65~66)

[形状] 東側の約1/2が調査区外に位置するが、方形を呈すると思われる。[床面・柱穴] 第III層中に貼り床を形成する。平坦であるが、軟弱である。[カマド] 半地下式である。袖は粘土により形成されていた。芯材は認められなかった。[その他の付属施設] 北壁際・南壁際に周溝が検出された。カマドが敷設された西壁際には認められなかった。[堆積土] 7層に細分した。暗褐色シルトを主体とし、人為堆積によると思われる。[出土遺物] 煙道部で土師器甕 (16片: 900.0 g)・支脚1点が出土した。[時期] 平安時代である。カマドから出土した炭化材1点を放射性炭素年代測定に供し、較正曆年代で1020~1155A.D. (95.4%) の値を得ている (第4章第1節)。(中村)

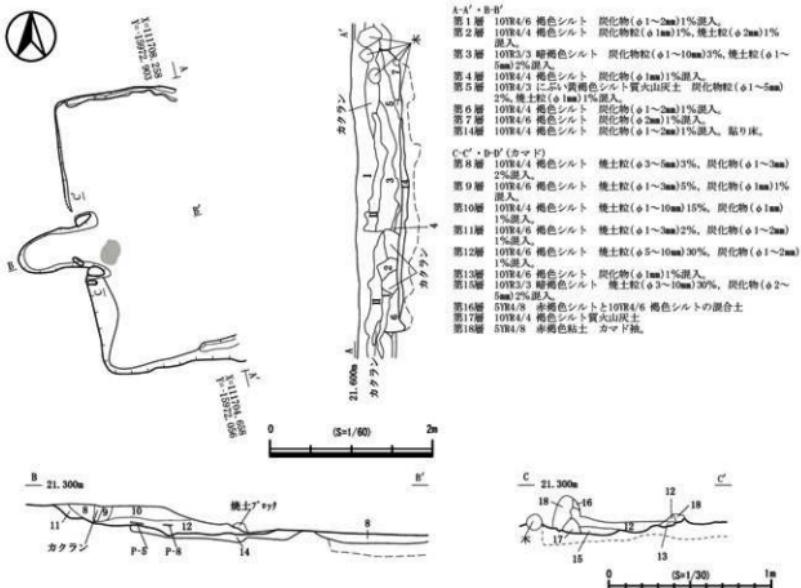
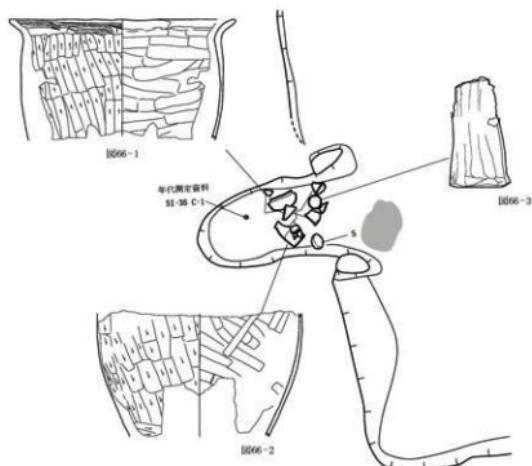


図65 第35号住居跡(1)



カマド遺物出土状況(1-30)

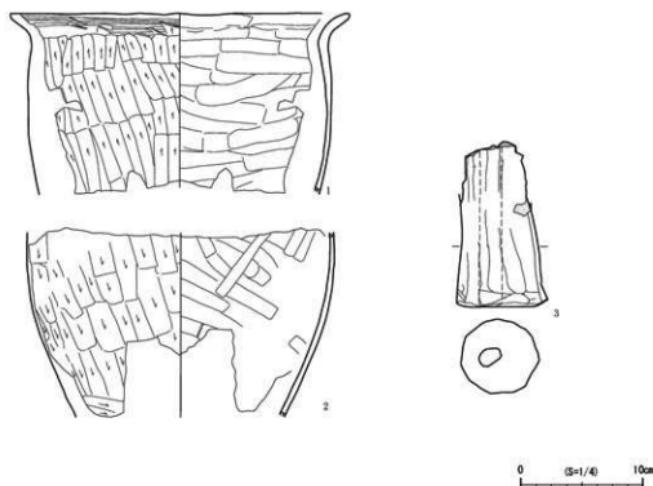


図66 第35号住居跡(2)

第36号住居跡 [SI-36] (図67)

[確認] 第III層中で遺構検出作業中、炉と床を検出した。[形状] セクションラインから北側は遺構検出のため掘り下げており、不明な点が多いが、円形または楕円形を呈すると思われる。[床面・柱穴] 床は一部が検出されたのみである。柱穴は検出されなかった。[炉] 扁平な川原石を4個、短軸が鉛直方向になるよう埋設し、その北側に焼土が点在していた。焼土の発達は弱い。[堆積土] 1層である。[出土遺物] 堆積土から土器95片 (1386.3 g) が出土した。石器は石核4点を含む剥片石器21点、縄石器3点が出土し、そのうち石核2点を図示した。土器は縄文時代後期初頭、中期末葉、中期中葉のものがある。[時期] 本遺構に伴う遺物がないため詳細は不明であるが、炉形態から縄文時代中期末葉から後期初頭のいずれかと思われる。(中村)

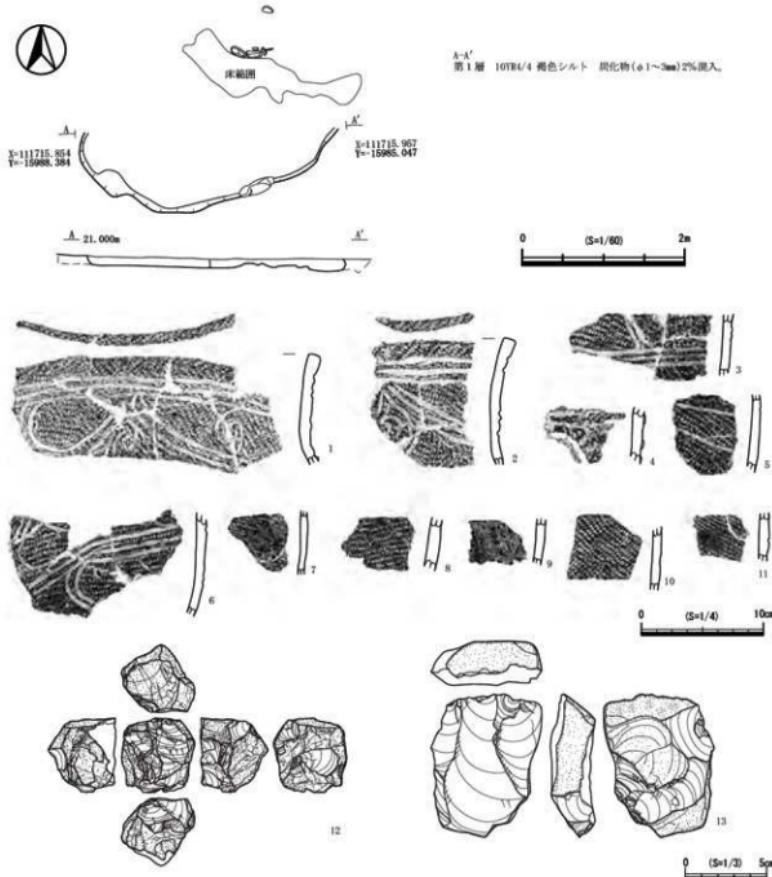


図67 第36号住居跡

第7号・第8号・第9号土坑〔SK-7、SK-8、SK-9〕(図68)

【確認】第I層直下で、暗褐色土の落ち込みを検出した。当初一つの土坑として調査を開始したが、精査の過程で3基の重複であることが判明した。【形状】底面は円形を呈し断面はフラスコ形を呈する。【堆積土】いずれも崩落土が認められず、人為堆積によるものと考えられる。【出土遺物】第7号土坑堆積土から土器2片(24.3g)、石核1点、第8号土坑堆積土から土器2片(16.3g)、第9号土坑堆積土から削器1点が出土した。【時期】第7号土坑から出土した図68-1は縄文時代中期前半、第8号土坑から出土した図68-2・3は縄文時代中期末葉の土器である。第8号土坑は縄文時代中期末葉かそれ以降の所産であるが、第7号土坑、第9号土坑については不明である。(中村)

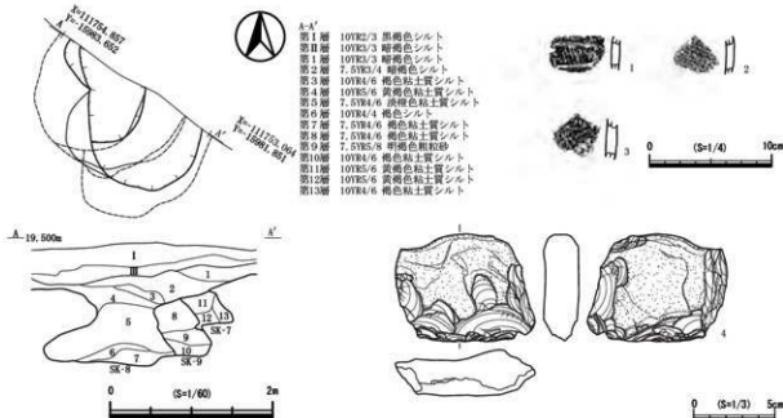


図68 第7・8・9号土坑

第10号土坑〔SK-10〕(図69)

【形状】平面形は円形、断面形はすり鉢状を呈する。【堆積土】暗褐色シルトの単層である。【出土遺物】縄文時代中期末葉から後期初頭の土器片8片(79.6g)、削器7点が出土した。【時期】詳細は不明である。(中村)



図69 第10号土坑

第11号土坑 [SK-11] (図70)

〔形状〕 底面は円形を呈し断面はフラスコ形を呈する。〔床面〕 底面中央には小穴が検出された。小穴底面には硬化面は見られなかった。〔堆積土〕 4層に分層した。褐色から黄褐色のシルトを主体とする。堆積層の形状から、人為堆積と思われる。〔出土遺物〕 堆積土から51片 (560.7 g) の土器、搔器1点を含む剥片石器9点が出土した。第1層から出土した図70-4は縄文時代中期末葉から後期初頭、その他は縄文時代前期末葉の土器である。〔時期〕 第1層の形成時期は縄文時代中期末葉かそれ以降であるが、それ以外は不明である。(中村)

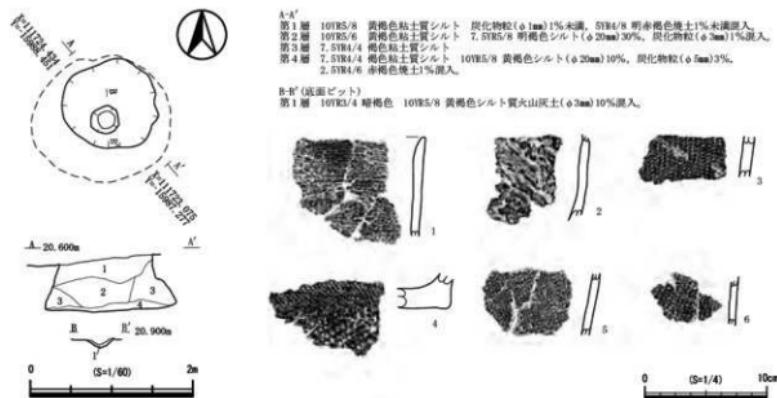


図70 第11号土坑

第12号土坑 [SK-12] (図71)

〔形状〕 円形を呈するものと思われる。〔堆積土〕 褐色シルトの単層である。〔出土遺物〕 堆積土中から土器11片 (199.5 g) が出土した。縄文時代中期前半の土器が出土している。〔時期〕 第17号住居跡より新しいので、縄文時代中期末葉～後期初頭、もしくはそれ以降である。(中村)

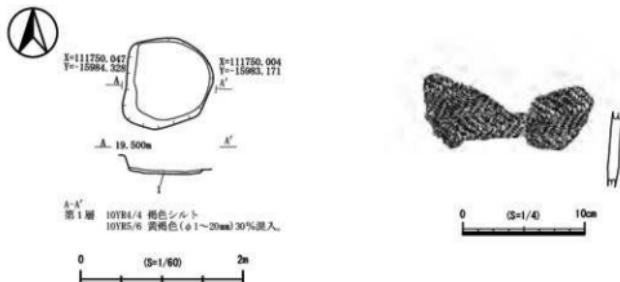


図71 第12号土坑

第14号土坑 [SK-14] (図72)

〔形状〕 平面形は不整な円形を呈する。断面形は鍋底状である。〔堆積土〕 棕褐色シルトの単層である。〔出土遺物〕 堆積土から土器96片 (1343.9 g) が出土した。石器は尖頭器1点、石核1点を含む剥片石器11点、礫石器3点が出土し、そのうち4点を図示した。土器は縄文時代中期末葉から後期初頭のものである。〔時期〕 堆積土の形成時期と、遺構の廃絶時期に大きな差は考えにくいので、堆積土から出土した土器により縄文時代後期初頭である。(中村)

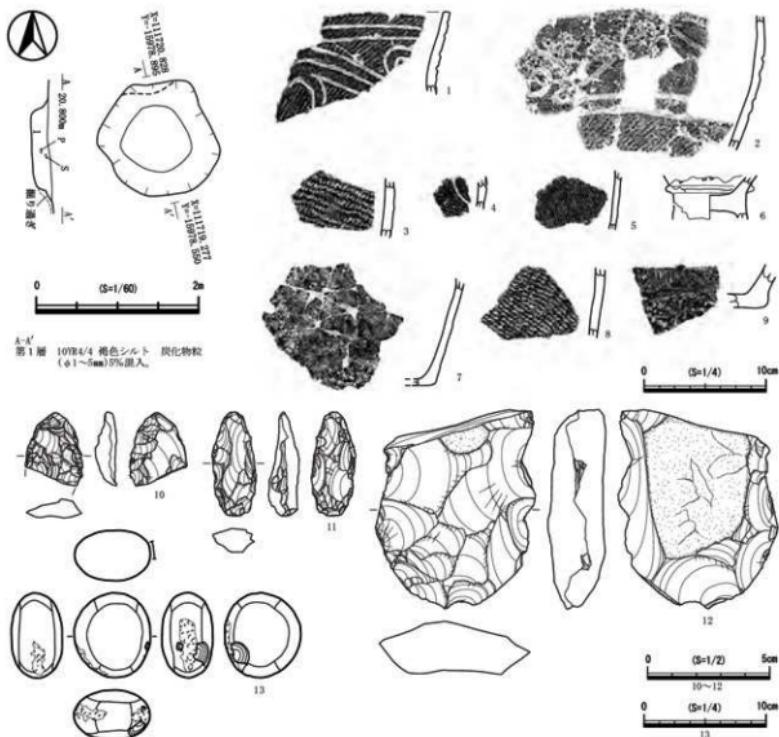


図72 第14号土坑

第15号土坑 [SK-15] (図73)

〔形状〕 底面は不整な円形、断面はフラスコ状を呈する。底面中央に小穴が検出された。小穴底面に硬化面などは確認されなかった。〔堆積土〕 10層に分層した。褐色～明黄褐色のシルト・粘土質シルトで、人為堆積と思われる。〔出土遺物〕 堆積土から土器24片 (271.3 g)、縦型石匙1点、石核3点を含む剥片石器20点が出土し、石器はそのうち4点を図示した。土器は4層から1層まで出土して

いるが、いずれも円筒下層式である。〔時期〕堆積土出土土器から縄文時代前期末葉の可能性も考えられるが、十分な資料ではないので、詳細は不明である。ただし、土坑の属性と出土土器型式の相関が明らかになれば時期を限定できる可能性はある。(中村)

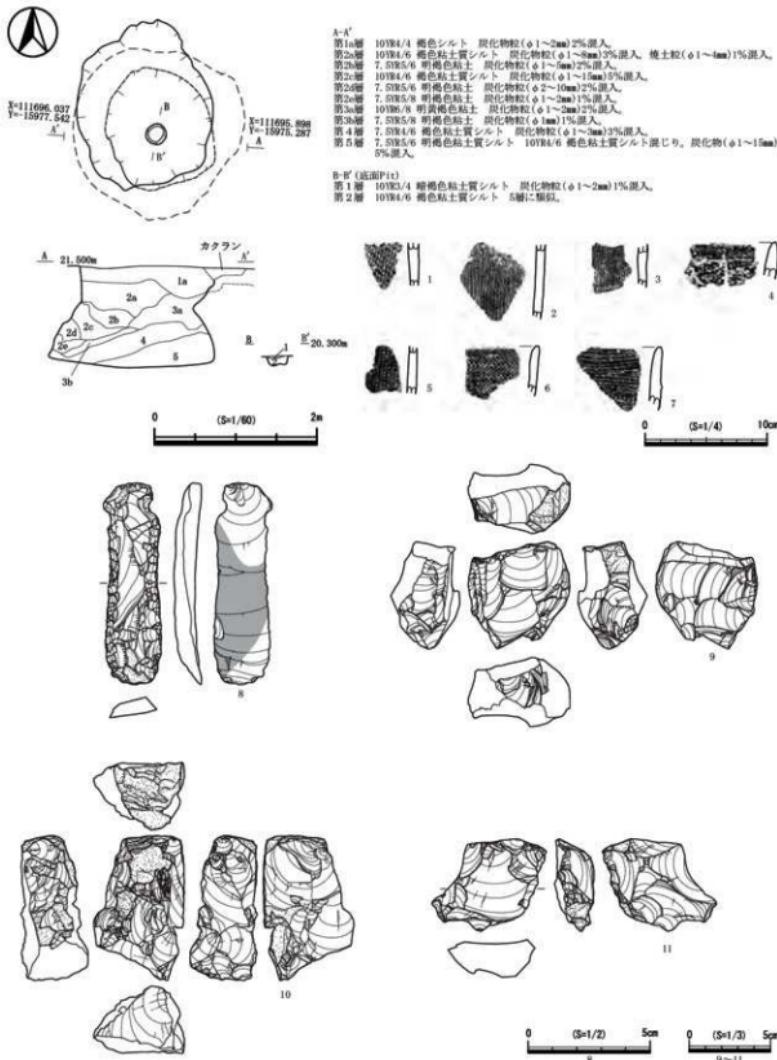


図73 第15号土坑

第16号土坑 [SK-16] (図74)

[確認] 第Ⅰ層直下で搅乱として掘削を行ったが、約2/3を掘り込んだ段階で土坑であることが判明した。[形状] 一部が調査区外に位置するが、平面形は底面で円形、断面はフラスコ状を呈するものと思われる。[堆積土] 残存した堆積土で5層に分層した。第4層中、底面から約10cm上方で、板状の炭化材が出土した。炭化材の樹種はクリと同定された。また、放射性年代測定に供した結果、2580BC-2461BC (95.4%) の較正暦年代が得られた。[出土遺物] 堆積土から土器4片 (57.0g)、削器1点が出土した。第1層から出土した図74-1は縄文時代中期末葉の土器である。[時期] 年代測定の結果と、出土土器により縄文時代中期末葉から後期初頭の所産である。(中村)



図74 第16号土坑

第17号土坑 [SK-17] (図75)

[形状] 底面はやや不整な円形、断面はフラスコ状を呈する。[堆積土] 6層に分層した。暗褐色から褐色のシルト・粘土質シルトで、崩落土と思われるものは認められず、人為堆積と考えられる。[出土遺物] 堆積土から土器30片 (376.2g)、尖頭器1点、石核3点を含む剥片石器15点、礫石器2点が出土し、石器はそのうち3点を図示した。第5層から出土した図75-3・4は縄文時代後期初頭の土器である。[時期] 第5層は遺構廃絶後まもなく堆積したと考えられ、縄文時代後期初頭と考えられる。(中村)

第18号土坑 [SK-18] (図75)

[確認] 第Ⅰ層直下で確認した。一部に搅乱が認められた。[形状] 平面形は底面で不整な円形、断面はフラスコ状を呈する。[堆積土] 7層に分層した。[出土遺物] 堆積土から土器79片 (1326.9g)、石器8点 (削器7点、敲磨器1点) が出土した。[時期] 第5層～第2層で出土した土器はすべて縄文時代後期初頭のものである。第5層の形成時期は縄文時代後期初頭かそれ以降として把握できる。遺構廃絶と第5層の堆積時期にどの程度の差があるか明確でないが、土器型式の幅を超える時間差は想定しがたい。従って、遺構の廃絶時期も縄文時代後期初頭かそれ以降である。(中村)

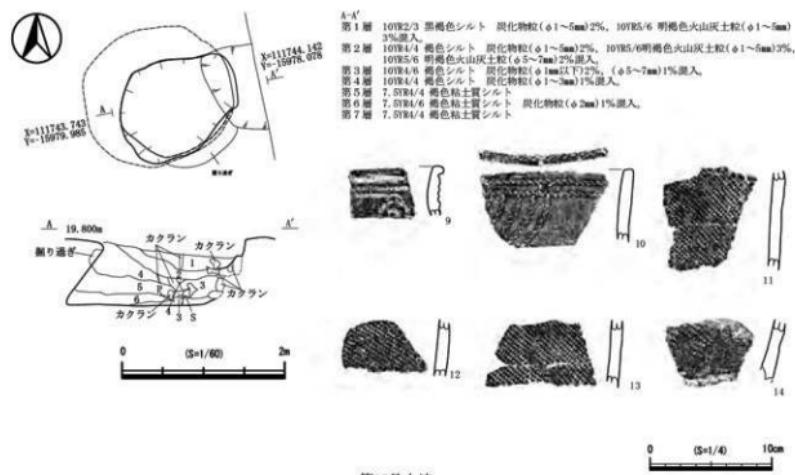
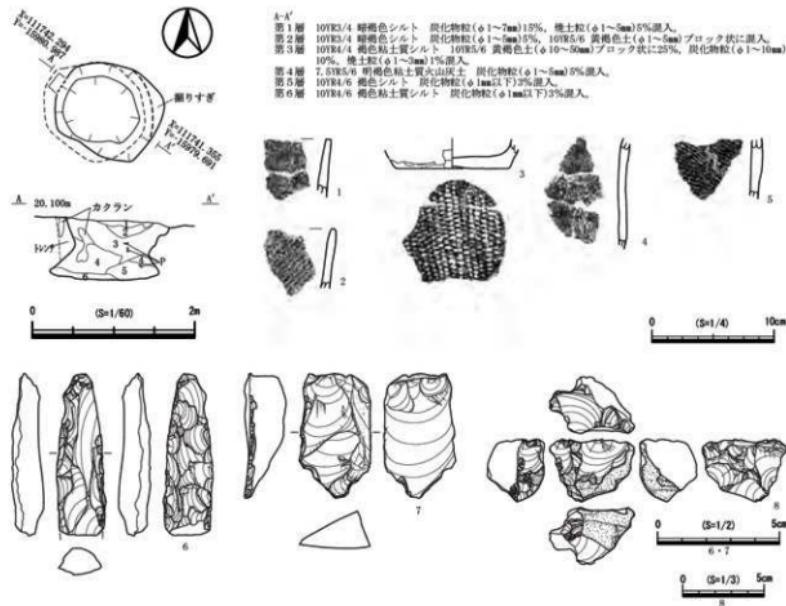


图75 第17·18号土坑

第19号土坑 [SK-19] (図76)

〔形状〕平面形はやや不整な円形、断面形は鍋底状である。〔堆積土〕3層に分層した。〔出土遺物〕堆積土から土器16片(222.9g)、石器2点(削器1点、敲磨器1点)が出土した。図76-1・2は縄文時代後期初頭の土器である。〔時期〕堆積土出土土器から縄文時代後期初頭と思われる。(中村)



図76 第19号土坑

第20号土坑 [SK-20] (図77)

〔形状〕平面形は不整な円形、断面形は鍋底状を呈する。〔堆積土〕2層に分層した。〔出土遺物〕堆積土中から土器6片(58.6g)、石器1点を含む剥片石器4点が出土し、石器1点を図示した。〔時期〕第15号土坑より旧い。(中村)

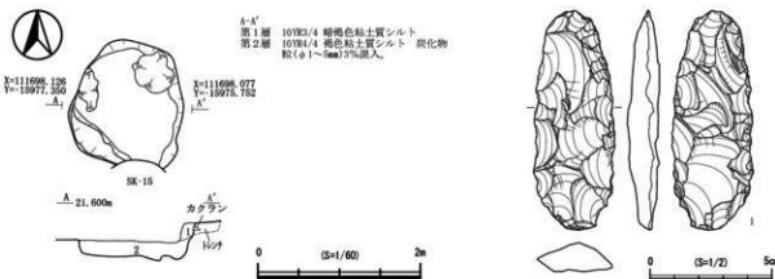


図77 第20号土坑

第21号土坑 [SK-21] (図78・79)

〔確認〕表土直下で搅乱を除去するため掘削を行った際検出した。〔形状〕底面は円形、断面形はフラスコ状を呈する。〔堆積土〕14層に分層した。崩落土と認められるものではなく、人為堆積と考えられる。〔出土遺物〕堆積土中から土器213片(6449.8g)、石器26点(尖頭器1点、石核1点を含む剥片石器22点、礫石器4点)が出土した。石器はそのうち3点を図示した。図78-2・3は堆積土下位から出土した。円筒上層式かと思われるが、かなり摩耗している。堆積土上位から中位にかけては縄文

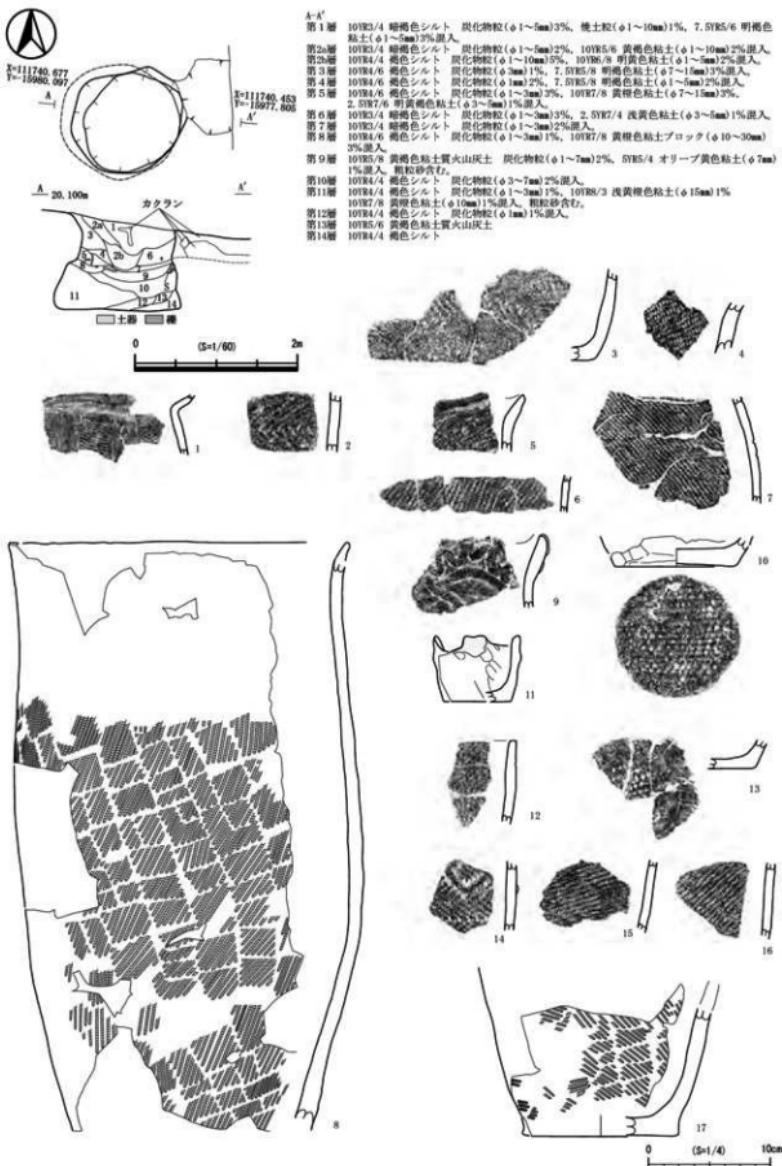


图78 第21号土坑(1)

時代中期前葉から後期初頭の土器が出土しているが、中期末葉から後期初頭の土器が多い。〔時期〕詳細は不明であるが、堆積土中位から上位の形成時期は繩文時代中期末葉から後期初頭ないしそれ以後と思われる。堆積土の様相からすれば、遺構の廃絶時期と堆積土中～上位の形成時期に土器型式を超える時間差は考えがたく、中期末葉から後期初頭のいずれかの所産と考えられる。(中村)

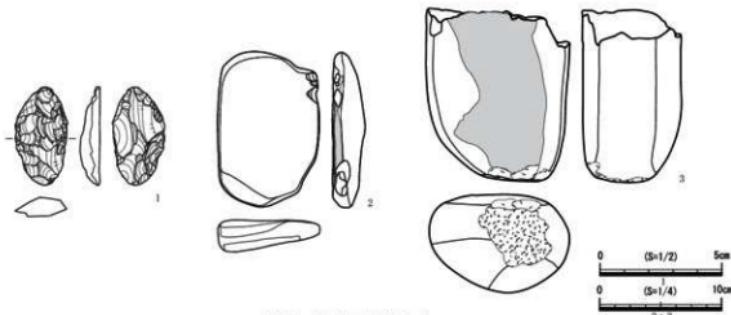


図79 第21号土坑(2)

第23号土坑 [SK-23] (図80・81)

〔形状〕平面形は橢円形を呈し、断面はボウル状を呈する。〔堆積土〕4層に分層した。〔出土遺物〕堆積土からは土器190点(2618.7g)、石器67点(石核10点を含む剥片石器65点、礫石器2点)が出土し、石器はそのうち15点を図示した。土器は繩文時代中期末葉から後期初頭の土器で後期初頭のものが多い。〔時期〕堆積土から出土した土器から、後期初頭である。(中村)

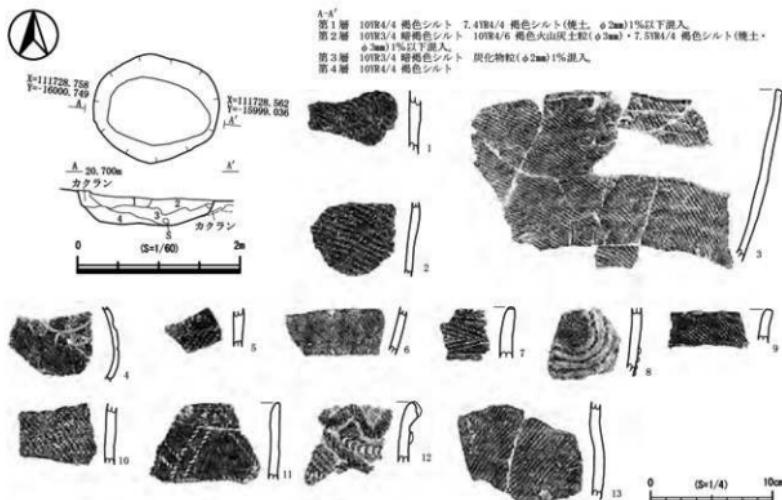


図80 第23号土坑(1)

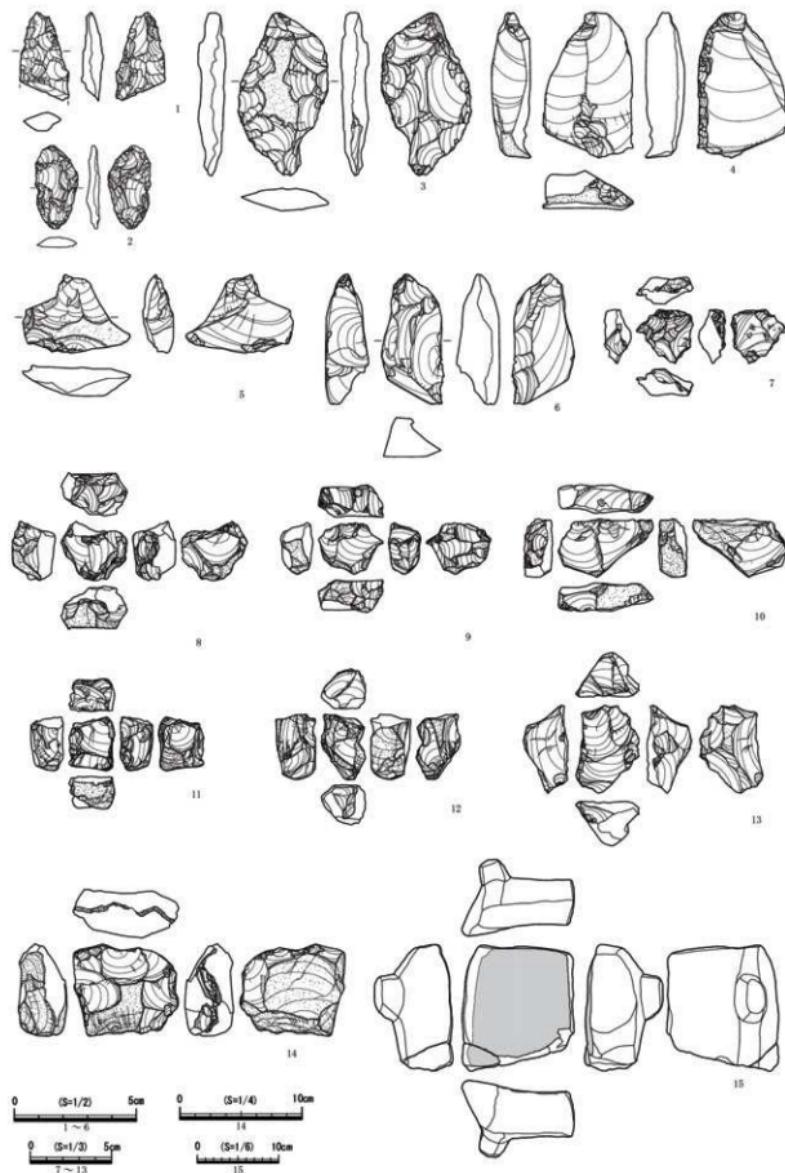


図81 第23号土坑(2)

第24号土坑 [SK-24] (図82)

[形状] 平面形は不整な橢円形、断面は箱形を呈する。[堆積土] 8層に分層した。[出土遺物] 堆積土から土器114片 (1658.3g)、石器29点 (石鏃3点、搔器1点を含む剥片石器27点、礫石器2)、土偶1点が出土した。石器はそのうち3点を図示した。土器はいずれも中期末葉～後期初頭のものである。[時期] 堆積土から出土した土器により縄文時代中期末葉から後期初頭である。(中村)

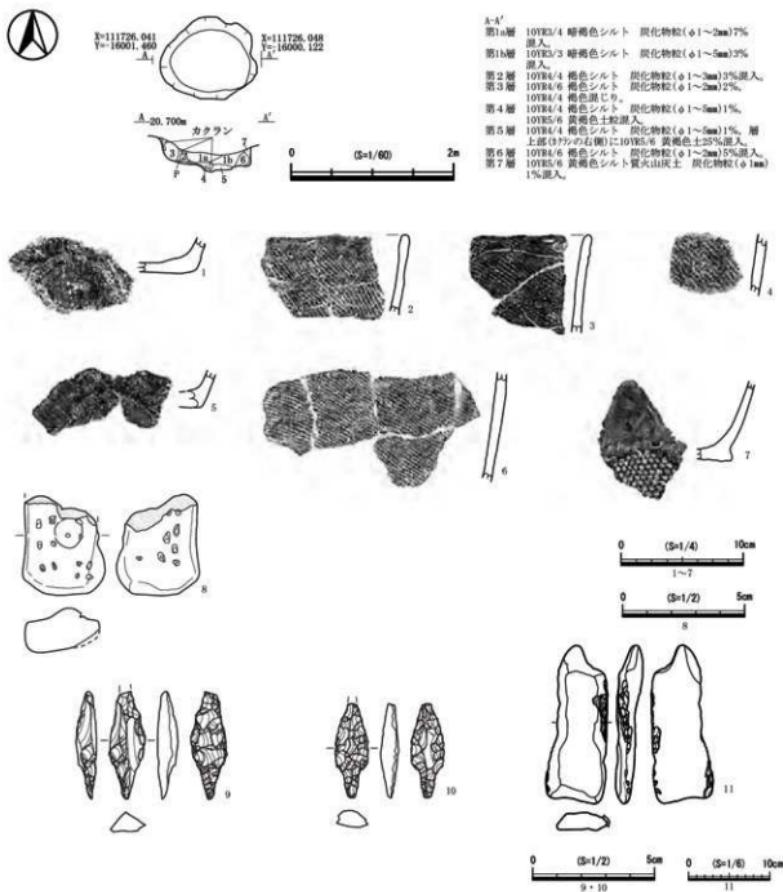


図82 第24号土坑

第25号土坑 [SK-25] (図83)

[形状] 不整な梢円形を呈する。[堆積土] 2層に分層した。[出土遺物] なし。[時期] 不明。(中村)

第5号焼土遺構 [SN-5] (図83)

[確認] 第III層中に焼土を検出した。住居跡に伴う可能性もあるが、確認できなかった。[時期] 繩文時代と思われるが、詳細な時期は不明である。(中村)

第1号埋設土器遺構 [SR-1] (図83)

第III層掘削中に土器胴部が円形に検出されたため半截したところ、土器底部から胴部下半にかけて正置された状態で確認できたことから埋設土器遺構として扱った。土器内堆積土2層中には炭化物が多く含まれるが、遺構構築面が削平され土器上部が確認できず、埋納されたものかどうかは判断できなかった。時期は縄文時代中期末葉から後期初頭である。(宮嶋)

第2号埋設土器遺構 [SR-2] (図83)

第III層掘削中に検出した。土器胴部が円形に検出され、半截したところ底部もほぼ水平に出土したため埋設土器遺構として扱った。底部が欠損した状態で出土した。堆積土は褐色シルトである。木根による攪乱の影響で土器内外の堆積土に大きな差異が認められず、掘方を特定できなかった。時期は縄文時代前期末葉である。(宮嶋)

第3号埋設土器遺構 [SR-3] (図83)

第III層掘削中に検出した。土器胴部が円形に検出されたため埋設土器遺構として調査した。接合作業の結果、底部と器体の約1/3周分を欠き、切断蓋付土器が横位の状態で検出されたものと考えられた。堆積土は褐色及び暗褐色シルトである。直下の木根が土器周辺の土層堆積状況に強く影響していたため、掘方を特定できなかった。時期は十腰内I式である。(宮嶋)

第5号埋設土器遺構 [SR-5] (図83・84)

第III層中で、小形の壺形土器と思われる土器を検出し截削を行ったところ、略完形になる事が判明し埋設土器遺構として扱った。土器内堆積土は黄褐色粘土質シルトの単層である。土器は切断蓋付き土器で、身部に蓋部が落ち込む形で出土した。時期は十腰内I式である。(中村)

第6号埋設土器遺構 [SR-6] (図83・84)

第III層中で確認した。土器横方向の断面が土中に円形に検出されたため土器埋設遺構として扱った。確認時では正位に埋設されたものか逆位で埋設されたものか判断できなかったが、確認上面位の遺物として取り上げた底部が接合したことから、逆位の状態であったことが判明した。調査時は周囲を掘り下げてしまったため、掘方の精査はできなかった。土器は口縁部を欠いており、逆位におかれた土器の底部が落ち込んだだけの可能性も否定できない。石器は削器1点が出土した。時期は円筒下層d式である。(中村)

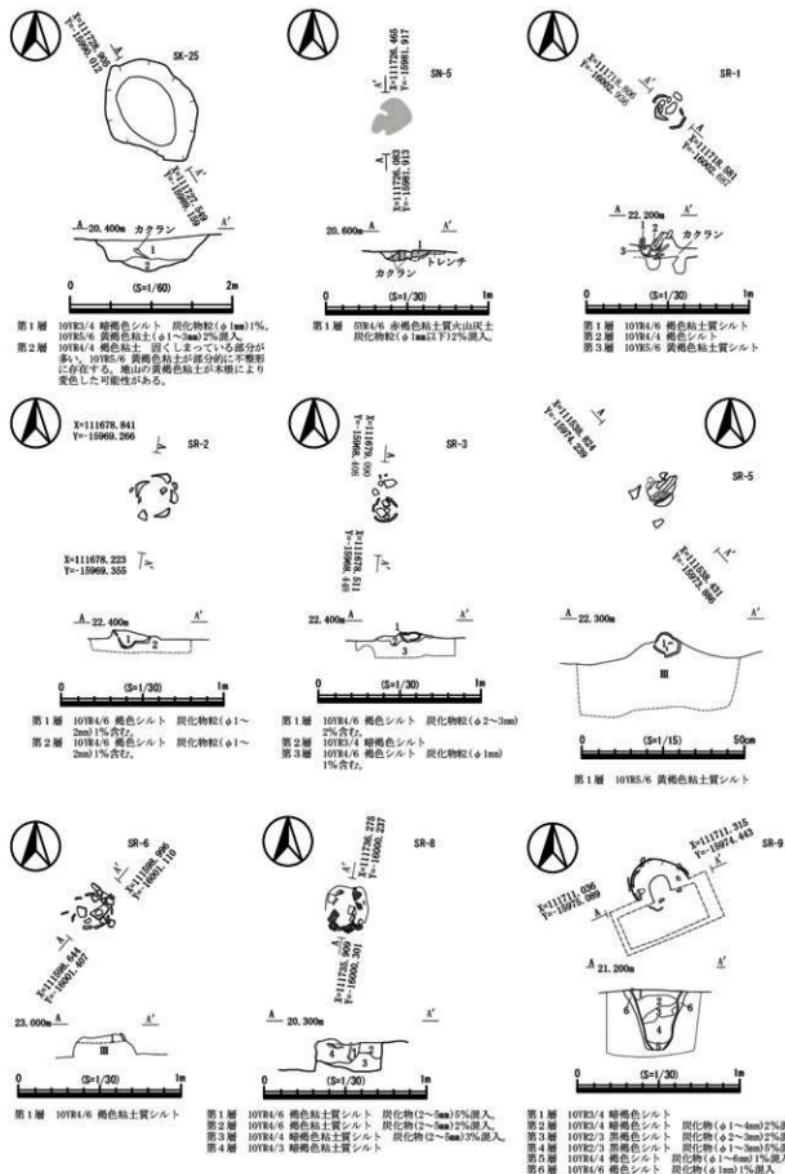


図83 第25号土坑・第5号焼土構造・第1～3・5・6・8・9号埋設土器構造

第8号埋設土器遺構 [SR-8] (図83・84)

第III層中で確認した。南側は第10号住居跡精査時に掘削したため、掘方は残っていない。堆積土は土器内が褐色粘土質シルトの単層、掘方も類似する褐色粘土質シルトの単層である。(中村)

第9号埋設土器遺構 [SR-9] (図83・84)

第III層中で検出した。当初住居跡の炉の可能性を考えて、第24号住居跡として精査を開始したが、土器内に焼土や被熱痕跡は確認されなかったことから、埋設土器遺構とした。土器は正位に埋設されていた。堆積土は土器内5層、掘方1層に分層した。石器は石鏃1点を含む剥片石器4点が出土し、石鏃1点を図示した。埋設された土器は縄文時代後期初頭の沈線文土器で、沖附式に比定される。(中村)

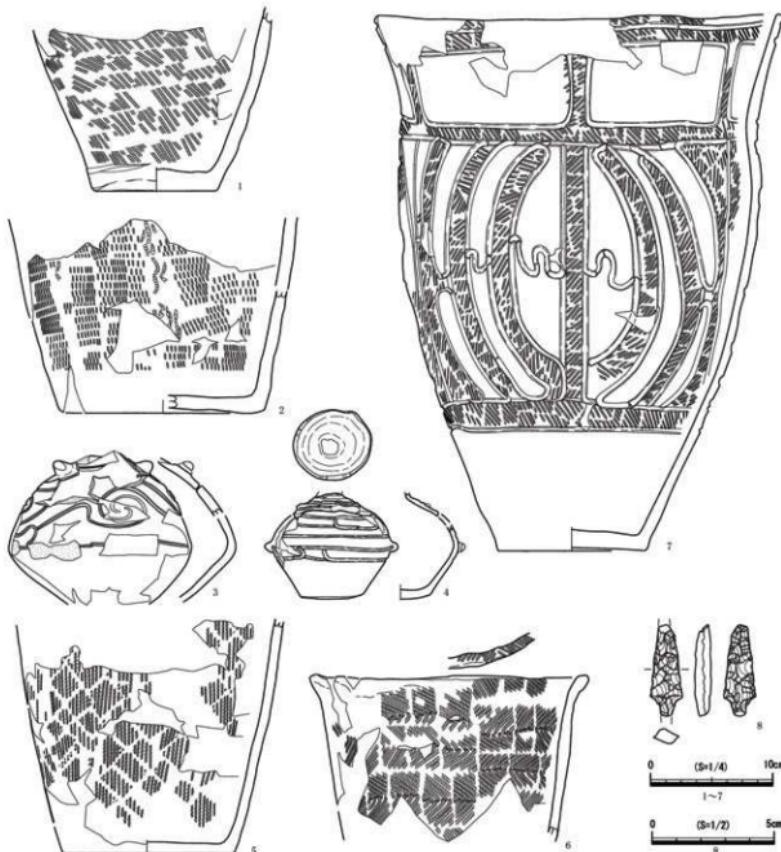


図84 第5・6・8・9号埋設土器遺構出土遺物

第1号性格不明遺構 [SX-01] (図85)

第III層上面で確認した。径20~50cm程度、深さ20~40cm程度の、不整形の小穴がおよそ12×3mの範囲に直線的に並ぶ。小穴内部にはしまりのない褐色・黒褐色のシルトが堆積する。何らかの植栽痕とも考えられるが、用途、時期とも不明である。堆積土中からは縄文時代の土器、剥片石器64点（石鏃1点、尖頭器4点）、礫石器1点が出土した。石器はそのうち8点を図示した。(中村)

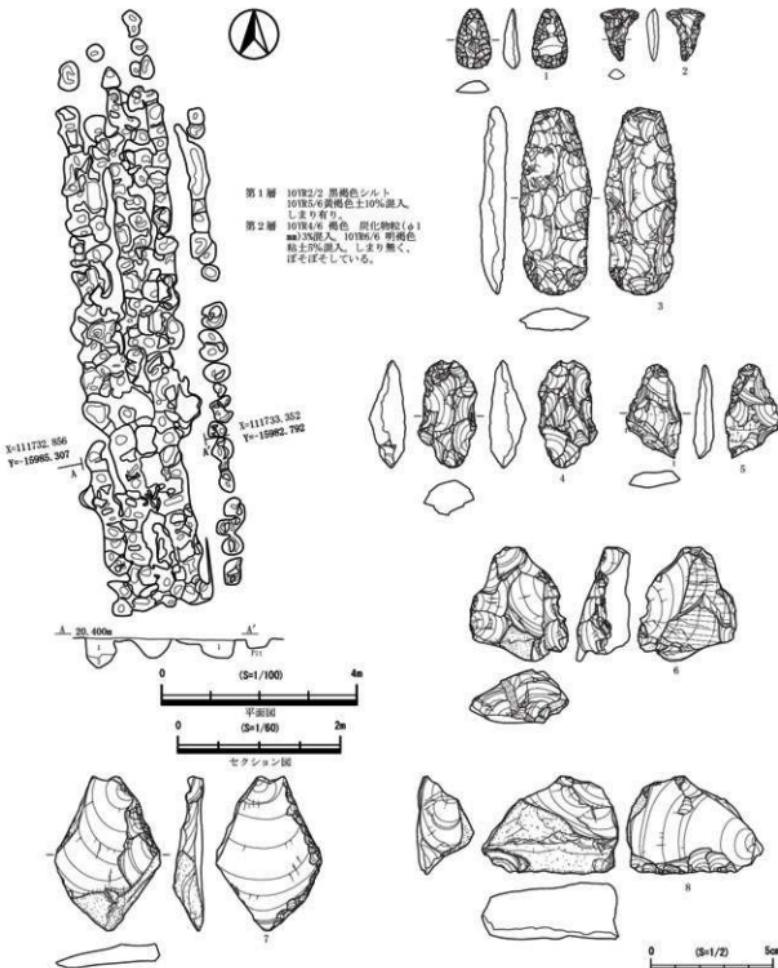


図85 第1号性格不明遺構

第1号配石遺構【SX-02】(図86~88)

第III層で遺構検出作業中に確認した。同一平面上の約3m×2mの範囲に川原石が認められた。密な部分を取り囲んで疎な部分が廻る。基底部には土坑等は検出されなかった。周辺で出土した土器は、縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が主体であり、この時期の所産と考えられる。石器は、周辺から石錐1点、尖頭器1点を含む剥片石器44点が出土し、そのうち10点を図示した。(中村)

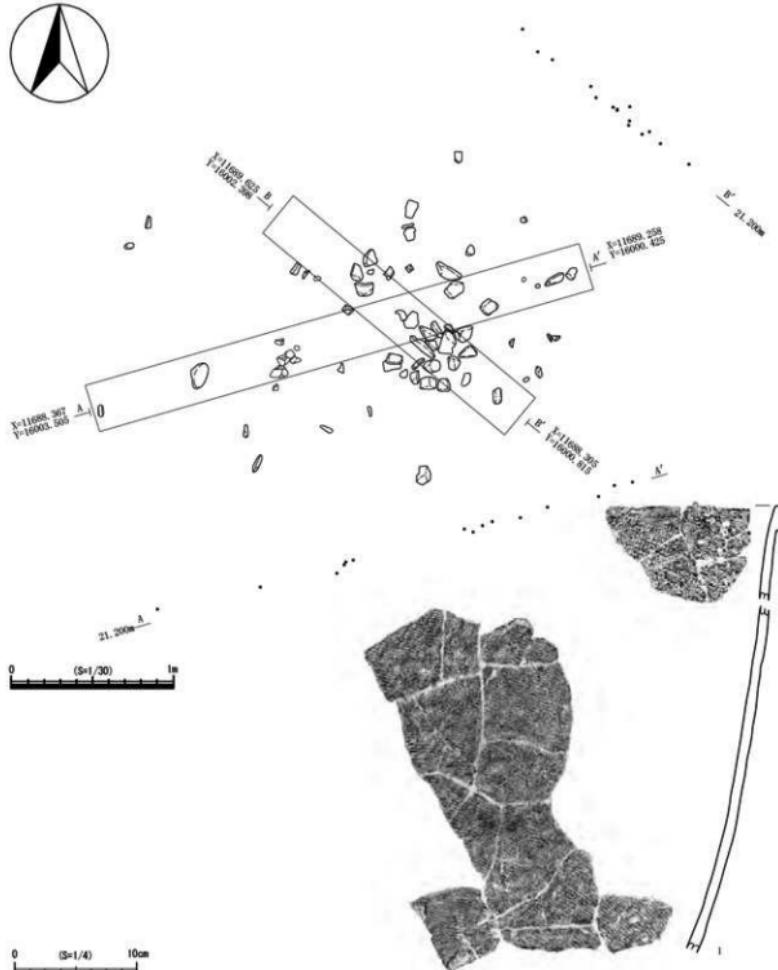


図86 第1号配石遺構【SX-2】(1)

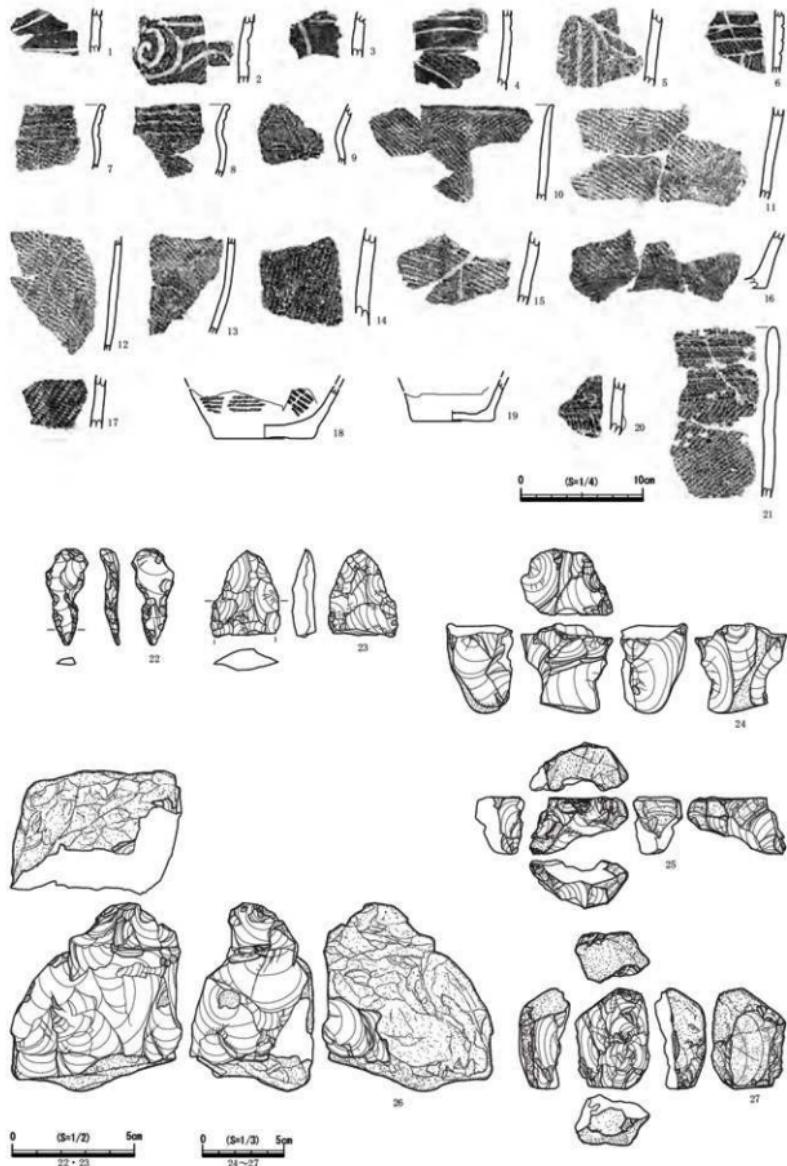
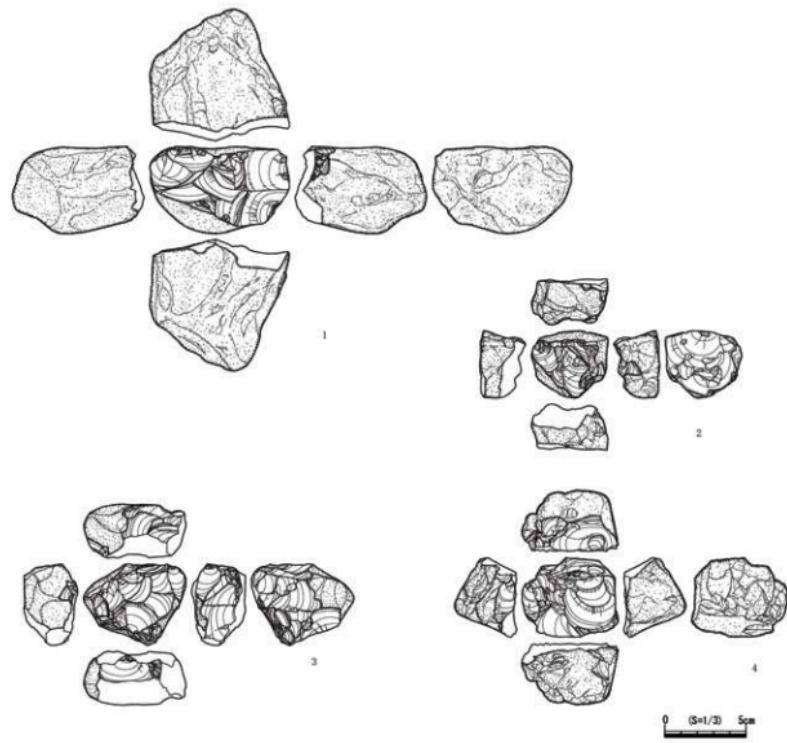
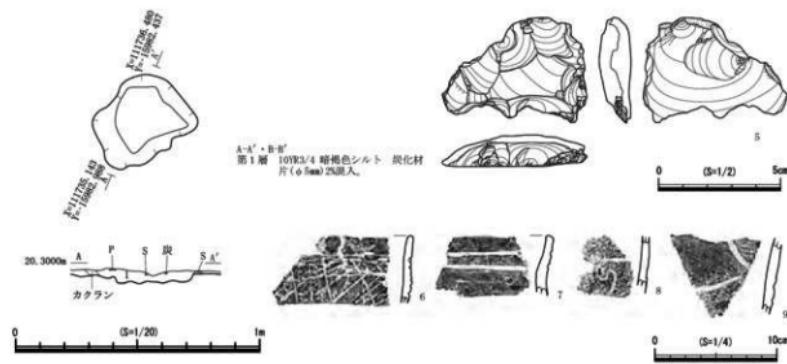


図87 第1号配石遺構 [SX-2] (2)



第1号配石遺構



第3号性格不明遺構

図88 第1号配石遺構 [SX-2] (3)・第3号性格不明遺構

第3号性格不明遺構【SX-03】(図88)

SI-21精査中にしまりのない暗褐色シルトが堆積した落ち込みを検出し、第3号不明遺構とした。平面形・断面形とも不整形で、堆積土中からは炭化材が出土した。うち、1点について樹種同定を行ったところ、クリと同定された（第4章第2節）。【出土遺物】縄文土器が15片（248.9g）出土した。後期前葉の十腰内I式の土器が含まれる。石器は搔器1点を含む剥片石器7点が出土し、そのうち1点を図示した。【時期】不明。（中村）

第4号性格不明遺構【SX-04】(図89)

第III層中で暗褐色土の落ち込みを確認した。第III層下の黄褐色火山灰土・褐色粘土質火山灰土を底面とする。木根の攪乱も多く、凹凸が激しい。平面形は不整形を呈する。褐色から暗褐色のシルトを主体とする。遺物は堆積土中から縄文土器23片（241.9g）、石錐2点、石核1点を含む剥片石器5点が出土し、そのうち3点を図示した。時期は不明である。（中村）

第5号性格不明遺構【SX-05】(図90)

第III層中で暗褐色土の落ち込みを確認した。第III層下の黄褐色火山灰土を底面とする。セクションベルト以外では壁の確認が困難であったため、不明な点が多いが不整な円形として認識した。第III層下の黄褐色火山灰土を底面とするが、木根の攪乱により、凹凸が激しい。【出土遺物】土器は41片（644.4g）が出土した。縄文時代中期末葉から後期初頭のものである。石器は削器2点を含む剥片石器10点、礫石器2点が出土し、接合資料3点を図示した。【時期】縄文時代中期末葉から縄文時代後期初頭ないしそれ以降と思われる。（中村）

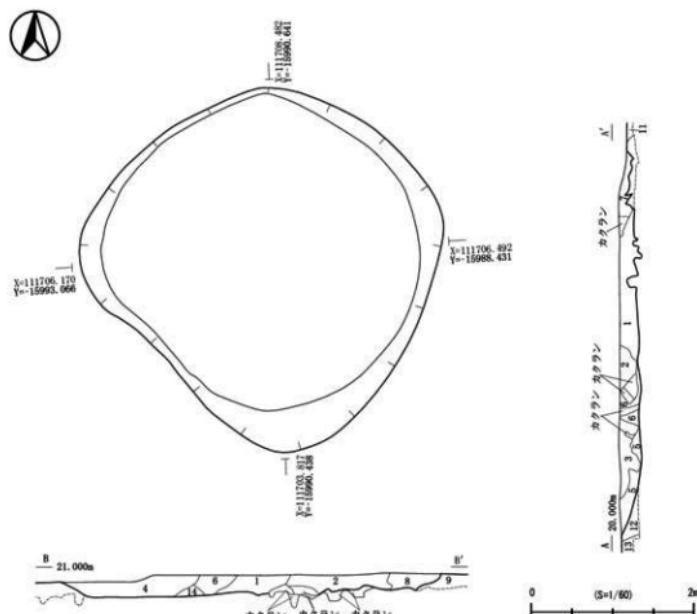
第6号不明性格遺構【SX-06】(図91)

第III層中で暗褐色土の落ち込みを確認した。第III層下の黄褐色火山灰土を底面とするが、攪乱を受けており、凹凸が多い。平面形は不明な点が多いがやや不整な円形を呈すると思われる。堆積土は褐色から黄褐色のシルトを主体とする。堆積土から、土器110片（2094.7g）、石核2点を含む剥片石器14点、礫石器1点が出土した。石器はそのうち石核1点を図示した。土器は縄文時代後期初頭、縄文時代中期末葉、縄文時代中期前半のものが出土している。従って、縄文時代後期初頭かそれ以後の所産と考えられる。（中村）

第4号～第6号性格不明遺構は、遺構として認識するには壁面や底面の把握が十分ではない。しかし、下層の火山灰土に直接の土層に遺物が含まれておらず、何らかの掘り込みがあった可能性は十分考えられる。ただし、下層の火山灰土上面で遺構検出を行っていないため、何らかの遺構の上に形成された包含層であった可能性も否定できない。（中村）

遺物集中(図92・93)

第I層除去後まもなく、縄文時代の土器・石器が比較的集中して検出されたため、遺物集中として取り扱った。その後の調査で、集中範囲は第19号住居跡と重複することが判明し、第19号住居跡廃絶



- A'-A'・B'-B'
 第1層 10784/6 棕褐色シルト 10785/6 黄褐色土、ブロック状に(φ~5cm)2%混入。炭化物(φ1~3mm)1%混入。
 第2層 10784/4 棕褐色シルト 炭化物(φ1~5mm)2%混入。
 第3層 10784/3 にじみ黄褐色 シルト炭化物(φ1~2mm)2%混入。
 第4層 10784/6 棕褐色シルト 10782/2 黄褐色土(1~3cm)2%混入。
 第5層 10784/4 棕褐色シルト 炭化物(φ1~2mm)2%混入。
 第6層 10784/6 棕褐色シルト 炭化物(φ1~2mm)1%混入。
 第7層 10782/4 灰褐色シルト 炭化物(φ1mm)1%混入。
 第8層 10784/4 棕褐色シルト
 第9層 10782/4 灰褐色シルト
 第10層 10784/4 棕褐色シルト 10785/6 黄褐色土、ブロック状に(φ~5cm)2%混入。
 第11層 10784/4 棕褐色シルト 10785/6 黄褐色土1%混入。
 第12層 10784/4 棕褐色シルト 炭化物(2~4mm)2%混入。
 第13層 10784/4 棕褐色シルト 炭化物(φ1mm)1%混入。
 第14層 10784/6 棕褐色シルト

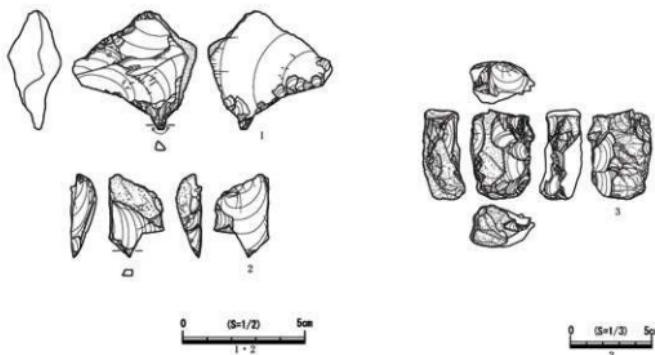


図89 第4号性格不明遺構

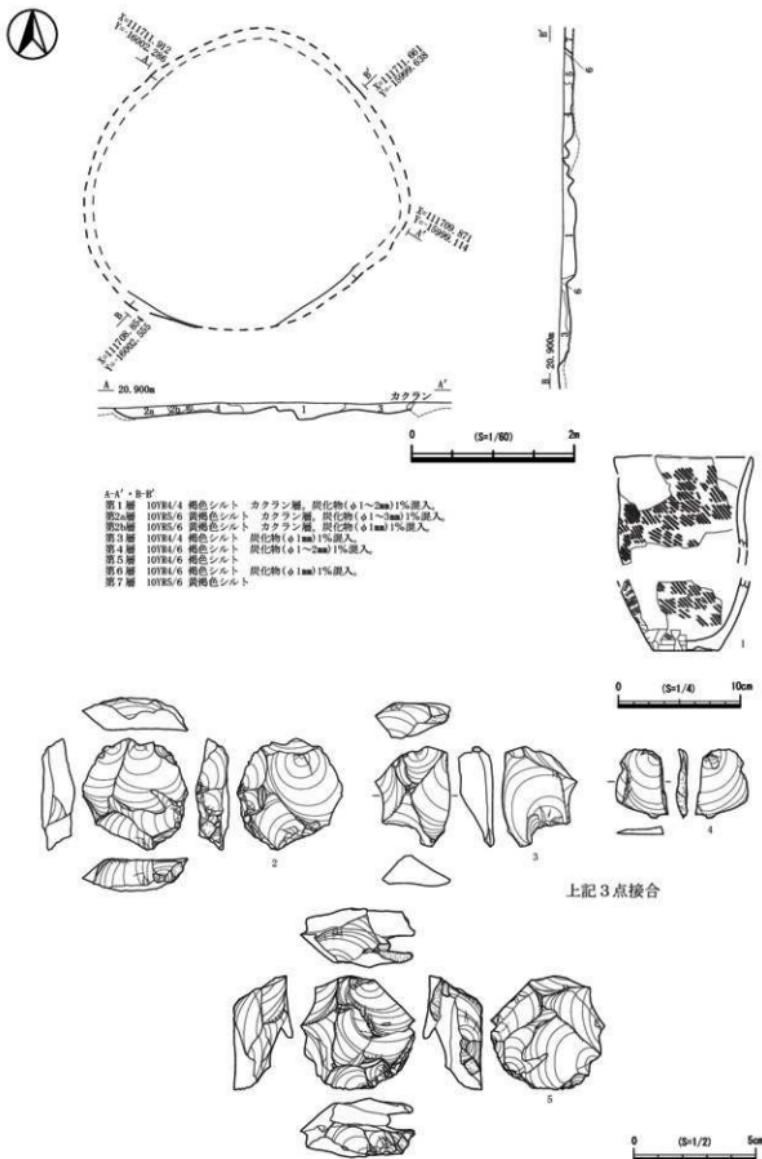


図90 第5号性格不明遺構

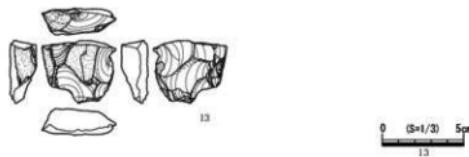
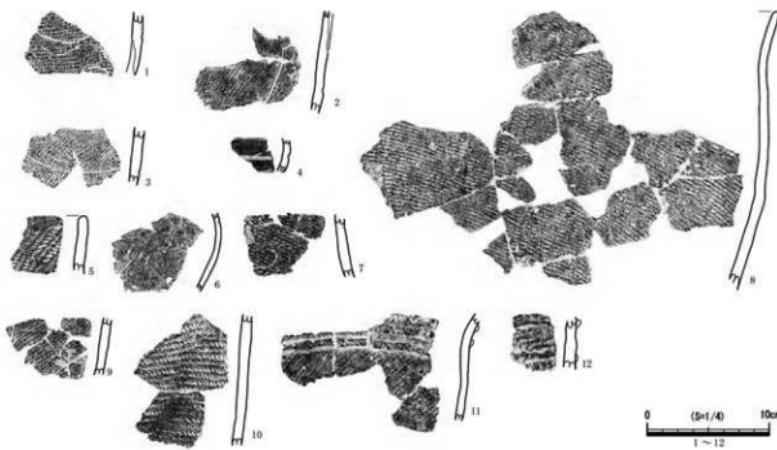
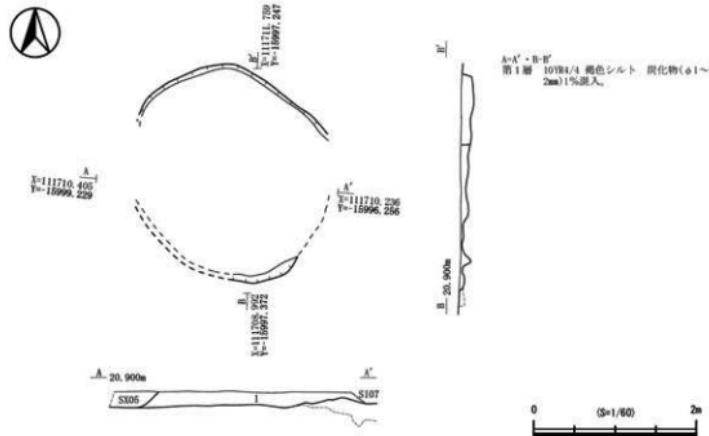


図91 第6号性格不明遺構

後の凹みに遺物が廃棄されたものと考えられた。土器は444点（4704.1g）が出土し、縄文時代後期初頭のものが主体である。石器は石核3点を含む剥片石器46点、礫石器8点が出土し、そのうち10点を図示した。図93-10は長径10cmほどの扁平な雨垂石の一部に線刻が施されている。線刻が表現する内容は不明である（中村）

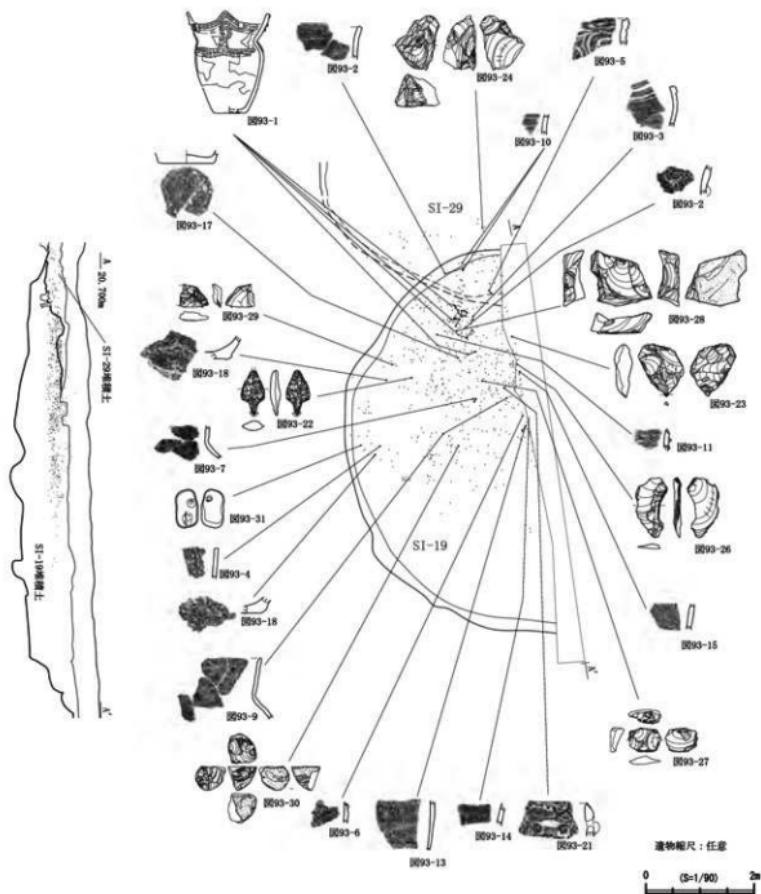


図92 遺物集中(1)

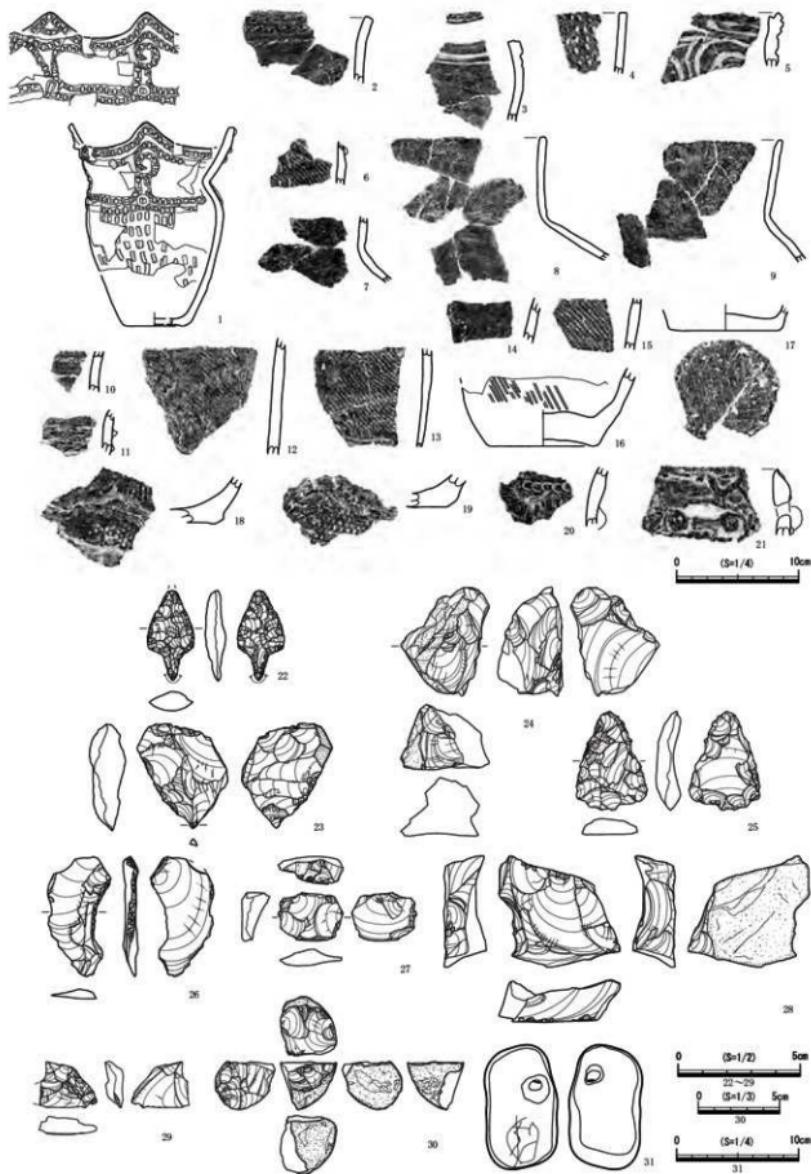


図93 遺物集中(2)

第3節 出土遺物の分類

1 土器

本報告書では、整理作業の対象とした縄文土器は第I～第VI群に大別した。ここでは分類基準と代表的な個体について記述することとした。個々の資料の分類・属性については章末の観察表を参照されたい。細分類を示した群もあるが、細分類に耐えられない資料は群のみ記した。

第I群（図63-2・3、図70-1～6、図73-1～7、80-7、84-2・5、87-21）

前期末葉の土器。円筒下層d式に比定される。口縁部の幅は狭く、撚糸側面圧痕が施される。胴部には縄文が斜位、または横位に回転施文されている。

第II群

中期の円筒上層式に比定される土器。次の4類に細分した。

第1類 a 口縁部文様帯に撚糸側面圧痕で鋸歯文を施すもの。（図21-8・25、35-1・2・4・5）

b 口縁部文様帯に馬蹄形圧痕文を施すもの。（図22-3・35-7・41-19）

c 口縁部文様帯を持たず、単一の、正面觀が方形を呈する突起を有するもの。（図49-9）

第2類 口縁部文様帯に竹管状工具による刺突文を持つもの。（図17-16、図22-5、図51-7～10・14、図61-6、図80-12、図87-20）

第3類 隆帶による胸骨文の一部と思われる装飾が施されるもの。

a 隆帶上に撚糸側面圧痕が施されるもの（図78-9）。

b 素文の隆帶のもの。（図51-6、図63-4、図91-12）

第4類 全面縄文が施されるもの。（図84-6）

第III群

中期末葉の土器。器形や文様のモチーフが不明なものが多いので細分類は行わなかった。施文手法には磨消縄文と地文縄文に沈線文を施すものの2種類がある。沈線は浅く、底面が平坦で、断面形が箱形を呈するか、観く細いものが多い。

図16-2は波頭部に貫通孔があり、貫通孔に沿って、縱位の隆帶が施される。隆帶上と頸部には刺突文が施され、口縁部は無文である。胴部には、磨消手法でJ字文が描かれる。J字文の端部には鱗状突起が施される。図41-22は口縁部を折り返し口縁とし、胴部には、地文縄文上に沈線で波頭文などを描く。図41-12は無文の口縁部下端に隆帶を貼り付け、隆帶に沿って円形の刺突文を施すものである。図41-15は胴部にJ字文、あるいはS字文が変形したと思われる文様が描かれ、小突起から垂下する沈線がこれに接続する。

第IV群

後期初頭の土器。

第1類 文様が隆帶で描かれるもの。（図14-4・5、図21-7、図22-1・8、図35-3、図51-11、図67-4、図80-8、図91-11、図93-1）

図35-3は、胴部上半に隆帶による三角形区画文と渦巻き文が施される。隆帶上には回転縄文が施される。図22-1は、幅広の口縁部に、隆帶による区画文を施す。胴部には、沈線による三角形構図の曲線文様が施される。胴部文様は第4類にみられるものと類似するとと思われるが、口縁部の幅が広い点で、第4類とは異なる特徴を持つため、本類に含めた。

第2類 口唇部直下に1条の隆帯が貼り付けされるもの。(図21-20、図94-3)

図93-2は口唇部からやや下位に、回転縄文の施された隆帯を、口唇部に平行に施す。図21-20は、口唇部からやや下位に素文の隆帯を口唇部に平行に施す。口縁部には半円形の文様が描かれる。

第3類 燐糸側面圧痕により平行線文・三角形文・半円形文が施されるもの。(図17-8、図75-10、図80-11、図87-7~9、図94-3)

第4類 沈線により、三角形文、入り組み文などが施されるもの。沈線は、太く、断面形がカマボコ状になるものが多い。施文手法により次の3類に細分した。

- a 縄文地に沈線文を施すもの(図14-11、図17-2、図21-9・14・21・23、図22-2・4・10・16・21・23・26・28・31、図46-1・5、図49-10、図57-2、図67-1・2・3・6、図87-2)

図57-2は胴部に接続するS字状の曲線文が施される。頸部には横位の、断面三角形の隆帯が2条ある。部分的に縦位の2条の隆帯が認められる。

- b 磨消縄文(図7-17、図21-2・13・19、図22-12・22・25、図49-1・49-3、図72-1)

- c 無文地に沈線文を施すもの。(図21-15・22、図22-6・30、図72-2、図75-9、図80-4、図93-5)

第5類 磨消縄文により、縦長の円形文が施されるもの。(図84-7)

第6類 無文の土器(図17-6、図21-3・4・10・11、図22-19、図72-6、図75-1・4、図76-1、図91-6、図93-7・8・9)

第7類 縄文が胴部に、縦位の帶状に施される土器。(図78-1)

第V群

中期末葉～後期初頭の粗製土器。器形によって次の6類に細分した。

第1類 底部からやや外傾気味に立ち上がり、胴部中位で内湾する。口縁部はほぼ直立ないし内湾気味となる。(図7-8、図17-1、図29-1、図41-16)

第2類 底部からやや外傾気味に立ち上がり、胴部中位から上位1/3でやや内湾する。口縁部はほぼ直立ないし内湾気味となる。1類よりも口径/底径比が小さい。(図7-6・7、図57-1)

第3類 底部からやや外傾気味に立ち上がり、胴部下位～中位で内湾する。頸部で外湾し、口縁部は外開きとなる。(図78-8、図90-1)

第4類 底部からやや直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に最大径がある。(図11-1、16-1、図17-3、図41-7、図45-4)

第5類 底部からやや外傾して立ち上がり胴部上位1/3で内湾し、頸部で再び外傾する。胴部上位と口縁部の径がほぼ等しい。(図59-1、図91-8)

第6類 底部から内湾気味に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾して口縁部に至る。口縁部に最大径がある。(図32-5)

第7類 口唇部が肥厚で外面に張り出し、その前面に回転縄文を施文するもの。(図14-8)

第8類 縄文地に結節回転文を伴うもの。(図41-25)

第9類 単軸絞条体が縦位に回転施文されるもの。(図14-2、図35-14)

第VI群

十腰内I式に比定される土器。(図7-19、図32-6、図88-6~9)

第Ⅰ群土器は上述したように円筒下層式土器に比定される。

第Ⅱ群は、1類が円筒上層a式に、2類は円筒上層c式に、3類は円筒上層d式にそれぞれ比定される。4類は帰属する土器型式は不明であるが、円筒上層式の範疇でとらえられる。

第Ⅲ群は大木10式併行期に比定される。復元個体が少なかったため、細分類は行わなかったが、図41-12・13と図16-2・図41-22などとは時期差がある可能性もある。この時期の細分案はいくつか提出されているが（成田1988・柳沢1996・鈴木2000）、なお不明な点も多い。図41-12・13は大木10式併行期の中でも旧い段階に、図41-22・図61-1は中位の段階に、図16-2のように鋸状突起と口縁部に隆帯を持つものは新しい段階に位置づけられる可能性が高い。

第Ⅳ群は縄文時代後期初頭の土器である。青森県における後期初頭の土器編年は古い方から順に牛ヶ沢（3）式、沖附式、弥栄平（2）式とするのが一般的である（成田1989、青森県教育委員会2002）。ただし、概説的な文献であり、それぞれの型式内容を網羅しているわけでもない。また、異論（葛西1979、本間1985、鈴木1998）もあり、未だに決着をみていない。しかし、大筋で、隆帯で文様を描出するものが古く、次第に沈線化する事は認めて良いようである。

第1類・第2類は、第Ⅳ群中の他の細分類に帰属させるべきものを含んでいる可能性もあるが、第Ⅳ群土器の中では旧い段階に位置づけられる。

第3類は北海道系の土器、また、その影響を受けた土器と思われる。数量的には少ない。

第4類は第1・2群より後出で、弥栄平（2）式とされるものである。

第5類は沖附式とされるもので、第4類より後出とする見解（成田1989）、前出とする見解（葛西1979）、同時期の地域性とする見解（本間1985、鈴木1989）がある。本遺跡では沖附式に比定できるものは図84-4の1点だけである。第4類と第5類の時間的関係を示唆する出土状況は得られなかった。

第6類は第1・2類および第5・6類のいずれかに伴うものと思われる。

第V群は第Ⅲ群・第Ⅳ群に伴うものである。器形により細分類を行ったが、供伴関係から時期比定できるものではない。

第VI群は上述したとおり十腰内I式に比定される土器である。

参考文献（五十音順）

- 青森県教育委員会 2002 『青い森の縄文人とその社会』図説ふるさと青森の歴史シリーズ2
- 葛西 助ほか 1979 『紫沢遺跡』青森市紫沢遺跡発掘調査団
- 鈴木 克彦 1998 「東北地方北部における十腰内土器様式の編年学的研究：4-十腰内I式と直前形式の研究」『縄文時代』9
- 鈴木 克彦 2001 「東北地方北半部の中期・後期縄区分に関する編年学的研究（上）-大曲I式などの中期末葉の土器群-」
- 成田 渥彦 1989 「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 本間 宏 1985 「東北地方北部における後期縄文土器群の実態」よねしろ考古学1 神奈川県立考古学研究会
- 柳沢 清一 2006a 「岩木山縄文の再検討」『縄文時代中・後期の編年学的研究』千葉大考古学研究叢書3（初出、『北奥古代文化』20 1990年 北奥古代文化研究会）
- 2006b 「北奥「大木10式併行土器」編年の見直し -富ノ沢(2)遺跡C地区の新資料を中心として-」『縄文時代中・後期の編年学的研究』千葉大考古学研究叢書3（原題「北奥大木10式併行土器の編年」初出は『板井清彦先生古稀記念論文集 -21世紀の考古学-』1993年 雄山閣出版）

2 石器

出土した石器は、以下のように分類した。

石鎌：精緻な二次調整による鋭利な先端を持ち、扁平・左右対称で長さ50mm程度までのもの。形状で、I類：茎が無く基部の抉入が強めのもの、II類：茎が無く基部の抉入が強めで張出部先端が丸みを帯びるもの、III類：茎が無く基部が円形のもの、IV類：茎が無く基部が尖形のもの、V類：茎が有り基部が突出するもの、VI類：茎が有り基部が平らで張出部先端が丸みを帯びるもの、VII類：茎が有り基部が平らで張出部先端が鋭いもの、VIII類：茎が有り基部に抉入がみられるもの、と細分した。

石槍：精緻な二次調整による鋭利な先端を持ち、長さ50mm程度以上・長幅比3:1程度以上のものを石槍としたが、今回報告分には含まれない。

石錐：二次調整により断面円形に近い突出部が作出されたもの。

石匙：器体の一端につまみ部分を作出し、縁辺に二次調整による刃部を有するもの。刃部とつまみ部の位置関係により縦型、横型に細分する。

石鎔：撥状、棒状に整形された器体端部に二次調整による弧状、直線状の刃部を有するもの。

尖頭器：器体両面または片面に調整が施され、端部が尖頭状に加工されたもの。

両面加工石器：器体が断面レンズ形に整形され、二次調整による刃部が見出せないもの。

搔器：器体の一部に、急角度の二次調整による弧状、直線状で片刃の刃部を有するもの。

削器：器体の全体または一部に調整痕あるいは使用による剥離痕跡が認められるが上述の器種群にあてはまらない不定形剥片石器を、削器としてまとめて扱った。調整の度合いにより、I-1類：器体両面全体に調整を施す、I-2類：片面全体と裏面側縁に調整を施す、I-3：片面全体に調整を施し裏面に調整はない、II-1類：片面の両側縁と裏面の一側縁以上に調整を施す、II-2類：片面の両側縁と裏面の一部に調整を施す、II-3類：片面の両側縁に調整を施し裏面に調整はない、II-4類：片面の一側縁とそれ以外の裏面の一側縁に調整を施す、II-5類：片面の一側縁と裏面の同一側縁に調整を施す、II-6類：片面の一側縁と裏面の一部に調整を施す、II-7類：片面の一側縁に調整を施し裏面に調整はない、III-1類：両面から部分的な片面調整を施すことで、一側縁全体に刃部を形成する、III-2類：側縁の一部に調整を施す、IV類：微小剥離痕の認められるものと調整が一側縁の3分の1以下のもの、V類：使用による刃こぼれ状の刃部をもつもの、と細分した。

両極加擊痕のある剥片：器体の両端に対応する打点があるもの。

異形石器：不定形剥片石器のうち、形状が特異なものを異形石器としてまとめた。

石核：石器素材剥離後の残骸部分。

磨製石斧：擦切りや敲打により短冊状に整形された素材を用い、器体・刃部が研磨により斧形に仕上げられたもの。

打製石斧：器体・刃部がハンマーの加撃による剥離で斧形に形成されたもの。

北海道式石冠：器体中央に帯状の敲打痕を持ち、側面に平坦な磨面を持つもの。

半円状扁平打製石器：扁平様の一長側縁に平坦な磨面を持ち、その周囲に加撃による剥離痕が残るもの。

石錘：扁平な様の長軸または短軸上の両端に、対になる打ち欠き加工を持つもの。

敲磨器：器体に敲打痕・磨面・凹痕など様々な痕跡が見られ手持ちで使えるサイズのもの。痕跡の種類で細分し、I類：敲打痕を持つもの、II類：磨面を持つもの、III類：凹痕を持つもの、IV類：2種

類以上の痕跡を持つもの、とした。

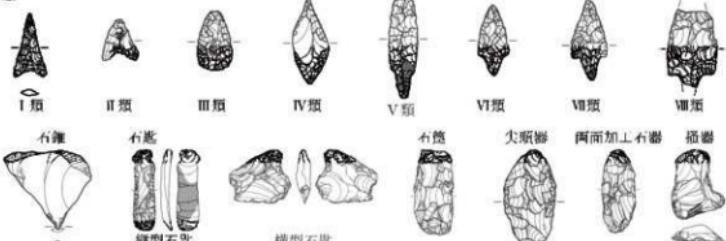
ハンマー：やや硬質な自然縁の側縁部や端部に、周辺の剥離を伴う明確な敲打痕がみられるもの。

砥石：対象物の局部的な研磨作業により、器面に溝が観察できるもの。

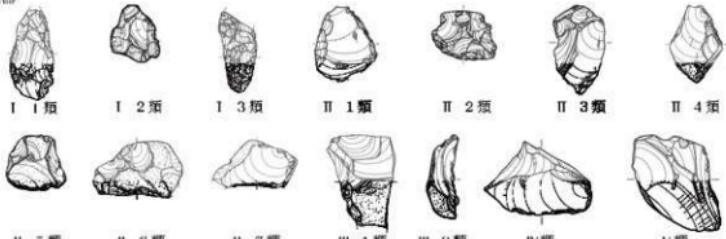
台石・石皿：敲打痕・磨面・凹痕をもつもののうち、手持ちでの使用が無理なサイズで床面などに置いて使用することが想定されるもの。

性格・用途不明な石製品：その他、敲打や研磨等によって特異な形状に整形され用途が不明なもの。(宮崎)

石器



剣器



兩極加撃痕のある剥片



接合資料



磨製石斧



打製石斧



北海道式石冠



半円状扁平打製石器



石鍬



砥石



敲打器



II類



III類



IV類



ハンマー



性格・用途不明な石製品



I類

II類

III類

表3 出土土器・土偶・土製品観察表

順位	種別	遺跡名	出土層位	注記	重量(g)	調査	外面文様		内面調整等	胎土	備考	分類
							地文調文(鉛範成)	上面				
7- 1	歌謡	SI- 6	11層	P-230	19.4	地文調文(鉛範成)上に沈澱による曲線文。沈澱幅2mm。	ミガキ。					III
7- 2	歌謡	SI- 6	10層	P-232	56.3	RL 縦位回転。						V
7- 3	歌謡	SI- 6	10層	P-9	27.9	横面調文による曲線文。RL 縦位回転。						III
7- 4	歌謡	SI- 6	11層・覆土	P-4・X	31.0	口縁部、無文、胴部、RL 縦位回転。						V
7- 5	歌謡	SI- 6	10層	P-224	23.5	地文調文(鉛範成回転)上に沈澱による曲線文。 北端幅2mm。	ミガキ。					III
7- 6	歌謡	SI- 6	9層・覆土	P-197・237・P-X	384.8	調文 RL 縦位回転。						V-2
7- 7	歌謡	SI- 6	10層	P-219・220・221	66.6	調文 RL 縦位回転。						V-2
7- 8	歌謡	SI- 6	10層・P-232	P-232・233	1200.0	調文(未端結構) 縦位回転。						V-1
	piti 覆土			P-X								
7- 9	歌謡	SI- 6	9層	P-75	17.0	口縁部、無文、胴部、RL 縦位回転。						V
7-10	歌謡	SI- 6	9層	P-72	8.0	3枚の平行路溝。沈澱幅3mm。沈澱上にRL 縦位回転。						IV
7-11	歌謡	SI- 6	H105・H16・P-2	P-149・157・235・236	132.7	RL 縦位回転。						V
7-12	歌謡	SI- 6	6層・7層	P-109・148・150・156・ P-X	196.7	調文 RL 縦位回転。						V
	覆土上・下			158・159								
7-13	歌謡	SI- 6	6層	P-105	34.1	口縁部、無文、胴部、RL 縦位回転。						V
7-14	歌謡	SI- 6	6層	P-22・91・92・93	75.5	地文調文(鉛範成回転)上に沈澱による曲線文。 北端幅2mm。	ミガキ。					III
7-15	歌謡	SI- 6	6層	P-X	40.8	RL 縦位回転。						V
7-16	歌謡	SI- 6	6層	P-101	131.9	RL 縦位回転。						V
7-17	歌謡	SI- 6	覆土	P-X	27.9	沈澱による曲線文。沈澱間にRL 縦位回転調文。 窓沿の手形の判明不 ^明	ミガキ? 化粧調 窓。					IV-4b
7-18	歌謡	SI- 6	覆土	P-X	16.6	沈澱による斜格子文。沈澱幅3mm。	ミガキ。					V
7-19	歌謡	SI- 6	覆土	P-X	15.5	無文部に沈澱による曲線文。沈澱幅3.5mm。	ミガキ。					V
10- 1	歌謡	SI- 7	社・土・P-2	P-12・30・73・98・184・ P-X	164.3	調文 RL 縦位回転。						V
	半・P-2			251・302								
	SI- 9	歌・P-3・P-2	P-92・144・170・200・X									
10- 2	歌謡	SI- 7	底・H1社・P-2	P-4・66・253	35.8	RL 縦位回転。						V
10- 3	歌謡	SI- 7	床面	P-65	233.3							V
10- 4	歌謡	SI- 7	23層	P-350	21.9	沈澱による曲線文間にRL 縦位回転。沈澱幅2mm。	ミガキ。					III
10- 5	歌謡	SI- 7	20層	P-210	24.3	調文 RL 縦位回転。						V
10- 6	歌謡	SI- 7	20層	P-347	22.1	沈澱による曲線文間にRL 矢塗。	ミガキ。					III
10- 7	歌謡	SI- 7	20層	P-207	50.7	沈澱による曲線文間にRL 矢塗。沈澱幅3mm。	ミガキ。					III
10- 8	歌謡	SI- 7	覆土・H1層・H3層	P-93・238・249・250・341	127.7	調文 RL 縦位回転。下端、横方向のナデ。	ミガキ。					V
				S-107								
10- 9	歌謡	SI- 7	歌・P-1	P-40・244・294	122.5	調文 RL 縦位回転。						V
10-10	歌謡	SI- 7	17層	P-156・186	32.7	RL 縦位回転。						V
11- 1	歌謡	SI- 7	18層	P-280・283・299・318	620.0	調文 RL 縦位回転。						V-4
			17層	P-173・190・198								
			12層	P-264								
			11層	P-326								
11- 2	歌謡	SI- 7	16層・20層	P-201・209・X	35.9	茎部、竹管工具による刃形刻文。胴部は織目調文。 ミガキ? 化粧調。	ミガキ?	化粧調。				III
11- 3	歌謡	SI- 7	16層	P-202・204・231	31.1	RL 縦位回転。下端ナデ。	ミガキ。					V
11- 4	歌謡	SI- 7	14層	S-109	194.6	RL 縦位回転。						V
	SI- 9	†??	P-X									
11- 5	歌謡	SI- 7	14層	P-266	28.4	ナデ。						V
11- 6	歌謡	SI- 7	11層	P-255	40.5	RL 縦位回転。						V
11- 7	歌謡	SI- 7	13層	S-107	7.3	口縁部無文、調文地文(RL 縦位回転)上に沈澱 文。沈澱幅2mm。	ミガキ。					III
11- 8	歌謡	SI- 7	歌・I層・II層	P-3・14・54・143・148・154・267	110.3	調文 RL 縦位回転。						V
	SI- 9	覆土・3層	P-4・156									
11- 9	歌謡	SI- 7	11層	P-216・314・319・321	147.0	調文 RL 縦位回転。						V
11-10	歌謡	SI- 7	覆土	P-30	53.7	ミガキ。						内側にも毛包印の 跡跡あり。
11-11	歌謡	SI- 7	覆土	P-X	13.0	肩下する2条の沈澱間に短沈澱を充填。						III
11-12	撲	SI- 7	16層	P-229	6.9	顔面部突出。面部部の具体的な表現ではなく、円形 の刻文記が施される。						
14- 1	歌謡	SI- 8	床面	P-117	114.1	単輪條各体1箇縦位回転。下端、ナデ。	ナデ。	底、断面近辺に輪 (1層)付付。				V
14- 2	歌謡	SI- 8	覆土	P-10	334.3	単輪條各体1箇縦位回転。	ミガキ。					V-9
14- 3	歌謡	SI- 8	覆土	P-54	46.8	波状口縁に沿った三条の断面三角形の陸帯。						IV

(土器・土偶・土製品 No. 2)											
箇号	種別	遺構名	出土層位	注記	重量(g)	調査	外面文様	内面調整等	附土	備考	分類
14- 4	歎詠	SI- 8	覆土	P-41	23.5	沈縫による曲線文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。				IV-1
14- 5	歎詠	SI- 8	覆土	P-52	23.0	斜位・縱位の断面三角形の縫合。縫合部は風化跡。					IV-1
14- 6	歎詠	SI- 8	覆土	P-25	12.3	口縫部斜文。LR 縦位回転。	ミガキ。				V
14- 7	歎詠	SI- 8	覆土	P-26・60	90.4	口縫部斜文。RL 縦位回転。	ミガキ。				V
14- 8	歎詠	SI- 8	覆土・1 層	P-X	66.1	口縫部、前面に回転調文。口縫部、無文。腹面以下、LR 縦位回転。	ミガキ。				V-7
14- 9	歎詠	SI- 8	覆土・1 层	P-X	35.1	RL 縦位回転。	ミガキ。				V
14-10	歎詠	SI- 8	覆土	P-X	36.5	RL 縦位回転。	ミガキ。				V
14-11	歎詠	SI- 8	覆土	P-13・77	819.4	調文斜文(乳頭回転)上に沈縫により三角形凹凸と尚存風化跡。 また、丁字状モチーフ、彌羅文が施される。沈縫幅 4mm。	ミガキ。				IV-4a
14-12	歎詠	SI- 8	覆土・1 层	P-92・X	446.9	0段多条 LR 縦位回転。	ミガキ。				V
14-13	歎詠	SI- 8	覆土・1 层	P-25・28・84・91・X	251.6	0段多条 LR 縦位回転。	ミガキ。				V
				XII-3							
16- 1	歎詠	SI- 9	3 层	P-X・155	2000.0	RL 縦位回転	ミガキ。				V-4
				覆土							
				P-65・66・67・69・117・118							
16- 2	歎詠	SI- 9	覆土	P-1・3・80・101・103・104・128	1230.0	直縫部に三日月状の風痕、腹巻上と裏面には横状後縫部による刺突が施される。口縫部～胴部は割り落し調文による丁字文。胴部文様巻下端には歎詠文。丁字文末端と直縫文の底面に横状突起が施される。	ミガキ。				III
				4c 层							
				P-171・181・182・183・217							
17- 1	歎詠	SI- 9	伊	P-1～5	1880.0	直縫部に三日月状の風痕、腹巻上と裏面には横状後縫部による刺突が施される。口縫部～胴部は割り落し調文による丁字文。胴部文様巻下端には歎詠文。丁字文末端と直縫文の底面に横状突起が施される。	ミガキ。	底面板ナデ。	V-1		
				覆土							
				P-57・90・113							
17- 2	歎詠	SI- 9	3 层	P-304	1900.0	直縫・横縫	ミガキ。				IV-4a
				XIII-3							
				VE-3・X							
17- 3	歎詠	SI- 9	覆土・3 层	P-95・151	2326.0	0段多条 LR 縦位回転。	ミガキ。	底面板ナデ。	V-4		
				覆土							
				P-70・92・108・115・120・125・X							
17- 4	歎詠	SI- 9	4 层	SI-20	P-X	直縫・横縫	ミガキ。				IV-4a
				トレン							
				2(造構外)							
17- 5	歎詠	SI- 9	7 层	P-278	234.5	LR 縦位回転。下端、ナデ。	ナデ。	底蓋、蓋代蓋日本 蓋日本蓋。	V		
				Tr-2							
				II 层・III 层							
17- 6	歎詠	SI- 9	4a 层	P-185・220・228	122.7	RL 縦位回転。下端、ナデ。	風化跡。			V	
				P-137							
17- 7	歎詠	SI- 9	3 层・3カソ	P-144・294・316・320・324	91.0	ミガキ。部分的に黒色付着物有り。	ミガキ。黒色付着物に 付着物有り。黒色 付着物。	付着物はウラシタカ 有る。	V-6		
				P-251							
17- 8	歎詠	SI- 9	4a 层		88.6	口縫部、燃余(LR)側面圧痕による縫合文。胴部、ミガキ。	ミガキ。	ミガキ。	V-3		

(土器・土器・土製品 No. 3)

順序	種別	遺物名	出土層位	注記	重量(g)	調	外見文様	内面調査等	胎土	備考	分類
17- 9	歯縫	SI- 9	2層	P-X	12.6	沈縫。	ミガキ。				III
17-10	歯縫	SI- 9	2層	P-133	55.6	ナデ。				底面、側面圧痕。	V
17-11	歯縫	SI- 9	櫻土・2層	P-61・132	46.9	單輪底多孔1型(歯縫回転)。	ミガキ。				V
17-12	歯縫	SI- 9	櫻土	P-53	98.1	LR 縦位回転。下端、ナデ。	ナデ。			底面、板ナデ。	V
17-13	歯縫	SI- 9	櫻土	P-84	18.4	口縫、底名(印) 横部三重による斜削れ。單孔、口縫位回転。	ミガキ。			IV-3	
17-14	歯縫	SI- 9	櫻土	P-44	15	沈縫による斜格子文。				風化済。	VII
17-15	歯縫	SI- 9	櫻土	P-4	67.4	口縫部、底斜張垂。口縫部、口段多孔1型(歯縫文化)。	口縫部、底名(印)	ミガキ		I-2±たじ	
						底部中央の底縫付り付け。尾部には2本多孔1型(歯縫文化)。	側面圧痕。			たじ	
17-16	歯縫	SI- 9	櫻土	P-28	129.6	口縫部。対向する2個強張窓。L-Lの1本一筋の燃え痕。	ミガキ。				II-2
						面圧による区画内に、二字の燃え痕(側面圧痕)。底部、横格子文。					
17-17	歯縫	SI- 9	9797	P-313・327	32.6	口縫部。対向回転。下端に横位の沈縫。	ミガキ。				V
21- 1	歯縫	SI-10	伊体・押	伊体・P-3・4	798.5	口縫部。口縫位回転。	風化済。			斜に削り出しているが、側面として底面に追加してある。	V
						口縫部。口縫位回転。				計2か所引いてある。	
21- 2	歯縫	SI-10	6層	P-86・521・528・511・527・526・524	680.0	口縫部は肥厚する。口縫部～脚部下位に沈縫による三角形区画文が施される。区画内には脚部、横部、尾部(印)が充填される。	ミガキ。				IV-6b
			1層	P-579							
			櫻土	P-29・51・55・57・59・32・38・36・35・37・39・38・31・33・32・31							
			床下	P-X							
			造構外	皿層							
21- 3	歯縫	SI-10	櫻土	P-15・95・170・219	514.7	口縫部。ナデ。	ミガキ。				IV-6
			造構外	皿層	P-X						
21- 4	歯縫	SI-10	櫻土	P-664	96.2	ナデ。	ナデ。				IV-6
21- 5	歯縫	SI-10	貼り床中	P-340・348	91.2	口縫位回転。	ミガキ。				V
21- 6	歯縫	SI-10	貼り床中	P-X	14.4	沈縫。	ミガキ。				IV
21- 7	歯縫	SI-10	貼り床中	P-X	16.1	断面三角形の踏面。	風化済。				IV-1
21- 8	歯縫	SI-10	貼り床中	P-251	26.4	口縫部、尾部による区画内に燃え(印)側面圧痕。隆脊の剥離痕がある。底部、木平な腰帯。側部、RL 腹位(印)。	ミガキ。				II-1a
21- 9	歯縫	SI-10	貼り床中	P-129	27.4	光輝灰文による曲面文。	ナデ。				IV-4a
21-10	歯縫	SI-10	貼り床中	P-X	12.0	ミガキ。経緯に起因。	ミガキ。				IV-6
21-11	歯縫	SI-10	櫻土	P-85	11.8	ミガキ。経緯に起因。	ミガキ。				IV-6
21-12	歯縫	SI-10	6層	P-527・570・575・596	96.2	地文縫文(口縫位回転)上に平行沈縫。	ミガキ。				IV
			XV-12a	皿層	P-X						
21-13	歯縫	SI-10	櫻土・6層	P-549・550・551・553・559	186.7	沈縫による直縫文。沈縫間にRL光縫。沈縫幅4.5mm。	ミガキ。				IV-6b
21-14	歯縫	SI-10	6層	P-257・501・504・544・X	138.6	地文縫文(口縫位回転)沈縫による三角形区画文と曲面文。	ミガキ。				IV-4a
			XVI-125	皿層	P-X						
21-15	歯縫	SI-10	貼り床中・6層	P-489・496・540・630・693	96.7	沈縫文による直縫文。	ミガキ。				IV-4c
21-16	歯縫	SI-10	5層	P-434	99.9	粘土帶の接合面にゆび押さえが観察できる。	ナデ。				IV
21-17	歯縫	SI-10	6層	P-517・518・568・569	98.6	沈縫による曲面文。沈縫幅4.5mm。	ミガキ。				IV-4a
21-18	歯縫	SI-10	貼り床中・5層	P-347・335・347・388・519	66.3	口縫部直下、1cm程度RL 腹位(印)以下、RL 腹位(印)。	ミガキ。				V
21-19	歯縫	SI-10	5層	P-472・473	21.0	沈縫文による曲面文。沈縫幅4.5mm。	ミガキ。				IV-4c
21-20	歯縫	SI-10	5層	P-437	156.9	口縫部直下、1条の隆脊。口縫部、沈縫による風化済。	ミガキ。				IV-2
						曲面文。沈縫幅3~4mm。					
21-21	歯縫	SI-10	櫻土	P-245・303・X	83.0	地文縫文(口縫位回転)上に沈縫文。	ミガキ。				IV-4a
			XV-12a	皿層	P-X						
21-22	歯縫	SI-10	4層	P-634	36.9	沈縫による曲面文。沈縫幅3.5mm。	風化済。				IV-4c
21-23	歯縫	SI-10	櫻土	P-102	28.4	沈縫による曲面文間にRL光縫。沈縫幅5mm。	ミガキ。				IV-4a
21-24	歯縫	SI-09	3層	P-137	357.3	口縫部直下、1cm程度RL 腹位(印)以下、RL 腹位(印)。	ミガキ。				V
			XI-12a	皿層	P-X						
21-25	歯縫	SI-10	1層・37層	P-621・623・715	181.7	内面に噴射した突起が付される。口縫部、底部には堆積が付く。	ミガキ。				II-1a
						突起付られる。隆脊上に燃え(印)側面圧痕。口縫部、RL二本一筋の鶴嘴圧痕による直縫文。脚部にはIR 斜縫文。					
22- 1	歯縫	SI-10	櫻土	P-123・139・160・162・166・169	296.0	口縫部と底部には堆積が付る。底部には2本の直縫が下に付く。	ミガキ。				IV-1
			XV-12a	皿層	P-X	する堆積により直縫文が埋没されてしまう。底部で陥没された直縫文堆積内にはX字の直縫が残され、直縫文が剥離状に充填される。側面には沈縫による曲面文が施され、直縫文が充填される。沈縫幅5mm。					

(土器・土偶・土製品 No. 4)									
図録	種別	遺跡名	出土層位	注記	重量(g)	調査	外面文様	内面調整等	
								施土	備考
22- 2	歯縫	SI-10	覆土	P-246・246	19.3	調文地文(Ⅲ. 鋸形回転)上に沈縫による三角形区画文と輪刺文。	風化頗る。		IV -4a
22- 3	歯縫	SI-10	覆土	P-26	45.1	口沿部、底部(Ⅲ. 集合圧延、重ねする點)、唇部とその下間に相	ミガキ。		II -1b
						合の痕跡。唇部上は焼失(?)。側面压痕が集まれる。口部には			
22- 4	歯縫	SI-10	覆土	P-13	36.2	調文地文(Ⅲ. 鋸形回転)に沈縫による角巻文。沈縫幅 1mm。	ミガキ。		IV -4a
22- 5	歯縫	SI-10	覆土	P-131	87.6	井状突起部上に輪刺的な角巻文、導体工具による斜突文。	ミガキ。		II -2
22- 6	歯縫	SI-10	覆土	P-61・63	31.1	二本一組の沈縫による三角形区画文。沈縫間に竹管状工具による凹形斜突文。	ミガキ。	内面、炭化物付着。	IV -4c
22- 7	歯縫	SI-10	覆土	P-28	16.3	突起状、Ⅲ. 回転状文と凹形斜突文。口底部、ミガキ。			IV
						地文地文上に花文。沈縫幅 4mm。			
22- 8	歯縫	SI-10	覆土	P-143・145・167	26.7	調文(図 22-1)と同一個体。			IV -1
22- 9	歯縫	SI-10	覆土	P-150	20.6	波渦添文上に斜突文。口縫部、沈縫文。沈縫幅 4.5mm。	ミガキ。		IV
22-10	歯縫	SI-10	覆土	P-140	32.5	調文地文(Ⅲ. 鋸形回転)に沈縫による角巻文。沈縫幅 1mm。	風化頗る。		IV -4a
22-11	歯縫	SI-10	覆土	P-83	68.0	調文地文(Ⅲ. 鋸形回転)に沈縫による角巻文。沈縫幅 1mm。	風化頗る。		IV -4a
22-12	歯縫	SI-10	覆土	P-121・122	84.8	沈縫による三角形区画文と曲巻き文。区画内に竹管状工具による凹形斜突文。	ミガキ。	口部、Ⅲ. 回転状文。	IV -4b
						斜縫幅 4mm。			
22-13	歯縫	SI-10	覆土	P-248・256	140.7	ナデ。			V
22-14	歯縫	SI-10	覆土	P-232	18.9	対向する弧状唇。隆唇上し側面正直。	ミガキ。		IV
22-15	歯縫	SI-10	覆土	P-2	100.9	調文地文上? に沈縫文、風化頗る。沈縫幅 4.5mm。	ミガキ。? 脣縫。		IV
22-16	歯縫	SI-10	覆土	P-X	14.3	調文地文上に斜突文。風化頗る。沈縫幅 6mm。	風化頗る。		IV -4a
22-17	歯縫	SI-10	覆土	P-X	24.6	沈縫文。沈縫幅 5mm。	風化頗る。		IV
22-18	歯縫	SI-10	覆土	P-16	21.4	4 条の平行沈縫文。沈縫の下位にⅢ. 回転状文。	ミガキ。		IV
22-19	歯縫	SI-10	覆土	P-124・136・137	161.5	調文	ミガキ。		IV -6
XVI-12a	皿形			P-X					
22-20	歯縫	SI-10	覆土	P-4・228・310	55.9	Ⅲ. 縫合凹印。			V
22-21	歯縫	SI-10	覆土	P-116・117・118・119	153.2	地文地文(Ⅲ. 鋸形回転)上に沈縫による角巻文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV -4a
22-22	歯縫	SI-10	覆土	P-34・67	91.5	沈縫による曲線文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV -4c
22-23	歯縫	SI-10	覆土	P-286	98.5	地文地文(Ⅲ. 鋸形回転)上に沈縫による角巻文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV -4a
22-24	歯縫	SI-10	覆土	P-267・270・271	121.9	地文地文(Ⅲ. 鋸形回転)上に沈縫による角巻文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV
22-25	歯縫	SI-10	覆土	P-292・124	99.8	沈縫による曲線文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV -4c
XVI-12b	皿形			P-X					
22-26	歯縫	SI-10	覆土	P-81	11.9	地文地文(Ⅲ. 鋸形回転)上に沈縫による角巻文。沈縫幅 5mm。	風化頗る。		IV -4a
22-27	歯縫	SI-10	覆土	P-312	63.0	地文地文(Ⅲ. 鋸形回転)上に沈縫による角巻文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV -4a
22-28	歯縫	SI-10	覆土	P-91・96・97	53.0	地文地文(Ⅲ. 鋸形回転)上に沈縫による角巻文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV -4a
22-29	歯縫	SI-10	覆土	P-276	21.3	口唇部上にⅢ. 回転状文。口縫部、Ⅲ. 縫合凹印。	ミガキ。		V
22-30	歯縫	SI-10	覆土	P-104	40.9	沈縫による曲線文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV -4c
22-31	歯縫	SI-10	覆土	P-302	67.8	地文地文(Ⅲ. 縫合凹印)上に沈縫による角巻文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV -4a
22-32	指環	SI-10	6 層	S-337	13.7	正面縫合筋形、断面形はレンズ形を呈する。ナデ。			
28- 1	土器	SI-11	フリ・3 層	P-5・P-14	22.4	环 ロクロナデ。			
				P-X					
28- 2	土器	SI-II-1b	1 层	P-48	196.0	环 ロクロナデ。			
28- 3	土器	SI-11	フリ・3 層	P-1・11・16・23・28	500.0	裏 口縫部、ヨコナデ。脣部、ナデ。			皿形 回転状文。
			フリ・1 层	P-31					
			フリ・覆土	P-X					
28- 4	土器	SI-11	フリ・3 層	P-4・P-17・27・41	880.0	裏 口縫部、ヨコナデ。脣部、ケズリ。			ナデ。
			フリ・2 层	P-3・30					
			フリ・1 层	P-10					
			フリ・周辺	P-16・21					
			覆土	P-10・20					
			P-X	P-4					
28- 5	土器	SI-11	フリ・3 層	P-15・20・21・22	158.4	裏 ケズリ。			ヘラナデ。
			フリ・2 层	P-29					
			フリ・1 层	P-X					
			P-1・2 层	P-4					
28- 6	土器	SI-11	フリ・3 層	P-45	100.8	ケズリ。			ヘラナデ。
			フリ・1 层	P-24					
28- 7	土器	SI-11	カマド跡	P-7	110.4	裏 ケズリ。			ヘラナデ。
28- 8	土器	SI-11	カマド跡	P-26	252.0	ヘラナデにより整形されている。中空。脚部傘状に広がる。			
28- 9	歯縫	SI-11	カクラン	P-X	22.7	沈縫による楕円・鍵の矢羽根状文。	ミガキ。		
28-10	歯縫	SI-11	周溝	P-X	24.3	沈縫による矢羽根状文。隆唇上、U 字状の押印。	風化頗る。		
28-11	歯縫	SI-11	覆土	P-X	7.9	沈縫による矢羽根状文。隆唇上、U 字状の押印。	ミガキ。		

(土器・土偶・土製品 No. 5)

順位	種別	遺物名	出土層位	注記	重量(g)	調	外面文様	内面調整等	胎上	備考	分類
28-12	歯辻	SI-11	周溝	P-X	166.6	ハケメ	ミガキ。				
28-13	歯辻	SI-11	ツバ' 3層	P-33・34・35・36	180.1	ハケメ。底部直上に2条の沈痕。	ハケメ。				
			ツバ' 1層	P-32							
			ツバ' 周辺	P-S							
28-14	歯辻	SI-11	櫛土	P-28・X	51.1	沈痕による矢羽根状文。隆帯上、H字状の押正。	ミガキ。				
29-1	歯辻	SI-12	伊体	P-X	949.0	単軸路条件1型 (8) 調位回転。	ミガキ。	底面板ナダ。	V-1		
32-1	土偶	SI-14	櫛土	P-X	134.1	环	ロクロナダ。	底面板A切り直し。			
32-2	土偶	SI-14	ツバ' 3層	P-4・P-10・P-11	68.4		風化顕著。	底面板A切り直し。			
32-3	土偶	SI-14	F1t8 櫛土	P-10	63.1	ケズリ。	ヘラナダ。				
32-4	土偶	SI-HM7	3層	P-28	267.2	ヘラナダにより整形される。中空。					
32-5	歯辻	SI-14	櫛土・床面下	P-X	700.0	口縁部、無文、胴部、BL 調位回転。	ミガキ。			V-6	
32-6	歯辻	SI-14	F1t8P-X	P-X	44.5	重 切断面付土偶基盤。所持沈痕。破損け実現。赤色顔料	ミガキ。			VI	
						による虹彩化。竹子二段工具による切削痕。					
35-1	歯辻	SI-16	1層・6層		1280.0	口縁部、直面から垂直する2つの瘤部が築かれ、唇部下端に土瘤部が付け、口縁部には嵌入の瘤部、唇部上には横掛瘤部。唇部が壊れる。丸窓モチーフは頭部表面に現れる痕跡。	ミガキ。唇部付近に黒色塗が残る。			II-1a	
35-2	歯辻	SI-16	1層・6層		880.0	口縁部、脇部には三弓形凸溝と腰帶文。唇部上、口縁部(後)、脇部下有肩部(前)、重ねる2つの瘤部上と瘤部下。	ミガキ。			II-1a	
35-3	歯辻	SI-16	1層・9層・ト	P-8・13・14・15・17・19・21・29・30・	71.7	頭部F1、唇部上には三弓形凸溝と腰帶文。唇部上、口縁部(後)、脇部下有肩部(前)、重ねる2つの瘤部上と瘤部下。	ミガキ。			IV-1	
35-4	歯辻	SI-16	伊体内	P-3・4	293.2	頭部直面に唇部に2つ丸み立った唇部と、脇部、唇部下端に土瘤部が付け、唇部表面直下による瘤部。脇部、唇部下端に土瘤部が付け、唇部表面直下による瘤部。	ミガキ。			II-1a	
35-5	歯辻	SI-16	伊体	P-4・5・6・7	380.4	内部清掃して表面が残される。口縁部、脇部には瘤部が貼り付ける。唇部に唇部(1) 瘤部直面、脇部、脇部(2) 瘤部直面、脇部(3) 三本一筋の瘤部が直面による瘤部。脇部には2つ瘤部(2) 瘤部直面。	ミガキ。			II-1a	
35-6	歯辻	SI-16	伊体	P-2・8	175.4	羽状縫合を終え1種類の調位回転。	ミガキ。			II	
35-7	歯辻	SI-16	伊体	P-1	59.5	口縁部、I・4三本一筋の瘤部直面間に2つの瘤部が直面。脇部、唇部上には脇部直面、脇部、脇部(2) 瘤部直面。	風化顕著。			II-1b	
35-8	歯辻	SI-16	9層	P-X	22.2	R1 調位回転。	ミガキ。			V	
35-9	歯辻	SI-16	9層	P-X	27.0	R1 調位回転。	ミガキ。			V	
35-10	歯辻	SI-16	9層	P-X	28.0	R1 調位回転。	風化顕著。			V	
35-11	歯辻	SI-16	6層	P-X	25.1	脇部(1) 伊側面部直下による瘤部直面。脇部(2) 伊側面部直下による瘤部直面。	風化顕著。			II-1a	
35-12	歯辻	SI-16	6層	P-X	44.6	貫通孔を有する円錐の突起。上面には筋条(直)側面部が施される。	風化顕著。			II-1a	
35-13	歯辻	SI-16	5層	P-X	31.0	沈痕による斜格子文。	ミガキ。			VI	
35-14	歯辻	SI-16	1層	P-X	72.9	風化顕著。赤色顔料による虹彩化。	風化顕著。			V-9	
SI-21	櫛土	P-X									
35-15	歯辻	SI-16	1層	P-X	26.5	沈痕による三角形凸溝。沈痕には2つ以上調位が施される。	ミガキ。			IV	
35-16	歯辻	SI-16	1層	P-X	13.1	単軸路条件1型 調位回転。	ミガキ。			ミニチュア土器	
35-17	歯辻	SI-16	1層	P-X	30.2	ナダ	ミニチュア土器				
38-1	歯辻	SI-17	5層	P-X	50.6	地天文(1) 脇部(2) 上) に沈痕によるJ字文。尻縫縫合。	ミガキ。			III	
38-2	歯辻	SI-17	4層	P-2	62.0	R1 調位回転。	ミガキ。			V	
38-3	歯辻	SI-17	3層	P-1	84.5	風化顕著。	ミガキ? 風化顕著。			V	
38-4	歯辻	SI-17	3層	P-7	36.6	地天文(1) 脇部(2) 上) に沈痕によるJ字文。尻縫縫合。	ミガキ。			III	
38-5	歯辻	SI-17	櫛土	P-X	74.2	地天文(1) 脇部(2) 上) に沈痕によるJ字文。尻縫縫合。	ミガキ。			III	
38-6	歯辻	SI-17	櫛土	P-X	123.3	R1 調位回転。	ミガキ。			V	
38-7	歯辻	SI-17	櫛土	P-X	91.8	12 R1 調位回転。	ミガキ。			V	
38-8	歯辻	SI-17	櫛土	P-X	32.2	地天文(1) 脇部(2) 上) に沈痕によるJ字文。尻縫縫合。	ミガキ。			III	
41-1	歯辻	SI-19P3	伊体	P-X	89.4	ナダ。	ナダ。			V	
41-2	歯辻	SI-19	22層	P-X	8.5	風化顕著。	風化顕著。			V	
41-3	歯辻	SI-19	22層	P-311・316・319	69.0	風化顕著。	風化顕著。			V	
41-4	歯辻	SI-19	22層	P-316・317	8.6	風化顕著。	風化顕著。			V	
41-5	歯辻	SI-19	22層	P-315	32.9	風化顕著。R1 調位回転。	風化顕著。			V	
41-6	歯辻	SI-19	22層・18層	P-299・317	11.3	風化顕著。	風化顕著。			V	
41-7	歯辻	SI-19	20層	P-304	355.6	R1 調位回転。	ミガキ。			V-4	
41-8	歯辻	SI-19	18層	P-X	17.6	R1 調位回転。R1 調位回転。	風化顕著。			V	
							質的にによる虹彩化。				
							82~98~112~113~114~115~				

(土器・土偶・土製品 No. 6)								
編目	種別	遺構名	出土層位	注記	重量(g)	調査	外面文様	内面調査等
41- 9	歯縫	SI-19	18層	P-X	27.8		風化顕著。	黒褐色。
41-10	歯縫	SI-19	18層	P-X	25.7		風化顕著。SL. 頂部凹凸。	黒褐色。
41-11	歯縫	SI-19	18層	P-X	5.8			黒褐色。
41-12	歯縫	SI-19	17層	P-134	63.0		口縫下約3cmに隆帯を貼り付け、それより上部を無文とする。落帯の上部に背筋丸印。大下部にはIR. 頂部凹凸。	ミガキ。
41-13	歯縫	SI-19	17層	P-275	34.2		口縫下約3cmに隆帯を貼り付け。黒褐色。	ミガキ? 風化顕著。
41-14	歯縫	SI-19	重土・Ⅲ層・17層	P-88・158・342	151.0		IR. 頂部凹凸。	ミガキ。
41-15	歯縫	SI-19	17層	P-156・180	200.0		地文調査(IR. 頂部凹凸) 上に沈縫による接合するS字文。沈縫幅2mm。	ミガキ。
41-16	歯縫	SI-19	10層・17層	P-79・110・260・354・358・359・366	1180.0	調査	IR. 頂部凹凸。	ミガキ。 地文調査(1本目) 横(1本目)
41-17	歯縫	SI-19	17層	P-61	64.1		IR. 頂部凹凸。	風化顕著。
41-18	歯縫	SI-19	12層	P-100・110	37.0		地文調査(IR. 頂部凹凸) 上に沈縫による曲筋。沈縫幅3mm。	ミガキ。
41-19	歯縫	SI-19	12層	P-28・66・85・86	181.0		口縫下に複数の隆帯が貼り付けられる。口縫にはリ字状の文様。底部は水平に1枚の墨縫が貼り付ける。隆帯は上部側面に貼り付される。鉛錆、羽衣文・柱頭文。	ミガキ。 II-1b 第1回調査。
41-20	歯縫	SI-19	10層	P-349・350	21.9		斜方の底面が削り付ける。口縫下に複数の隆帯がある。	ミガキ。
41-21	歯縫	SI-19	10層	P-130・255	96.5		口縫下3cm無文。以下、IR. 頂部凹凸。	ミガキ。
41-22	歯縫	SI-19	10層	P-18・21・38・39・80・81・88・99・236・238	690.0	調査	口縫下、折り返し口縫。地文調査(IR. 頂部凹凸) に沈縫による曲筋文。	ミガキ。 地文調査(1本目) 横(1本目)
41-23	歯縫	SI-19	10層	P-143・372	102.0	調査	IR. 頂部凹凸。風化顕著。	風化顕著。
41-24	歯縫	SI-19	塵土・10層	P-347	109.6	調査	IR. 頂部凹凸。	ミガキ。
41-25	歯縫	SI-19	10層	P-334	189.2	調査	IR. (未確認) 頂部凹凸。	ミガキ。
41-26	歯縫	SI-19	10層	P-X	26.9		地文調査(IR. 頂部凹凸) 上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。
41-27	歯縫	SI-19	10層	P-X	42.8		地文調査(IR. 頂部凹凸) 上に沈縫文。沈縫幅5mm。	ミガキ。
41-28	歯縫	SI-19	10層	P-340	22.3		尤開二上部の曲筋文。IR. 頂部凹凸。沈縫幅3mm。	ミガキ。
41-29	歯縫	SI-19	10層	P-343	31.8		IR. 頂部凹凸。	ミガキ。
41-30	歯縫	SI-19	10層	P-296	29.8		地文調査(IR. 頂部凹凸) 上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。
42- 1	歯縫	SI-19	10層	P-361	242.1	調査	IR. 頂部凹凸。	ミガキ。
42- 2	歯縫	SI-30	塵土	P-39	68.7		X字状隆帯。風化顕著。	II
42- 3	歯縫	SI-30	塵土	P-33	35.4		沈縫による曲筋文間にR. 先端。沈縫幅2mm。	ミガキ。
42- 4	歯縫	SI-30	塵土	P-20	36.1		ミガキ。	III
42- 5	歯縫	SI-30	塵土	P-28	27.7		沈縫による曲筋文間にR. 先端。沈縫幅2mm。	ミガキ。
42- 6	土	SI-19	17層	P-150	183.5		塵面部は突出し、日・鳥・鳥・口等が具形的に表現される。頸部は2ヶ所、上方へ大きくなっている。後頭部にも前方へ突出する部分がある。正面・裏面とも、腹部から胴体下端まで形状工具による刺突文が施される。肩部から腹部、前先・後側の中央部には「貫通刺」があり、割離表記はない。	風化顕著。
42- 7	土	SI-19	12層	S-3	23.9			IV
			10層	P-85	6.7			
42- 8	土	SI-19	12層	P-23	82.1		正面・横面には土壁が付される。柱土壁の下端には沈縫(II) 頂部凹凸が逆S字形に押さえられ、これより上辺は直線(II) 頂部凹凸が直線に下では横筋に押さえられる。裏面:柱土壁にあたる部分に巻き縫の撲毛(II) 頂部凹凸が押さえられる。左右に折り返したU字状の撲毛(II) 頂部凹凸が横に並ぶ。	ミガキ。
45- 1	歯縫	SI-20	伊体・塵土・1層・2層・6層	P-1・2・4・5・6・7・8・9・P-X	1360.0	調査	IR. 頂部凹凸。	ミガキ。 底面板ナゲ。
		Tr-2	皿層	P-8・9・10・34・35・36・37・38・39・31・32・33・34・35・36・37・38・39・30				V-4
46- 1	歯縫	SI-21	Pit3 塵土	P-X	20.3		地文調査(IR. 頂部凹凸) 上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。
46- 2	歯縫	SI-21	周溝	P-X	16.0		地文調査(IR. 頂部凹凸) 上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。
46- 3	歯縫	SI-21	表面	P-5	23.0		IR. 頂部凹凸。	ミガキ。
46- 4	歯縫	SI-21	Pit3 塵土	P-X	43.6		口唇上面に見到輪窓文。口縫部、IR. 頂部凹凸。	ミガキ。
46- 5	歯縫	SI-21	塵土	P-34	64.1		地文調査(IR. 頂部凹凸) 上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。
46- 6	歯縫	SI-21	塵土	P-7	19.6		IR. 頂部凹凸。	ミガキ。
46- 7	歯縫	SI-21	塵土	P-22	36.1		口唇部凹凸。沈縫による曲筋文。貫通孔あり。	ミガキ。
46- 8	歯縫	SI-21	57号	P-X	39.6		沈縫による曲筋文間にR. 頂部凹凸。沈縫幅3mm。	ミガキ。
46- 9	歯縫	SI-21	塵土	P-19	37.1		ナゲ。	底面板ナゲ。
49- 1	歯縫	SI-22	塵土	P-37・39・40・50・52	138.7		沈縫による曲筋文。風化顕著。	風化顕著。
49- 2	歯縫	SI-22	Pit1 塵土	P-1・2・4・5・6・7	125.7		IR. 頂部凹凸。風化顕著。	ミガキ。
49- 3	歯縫	SI-22	1層・塵土	P-23・60・103	209.0	調査	三角形を基本とする網の内に、沈縫による曲筋文。沈縫	ミガキ。
49- 4	歯縫	SI-22	塵土・1層	P-12	82.5		による区画内にR. 先端。沈縫幅4mm。	ミガキ。
49- 5	歯縫	SI-22	1層	P-67	21.6		沈縫による曲筋文。沈縫幅3mm。	ミガキ。

(土器・土偶・土製品 No. 7)

固封	種別	遺物名	出土層位	注記	重量(g)	調	外面文様	内面調整等	胎土	備考	分類
49- 6	歯縫	SI-22	I層	P-98	15.8	沈縫による曲面文。LR 縦目施文。沈縫幅3.5mm。	ミガキ。				IV
49- 7	歯縫	SI-22	櫻土	P-47	170.4	LR 縦目施文。	ミガキ。				V
49- 8	歯縫	SI-22	櫻土	P-288	26.2	調文地文(BL 縦目施文)上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。				IV
49- 9	歯縫	SI-22	櫻土	P-23・24	172.5	調文地文(BL 縦目施文)上に沈縫による曲面文。正面形、正面複方形の低い突起が付される。口唇部には虹文が側面に印加施文される。風化調査。	ミガキ。				II-1c
49-10	歯縫	SI-22	櫻土	P-X	30.0	調文地文(BL 縦目施文)上に沈縫による曲面文。沈縫幅3mm。	ミガキ。				IV-4a
49-11	歯縫	SI-22	櫻土	P-X	23.1	調文地文(BL 縦目施文)上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。				IV
49-12	歯縫	SI-22	櫻土	P-X	187.0	LR 縦目施文。	ミガキ。				V
51- 1	歯縫	SI-23	仰体		340.0	SL 縦目施文(BL 縦目施文)上に沈縫幅3mm。	ミガキ。				II
51- 2	歯縫	SI-23	仰覆土	P-X	74.0	風化調査。	ミガキ。				III
51- 3	歯縫	SI-23	2層	P-X	47.1	口唇部、底状施文。隆帶上に施文。口唇部は口唇部と底状施文。	ミガキ。				II-2
51- 4	歯縫	SI-23	I層	P-X	33.3	口唇部、底状施文。隆帶上、R側面正直。	ミガキ。				II-2
51- 5	歯縫	SI-23	2層	P-X	14.5	調文地文(BL 縦目施文)上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。				IV
51- 6	歯縫	SI-23	2層	P-X	17.0	LR 縦目施文。その後、曲線的な文様の隆帶が付けられる。	ミガキ。				II-3b
51- 7	歯縫	SI-23	I層	P-X	29.7	隆帶上に施文。口唇面正直。	ミガキ。				II-2
51- 8	歯縫	SI-23	I層	P-X	33.7	隆帶上に施文(口唇面正直)。隆帶間に角棒状の工具による刺突文が施される。	ミガキ。				II-2
51- 9	歯縫	SI-23	I層	P-X	277.6	調文地文(BL 縦目施文)上に沈縫文。沈縫幅3mm。	ミガキ。				II-2
51-10	歯縫	SI-23	I層	P-X	169.7	大形の半状突起が付される。口唇部には隆帶で直角的な文様を書き、隆帶上には施文。口唇部は口唇部と底状施文。	ミガキ。				II-2
51-11	歯縫	SI-23	I層	P-X	95.8	調文地文から半状の隆帶が垂する。表裏下と、対応する裏面に口唇の施文が付けられる。風化調査。	ミガキ。				IV-1
51-12	歯縫	SI-23	I層	P-X	69.4	LR 縦目施文。	ミガキ。				V
51-13	歯縫	SI-23	I層	P-X	22.7	口唇部、底状(口唇面正直)。調査。0段多孔LR 縦目施文。	ミガキ。				II
51-14	歯縫	SI-23	I層	P-X	9.3	隆帶上に施文(口唇面正直)。隆帶間に角棒状の工具による刺突文が施される。	ミガキ。				II-2
51-15	歯縫	SI-23	I層	P-X	66.5	粘土帯の剥離面が観察できる。	ナゲ。				II-2
57- 1	歯縫	S I-26	櫻土・2層	P-1・P-2	2180.0	粘土帯の剥離面が観察できる。	ナゲ。				V-2
			伊C	P-3			ミガキ				
			SI-26伊B	P-3							
57- 2	歯縫	S I-26	仰体	P-X	1060.0	露部。断面三角形。文様の露部2号。露部の露部4号。	ミガキ。内面に削除				IV-4a
			伊D				半削。調査。調文地文(BL 縦目施文)上に沈縫文によく似た曲面文。沈縫は平面形ない。沈縫幅5mm。				
59- 1	歯縫	S I-28	仰体	P-6	600.0	LR 縦目施文。	風化調査。				V-5
			伊F				露部露部4号。本層				
59- 2	歯縫	S I-28	伊2層	P-X	56.4	LR 縦目施文。	風化調査。				V
59- 3	歯縫	S I-28	伊1層	P-3	12.5	LR 縦目施文。	風化調査。				V
59- 4	歯縫	S I-28	伊櫻土	P-11	12.5	LR 縦目施文。	ミガキ。				V
61- 1	歯縫	S I-29	櫻土・3層+	P-X・P-10・12・13・14・15・16・17・32・33・34	680.0	調文地文(BL 縦目施文)上に沈縫文による波頭文などの文様。沈縫幅2mm。	ミガキ。				III
61- 2	歯縫	S I-29	I層	P-35	26.4	露部。断面三角形。文様の露部2号。露部の露部4号。	ナゲ。				V
61- 3	歯縫	S I-29	I層	P-X	8.3	LR 縦目施文。	ミガキ。				V
61- 4	歯縫	S I-29	櫻土	P-20	50.1	LR 縦目施文。	風化調査。				V
61- 5	歯縫	S I-29	櫻土	P-2	24.6	LR 縦目施文。	ミガキ。やや風化。				III
61- 6	歯縫	S I-29	櫻土	P-9	43.4	露部上に施文(口唇面正直)。露部間に角棒状の工具による刺突文が施される。	ミガキ。				II-2
61- 7	歯縫	S I-29	櫻土	P-5	28.8	LR 縦目施文。	ナゲ。				V
61- 8	歯縫	S I-29	カクラン	P-23	214.5	LR 終末第1種横目施文。	ミガキ。				II
61- 9	歯縫	S I-29	櫻土	P-9	16.2	LR 縦目施文。	ミガキ。				V
61-10	歯縫	S I-29	櫻土	P-7・8・11	492.7	0段多孔LR 縦目施文。	ミガキ。				V
62- 1	歯縫	S I-31	櫻土	P-37	115.3	LR 縦目施文。	下端、ナゲ。	ナゲ。			V
							底面板ナゲ。				

(土器・土偶・土製品 No. 8)

箇番	種別	遺構名	出土層位	注記	重量(g)	調	外面文様	内面調整等	胎土	備考	分類
62- 2	歯縫	S1-31	層土	P-14	25.8	LR 縦位回転。	ミガキ。		V		
62- 3	歯縫	S1-31	層土	P-25	36.5	尤麻縫に単輪縫各2条 (LR)。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV		
62- 4	歯縫	S1-31	層土	P-5	64.4	LR 縦位回転。	ミガキ。		V		
62- 5	歯縫	S1-31	層土	P-27	10.5	単輪縫各1条 (R) 縦位回転。	ミガキ。		V-9		
62- 6	歯縫	S1-31	層土	P-18	7.8	尤麻縫による曲線文と LR 回転文。沈縫幅 2mm。	ミガキ。		IV		
62- 7	歯縫	S1-32	層土	P-20・21・30・31・41・45・46・53	221.5	LR 縦位・斜位回転。	ミガキ。		V		
63- 1	歯縫	S1-33	層土	P-10・47	41.0	RL 縦位回転。	ミガキ。		V		
63- 2	歯縫	S1-33	層土	P-4	15.6	口縫部、熱糞 (L) 側面圧痕。脛部、低平な隆筋。胴部、羽状縫文結束第3種横位回転。	ミガキ。		I		
63- 3	歯縫	S1-33	層土	P-23	24.1	口縫部、LR 側面圧痕。脛部、低平な隆筋。	ミガキ。		I		
63- 4	歯縫	S1-33	層土	P-1	38.7	LR 橫位回転後、曲線的な蓋文の産物を貼り付ける。	ミガキ。		II-3b		
63- 5	歯縫	S1-33	層土	P-48	37.4	尤麻縫による曲線文と LR 回転文。沈縫幅 2mm。	ミガキ。		III		
63- 6	歯縫	S1-33	層土	P-11	30.5	尤麻縫による曲線文と LR 烈痕。沈縫幅 2mm。	ミガキ。		III		
63- 7	歯縫	S1-33	層土	P-14	22.7	尤麻縫による曲線文と LR 回転文。沈縫幅 2mm。ミガキ。			IV-4a		
66- 1	土偶	S1-35-17	12 層	P-1・3・4・8	228.3	重 口縫部、ヨコナデ。胴部、ケズリ。	ロ縫部ヨコナデ。胴部ナデ。				
66- 2	土偶	S1-35-17	12 層・10 層	P-2・5・6・10	154.4	重 口縫部、ヨコナデ。胴部、ケズリ。	ロ縫部ヨコナデ。胴部ナデ。				
66- 3	土偶	S1-35-17	12 層	P-9	598.6	ヘラナデ。中空。					
67- 1	歯縫	S1-36	層土・1 層	P-4・15・56	214.5	口縫部上・口縫部下、LR 橫位回転。ロ縫部、調文地。風化剥離。			67-1 ~ 6、同	IV-4a	
67- 2	歯縫	S1-36	層土・1 层	P-54	88.3	文 (R) 縦位回転) 上に沈縫による曲線文。沈縫幅 5mm。				一體体。	
67- 3	歯縫	S1-36	層土・1 层	P-X	53.1						
67- 4	歯縫	S1-36	層土	P-11	24.1						
67- 5	歯縫	S1-36	1 層	P-46	29.7						
67- 6	歯縫	S1-36	層土・1 层	P-47	105.5						
67- 7	歯縫	S1-36	1 层	P-65	14.1	尤麻縫による曲線文と LR 回転文。沈縫幅 2mm。	ミガキ。			IV	
67- 8	歯縫	S1-36	層土	P-5	28.8	RL 縦位回転。	ミガキ。		V		
67- 9	歯縫	S1-36	層土	P-7	13.8	単輪縫各1条 (R) 縦位回転。	ミガキ。		V		
67-10	歯縫	S1-36	層土	P-9	29.9	LR 縦位回転。	ミガキ。		V		
67-11	歯縫	S1-36	層土	P-72	17.8	尤麻縫による曲線文と LR 回転文。沈縫幅 2mm。	ミガキ。		III		
68- 1	歯縫	SK-7	5 層	P-X	12.6	後脛上熱糞 (R) 側面圧痕。	ミガキ。			II-3	
68- 2	歯縫	SK-8	6 層	P-X	6.7	LR 縦位回転。	ミガキ。			III	
68- 3	歯縫	SK-8	4 层	P-X	9.5	羽状縫文結束第3種横位回転。	ミガキ。			II	
69- 1	歯縫	SK-10	1 层	P-X	6.8	ロ縫部、折り返し口縫。	ミガキ。			IV	
69- 2	歯縫	SK-10	1 层	P-X	8.7	尤麻縫による曲線文。沈縫幅 2mm。	ミガキ。			IV	
70- 1	歯縫	SK-11	5 层	P-X	54.2	ロ縫部熱糞 (R) 側面圧痕。脣部、風化剥離。	風化剥離。			I	
70- 2	歯縫	SK-11	3 层	P-X	27.8	羽状縫文結束第3種横位回転。	ミガキ。			I	
70- 3	歯縫	SK-11	3 层	P-X	30.1	RL 縦位回転。	ミガキ。			I	
70- 4	歯縫	SK-11	1 层	P-X	93.4	LR 縦位回転。	ナデ。			I	
70- 5	歯縫	SK-11	1 层	P-X	26.2	RL 縦位回転。	ミガキ。			I	
70- 6	歯縫	SK-11	1 层	P-X	14.9	単輪縫各1条 (R) 縦位回転。	ミガキ。			I	
71- 1	歯縫	SK-12	1 层	P-X	92.0	羽状縫文結束第3種横位回転。	ミガキ。			II	
72- 1	歯縫	SK-14	1 层	P-X	25.6	地文調文 (R) 縦位回転) 上に尤麻縫による三角形区画文と曲線文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。			IV-6	
72- 2	歯縫	SK-14	1 层	P-X	181.5	調文 二本一組の沈縫による三角形区画文。沈縫間に充填。脣部下半 RL 縦位回転。	ミガキ。			IV-6	
72- 3	歯縫	SK-14	1 层	P-X	33.2	RL 縦位回転。	ミガキ。			V	
72- 4	歯縫	SK-14	1 层	P-X	7.9	尤麻縫による曲線文と LR 回転文。	ミガキ。			V	
72- 5	歯縫	SK-14	1 层	P-X	16.5	LR 縦位回転。	ミガキ。			V	
72- 6	歯縫	SK-14	1 层	P-X	26.4	台脚と脣部の境界に1条の隆筋が貼り付けられる。ナデ。	ナデ。			II-12	
72- 7	歯縫	SK-14	1 层	P-X	84.7		ミガキ。			V	
72- 8	歯縫	SK-14	1 层	P-X	36.3	LR 縦位回転。	ミガキ。			V	
72- 9	歯縫	SK-14	1 层	P-X	51.9	単輪縫各1条 (R) 縦位回転。	ナデ。			V	
73- 1	歯縫	SK-15	4 层	P-X	8.8	羽状縫文結束第3種横位回転。	ミガキ。			I	
73- 2	歯縫	SK-15	3a 层	P-X	23.1	単輪縫各1条 (R) 縦位回転。	ミガキ。			I	
73- 3	歯縫	SK-15	3a 层	P-X	9.7	単輪縫各1条 (R) 縦位回転。	ミガキ。			I	
73- 4	歯縫	SK-15	2a 层	P-X	14.1	単輪縫各1条 (R) 縦位回転。	ミガキ。			I	

(土器・土偶・土製品 No. 9)

測斜	種別	遺物名	出土層位	注記	重量(g)	記号	外面文様	内面調整等	勘上	備考	分類
T3- 5	歯縫	SK-15	2b 層	P-X	8.3		単輪鉗条体 (LR) 側面倒転。	ミガキ。	翻訳。		I
T3- 6	歯縫	SK-15	1 層	P-X	10.2		羽状彌文結束第 1 種側面倒転。	風化調査。	翻訳。		I
T3- 7	歯縫	SK-15	2a 層	P-X	18.5		口縫部、撫手 (LR) 側面圧痕。胴部、単輪鉗条体 (D) 側面倒転。	ミガキ。	翻訳。		I
74- 1	歯縫	SK-16	1 层	P-X	39.1		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
75- 1	歯縫	SK-17	5 層	P-X	13.7		ミガキ。				IV-6
75- 2	歯縫	SK-17	3 層	P-X	16.2		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
75- 3	歯縫	SK-17	1 層	P-X	120.4		ナデ。			羽状彌文 (LR) 側面倒転。	V
75- 4	歯縫	SK-17	3 層	P-X	26.4		ミガキ? 風化調査。	ミガキ。			IV-6
75- 5	歯縫	SK-17	5 層	P-X	25.1		LR 側面倒転。絞筋輪軸文 (LR) 側面倒転。	ミガキ。			V
75- 9	歯縫	SK-18	4 層	P-X	27.2		平行沈線と曲文。沈縫幅 4mm。	風化調査。			IV-4c
75-10	歯縫	SK-18	3 層	P-X	77.2		撫手 (LR) 側面圧痕による平行縫と弧彌文。	ミガキ。			IV-3
75-11	歯縫	SK-18	5 層	P-X	68.4		LR 側面倒転。	ミガキ? 風化調査。			V
75-12	歯縫	SK-18	4 层	P-X	39.7		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
75-13	歯縫	SK-18	2 層	P-X	60.2		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
75-14	歯縫	SK-18	2 層	P-X	41.8		LR 側面倒転。下端、ナデ。	ミガキ。			V
76- 1	歯縫	SK-19	1 層・3層・5層	P-X	119.1		ミガキ。	ミガキ。			IV-6
76- 2	歯縫	SK-19	1 层	P-X	36.7		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
76- 1	歯縫	SK-21	1 層・25 層	P-X	44.7		口縫部、無文。胴部、腰部の沈縫による帯状区画内に LR 施用。	ミガキ。			IV-7
78- 2	歯縫	SK-21	14 层	P-X	32.3		羽状彌文結束第 1 種側面倒転。風化調査。	ミガキ。			II
78- 3	歯縫	SK-21	10 层・12 层	P-X	130.2		羽状彌文結束第 1 種側面倒転。風化調査。	ナデ。			V
78- 4	歯縫	SK-21	11 层	P-X	32.8		羽状彌文結束第 1 種側面倒転。風化調査。	ミガキ? 風化調査。			V
78- 5	歯縫	SK-21	10 层	P-X	27.9		口縫部下二条の沈縫。LR 側面倒転。	ミガキ。			IV
78- 6	歯縫	SK-21	10 层	P-X	33.6		地文彌文 (LR 側面倒転) 上に沈縫による曲文。沈縫幅 2mm。	ミガキ。			III
78- 7	歯縫	SK-21	1 层	P-X	98.8		地文彌文 (LR 側面倒転) 上に沈縫文。沈縫幅 2mm。	ミガキ。			III
78- 8	歯縫	SK-21	1 层・18・19・18・19・18・19	P-X	2680.0		口縫部・脛部、無文。胴部、LR 側面倒転。	ミガキ。			IV-3
		SK-19	2 层	P-X							
78- 9	歯縫	SK-21	10 层	P-X	43.3		脊状突起上に魚鱗的な落書き付け。脇部上端 (L) 侧面三痕。落書きに L+R+L 三本の捺条側面压痕。	ミガキ。			II-2a
78-10	歯縫	SK-21	1 层	P-X	242.7		ナデ。			羽状彌文 (LR) 側面倒転。	V
78-11	歯縫	SK-21	1 层	P-X	39.2		ナデ。	ミガキ? 腹部			
78-12	歯縫	SK-21	9 层	P-X	21.7		彌文地文 (LR 側面倒転) 上に沈縫文。	ミガキ。			V
78-13	歯縫	SK-21	カクラン	P-X	54.2		ナデ。	風化調査。		羽状彌文 (LR) 側面倒転。	V
78-14	歯縫	SK-21	1 层	P-X	27.9		羽状彌文結束第 1 種側面倒転。波状落書き付け。	風化調査。			II-2
78-15	歯縫	SK-21	1 层	P-X	34.7		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
78-16	歯縫	SK-21	1 层	P-X	31.1		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
78-17	歯縫	SK-21	腰土・9 层	P-X	329.5		LR 側面倒転。	ナデ。	羽状彌文 (LR) 側面倒転。	V	
		2b 層									
80- 1	歯縫	SK-23	4 层	P-X	39.9		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
80- 2	歯縫	SK-23	3 层	P-X	33.1		口縫部・LR 側面倒転。	ミガキ。			V
80- 3	歯縫	SK-23	1 层・2 层	P-X	20.6		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
80- 4	歯縫	SK-23	2 层	P-X	22.9		沈縫による曲文。沈縫幅 3mm。	ミガキ。			IV-4c
80- 5	歯縫	SK-23	2 层	P-X	12.5		撫手 (LR) 側面圧痕と RL 側面倒転。	ミガキ。			V
80- 6	歯縫	SK-23	1 层	P-X	27.3		LR 側面倒転。	ミガキ。			V
80- 7	歯縫	SK-23	1 层	P-X	17.1		撫手 (LR) 側面圧痕による幾何学文。	ミガキ。			I
80- 8	歯縫	SK-23	1 层	P-X	31.7		三条一組の落書きによる曲文。	風化調査。			IV-1
80- 9	歯縫	SK-23	腰土	P-X	21.8		口縫部、LR 側面倒転。下端に平行沈縫。	ミガキ。			V
80-10	歯縫	SK-23	腰土	P-X	35.3		LR 側面倒転。	ナデ。			V
80-11	歯縫	SK-23	腰土	P-X	50.9		撫手 (R) 側面圧痕による彌文。	ミガキ。			IV-3
80-12	歯縫	SK-23	腰土	P-X	63.7		口縫部、波状落書き付け。口縫部、曲線的落書き間に竹管状工具による爪形彌文。麻布上に撫手 (R) 側面圧痕。	ミガキ。			II-2
80-13	歯縫	SK-23	腰土	P-X	82.5		LR (末端結び) 側面倒転。	ミガキ。			V
80-14	歯縫	SK-24	5 层	P-X	71.9		ナデ。	ナデ。		毛刷代用。	V

(土器・土偶・土製品 No. 10)

順位	種別	遺物名	出土層位	注記	重量(g)	記号	外面文様	内面調整等	胎土	備考	分類
82-2	歯辻	SX-24	5層	P-X	65.1		口唇下、1.5cm 無文、L 側位回転。	ミガキ。		V	
82-3	歯辻	SX-24	5層	P-X	63.7		地文彫文(UL 側位回転) 上に沈文。沈縫幅 2mm。	ミガキ。		III	
82-4	歯辻	SX-24	5層	P-X	31.8		LR 側位回転。	ミガキ。		V	
82-5	歯辻	SX-24	覆土・3層	P-X	87.7		ナデ。	ナデ。		V	
82-6	歯辻	SX-24	覆土	P-X	157.7		LR 側位回転。	ミガキ。	胎面凹り様々。棒状孔。	V	
82-7	歯辻	SX-24	タグソ	P-X	61.7		ナデ。	ミガキ。		V	
82-8	土偶	SX-24	タグソ	P-X	24.8		胸部に粘土瘤が付される。正面・裏面とも棒状工具による刺し文が施されるが、側面にはない。				
84-1	歯辻	SX-1		P-1	115.6		LR 側位回転。	ミガキ。	底面再調整。	V	
84-2	歯辻	SX-2			133.5		多軸筋条件範囲回転。	ミガキ。		I	
84-3	歯辻	SX-3		P-1 ~ 30	441.8		沈縫による曲線的な入り組み文。赤色墨彩の痕跡有り。	ミガキ。	焼付低温 性ヒビ。刃口に凹凸痕跡。	VI	
84-4	歯辻	SX-5	■層		167.9		沈縫による曲線文。蓋部・身部とも絞掛け突起が付される。	ナデ。	焼付低温 性ヒビ。刃口に凹凸痕跡。	VI	
84-5	歯辻	SX-6	上層・■層		1100.0		口縫部、LR 側位回転。	ミガキ。	■	I	
84-6	歯辻	SX-8	埋設土器	本体・P-1・4・5・6・7	840.0		口縫部、LR 橫位回転。ロ縫部・胸部、羽状縫。	ミガキ。		II-4	
S1-10			床下	P-X			文結束末 1 種種位回転。				
S1-10			覆土	P-600・622・674・636・684・687							
84-7	歯辻	SX-9	1層・2層・3層	P-1・2・3・4・5・6・7・8・9	4360.0		光端吹灰により文様が施される。口縫部に沈縫による方形の区域が施される。側面には長円形文と、円形容文の中央から左右に伸びる波状文が施される。	ミガキ。	底面板ナデ。	IV-5	
			SI-13周縁	P-X							
86-1	歯辻	SX-2周①	■層	P-114・132・133・135・156・157	689.1		ロ縫部、折り返し口縫、胸部、L 側位回転。	ミガキ。		V	
87-1	歯辻	SX-2周②	■層	P-259	19.6		沈縫と LR 回転施文。沈縫幅 3mm。			IV	
87-2	歯辻	SX-2周②	■層	P-171	41.6		沈縫による曲線文と RL 回転施文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV-4a	
87-3	歯辻	SX-2周②	■層	P-260	18.6		沈縫による曲線文と RL 回転施文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV	
87-4	歯辻	SX-2周②	■層	P-67・148	33.6		沈縫による曲線文と RL 回転施文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV	
87-5	歯辻	SX-2周②	■層	P-110・111・167	42.9		沈縫による曲線文と LR 先端施文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV	
87-6	歯辻	SX-2周②	■層	P-65	21.1		沈縫による曲線文と LR 先端施文。沈縫幅 5mm。	ミガキ。		IV	
87-7	歯辻	SX-2周②	■層	P-43・138	30.2		口縫部、標系 (LR) 側面直底による平行施文。	ミガキ。	SF-9と同一個体? IV-3		
							胸部、LR 側位回転。				
87-8	歯辻	SX-2周②	■層	P-39・144	20.6		口縫部、標系 (LR) 側面直底による平行施文。	ミガキ。	SF-7と同一個体? IV-3		
							胸部、LR 側位回転。				
87-9	歯辻	SX-2周②	■層	P-47	16.9		標系 (L) 側面直底による横文。	ミガキ。		IV-3	
87-10	歯辻	SX-2周②	■層	P-32・37・136・196	69.8		口縫部下 5cm、L 橫位回転。以下、縱位回転。	ミガキ。		V	
87-11	歯辻	SX-2周②	■層	P-108・176・192	140.7		LR 側位回転。	ミガキ。		V	
87-12	歯辻	SX-2周②	■層	P-33	48		LR 側位回転。	ミガキ。		V	
87-13	歯辻	SX-2周②	■層	P-83・170・171	28.5		LR 側位回転。	ミガキ。		V	
87-14	歯辻	SX-2周②	■層	P-87	76		LR 側位回転。	ミガキ。		V	
87-15	歯辻	SX-2周②	■層	P-172	43.5		LR 側位回転。	ミガキ。		V	
87-16	歯辻	SX-2周②	■層	P-3・4・24	98.9		LR 側位回転。下端、ナデ。	ナデ。		V	
87-17	歯辻	SX-2周②	■層	P-50	26.7		LR 側位回転。	ミガキ。		V	
87-18	歯辻	SX-2周②	■層	P-54・55・57・137・146	135.6		LR 側面～縱位回転。下端、ナデ。	ナデ。	底面板ナデ。	V	
87-19	歯辻	SX-2周②	■層	P-134	87.1		ナデ。	ナデ。	底面板ナデ。	V	
87-20	歯辻	SX-2周②	■層	P-295	36.6		口縫部、標系 (LR) 側面直底による C 字状文。	ミガキ。		II-2	
							脇部、陰帯上。(LR 側面直底)。				
87-21	歯辻	SX-2周②	■層	P-298	113.3		口縫部、L・R 二本一筋の筋条側面直底による平行施文。胸部、LR 橫位回転。	ミガキ。	■	I	
88-6	歯辻	SX-3	覆土	P-X	39.9		口縫部、無文、底版、棒状工具による刺し文。	ミガキ。		VI	
88-7	歯辻	SX-3	覆土	P-X	45.5		平行施文、幅 3.5mm。	ミガキ。		VI	
88-8	歯辻	SX-3	覆土	P-X	14.2		地文彫文 (XL 側位回転) 上に沈縫による曲線文。幅 5mm。			VI	
88-9	歯辻	SX-3	覆土	P-X	41.9		沈縫による曲線モチーフ内に LR 回転施文。	ミガキ。		VI	
90-1	歯辻	SX-5	6層・1層	P-X	161.4		LR 側位回転。	ミガキ。	底面吹灰直口縫 (1本目)。	V-3	
90-2	歯辻	SX-5	6層	P-X	109.8				(1本目) 起きり		
91-1	歯辻	SX-6	1層	P-X	31.4		地文彫文 (BL 側位回転) 上に沈縫文。	ミガキ。		III	
91-2	歯辻	SX-6	覆土	P-X	68.0		地文彫文 (BL 側位回転) 上に沈縫文。	ミガキ。		III	
91-3	歯辻	SX-6	覆土	P-X	41.0		地文彫文 (BL 側位回転) 上に沈縫文。	ミガキ。		III	
91-4	歯辻	SX-6	4層	P-X	6.7		沈縫文。赤色墨彩による地文痕跡有り。	ミガキ。		IV	

(土器・土偶・土製品 No. 11)

測符	種別	遺跡名	出土層位	注記	重量(g)	記号	外面文様	内面調整等	船上	備考	分類
91- 5	歯縫	SX- 6	7層	P-X	22.0		口唇部下1cm 無文。以下、R1. 縦位回転。	ミガキ。			V
91- 6	歯縫	SX- 6	1層	P-X	25.4	壹	ミガキ後、沈縫による縦位文を施文。沈縫幅2mm。	ミガキ。			IV-6
91- 7	歯縫	SX- 6	1層	P-X	31.6		R1.縦位回転。	ミガキ。			III
91- 8	歯縫	SX- 5	1層・3層	P-X	539.6	脚	R1.側空彫刻。	風化箇所。			V-5
		SX- 6	1層	P-X							
91- 9	歯縫	SX- 6	1層	P-X	38.2		地文調文(0.6.縦位回転)上に凸縦文。	ミガキ。			III
91-10	歯縫	SX- 6	1層	P-X	76.0		沈縫による凸縦文内に丸打痕。	ミガキ。			V
91-11	歯縫	SX- 6	1層・10層	P-X	94.8	脚	脚間に1条の横帯、側縫 R. 橫位回転。				IV-1
91-12	歯縫	SX- 6	4層	P-X	20.8		地文調文(底縫)縦位回転。表文の縦書きを轴り付けた。	ミガキ。			II-3b
93- 1	歯縫	遺物集中	■	P-9・18・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47・48・49	239.4	脚	口唇部下2条の縦文。底縫頂上に凹縫。または溝書きを施す隆脊。脛部に2條の隆脊。脛部は表書きが施される。脚部、竹管骨工具による短位彫が施される。	ミガキ。			IV-1
93- 2	歯縫	遺物集中	■	P-8・11	36.1		口縫部、R1.側面圧痕による2条の平行縦文。1条はミガキでつぶされている。	ミガキ。			IV-2
93- 3	歯縫	遺物集中	■	P-152・189	34.8		口唇部切欠。口唇部上面にR1.側面縦文。口唇部直下に幅4mmの沈縫。	ミガキ。			IV-2
93- 4	歯縫	遺物集中	■	P-92	9.6		調文調文(底縫)縦位回転上に脚打工具による横突穴。	ミガキ。			III
93- 5	歯縫	遺物集中	■	P-23・29	44.2		凸縫による凸縦文。沈縫幅5mm。	ミガキ。			IV-4c
93- 6	歯縫	遺物集中	■	P-300	13.5		調文調文(底縫)縦位回転上に棒状工具による側突穴。	ミガキ。			III
93- 7	歯縫	遺物集中	■	P-334・357・385	28.7	壹	ミガキ。赤色顔料による塗影模様。	ミガキ。赤色顔料による塗影模様。			IV-6
93- 8	歯縫	遺物集中	■	P-97・101・107・127・130・131	95.4	壹	ミガキ。赤色顔料による塗影模様。	ミガキ。			IV-6
93- 9	歯縫	遺物集中	■	P-110・301	61.9	壹	ミガキ。赤色顔料による塗影模様。	ミガキ。			IV-6
93-10	歯縫	遺物集中	■	P-10・136	7.7		口唇部直下、然舟 R.側面圧痕。	ミガキ。			IV
93-11	歯縫	遺物集中	■	P-49	16.1		断面三角形の隆脊上、回転調文。	ミガキ。			IV-1
93-12	歯縫	遺物集中	■	P-346	89.8		R1.縦位回転。	ミガキ。			V
93-13	歯縫	遺物集中	■	P-287・288	51.0		R1.縦位回転。	ミガキ。			V
93-14	歯縫	遺物集中	■	P-318	21.9		柱頭回転文。	ミガキ。			IV
93-15	歯縫	遺物集中	■	P-347	24.2		R1.縦位回転。	ミガキ。			V
93-16	歯縫	遺物集中	■	P-64・284・311	479.2		R1.縦位回転下端。ナデ。	ナデ。			V
93-17	歯縫	遺物集中	■	P-200	118.1		R1.縦位回転。	ナデ。		集脣圧板	V
93-18	歯縫	遺物集中	■	P-87	94.5		ナデ。	ナデ。		表面削り目(本筋 丸1mm程り1本筋)。	
93-19	歯縫	遺物集中	■	P-66	81.5		R1.縦位回転。	ナデ。		表面削り目(本筋 丸1mm程り1本筋)。	V
93-20	歯縫	遺物集中	■	P-271	49.0		口縫部、撫糸(L)側面圧痕によるC字状文。 脣部、隆脊上、R1.側面圧痕。	ミガキ。			II-2
93-21	歯縫	遺物集中	■	P-21	77.1		口縫部、波状隆脊貼り付け。隆脊上に撫糸(L) 側面圧痕。	ミガキ。			II-2

表4 器種・遺構別出土石器數一覽

表5 遺構別剥片出土重量

遺構名	重量(g)	遺構名	重量(g)	遺構名	重量(g)	遺構名	重量(g)
SI- 5	131.4	SI-22	3539.0	SK- 9	20.2	SX-01	2381.3
SI- 6	2065.6	SI-23	8564.2	SK-10	46.4	SX-02	1180.7
SI- 7	2530.0	SI-24	33.0	SK-11	442.1	SK-03	78.1
SI- 8	1181.5	SI-26	3975.3	SK-14	190.4	SX-04	77.1
SI- 9	3204.5	SI-29	1139.6	SK-15	351.8	SX-05	46.6
SI-10	4969.9	SI-31	748.1	SK-16	233.6	SX-06	230.9
SI-11	2519.7	SI-33	625.5	SK-17	176.4	SR-01	5.5
SI-14	2655.9	SI-35	6.8	SK-18	932.9	遺物集中	5330.2
SI-16	3332.4	SI-36	438.2	SK-20	25.6		
SI-17	589.5	SK- 5	31.7	SK-21	224.3		
SI-19	5259.7	SK- 7	19.1	SK-23	2349.9		
SI-21	10990.0	SK- 8	37.5	SK-24	617.0		

表6 出土石器観察表

※ 備考は前アルカ編参考を参考にした。

(石器 No. 1)

回-番	出土位置	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
8- 1	SI- 6	カクラン	石縫(Ⅲ類)	(26.1)	16.0	7.2	2.7	珪質岩	先端・基部欠損
8- 2	SI- 6	6層	石錐	61.2	39.1	18.7	35.2	珪質岩	
8- 3	SI- 6	7層	石錐	46.4	33.6	17.6	20.1	珪質岩	
8- 4	SI- 6	5層	搔器	71.4	54.8	19.3	63.0	珪質岩	肉眼でも光沢みられる
8- 5	SI- 6	6層	削器(Ⅰ-2類)	57.1	29.5	15.2	21.3	珪質岩	石漠木製品か
8- 6	SI- 6	10層	削器(Ⅱ-4類)	39.2	22.1	7.0	6.0	珪質岩	
8- 7	SI- 6	6層	削器(Ⅱ-7類)	28.2	41.7	9.9	9.2	珪質岩	細衝状加工は整形加工
8- 8	SI- 6	9層	削器(Ⅲ-2類)	41.6	51.9	21.7	45.4	珪質岩	細衝状加工
8- 9	SI- 6	11層	削器(Ⅳ類)	30.6	44.2	18.5	12.8	珪質岩	黒色付着物あり
8-10	SI- 6	6層	削器(Ⅴ類)	39.7	36.6	9.1	8.9	珪質岩	
8-11	SI- 6	5層	尖頭器	32.8	33.7	13.5	9.3	凝灰岩	円盤狀
8-12	SI- 6	5層	石核	38.2	42.3	37.8	65.8	珪質岩	多面体石核
8-13	SI- 6	9層	石核	67.5	88.8	40.6	294.5	珪質岩	多面体石核 織素材
8-14	SI- 6	5層	石核	51.4	71.0	41.0	127.3	珪質岩	円盤状石核 織素材 上面交叉刻離
8-15	SI- 6	覆土	石核	78.7	84.2	48.2	279.1	珪質岩	多面体石核 コーンクラックが上面にみられる
9- 1	SI- 6	5層	石錐	76.0	44.0	36.0	131.0	珪質岩	
9- 2	SI- 6	9層	石錐	94.0	74.0	14.0	115.8	凝灰岩	
9- 3	SI- 6	6層	磨削器(IV類)	108.0	86.0	46.0	362.7	凝灰岩	
9- 4	SI- 6	9層	ハンマー	74.0	51.0	50.0	203.4	珪質岩	
9- 5	SI- 6	9層	ハンマー	72.9	56.3	46.4	217.4	珪質岩	
9- 6	SI- 6	10層	台石	300.0	115.0	101.0	3957.3	粗粒玄武岩	擦痕 磨石か
11-13	SI- 7	16層	石縫(Ⅲ類)	38.5	17.3	7.6	4.7	珪質岩	
11-14	SI- 7	17層	石縫(Ⅲ類)	23.3	10.9	5.3	1.0	珪質岩	
11-15	SI- 7	15層	石錐	70.0	29.5	11.5	16.9	珪質岩	
11-16	SI- 7	15層	石核	28.9	45.9	34.9	38.0	珪質岩	多面体石核 コーンクラックがみられる
11-17	SI- 7	6層	石核	30.9	70.0	32.4	60.2	珪質岩	
11-18	SI- 7	カクラン	石核	35.9	52.0	41.7	78.1	珪質岩	多面体石核
11-19	SI- 7	13層	石核	64.5	107.3	58.6	313.3	珪質岩	多面体石核
11-20	SI- 7	覆土	石核	63.0	43.6	36.9	107.7	珪質岩	石器正面に大きな作業面がみられる
12- 1	SI- 7	17層	磨製石斧	(34.0)	27.0	9.0	8.4	綠色凝灰岩	
12- 2	SI- 7	18層	ハンマー	73.0	61.0	30.0	177.1	珪質岩	
14-14	SI- 8	覆土	石縫(V類)	(26.0)	11.0	6.0	1.3	珪質岩	
14-15	SI- 8	覆土	石縫(VI類)	(29.4)	21.6	7.4	4.0	珪質岩	先端欠
14-16	SI- 8	1層	石錐	46.4	30.8	16.1	13.2	珪質岩	
14-17	SI- 8	覆土	両面加工石器	(64.3)	54.2	18.0	55.0	珪質岩	尖頭器製品か
14-18	SI- 8	床下	削器(II-2類)	60.6	79.5	22.6	84.9	珪質岩	末端ヒンジフラクチャーの横長剥片素材 打面に加工 深い抉り加工 粗製の石底にも見える
15- 1	SI- 8	床下	削器(II-6類)	46.9	73.7	17.7	40.6	珪質岩	
15- 2	SI- 8	床下	削器(III-1類)	76.7	56.0	19.2	74.7	珪質岩	右切削面 左切削方向の押圧剝離 素材打面付近に反方向の押圧剝離があり、ここが刃部と思われる
15- 3	SI- 8	pit6	覆土	30.6	42.9	8.1	8.4	珪質岩	素材末端部に微小剝離痕
15- 4	SI- 8	覆土	石核	49.9	57.9	25.6	90.9	珪質岩	多面体石核
15- 5	SI- 8	覆土	石核	47.8	52.7	39.0	88.8	珪質岩	多面体石核
15- 6	SI- 8	覆土	石核	59.0	79.5	48.9	217.9	珪質岩	多面体石核
18- 1	SI- 9	2層	石縫(IV類)	46.0	48.5	7.5	4.1	珪質岩	
18- 2	SI- 9	覆土	石縫(IV類)	(51.7)	15.4	7.8	4.4	珪質岩	

(石器 No. 2)

図-番	出土位置	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
18- 3	SI- 9	4-c 層	石鏟 (V型)	45.1	14.5	6.9	3.5	珪質頁岩	
18- 4	SI- 9	覆土	尖頭器	(27.0)	21.5	7.5	3.7	珪質頁岩	
18- 5	SI- 9	7層	石腔 (横型)	54.7	63.1	15.2	42.5	珪質頁岩	
18- 6	SI- 9	3層	削器 (I-I型)	74.0	36.1	20.2	48.2	珪質頁岩	石箋木製品か
18- 7	SI- 9	3層	両面加工石器	48.1	32.9	14.7	20.2	珪質頁岩	小形の両面加工石器 右刃二次加工の潰れ顯著
18- 8	SI- 9	5層	両面加工石器	72.9	51.1	17.7	64.0	珪質頁岩	
18- 9	SI- 9	覆土	両面加工石器	80.5	59.7	22.5	88.3	珪質頁岩	尖頭状に加工されている 火ハネ資料
18-10	SI- 9	覆土	翼形石器	35.8	26.1	6.4	3.2	珪質頁岩	釣針形
18-11	SI- 9	4-c 層	石核	66.0	47.5	34.3	93.6	珪質頁岩	円盤状石核
18-12	SI- 9	4-c 層	石核	59.9	81.4	54.9	269.2	珪質頁岩	多面体石核 細長削片を剥離
18-13	SI- 9	3層	石核	80.3	61.5	34.7	141.2	珪質頁岩	
18-14	SI- 9	8層	石核	63.3	91.8	68.3	267.7	珪質頁岩	裏面に縦面大きく残す 梗理面が顯著
19- 1	SI- 9	3層	石核	44.8	50.4	35.1	65.6	珪質頁岩	円盤状石核
19- 2	SI- 9	覆土	石核	71.8	65.1	39.4	199.2	珪質頁岩	円盤状石核 織素材
19- 3	SI- 9	8層	石核	57.6	65.8	36.4	117.9	珪質頁岩	円盤状石核 剥片素材 石器正面にボジ面
19- 4	SI- 9	床面	石核	104.3	98.6	73.4	1008.1	珪質頁岩	多面体石核 縁辺は鷹爪
19- 5	SI- 9	5層	ハンマー	66.0	64.0	44.0	226.5	頁岩	
19- 6	SI- 9	2層	敲削器 (IV型)	116.0	77.0	50.0	730.3	安山岩	
23- 1	SI-10	貼床中	石鏟 (V型)	45.5	12.1	6.2	2.8	珪質頁岩	茎部にアスファルト
23- 2	SI-10	カクラン	石鏟 (V型)	(49.3)	16.6	6.8	4.6	珪質頁岩	茎部にアスファルト 茎部欠
23- 3	SI-10	床下	石鏟 (V型)	33.7	(14.2)	4.9	1.7	珪質頁岩	左迎軌源欠損 アスファルト付着
23- 4	SI-10	貼床中	石鏟 (V型)	(33.6)	15.0	5.4	1.9	珪質頁岩	茎部欠損 アスファルト付着
23- 5	SI-10	4層	石核	36.0	25.5	12.0	6.9	珪質頁岩	
23- 6	SI-10	覆土	石核	55.8	15.2	9.9	4.8	珪質頁岩	
23- 7	SI-10	覆土	石核	40.5	21.5	6.0	3.3	珪質頁岩	
23- 8	SI-10	覆土	石核	30.0	18.5	10.0	2.7	珪質頁岩	
23- 9	SI-10	貼床中	石核	47.2	47.2	16.8	29.3	珪質頁岩	
23-10	SI-10	2層	尖頭器	(29.2)	26.3	10.4	6.2	珪質頁岩	石箋木製品か
23-11	SI-10	貼床中	尖頭器	(33.0)	30.6	9.1	6.4	珪質頁岩	久留前に加工
23-12	SI-10	5層	両面加工石器	58.6	33.0	17.3	26.4	珪質頁岩	小形の両面加工石器
23-13	SI-10	覆土	削器 (I-1類)	41.2	17.3	9.7	6.0	鐵石英	鐵石英と頁岩 石箋木製品か
23-14	SI-10	2層	削器 (I-3類)	42.7	28.4	10.3	11.8	珪質頁岩	右刃折曲
23-15	SI-10	覆土	削器 (I-3類)	57.3	49.3	18.8	66.7	珪質頁岩	
23-16	SI-10	1層	削器 (II-2類)	40.2	28.8	11.5	11.8	珪質頁岩	反方向からの剥離
23-17	SI-10	4層	削器 (II-3類)	(36.1)	25.3	8.6	6.9	珪質頁岩	長軸両端破損
23-18	SI-10	1層	削器 (II-5類)	68.4	74.1	22.6	103.2	珪質頁岩	
23-19	SI-10印	印	削器 (III-2類)	47.8	62.5	20.1	47.1	珪質頁岩	横長剝片素材 末端に反方向からの剥離状加工 左辺に正方向からの剝離状加工
23-20	SI-10	13層	削器 (III-2類)	40.3	72.6	18.3	37.2	珪質頁岩	
23-21	SI-10	5層	両面加工痕 のある剝片	37.3	35.9	13.9	18.4	珪質頁岩	
23-22	SI-10	貼床中	両面加工痕 のある剝片	28.1	17.8	8.4	4.5	珪質頁岩	
24- 1	SI-10	6層	石核	65.2	79.2	44.3	207.8	珪質頁岩	多面体石核
24- 2	SI-10	覆土	石核	45.4	63.6	46.2	126.3	珪質頁岩	多面体石核 織素材
24- 3	SI-10	覆土	石核	42.2	35.8	27.9	62.2	珪質頁岩	多面体石核
24- 4	SI-10	覆土	石核	67.2	65.7	44.6	185.0	珪質頁岩	裏面に縦面大きく残す 梗理面が顯著
24- 5	SI-10	13層	石核	77.1	43.9	29.2	89.3	珪質頁岩	
24- 6	SI-10	覆土	石核	60.9	81.5	56.0	239.3	珪質頁岩	裏面に縦面大きく残す
24- 7	SI-10	床下	石核	73.2	39.6	37.7	104.8	珪質頁岩	紙刺片を剥離 上面にコーンクラック
24- 8	SI-10	カクラン	石核	97.3	55.4	38.4	144.0	珪質頁岩	円盤状石核
24- 9	SI-10	6層	石核	65.6	81.4	35.0	152.3	珪質頁岩	円盤状石核 裏面に縦面を大きく残す 交互剥離に直い線邊を有する
24-10	SI-10	1層	石核	53.8	64.4	45.8	159.4	珪質頁岩	多面体石核
24-11	SI-10	1層	石核	92.6	88.1	49.8	406.0	珪質頁岩	多面体石核
25- 1	SI-10	覆土	石核	72.7	72.3	58.8	284.6	珪質頁岩	多面体石核
25- 2	SI-10	貼床中	打製石斧	111.0	75.0	31.0	285.0	珪質頁岩	
25- 3	SI-10	1層	ハンマー	45.0	102.4	45.8	218.5	珪質頁岩	
25- 4	SI-10	覆土	ハンマー	(54.0)	57.0	42.0	163.6	珪質頁岩	
25-15	SI-11	覆土	石鏟 (V型)	(37.7)	12.4	6.2	2.5	珪質頁岩	先端・茎部欠損
25-16	SI-11	覆土	石鏟 (V型)	(34.8)	15.2	5.0	2.0	珪質頁岩	先端・茎部欠損
25-17	SI-11	覆土	石核	(28.4)	14.7	5.4	2.1	珪質頁岩	有茎錐軸用鉛 茎部欠損

図-番	出土位置	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
28-18	SI-11 pit1	3層	石底(縦型)	42.5	36.5	10.8	10.3	珪質頁岩	
28-19	SI-11	同溝	尖頭器	(36.5)	32.0	10.0	10.0	珪質頁岩	
28-20	SI-11	覆土	掻器	28.2	36.1	14.4	10.8	珪質頁岩	
28-21	SI-11	覆土	両面加工石器	33.7	26.9	9.5	7.9	珪質頁岩	
28-22	SI-11	覆土	削跡(V類)	40.1	31.9	18.3	19.9	珪質頁岩	反方向からの剥離
28-23	SI-11	覆土	削器(III-2類)	59.8	39.6	19.5	67.7	珪質頁岩	鉋擦状加工がみられる
28-24	SI-11 pit3	2層	台石	174.0	124.0	63.0	1969.2	凝灰岩	形状は台石だが原形はつきりしない
33-1	SI-14	覆土	石縫(IV類)	(49.5)	16.0	4.5	3.1	珪質頁岩	
33-2	SI-14	覆土	石縫(IV類)	35.4	14.9	4.4	1.5	珪質頁岩	
33-3	SI-14	覆土	石縫(V類)	29.2	12.9	4.6	1.3	珪質頁岩	
33-4	SI-14	覆土	石縫	(42.3)	17.1	5.2	3.3	珪質頁岩	基部欠損
33-5	SI-14	覆土	石底(縦型)	49.6	39.5	10.6	23.9	珪質頁岩	棒状刃部
33-6	SI-14	覆土	両極加撃痕のある剥片	31.1	26.6	11.2	7.7	珪質頁岩	
33-7	SI-14	覆土	両面加工石器	23.0	21.4	11.3	4.7	珪質頁岩	
33-8	SI-14	3層	石核	71.9	75.0	26.9	171.4	シルト岩	火ハネ顯著
33-9	SI-14	3層	石核	108.2	110.0	93.2	1377.3	珪質頁岩	石核ブランク 硅質頁岩の塊
33-10	SI-14	床下面	石核	73.1	54.8	40.9	139.6	珪質頁岩	右側面に敲打痕跡
33-11	SI-14	覆土	石核	85.5	76.3	36.8	226.9	珪質頁岩	円錐状石核 上面交互剥離
33-12	SI-14	12層	打製石斧	127.0	100.0	34.0	531.4	珪質頁岩	
33-13	SI-14 pit8	性格・用途不明な石製品	(94.0)	(67.0)	114.0	554.8	凝灰岩	用途不明 器体上面下面に十字切込状の溝	
33-14	SI-14 pit8	性格・用途不明な石製品	(165.0)	(96.0)	124.0	1131.1	凝灰岩	用途不明 器体上面下面に十字切込状の溝	
36-1	SI-16	1層	石縫	32.5	36.0	24.0	15.3	珪質頁岩	
36-2	SI-16	1層	石縫	42.3	38.2	15.5	16.5	カバセドニー	
36-3	SI-16	3-a層	石縫	40.3	14.4	5.8	2.2	珪質頁岩	
36-4	SI-16	9層	石縫	35.2	23.9	7.0	4.6	珪質頁岩	右面折取加工の後、後に正面に正の押圧剥離の二次加工
36-5	SI-16	1層	石縫(IV類)	38.3	14.2	8.7	3.2	凝灰質珪質頁岩	
36-6	SI-16	1層	尖頭器	(43.6)	22.8	8.3	5.9	珪質頁岩	あるいは石縫未製品か
36-7	SI-16	1層	尖頭器	62.3	26.6	10.9	13.5	珪質頁岩	小形の両面加工石器 尖頭器未製品か
36-8	SI-16	1層	尖頭器	(27.5)	30.0	8.0	5.3	珪質頁岩	
36-9	SI-16	6層	石縫	59.0	35.0	16.0	26.9	珪質頁岩	
36-10	SI-16	1層	両面加工石器	68.2	28.2	13.1	18.4	珪質頁岩	裏面右辺に光沢みられる
36-11	SI-16	3-a層	両面加工石器	43.6	22.1	12.0	9.2	珪質頁岩	小形の両面加工石器
36-12	SI-16	1層	削器(II-2類)	34.5	21.6	6.1	3.5	珪質頁岩	
36-13	SI-16	5層	削器(II-7類)	59.1	104.3	24.5	94.6	シルト岩	
36-14	SI-16	6層	削器(II-3類)	53.6	57.3	18.4	39.6	珪質頁岩	右辺に微小剥離痕
36-15	SI-16	1層	両極加撃痕のある剥片	36.3	66.3	10.8	16.5	珪質頁岩	
36-16	SI-16	9層	両極加撃痕のある剥片	22.3	17.8	6.7	2.3	珪質頁岩	
36-17	SI-16	1層	石核	80.8	51.7	42.4	107.5	珪質頁岩	多面体石核
36-18	SI-16	1層	石核	88.2	67.3	59.8	307.2	珪質頁岩	多面体石核 滾理の多い石材である
37-1	SI-16	1層	石核	102.1	71.8	39.8	46.0	珪質頁岩	荒削り段階
37-2	SI-16	1層	石核	87.7	59.6	46.4	297.9	珪質頁岩	粗面削れ 崩長剝片を判断する作業面を一面持つ
37-3	SI-16	1層	石核	81.1	102.9	65.8	335.3	珪質頁岩	多面体石核 両極打撃で素材を剥離している
37-4	SI-16	トレンチ 扁平打撃石器	半円状	155.0	80.0	36.0	332.9	デイサイト	
37-5	SI-16	1層	敲磨器(I類)	94.0	73.0	53.0	371.6	流紋岩	
37-6	SI-16	1層	眼磨器(I類)	54.0	49.0	46.0	137.0	凝灰岩	
37-7	SI-16	6層	敲磨器(IV類)	154.0	87.0	34.0	368.3	凝灰岩	
37-8	SI-16	3層	台石	(226.0)	(102.0)	56.0	1550.9	凝灰岩	
39-1	SI-17	覆土	削跡(I-1類)	36.8	19.3	9.1	5.0	珪質頁岩	石縫未製品か
39-2	SI-17	覆土	石核	55.7	62.7	33.8	91.7	珪質頁岩	円錐状石核
39-3	SI-17	覆土	敲磨器(皿類)	(97.0)	66.0	40.0	318.2	安山岩	
39-4	SI-17	5層	敲磨器(IV類)	106.0	91.0	54.5	617.5	凝灰岩	
43-1	SI-19	10層	石縫(I類)	(26.1)	13.5	3.0	0.7	珪質頁岩	
43-2	SI-19	17層	石縫(II類)	16.8	14.9	2.8	0.5	珪質頁岩	アスファルト付着
43-3	SI-19	10 - 17層	石縫(IV類)	29.7	13.8	5.7	1.8	珪質頁岩	石縫未製品
43-4	SI-19	覆土	石縫(V類)	(39.7)	13.9	5.4	2.1	珪質頁岩	先端・基部欠損

(石器 No. 4)

図-番	出土位置	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
43- 5	SI-19	覆土	石錐 (錐類)	28.3	15.2	5.4	1.4	珪質頁岩	
43- 6	SI-19	12層	石錐	(34.5)	40.0	10.0	11.2	珪質頁岩	
43- 7	SI-19	10層	石錐	45.6	12.0	7.9	3.4	珪質頁岩	右側刃磨耗
43- 8	SI-19	12層	石錐	49.5	23.0	11.0	10.3	珪質頁岩	
43- 9	SI-19	piti	両面加工石器	96.8	33.9	12.2	31.9	珪質頁岩	全体を直接打撃で加工し、押圧剥離で両側刃を整形している。尖頭器もしくは尖頭削器と思われる。
43-10	SI-19	覆土	両面加工石器	51.5	19.4	9.1	8.6	珪質頁岩	小形の両面加工石器 尖頭器未製品か
43-11	SI-19	10・17層	尖頭器	(40.5)	31.0	8.0	8.7	珪質頁岩	
43-12	SI-19	覆土	両面加工石器	50.7	25.5	12.5	13.6	珪質頁岩	小形の両面加工石器 尖頭器未製品か
43-13	SI-19	17層	尖頭器	(46.0)	26.4	9.3	10.5	珪質頁岩	欠損
43-14	SI-19	10層	両面加工石器	(44.4)	35.4	15.6	22.9	珪質頁岩	
43-15	SI-19	覆土	削器 (II-1類)	91.8	74.8	15.2	93.1	珪質頁岩	
43-16	SI-19	19層	削器 (II-6類)	47.3	56.5	14.0	23.9	珪質頁岩	
43-17	SI-19	17層	削器 (IV類)	43.5	39.4	15.0	24.6	珪質頁岩	
43-18	SI-19	17層	石核	53.5	42.8	23.3	34.0	珪質頁岩	
43-19	SI-19	3層	石核	65.0	75.4	39.7	128.6	珪質頁岩	多面体石核
43-20	SI-19	12層	石核	91.6	71.8	26.9	176.3	珪質頁岩	円盤状石核
44- 1	SI-19	覆土	石核	57.4	77.4	38.5	127.8	珪質頁岩	円盤状石核 裏面に縦面を大きく残す
44- 2	SI-19	13層	敲削器 (I類)	(71.0)	65.0	55.0	241.9	珪質頁岩	
44- 3	SI-19	17層	敲削器 (I類)	106.0	51.0	20.0	140.5	珪質頁岩	
46-10	SI-21	カクラン	石錐	44.1	43.3	16.8	26.2	珪質頁岩	
46-11	SI-21	周溝	削器 (III-1類)	79.7	37.4	16.5	39.9	珪質頁岩	左刃は正方向と反方向の剥離が場所を進めてある。右刃は反方向の抉り加工
47- 1	SI-21	覆土	削器 (III-2類)	103.8	39.7	46.1	170.3	珪質頁岩	繩素材
47- 2	SI-21	周溝	石核	55.4	41.7	20.5	42.7	珪質頁岩	円盤状石核
49-13	SI-22	覆土	石錐	48.8	18.4	6.5	5.8	珪質頁岩	有茎転用鋸 先端磨耗?
49-14	SI-22	覆土	石錐	31.0	29.0	7.0	3.1	珪質頁岩	
49-15	SI-22	覆土	尖頭器	(37.0)	24.5	10.5	7.7	珪質頁岩	
49-16	SI-22	覆土	両面加工石器	(48.4)	26.9	11.5	13.6	珪質頁岩	小形の両面加工石器
49-17	SI-22	1層	両面加工石器	27.7	26.3	9.2	4.1	珪質頁岩	
49-18	SI-22	覆土	両面加撃痕 のある剥片	36.0	35.0	10.0	11.7	珪質頁岩	
49-19	SI-22	覆土	ハンマー	68.8	72.6	38.2	203.3	珪質頁岩	下刃に戴打痕跡
49-20	SI-22	覆土	打製石斧	142.0	73.0	19.0	252.7	デイサイト	
49-21	SI-22	覆土	敲削器 (IV類)	108.0	68.0	61.0	459.0	デイサイト	
51-16	SI-23	1層	石錐 (IV類)	(38.6)	14.6	7.0	2.9	珪質頁岩	基部欠損
51-17	SI-23	1層	石錐	37.9	16.0	8.8	4.2	珪質頁岩	先端削減 有茎転用鋸
51-18	SI-23	覆土	石錐	(36.4)	12.4	6.8	2.7	珪質頁岩	有茎転用鋸 基部にアスファルト 先端磨耗 基部欠
51-19	SI-23	覆土	石錐	41.7	21.9	10.7	7.1	珪質頁岩	
51-20	SI-23	3層	石錐	64.9	23.6	24.1	22.9	珪質頁岩	
51-21	SI-23	1層	石錐	44.0	47.0	17.5	23.0	珪質頁岩	
51-22	SI-23	1層	石錐	69.8	32.6	18.8	48.0	珪質頁岩	
51-23	SI-23	1層	石錐	76.0	33.0	19.0	42.3	珪質頁岩	
51-24	SI-23	1層	石錐	(62.7)	38.9	18.0	45.4	珪質頁岩	石錐木製品か
52- 1	SI-23	覆土	石錐	(30.0)	25.0	7.0	6.0	珪質頁岩	
52- 2	SI-23	1層	両面加工石器	(85.5)	42.5	23.8	78.9	矽質頁岩	石錐か、刃部欠損
52- 3	SI-23	1層	両面加工石器	(77.9)	45.2	16.5	40.4	珪質頁岩	
52- 4	SI-23	1層	両面加工石器	68.2	21.8	7.3	9.9	珪質頁岩	小形の両面加工石器 尖頭器未製品か
52- 5	SI-23	1層	尖頭器	(26.5)	23.0	7.0	3.6	珪質頁岩	
52- 6	SI-23	1層	尖頭器	(36.0)	34.0	10.0	8.9	珪質頁岩	
52- 7	SI-23	1層	両面加工石器	(62.8)	61.9	19.7	34.1	珪質頁岩	尖頭状に加工
52- 8	SI-23	1層	両面加工石器	53.9	32.6	17.2	22.6	珪質頁岩	未製品か
52- 9	SI-23	1層	両面加工石器	(66.8)	49.0	29.0	93.8	珪質頁岩	繩素材である
52-10	SI-23	1層	両面加工石器	54.8	28.6	12.8	14.5	珪質頁岩	右刃微小剥離痕 反方向の押圧剥離で椎状に整形
52-11	SI-23	覆土	両面加工石器	62.6	59.5	21.0	90.1	珪質頁岩	
52-12	SI-23	3層	削器 (II-7類)	98.5	40.7	31.9	124.8	珪質頁岩	厚手の綫長削片
52-13	SI-23	1層	削器 (III-2類)	27.5	25.8	7.3	4.2	珪質頁岩	
52-14	SI-23	覆土	真形石器	34.8	15.4	5.3	2.1	珪質頁岩	
53- 1	SI-23	覆土	接合資料	49.3	48.3	30.0	48.9	珪質頁岩	接合状態図 (図 53-2 ~ 3)
53- 2	SI-23	覆土	接合資料	44.8	32.8	22.7	29.8	珪質頁岩	素材の1辺に二次加工
53- 3	SI-23	覆土	接合資料	47.5	37.3	17.2	19.1	珪質頁岩	素材の2辺に二次加工
53- 4	SI-23	1層	石核	83.5	53.5	37.7	145.6	多面体石核 分厚い素材を用いでいる	

図-番	出土位置	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
53- 5	SI-23	1層	石核	90.1	74.3	34.0	194.6	珪質頁岩	円盤状石核 縦長剥片を素材とする
53- 6	SI-23	1層	石核	61.6	75.9	46.9	236.3	珪質頁岩	剥離した平坦打面から一枚の作業面を剥離
53- 7	SI-23	1層	石核	34.3	48.1	54.4	96.6	珪質頁岩	
53- 8	SI-23	1層	石核	39.3	41.6	21.4	30.7	珪質頁岩	円盤状石核 裏面にボジ面がみられる
53- 9	SI-23	1層	石核	60.4	36.9	21.8	48.1	珪質頁岩	正面にボジ面がみられる
53-10	SI-23	1層	磨製石斧	(63.0)	54.0	18.0	80.7	綠色顕灰岩	
53-11	SI-23	3層	磨製石斧	160.0	55.0	31.0	373.9	褐色岩	
53-12	SI-23	1層	北海道式石冠	(107.0)	81.0	43.0	567.6	綠色顕灰岩	
54- 1	SI-23	1層	敲磨器(Ⅰ類)	(84.0)	49.0	35.0	198.7	顕灰岩	
54- 2	SI-23	1層	敲磨器(Ⅰ類)	116.0	72.0	49.0	466.1	顕灰岩	
54- 3	SI-23	1層	敲磨器(Ⅳ類)	86.5	70.0	57.0	450.1	顕灰岩	風化による表面劣化が激しい
54- 4	SI-23	1層	ハンマー	75.0	67.0	50.0	295.3	珪質頁岩	
54- 5	SI-23	3層	ハンマー	(138.0)	53.0	63.0	482.3	頁岩	
54- 6	SI-23	1層	ハンマー	66.3	81.5	41.6	277.9	珪質頁岩	上面にタタキの痕跡
54- 7	SI-23	1層	砥石	(52.0)	49.0	13.0	21.0	顕灰岩	
54- 8	SI-23	1層	台石	(101.0)	139.0	35.0	380.7	顕灰岩	擦痕多数
54- 9	SI-23	1層	台石	331.0	(175.0)	104.0	6600.0	顕灰岩	
58- 1	SI-26	2層	石鏃(鍔頭)	46.0	18.4	5.8	3.4	珪質頁岩	
58- 2	SI-26	3-a層	石鏃(鍔頭)	33.2	14.9	5.4	1.7	珪質頁岩	
58- 3	SI-26	2-a層	石鏃(鍔頭)	(31.9)	20.6	8.7	5.9	珪質頁岩	先端・基部欠
58- 4	SI-26	覆土	石錐	36.7	17.4	9.7	4.5	珪質頁岩	
58- 5	SI-26	4層	石錐	39.0	22.0	12.0	7.2	珪質頁岩	
58- 6	SI-26	6層	尖頭器	(40.0)	26.0	8.0	5.7	珪質頁岩	
58- 7	SI-26	9層	削器(Ⅰ-3類)	(66.6)	31.6	8.6	15.1	綠色顕灰岩	かなり薄手の二次加工で整形されている
58- 8	SI-26	6層	両面加工石器	(68.0)	56.0	15.4	37.8	珪質頁岩	
58- 9	SI-26	4層	削器(Ⅱ-7類)	77.6	74.3	19.4	75.4	珪質頁岩	稜上反の押圧剝離
58-10	SI-26	2層	削器(Ⅴ類)	40.2	42.1	11.3	14.3	珪質頁岩	素材末端部に微小剝離板
58-11	SI-26	2層	石核	51.2	57.0	30.9	88.7	珪質頁岩	内眼でも光沢が見られる
58-12	SI-26	カクラン	石核	41.4	43.3	42.7	88.4	珪質頁岩	多面体石核
58-13	SI-26	2層	ハンマー	68.0	51.0	40.0	169.6	珪質頁岩	
61-11	SI-29	カクラン	石核	74.1	76.1	37.0	180.8	珪質頁岩	
61-12	SI-29	カクラン	石核	78.2	44.1	31.8	93.3	珪質頁岩	
61-13	SI-29	カクラン	敲磨器(Ⅰ類)	(104.0)	61.0	26.0	180.1	顕灰岩	
62- 8	SI-31	覆土	石核	91.6	62.6	64.2	386.5	玉髓珪質頁岩	多面体石核 滑理の多い石材である
63- 8	SI-33	覆土	削器(Ⅱ-3類)	73.3	42.7	17.6	48.7	珪質頁岩	左肩で加工異なる 右部先端摩耗
67-12	SI-36	1層	石核	68.9	67.7	62.5	318.4	珪質頁岩	滑理面が顕著 廃棄された
67-13	SI-36	覆土	石核	88.3	68.5	27.6	196.8	珪質頁岩	円盤状石核 裏面に縦面を大きく残す 正面に縦長剥片を剥離した作業面がみられる
68- 4	SK- 7	13層	石核	66.4	81.1	28.3	108.2	珪質頁岩	融石か
72-10	SK-14	1層	尖頭器	(30.3)	23.7	8.9	5.0	珪質頁岩	欠損
72-11	SK-14	1層	両面加工石器	42.7	18.2	12.6	8.6	カルセドニー	小形の両面加工石器 尖頭器未製品か
72-12	SK-14	1層	両面加工石器	81.8	65.8	23.8	132.9	頁岩	
72-13	SK-14	1層	ハンマー	69.0	62.0	41.0	239.1	珪質頁岩	
73- 8	SK-15	2-a層	石底(縦型)	82.8	23.9	11.4	18.8	珪質頁岩	
73- 9	SK-15	2-a層	石核	66.1	62.8	42.5	174.3	珪質頁岩	多面体石核 打面転移顕著 所々に縱長剥片を剥離した作業面がみられる
73-10	SK-15	5層	石核	133.7	84.0	62.2	664.8	珪質頁岩	厚手の縱長剥片 石核ブランクか 背面は縦面
73-11	SK-15	1層	石核	57.0	70.0	42.5	72.9	珪質頁岩	円盤状石核
75- 6	SK-17	3層	尖頭器	(66.5)	20.5	13.3	18.1	顕灰珪質頁岩	基部欠損
75- 7	SK-17	3層	削器(Ⅱ-6類)	51.3	29.7	17.3	22.5	珪質頁岩	
75- 8	SK-17	3層	石核	58.0	78.2	52.5	193.3	珪質頁岩	多面体石核
77- 1	SK-20	2層	石錐	90.2	33.6	13.2	36.1	珪質頁岩	石錐未製品か
79- 1	SK-21	11層	尖頭器	40.5	21.7	8.2	6.7	珪質頁岩	肉眼でも光沢みられる
79- 2	SK-21	9層	敲磨器(Ⅱ類)	127.0	84.0	25.0	263.7	顕灰岩	
79- 3	SK-21	11層	台石	(141.0)	118.0	79.0	1594.3	流紋岩	擦痕あり 全体に被熱
81- 1	SK-23	4層	尖頭器	(36.0)	20.5	9.0	4.7	珪質頁岩	
81- 2	SK-23	覆土	両面加工石器	51.2	26.6	8.2	9.4	珪質頁岩	尖頭器未製品か
81- 3	SK-23	1層	両面加工石器	66.9	37.2	11.5	22.8	珪質頁岩	尖頭器未製品か
81- 4	SK-23	覆土	削器(Ⅱ-7類)	59.8	37.0	16.2	36.5	珪質頁岩	反方向の押圧剝離
81- 5	SK-23	2層	削器(Ⅲ-2類)	32.1	44.1	12.6	13.2	珪質頁岩	
81- 6	SK-23	1層	削器(Ⅴ類)	53.6	25.8	17.9	19.2	珪質頁岩	
81- 7	SK-23	覆土	石核	49.6	52.5	24.7	47.1	珪質頁岩	円盤状石核裏面にコーンクラック
81- 8	SK-23	覆土	石核	54.9	61.2	39.8	132.0	珪質頁岩	多面体石核

(石器 No. 6)

図・番	出土位置	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
81-9	SK-23	2層	石核	47.5	59.5	30.0	79.8	珪質頁岩	多面体石核
81-10	SK-23	2層	石核	53.9	87.7	26.4	126.3	珪質頁岩	円盤状石核
81-11	SK-23	1層	石核	49.6	42.2	30.2	86.8	珪質頁岩	多面体石核
81-12	SK-23	2層	石核	30.2	40.8	36.9	102.6	珪質頁岩	多面体石核
81-13	SK-23	4層	石核	54.1	38.8	27.4	41.0	珪質頁岩	
81-14	SK-23	1層	ハンマー	75.5	86.7	39.8	300.3	珪質頁岩	円盤状石核を素材にしている 石器上縁と右縁が交互刃剥離で、ハンマーの機能面である
81-15	SK-23	覆土	石墨	(155.0)	(139.0)	94.0	1747.9	燧灰岩	
82-9	SK-24	5層	石墨(IV類)	(44.3)	14.9	8.6	3.9	珪質頁岩	石墨製品 あるいは石墨か
82-10	SK-24	カクラン	石墨(V類)	(38.7)	13.6	7.5	3.1	珪質頁岩	先端欠損
82-11	SK-24	1層	敲磨器(I類)	194.0	76.0	20.0	398.1	デイサイト	
84-8	SR-9	覆土	石墨(VI類)	(37.5)	13.2	6.9	3.1	珪質頁岩	先端・基部欠損
85-1	SX-1	覆土	石墨(III類)	24.4	14.4	6.7	2.2	珪質頁岩	
85-2	SX-1	覆土	石錐	32.0	23.4	7.3	3.8	珪質頁岩	基部にアスファルト付着
85-3	SX-1	覆土	石錐	77.0	30.0	11.0	25.2	珪質頁岩	
85-4	SX-1	覆土	尖頭器	44.0	24.3	14.9	12.4	珪質頁岩	
85-5	SX-1	覆土	尖頭器	(37.5)	23.0	8.0	5.3	珪質頁岩	
85-6	SX-1	覆土	削器(I-2類)	70.3	60.7	32.8	105.1	珪質頁岩	
85-7	SX-1	覆土	削器(I-4類)	63.6	43.5	12.5	22.1	珪質頁岩	刃部両面加工
85-8	SX-1	覆土	削器(II-6類)	60.4	84.0	35.1	171.9	珪質頁岩	反方向からの鍛造状刃部
87-22	SX-2	皿層	石錐	39.5	17.2	8.0	3.5	珪質頁岩	
87-23	SX-2	皿層	尖頭器	(35.5)	29.0	8.5	8.4	珪質頁岩	
87-24	SX-2	皿層	石核	55.4	56.3	40.9	107.1	珪質頁岩	多面体石核 打面転移顕著
87-25	SX-2	皿層	石核	52.8	90.5	45.1	168.7	珪質頁岩	
87-26	SX-2	皿層	石核	116.2	105.4	76.2	870.1	珪質頁岩	多面体石核
87-27	SX-2	皿層	石核	93.3	68.8	46.8	308.5	珪質頁岩	荒削り段階
88-1	SX-2	皿層	石核	80.8	129.2	120.0	1354.6	珪質頁岩	礫の一塊を荒削り
88-2	SX-2	皿層	石核	62.5	71.0	42.6	206.6	珪質頁岩	表裏の大きな作業面
88-3	SX-2	皿層	石核	75.6	94.9	50.1	395.8	珪質頁岩	多面体石核
88-4	SX-2	皿層	石核	73.7	89.4	57.3	405.8	珪質頁岩	荒削り段階 鏈面を大きく残す
88-5	SX-3	覆土	削器(II-7類)	43.5	59.4	13.1	30.3	珪質頁岩	横長削片を素材 鍛造状加工がみられる
89-1	SX-4	6層	石錐	49.0	51.0	22.0	28.1	珪質頁岩	
89-2	SX-4	1層	石錐	34.2	22.6	10.5	6.8	珪質頁岩	
89-3	SX-4	2層	石核	83.2	59.2	38.8	216.2	珪質頁岩	
90-2	SK-5	8層	接合資料	68.4	64.8	20.2	74.2	玉鶴珪質頁岩	剥片
90-3	SK-5	8層	接合資料	61.8	46.1	21.8	43.9	玉鶴珪質頁岩	残骸
90-4	SK-5	8層	接合資料	42.7	32.2	6.7	7.2	玉鶴珪質頁岩	剥片
90-5	SK-5	8層	接合資料	70.2	70.2	36.4	125.3	玉鶴珪質頁岩	接合状態図(図90-2~4)
91-13	SK-6	覆土	石核	58.1	68.1	24.7	98.7	珪質頁岩	円盤状石核
93-22	遺物集中		石錐	(36.5)	19.0	8.0	4.2	珪質頁岩	
93-23	遺物集中		石錐	43.0	37.5	15.0	15.3	珪質頁岩	
93-24	遺物集中		石錐	67.1	54.4	40.1	119.0	珪質頁岩	
93-25	遺物集中		両面加工石器	60.9	43.8	15.3	31.7	珪質頁岩	石器か 刃部反方向から鍛造状に加工
93-26	遺物集中		削器(II-7類)	49.3	25.9	6.2	4.1	珪質頁岩	
93-27	遺物集中		削器(III-2類)	29.8	40.2	17.2	15.0	珪質頁岩	末端ヒンジフランチャーの横長削片素材 打面に加工 素材左辺に反方向の剥離
93-28	遺物集中		削器(IV類)	45.7	50.0	17.6	32.7	珪質頁岩	下面に懸小剥離痕
93-29	遺物集中		削器(V類)	28.7	35.5	10.7	9.4	珪質頁岩	右辺は形態整形加工
93-30	遺物集中		石核	44.8	52.0	55.2	131.3	珪質頁岩	円錐素材
93-31	遺物集中		性格・用途不明な石製品	102.0	62.0	22.0	123.5	デイサイト	器面に難刻

第4章 理化学的分析

第1節 山田(2)遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

山田(2)遺跡は、青森県東津軽郡蓬田村大字瀬辺地字山田522外（北緯41° 00' 30.75''、東経140° 38' 22.66''）に所在する。

測定対象試料は、SI-14pit8の覆土から出土した木炭2点（07YAMADA(2)-3・4 : IAAA-71847・71848）、SI-11pit2の覆土から出土した木炭（07YAMADA(2)-1 : IAAA-71849）、SI-11pit3の1層から出土した木炭（07YAMADA(2)-2 : IAAA-71850）、SI-19炉2の31層から出土した木炭（07YAMADA(2)-5 : IAAA-71851）、SI-19炉2の34層から出土した木炭2点（07YAMADA(2)-6・7 : IAAA-71852・71853）、SI-11覆土から出土した木炭（07YAMADA(2)-8 : IAAA-80655）、SI-11pit2覆土から出土した木炭（07YAMADA(2)-9 : IAAA-80656）、SI-11pit3覆土1層から出土した木炭（07YAMADA(2)-10 : IAAA-80657）、SI-35カマド覆土12層から出土した木炭（07YAMADA(2)-11 : IAAA-80658）、SK-16覆土から出土した木炭（07YAMADA(2)-12 : IAAA-80659）、合計12点である。

2. 測定の意義

試料が出土した遺構の年代を決定する。

3. 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA : Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

(3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。

(4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4. 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした14C-AMS専用装置を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)

から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一位を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal104データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCal v4.0 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6. 測定結果

^{14}C 年代は、SI-14pit8から出土した木炭2点が 1190 ± 30 yrBP と 1200 ± 30 yrBP、SI-11pit2から出土した木炭が 990 ± 30 yrBP、SI-11pit3から出土した木炭が 1020 ± 30 yrBP、SI-19炉2の31層から出土した木炭が 4030 ± 40 yrBP、SI-19炉2の34層から出土した木炭2点が 4030 ± 40 yrBP と 4000 ± 30 yrBP、SI-11覆土から出土した木炭が 960 ± 30 yrBP、SI-11pit2覆土から出土した木炭が 890 ± 30 yrBP、SI-11pit3覆土1層から出土した木炭が 1090 ± 30 yrBP、SI-35カマド覆土12層から出土した木炭が 960 ± 30 yrBP、SK-16覆土から出土した木炭が 3990 ± 30 yrBP である。同一遺構では誤差範囲内で一致するが、SI-11ではpitや覆土出土試料で年代差があり、遺構の形成過程と埋没過程を踏まえて、年代値の妥当性を検討すべきである。試料の炭素含有率はすべて約60%以上であり、化学処理と測定内容にも問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Pro-

- gram, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

表7 測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-71847	07YAMADA (2)-3	遺構: SI-14pit8 層位: 穢土	木炭	AAA	-24.62 ± 0.57	1190 ± 30	86.28 ± 0.33
IAAA-71848	07YAMADA (2)-4	遺構: SI-14pit8 層位: 穢土	木炭	AAA	-20.58 ± 0.43	1200 ± 30	86.08 ± 0.3
IAAA-71849	07YAMADA (2)-1	遺構: SI-11pit2 層位: 穢土	木炭	AAA	-25.88 ± 0.68	990 ± 30	88.43 ± 0.36
IAAA-71850	07YAMADA (2)-2	遺構: SI-11pit3 層位: 1層	木炭	AAA	-21.08 ± 0.60	1020 ± 30	88.13 ± 0.33
IAAA-71851	07YAMADA (2)-5	遺構: SI-19 炉 2 層位: 31層	木炭	AaA	-27.67 ± 0.78	4030 ± 40	60.58 ± 0.27
IAAA-71852	07YAMADA (2)-6	遺構: SI-19 炉 2 層位: 34層	木炭	AAA	-30.36 ± 0.49	4030 ± 40	60.57 ± 0.26
IAAA-71853	07YAMADA (2)-7	遺構: SI-19 炉 2 層位: 34層	木炭	AAA	-27.55 ± 0.67	4000 ± 30	60.76 ± 0.26
IAAA-80655	07YAMADA (2)-8	遺構: SI-11 層位: 穢土	木炭	AAA	-19.87 ± 0.42	960 ± 30	88.69 ± 0.28
IAAA-80656	07YAMADA (2)-9	遺構: SI-11pit2 層位: 穢土	木炭	AAA	-25.22 ± 0.34	890 ± 30	89.52 ± 0.31
IAAA-80657	07YAMADA (2)-10	遺構: SI-11pit3 層位: 1層	木炭	AAA	-23.43 ± 0.50	1090 ± 30	87.32 ± 0.29
IAAA-80658	07YAMADA (2)-11	遺構: SI-35カマド 層位: 12層	木炭	AAA	-25.03 ± 0.46	960 ± 30	88.72 ± 0.29
IAAA-80659	07YAMADA (2)-12	遺構: SK-16 層位: 穢土	木炭	AAA	-25.38 ± 0.55	3990 ± 30	60.85 ± 0.25

表8 轮正唇年代

試料番号	Code No.	前處理	試料	處理前試回取炭素燃燒量精製炭素	$\delta^{13}C$ (‰)	Libby age (yrBP)	(yrBP - 売め込年較正 1 σ)	(yrBP - 売め込年較正 2 σ)	[yrBP]
07YAMADA(2)-3	IAAA-71847	AAA	乾燥	35.84	5.77	4.74	3.04	-24.62 ± 0.57	1190 ± 30
07YAMADA(2)-4	IAAA-71848	AAA	乾燥	40.75	5.66	4.69	3.03	-20.58 ± 0.43	1200 ± 30
07YAMADA(2)-1	IAAA-71849	AAA	乾燥	39.85	20.62	4.77	3.09	-25.88 ± 0.68	990 ± 30
07YAMADA(2)-2	IAAA-71850	AAA	乾燥	33.05	20.15	4.65	3.13	-21.08 ± 0.60	1020 ± 30
07YAMADA(2)-5	IAAA-71851	AAA	乾燥	28.22	12.75	4.80	3.03	-27.67 ± 0.78	4030 ± 40
07YAMADA(2)-6	IAAA-71852	AAA	乾燥	32.61	10.14	4.76	2.84	-30.36 ± 0.49	4030 ± 40
07YAMADA(2)-7	IAAA-71853	AAA	乾燥	22.82	8.55	4.67	2.90	-27.55 ± 0.67	4000 ± 30
07YAMADA(2)-8	IAAA-80655	AAA	乾燥	32.13	17.17	4.64	2.98	-19.87 ± 0.42	960 ± 30
07YAMADA(2)-9	IAAA-80656	AAA	乾燥	27.44	17.71	4.47	3.04	-25.22 ± 0.34	890 ± 30
07YAMADA(2)-10	IAAA-80657	AAA	乾燥	38.55	22.86	4.46	2.97	-23.43 ± 0.50	1090 ± 30
07YAMADA(2)-11	IAAA-80658	AAA	乾燥	37.20	10.16	4.62	2.96	-25.03 ± 0.46	960 ± 30
07YAMADA(2)-12	IAAA-80659	AAA	乾燥	46.55	27.15	4.72	3.17	-25.38 ± 0.55	3990 ± 30

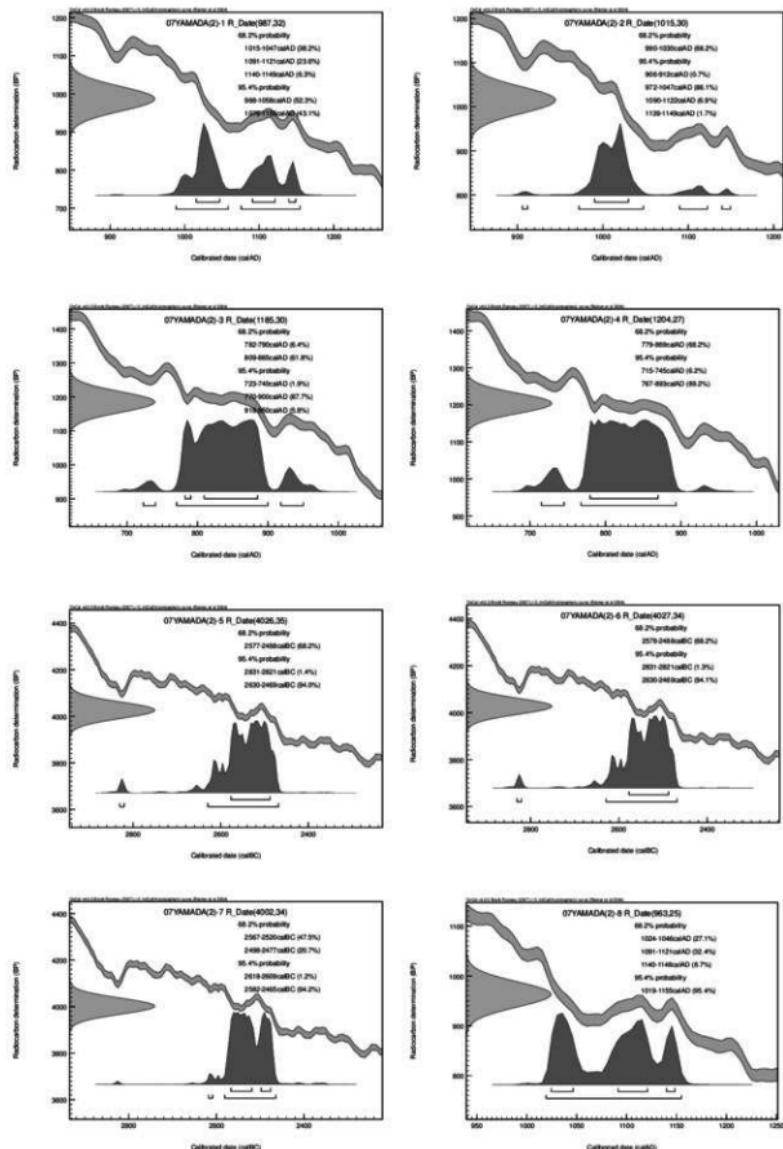


図95 年齢校正グラフ(1)

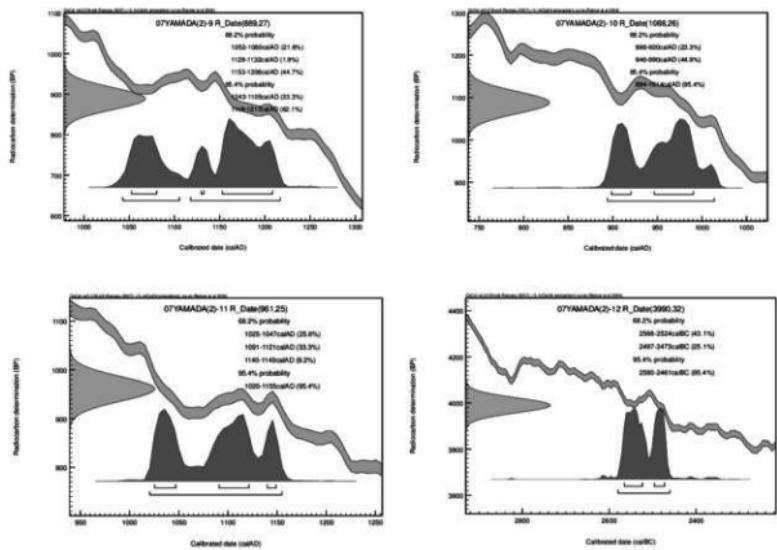


図96 年齢校正グラフ(2)

第2節 蓬田村山田(2)遺跡出土炭化材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は15点（№1～15）である。№1～11, 13は平安時代のものとされる3基の住居跡（SI-11, SI-14, SI-35）から検出されたもので、SI-11検出の10点（№1～10）は住居部材？、SI-14検出材（№11）は用途不明、SI-35カマド検出の№13は燃料材とされている。また、№12, 14は縄文時代中期末葉のものとされる2基の遺構（SI-19, SK-16）から検出されたもので、№12が燃料材？、№14は用途不明とされている。一方、№15が検出されたSX-03の所属時期は不明とされ、№15も燃料材の可能性があるとされるものの用途は確定していない（表9）。

遺跡は海岸線まで約400mの海岸段丘上（標高約20m）に立地し、縄文時代前期末葉～後期、平安時代の遺構・遺物が確認されている。

2. 方法

送付されてきた試料を室内で自然乾燥させたのち、適当な材片1片を選びその横断面（木口）・放射断面（柾目）・接線断面（板目）3断面を实体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（加速電圧15kV）で観察し同定した。併せて各分類群1点の電子顕微鏡写真図版（図97・98）を作成した。なお、同定作業で残った炭化材は木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料は以下の4分類群に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名と配列は「日本の野生植物 木本I」（佐竹ほか 1989）にしたがい、県内での自然分布については「北本州産高等植物チェックリスト」（上野 1991）を参照した。また、一般的な性質については「木の事典 第1・2・4・7巻」（平井 1979, 1980）も参考にした。

・アスナロ (*Thujopsis dolabrata*) ヒノキ科 №1, 2, 7, 8, 9, 10, 11, 13

早材部から晚材部への移行は緩やかで、晚材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみとなる。分野壁孔は小型のヒノキ型（Cupressoid）～スギ型（Taxodioid）で分野あたり1～6個。放射組織は単列、1～15細胞高であるが5細胞高前後の低いものが多い。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）（*T. dolabrata* var. *hondai*）がある。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・ブナ属 (*Fagus* sp.) ブナ科 №4

散孔材で管孔は単独または放射方向に2～3個が複合、横断面では多角形、分布密度は高い。道管はほぼ單穿孔をもつが、晚材部では段（bar）数が10前後の階段穿孔をもつものもある。放射組織

は同性～異性、單列、數細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状、散在状。年輪界は明瞭。

ブナ属はブナ (*Fagus crenata*) とイヌブナ (*F. japonica*) の2種があるが、県内にはブナのみが自生する。ブナは日本の冷温帶落葉樹林を代表する樹木で、北海道南西部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に分布する。材はやや重硬で、強度は大きいが加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・クリ (*Castsnea creanta*) ブナ科 №.3, 6, 12, 14, 15

環孔材で孔圈部は1～多列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大導管は単独、横断面では梢円形～円形、小導管は単独および2～3個が複合、横断面では角張った梢円形～多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、單（一部2）列、1～15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、梢木などに用いられる。

・モクレン属 (*Magnolia* sp.) モクレン科 №.5

散孔材で、横断面では角張った梢円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は單穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界はやや明瞭。

モクレン属は国内に6種あるが、県内にはホオノキ (*Magnolia obovata*)・コブシ (*M. praecocissima*)など4種が自生する。このうち材が有用なのはホオノキである。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工はきわめて容易で欠点が少ないとから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄齒・刃物鞘など特殊な用途も知られている。また木炭は金・銀・同・漆器の研磨に用いられた。コブシの材はホオノキに似るがやや硬く、ホオノキに準じた使われ方をする。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧表で示す（表9）。

4. 考察

平安時代とされるSI-11から検出された住居部材？とみられている10試料はアスナロ（6）・ブナ属・クリ（2）・モクレン属に同定された。試料の用途は確定したものではないが、県内の遺跡から出土した住居構築材とされる炭化材の中には今回と同じ分類群の報告もある。例えば、本遺跡の南南東方向24kmほどに位置する青森市安田（2）遺跡の平安時代前半（9世紀後半～10世紀前半）とされる11基の住居跡から検出された25点の炭化材からはクリを主にモクレン属などが認められている^{**}（高橋2002）。また、安田（2）遺跡の南方2kmほどに位置する朝日山（2）遺跡の平安時代（10世紀前葉）とされる3住居跡検出材30点からは、アスナロ・クリを主体とする炭化材が認められている^{**}（高橋2003, 2004）。

表9 山田(2)遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構	遺物番号	層位	用途など	分類群
1	SI-11	炭化材-1	覆土	住居部材?	アスナロ
2	SI-11	炭化材-8・11	覆土	住居部材?	アスナロ
3	SI-11	炭化材-19	覆土	住居部材?	クリ
4	SI-11	炭化材-27	覆土	住居部材?	ブナ属
5	SI-11 Pit2	炭化材-26	覆土	住居部材?	モクレン属
6	SI-11 Pit3	C-1	2	住居部材?	クリ
7	SI-11 Pit3	C-16	1	住居部材?	アスナロ
8	SI-11 Pit3	C-17	2	住居部材?	アスナロ
9	SI-11 Pit3	C-24	1	住居部材?	アスナロ
10	SI-11 Pit3	C-26	2	住居部材?	アスナロ
11	SI-14 Pit8			不明	アスナロ
12	SI-19 Pit1	C-1	1	燃料材?	クリ
13	SI-35 #7'	C-1	12	燃料材	アスナロ
14	SK-16	C-1	4	不明(板状)	クリ
15	SX-03		覆土	不明(燃料の可能性)	クリ

一方、縄文時代中期末葉のものとされる2基の遺構から検出された試料はともにクリに同定された。試料の用途や性格の異同についてはわからないが、安田(2)遺跡の北1kmほどに位置する近野遺跡の縄文時代中期とされる2住居跡からクリを主とする炭化材組成が得られている例^{*3}(嶋倉 1979)もある。

<注>

*1 : クリ(14), モクレン属(4)のほかオニグルミ(2)・ケヤキ・サクラ属(3)・エゴノキ属も認められている。

*2 : アスナロ(8), クリ(17)とカツラ(2)・コシアブラ・トネリコ属が認められている。

*3 : 手元の資料では形状以外の詳細は不明であるが、97点がクリ(85)・アスナロ?(1)・ハンノキ類・クリ?(2)・ケヤキ・キハダ?(5)・トネリコ属(2)に同定されている。

引用文献

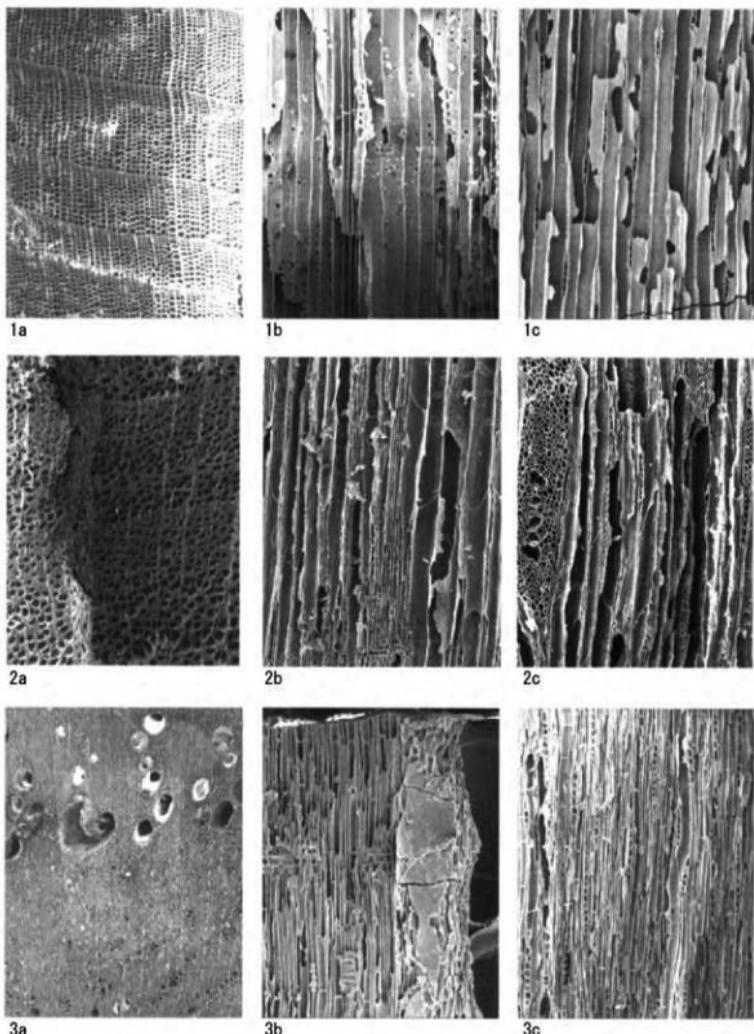
平井信二 1979 「木の事典 第1・2巻」, かなえ書房.

平井信二 1980 「木の事典 第4・7巻」, かなえ書房.

佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ」, 平凡社.

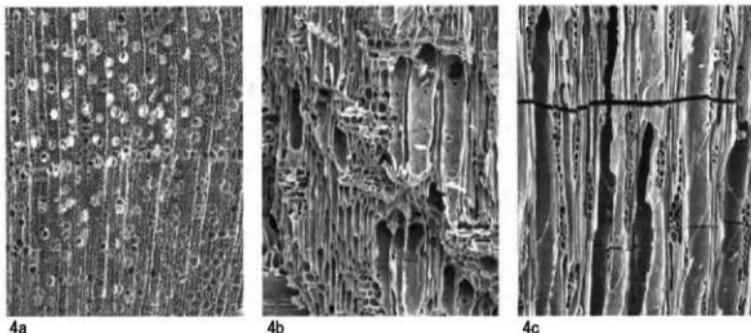
嶋倉巳三郎 1979 青森市近野遺跡から出土した炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第47集 近野遺跡発掘調査報告書(IV) -青森県総合運動公園建設関係発掘調査-」, 321-323, 青森県教育委員会.

高橋利彦 2002 青森市安田(2)遺跡出土炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第321集



1. アスナロ No.9 2. ブナ属 No.4 3. クリ No.15
a : 横断面 $\times 40$ b : 放射断面 $\times 100$ c : 接線断面 $\times 100$

図97 炭化材顕微鏡写真(1)



4. モクレン属 No.5

a : 横断面 $\times 40$ b : 放射断面 $\times 100$ c : 接線断面 $\times 100$

図98 炭化材顕微鏡写真(2)

安田(2)遺跡III 一東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告ー」，
90-96，青森県教育委員会。

高橋利彦 2003 朝日山(2)遺跡出土材・炭化材の樹種，「青森県埋蔵文化財調査報告書第349集 朝
日山(2)遺跡VI 一東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告ー」，181-188，青森県教育委員会。

高橋利彦 2004 朝日山(2)遺跡出土材・炭化材の樹種，「青森県埋蔵文化財調査報告書第368集 朝
日山(2)遺跡VII 一東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告ー」，165-170，青森県教育委員会。
上野雄規（編） 1991 「北本州産高等植物チェックリスト」，東北植物研究会。

第3節 山田(2)遺跡縄文時代より出土した炭化種実

吉川純子 (古代の森研究会)

1. はじめに

山田(2)遺跡は東津軽郡蓬田村の海岸段丘上に位置し、縄文時代中期から後期にかけて住居群や土坑などの遺構が見つかっている。これら住居の炉や土器埋設遺構などで堆積物の水洗選別を行ったところ炭化種実が検出されたため、当時の植物利用を検討するためこれら炭化種実の同定を行った。

2. 同定結果と考察

表1に出土した炭化種実の一覧を示した。中期初頭～中葉の遺構であるSR-08からはオニグルミとカラスザンショウ近似種を出土した。中期末葉の住居SI-19の炉からはクリとブナ科、トチノキ、タニソバ、核菌綱を出土した。中期末葉～後期初頭の住居SI-08の炉からはオニグルミとトチノキを出土した。後期初頭の住居SI-07、SI-12、SI-20、SI-26の炉からはオニグルミ、ブナ科、トチノキ、核菌綱を出土した。遺構SR-09からはオニグルミ、クリ小片、ブナ科を出土した。

表10 山田(2)遺跡縄文時代出土炭化種実一覧表

分類群	部位＼層位	中期初頭～中葉		中期末葉		中期末葉～後期初頭	
		SR-08	1層	炉32a層	SI-19	炉32b層	炉覆土
オニグルミ	内果皮破片(1/16)	-	-	-	-	-	-
	内果皮破片(1/32以下)	2	-	-	-	10	-
クリ	子葉完形	-	1	-	-	-	-
	子葉一部欠落	-	2	-	-	-	-
	子葉半分	-	1	-	-	-	-
	子葉小片	-	13	-	-	-	-
ブナ科	果皮小破片	-	93	-	-	-	-
カラスザンショウ近似種	内果皮破片	1	-	-	-	-	-
トチノキ	種皮小破片	-	-	46	-	9	-
タニソバ	果実	-	3	-	-	-	-
核菌綱	菌核	-	-	2	-	-	-
不明	果皮小破片	-	-	-	-	-	-

分類群	部位＼層位	後期初頭							
		SI-07	SI-12	SI-20	SR-09	SR-09	SR-09	SR-09	SI-26
		炉12層	炉3層	炉3層	炉1層	炉2層	炉3層	炉4層	炉D1層
オニグルミ	内果皮破片(1/16)	-	-	-	-	-	-	-	1
	内果皮破片(1/32以下)	18	1	7	1	8	-	4	2
クリ	子葉完形	-	-	-	-	-	-	-	-
	子葉一部欠落	-	-	-	-	-	-	-	-
	子葉半分	-	-	-	-	-	-	-	-
	子葉小片	-	-	-	-	1	1	-	-
ブナ科	果皮小破片	2	2	-	-	-	2	-	-
カラスザンショウ近似種	内果皮破片	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ	種皮小破片	-	-	-	-	-	-	-	1
タニソバ	果実	-	-	-	-	-	-	-	-
核菌綱	菌核	-	-	-	-	-	-	-	5
不明	果皮小破片	-	-	-	3	5	-	-	-

以下に出土した炭化種実の形態記載を行う。

オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.): 出土した内果皮破片は緻密で壁は無構造、不規則な曲面としばしば壁に空隙がある。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.): 完形の子葉は三角形で縦方向に大きく深く波打つしづが入る。一部欠落の子葉のひとつは大きな虫食いの痕跡が見られた。

ブナ科 (Fagaceae): 果皮は表面に細かい直線のすじが密に分布し、内面にも同方向にやや粗い直線のすじが入る。属の同定ができる基部が出土しなかったが、同層位で出土した子葉がすべてクリであるため、果皮もクリである可能性が高い。

カラスザンショウ近似種 (*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.): 内果皮は完形であればほぼ球形で表面に粗く不規則な網目があり、網目の縁は不規則に突出する。カラスザンショウ、イヌザンショウ、コカラスザンショウのいずれかであるが、同定に必要なべその部分がない破片であるが、網目の状況からカラスザンショウの可能性が高い。

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume): 種子基部の破片は平滑だがざらつく。それ以外の表面は炭化しても光沢が残る場合が多く、表面には流紋状ないし指紋状の微少模様があり、不規則な形に割れことが多い。

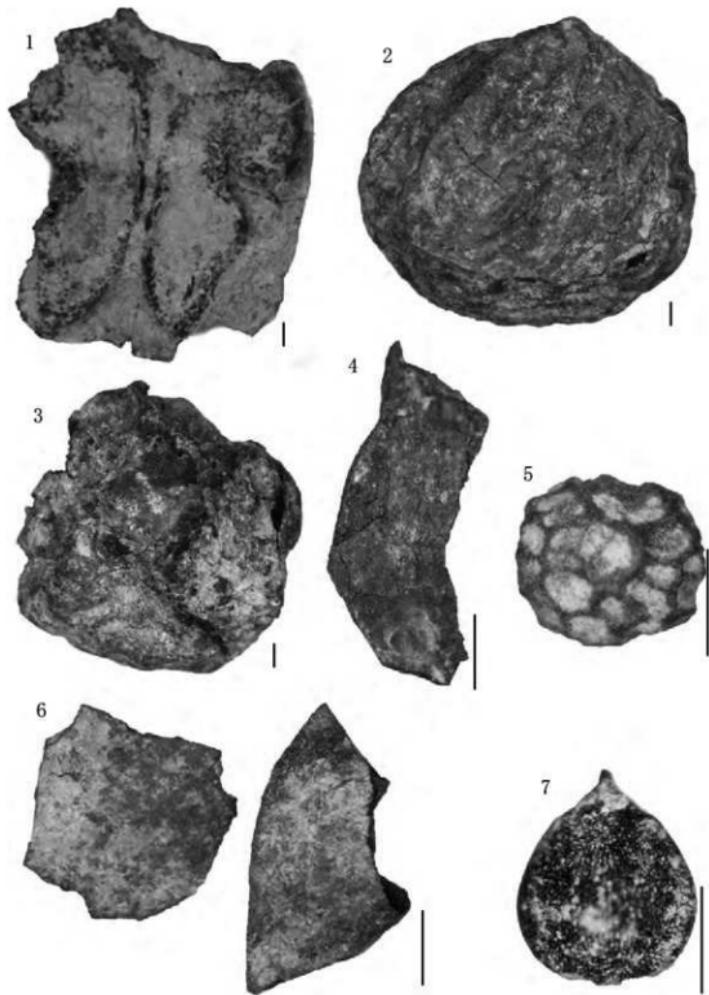
タニソバ (*Persicaria nepalense* (Meisn.) H. Gross): 果実は高さ1.8mmで両凸形の円形、全面にやや大きな多角形の網目模様がある。

核菌綱 (Ascomycotina): 菌核を出土した。内部は発泡状で無構造、枯死した材や樹皮に付着して生活する。元々黒くて堅いので炭化しているかどうか不明である。

本遺跡ではオニグルミは中期から後期を通して利用していたと考えられる。クリは中期末葉の住居SI19と後期初頭のSR09から出土したが、出土個数は數個分と少なく炉から出土していること、うち1個はかなりの虫害を受けていることから、食用として不適なものを炉に廃棄したと考えられる。トチノキは中期末葉のSI-19とSI-08で出土し、後期初頭ではSI26で出土した。出土量としては少ないが、住居内で利用していた可能性がある。SR-08で1個のみ出土したカラスザンショウ近似種は現在利用されていないが、縄文の遺跡における出土例は多く、新潟県黒川村分谷地A遺跡では縄文後期前葉（漆3650±40yBP）の黒漆塗木製水差の内部にニワトコ属を主体とし、ヤマグワ、マタタビ、サルナシ、破碎されたカラスザンショウ、アサなどが満たされた状態で発見され（辻ほか2003）、薬用ないし調味料として利用していたと推定している。カラスザンショウの薬効成分は調査されていないが、同属のサンショウやイヌザンショウに薬効があることから同様の効果を期待して利用されたとみられる。SI19で出土したタニソバは日陰や湿地に生育する草本で利用例はない。

引用文献

辻誠一郎・大松しのぶ・辻圭子・森勇一. 2003. 2. 分谷地A遺跡から出土した漆塗り木製水差内の植物・昆虫遺体群. 分谷地A遺跡II下段（V区）縄文時代漆製品. 黒川村教育委員会. 215-220.



1. オニグルミ、内果皮破片(SI-26炉D 1層土器内土) 2. クリ、子葉完形(SI-19 32a層)
3. クリ、子葉虫害(SI-19 32a層) 4. ブナ科、果皮破片(SI-19 32a層) 5. カラスザンショウ、内果皮破片
(SR-08 1層) 6. トチノキ、種皮破片(SI-19 32b層) 7. タニソバ、果実(SI-19 32a層)
スケールは1mm

図99 山田(2)遺跡より出土した炭化種実

第4節 山田(2)遺跡使用痕並びに剥離技術について

(株)アルカ 高橋 哲

はじめに

青森県埋蔵文化財調査センターから委託を受けた際に、肉眼でも光沢が見える石器について伺った。多くは鋸歯状に加工された部分や石錐状であり、素材などの形態を利用した石器と現地で判断した。No.4、No.20、No.21、No.15、参考資料1、参考資料2、No.8などが該当する。

(株)アルカにおいてこれら石器を顕微鏡などで観察した結果、結論からのべれば、こうした部分に使用痕は確認できない場合が多かった。

しかし、このことによってもう一つ別の点、二次加工の種類と使用された縁辺という問題提起へといたり、当地域における石器製作に関わる重要な知見が得られることとなった。

観察方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ(VH-7000)による高倍率ズームレンズ(VH-Z450)を用いて使用痕観察をおこなった。観察倍率は、200倍～450倍である。観察面は、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は梶原・阿子島の分類基準によっている(梶原・阿子島 1981)。微小剥離痕は、阿子島(阿子島1981、89)を用いた。

石器刃部にみられる摩滅・剥離面などの状態を観察するため、低倍率ズームレンズ(10～40倍)を併用した。

※用語について

以下文章中で、石器縁辺の物理的なすり減りを「摩滅」として記述する。東北大学で基準が設定された際にはこうした使用痕は「摩耗」とされてきたが、一方で「摩耗」という用語も用いられてきた。日本語としては「摩耗」が正しいとの考えもあり、自身これまで摩耗という用語を用いてきた。しかし「摩耗」とした場合、使用痕光沢の形成に「摩耗」説といった用語もあり、光沢の意味にとらわれる可能性も高く、用語の混乱をまねく恐れがあるので、この報告では、こうした物理的な縁辺のすり減りは「摩滅」に統一した。

分析

No.1

有茎鎌の先端部に摩滅がみられた(図100-1)。高倍率顕微鏡下でも、摩滅にともない鋭い線状痕がみられる(図100-2)。線状痕は石錐長軸に直交している。石錐先端を回転運動によってもちいた際に生じた痕跡と思われる。

矢柄に取り付けられた状態で使用されたとしたら、弓を用いて穿孔した可能性もある。摩滅の様相から、硬いものや、そういう連続的な激しい動きが考えられる。その場合、アスファルトなどでしっかりと固定されないと、矢柄から錐がはずれ、穿孔中に空回りするので、固定方法の問題にもかか

わる。

No.4

横長剥片を素材としている。右辺は反方向の押圧剥離で尖頭状に加工されている（図100-5）。高倍率で検鏡したところ、鈍い光沢と摩滅がみられた（図100-6）。それ以外の縁辺にはこうした痕跡（図101-7）は確認できなかったので、使用によるものと考えられる。

No.8

横長剥片を素材としている。右辺には反方向の押圧剥離で尖頭状に加工されている（図100-12）。高倍率で検鏡したが石器表面にみられるると同種光沢が縁辺にまでひろがり、かつ摩滅などもみられなかった（図100-15）。素材末端部には径の細いハンマーによる加工がみられ（図100-13）、高倍率でもやはり図100-15と同様の状況が確認できた。左辺には微小剥離痕がみられ（図100-14）、この部分が刃部とはじめ思ったが、高倍率で検鏡したところ、やはり光沢、摩滅などは確認できなかった。

そのためどの部分が刃部かは確認できなかった。ただ加工の様相から、素材末端部は刃部にはならないと思われる所以、左右辺いずれかが刃部であったのであろう。

No.10

両面加工石器の左辺に光沢がみられ、特に裏面右辺には肉眼でもはっきりと光沢がみられた。この部分を検鏡した所、AタイプもしくはBタイプ光沢がみられた（図100-16）。線状痕は刃部に対して平行方向である。

草本植物の切断に用いられたと思われる。

No.9

縦長剥片を素材としている。素材打面は自然面打面であり、コーンがみられる。ハードハンマーの直接打撃で素材が剥離された。素材末端から左辺にかけて押圧剥離で整形されている。正面刃部一帯に肉眼でも光沢がみられる。明るく丸みをもつ光沢である（図100-17）。刃部付近にも類似光沢がみられるが、縁辺そのものにまでは広がっていない（図100-18）。使用によって生じた光沢かは不明である。

No.11

横形石匙である。矩形剥片を素材とし、ハードハンマーの直接打撃で素材剥片を得ている（図101-4）。素材打面側と末端に抉り加工がみられる。刃部には加工がなく、微小剥離痕がみられる（図101-1）。刃部反対辺は両面加工であり、縁辺は丸くなり、潰している（図101-3）。刃部を高倍率で検鏡したところ鈍い光沢や摩滅が確認できた（図101-2）。

No.12

縦形石匙である。縦長剥片を素材とし、素材打面は切子打面であり、コーンがみられる（図101-5）。

打面側に抉りをいれ、摘み部を作り出している。刃部は割と急角度であり、微小剥離痕がみられる（図101-6、7）。刃部には肉眼でも光沢がみられる。高倍率で検鏡したところAタイプ光沢が確認できた（図101-8）。

草本植物の切断に用いられたと思われる。

No.13

素刃削器である。右辺を加工で潰して整形している（図101-9）。下辺の鋭い縁辺を刃部としている。刃部には低倍率顕微鏡下で1mm以下の微小剥離痕がみられる（図101-10）。

高倍率で検鏡したところ、刃部には光沢が確認できた（図101-11、12、15）。二次加工部分には光沢や摩滅はみられない（図101-14）。石器表面と同じような状況である（図101-13）。

刃部に確認できた光沢は、縁辺から500ミクロンほどまで広がり、連続的で、漸移的に広がる。光沢は点状で、原面の凹凸にしたがい、表面は粗く、いわゆる脂ぎった光沢といった特徴がある。F1タイプと思われる。線状痕は確認できなかったが、光沢が表裏両面に広がることを考えると、おそらく平行方向に石器を動かしたものと思われる。微小剥離痕は非常に小さい上に、摩滅も軽微ながら確認できることから、柔らかい被加工物が考えられる。

No.14

素刃の削器である。素材打面の二次加工（図102-1）は、調整打面なのか、二次加工かは判断できなかった。ただ主要剥離面に接する大きな剥離面は、主要剥離面側に切られている。この二次加工部分に使用痕はなく、反対側の鋭い縁辺に使用痕がみられた。刃部には低倍率顕微鏡下で微小剥離痕がみられる（図102-2）。

高倍率で検鏡したところ、刃部には光沢や摩滅が確認できた（図102-4、5、7）。二次加工部分には光沢や摩滅はみられない（図102-3）。部分的に光沢はみられるが（図102-6）、限定的であり、刃部のような連続的に広がることはない。

刃部に確認できた光沢は、縁辺から200から500ミクロンほどまで広がり、連続的で、漸移的に広がる。光沢は点状で、原面の凹凸にしたがい、表面は粗く、いわゆる脂ぎった光沢といった特徴がある。F1タイプと思われる。線状痕は確認できなかったが、光沢が表裏両面に広がることを考えると、おそらく平行方向に石器を動かしたものと思われる。微小剥離痕は非常に小さい上に、摩滅も軽微ながら確認できることから、柔らかい被加工物が考えられる。

No.15

横長剥片を素材としている。自然面打面であり、コーンがみられる。ハードハンマーの直接打撃で素材が剥離された。素材末端はヒンジフラクチャーである。左辺に鋸歯状の整形加工がある（図103-8）。

高倍率で検鏡したところ、刃部には摩滅が確認できた（図102-10、11）。光沢自体は、石器表面の様相と差がない。二次加工部分には摩滅はみられず、本来の鋭い縁辺を保っている（図103-12、13）。

No.13、No.14、No.15は刃部が素刃であり、微小剥離痕の規模も小さく、摩滅も非常に軽微なことから、肉・皮などの柔らかい被加工物に対して用いられたと思われる。光沢は非常に弱く、強いてタイプ名をつければF 1 タイプであるが、石器表面と区分が困難な場合もある。しかし微小剥離痕などの様相から導き出した肉・皮などの被加工物と矛盾はしない。

No.18

石器右辺は貝殻状の大きな剥離がみられ、鋸歯状を呈している。剥離開始部が砕けており、剥離規模も大きいことから、ハードハンマーの直接打撃で剥離されたと思われる。石器下側に両面加工で整形している（図103-2）。石器上面は自然面で覆われている。刃部は左辺の正方向の片面加工（図103-1）であり、肉眼でも裏面に摩滅がみられる（図103-3）。

高倍率で検鏡したところ、刃部には摩滅が確認できた（図103-4）。反対面にはこうした光沢や摩滅は確認できなかった（図103-6）。両面加工部分には光沢や摩滅はみられるが（図103-5）、石器表面にみられるのと同種光沢（図103-7）であるので、使用によって生じた光沢とは思えない。

使用痕が確認できた縁辺は、光沢、摩滅が片面にのみ顕著に広がることから、この部分が被加工物に接触する状態、スクレイピングかホイッティングで用いられたと思われる。

光沢タイプについては、粗く、鈍い光沢で、比較的刃部奥にまで広がる特徴をもつ。ただ、光沢は実験とはことなる特徴をもち、タイプは特定できない。一番近いのはE タイプであろう。線状痕も刃部に対して直交方向にみられ、上記使用痕から導き出した操作方法と矛盾しない。

No.19

平坦打面をもつ横長剥片を素材としている。素材末端部には反方向の鋸歯状加工（図103-8）がみられる、左辺には正方向の鋸歯状加工がみられる（図103-9）。しかし、この加工部分には高倍率で検鏡したところ光沢や摩滅は確認できなかった（図103-10、11、12）。

一方、背面が自然面で覆われた右辺には摩滅や光沢が確認されている（図103-13、14）。果たしてこの辺が刃部として機能したかは、幾分検討する必要はあろう。

No.20

石核である。図105-1にみられる加工によって錐状に縁辺が加工されているかと思い、検鏡した。しかし光沢は確認できなかった（図104-4）。他の縁辺の様相（図104-3）とも大きく変わらない。これらの加工は、石核の作業面と同じ剥離開始部（図105-2）である。

No.21

石核？である。加工によって錐状に縁辺が加工されているかと思い、検鏡した。しかし錐状を形成する加工（図104-5、6）は基本的に石核の作業面と同じである。打面側には径1 mm程度のコーンクラックがみられる。

不明な光沢が錐状加工の先端部に確認できる（図104-7）。一方で同種光沢は刃部とはなりえない部分にもみられ（図104-9）、先端部の光沢も偶然錐状部分の先端に光沢が付着していた可能性も否定で

きない。

他に観察だけ行った石器がある。

参考資料1と参考資料2石核は観察した結果、使用痕はみられないし、加工もNo.20や下記の石核と類似しているので、石核と判断した。

No.17、参考資料3の鋸歯縁部分をもつ石器は、加工部分に光沢などは確認できなかった。

分析

分析した上記石器以外にもどのような剥離面が観察できるかみてみたい。

石鎌は尖基鎌、有茎鎌などがある。剥離面は剥離開始部の砕けではなく、厚みがない。バルブの発達も顕著でない。鹿角などのソフトハンマーによる押圧剥離で整形している（図100-3、4）。

石錐については、No.2のような加工（図100-5）が、No.5（図100-8）などにみられる。中には素材の分厚い部分の形態を利用したNo.7（図100-9）や、尖頭状の素材形態に押圧剥離で整形しているNo.6（図100-10、11）がある。

尖頭器・石箒などの両面加工石器については、No.22は横長剥片を素材とし、全周囲を加工している。剥離面は剥離開始部の砕けではなく、厚みがない（図104-10、11）。

No.23の石箒は、器体を両面加工で棒状に整形している。剥離面は剥離開始部の砕けもすくなく、厚みがない。バルブの発達も顕著でない。鹿角などのソフトハンマーによる平坦剥離で整形されたと考えられる。部分的に開始部が大きく砕け、鋸歯状になっている部分もある（図104-12）。刃部は外湾状であり、側面側の形態は嘴状である。いわゆる搔器の急角度刃部と異なる。

No.24は剥離開始部の砕けもすくなく、厚みがない。バルブの発達も顕著でない。鹿角などのソフトハンマーによる平坦剥離（図104-13）で整形されたと考えられる。

No.16は石箒状に加工されているが、刃部に相当する部分が鋸歯縁状（図102-14）であり、使用痕はみられないことが想像される。そのため製作途上とも考えられる。

鋸歯縁は、参考資料3、No.17などにもみられ、No.17（図102-15）にもあるように使用痕らしき痕跡はみられなかつた。

上記の成果を考慮すると、使用痕が確認できる加工とそうでない加工に分かれる。

- ・ 使用痕がみられる加工

使用痕が確認できるのは、No.12などの押圧剥離が典型的であろう。石鎌の縁辺の整形や、石錐などにもみられる加工である。基本は片面加工である。

両面加工石器でも、平坦剥離などの場合、No.10、尖頭器などの整形加工にも用いられる。

加工がない、素材の鋭い部分に使用痕が残されている石器がある。

まとめると、片面押圧剥離や平坦剥離、素材の縁辺部分に使用痕がみられる場合が多い。ただし尖頭器類、石錐などの刺突を目的とした場合は、少々意味が異なる。

- ・ 使用痕がみられない加工

逆に使用痕がみられない加工は、No.14、No.19、No.17などの鋸歯状加工や、No.11、No.18などの通常

の剥離による両面加工で、縁辺を潰している場合、そしてNo.13などのような、片面加工で剥離面がステップの階段状で重複しているハードハンマーの直接打撃である。特にこれらの加工をもつ場合、他の辺にある押圧剥離の片面加工や鋭い縁辺を残している辺に使用痕がのこされている。

上記の成果を考慮すると、No.16（図102-14）は、刃部に相当する部分が鋸歯縁状であり、高倍率で検鏡はしていないが、使用痕はみられないことが想像される。

そうした場合、図104にみられる石器も、加工によって一見錐状に加工されているように見受けられるが、これらの加工が石核にみられる作業面と類似しており、偶然に錐状にみえるだけかもしれない。そのため、ハードハンマーの直接打撃による整形の場合も、刃部加工には用いられないことが考えられる。ただ不明な光沢が見受けられるので、今後もこうした資料を蓄積した上で、再度考察を加える必要があろう。

まとめ

加工の種類によって使用痕の有無が見られることが明らかになった。もちろん、これは山田（2）遺跡という1遺跡の所見から得られた結果であり、これでもって青森県内の全体を唱えることはできないが、こうした分析の積み重ねによって、縄文石器の器種認定にも大きな貢献ができると思われる。さらに石器図化の際にも可能な限り、剥離面の特徴を書き分ける必要もある。

参考文献

- 阿子島香 1981 「マイクロフレイキングの実験的研究（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その1）」『考古学雑誌』66-4 pp.1-27
 1989 『石器の使用痕』考古学ライブラリー-56 ニュー・サイエンス社
 梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試みー（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2）」『考古学雑誌』67-1 pp.1-35
 高橋哲 2003 「使用痕実験報告と使用痕研究の課題」『アルカ研究論集』1 pp.54-59
 2008a 「使用痕分析からみた縄文石器の機能についての考察」『アルカ研究論集』3 株式会社アルカ pp.1-25

表11 使用痕分析対象資料

資料番号	顕微鏡写真掲載番号	出土位置	層位	取り上げ番号	掲載実測図番号	整理番号
No. 1	図100-1・2	SI-23	1		図51-17	96
No. 2	図100-3	SI-8	覆土	S-4	図14-15	4
No. 3	図100-4	SI-8	覆土	S-72	図14-14	5
No. 4	図100-5・6・7	SI-23	1		図52-10	586
No. 5	図100-8	SI-6	6	S-85	図8- 2	65
No. 6	図100-10・11	SI-6	7	S-219	図8- 3	272
No. 7	図100-9	SI-23	3		図51-20	102
No. 8	図100-12~15	SI-23	2		図81- 5	607
No. 9	図100-17・18	SI-6	5	S-53	図8- 4	162
No. 10	図100-16	SI-16	1	S-15	図36-10	658
No. 11	図101-1~4	SI-9	7	S-252	図18- 5	155
No. 12	図101-5~8	SK-15	2-a		図73- 8	161
No. 13	図101-9~15	遺物集中		S-143	図93-29	610
No. 14	図102-1~7	SI-6	6	S-187	図8- 7	611
No. 15	図102-8~13	遺物集中		S-121	図93-27	650
No. 16	図102-14	遺物集中		S-27	図93-25	205
No. 17	図102-15	SI-11	覆土		図28-23	621
No. 18	図103-1~7	SI-8	床下		図14-18	712
No. 19	図103-8~14	SI-10	炉1	S-1	図23-19	620
No. 20	図104-1~4	SI-23	1		図53- 7	588
No. 21	図103-5~9	SI-26	2		図58-11	589
No. 22	図103-10・11	SI-19pit1	覆土	S-2	図43- 9	226
No. 23	図103-12	Tr-9(XIVX-124)	III			
No. 24	図103-13	Tr-5(XVY-130)	III			
参考資料1	観察のみ	SK-23	4		図81-13	647
参考資料2	観察のみ	SI-7	15	S-158	図11-16	614
参考資料3	観察のみ	SX-3	覆土		図88- 5	648

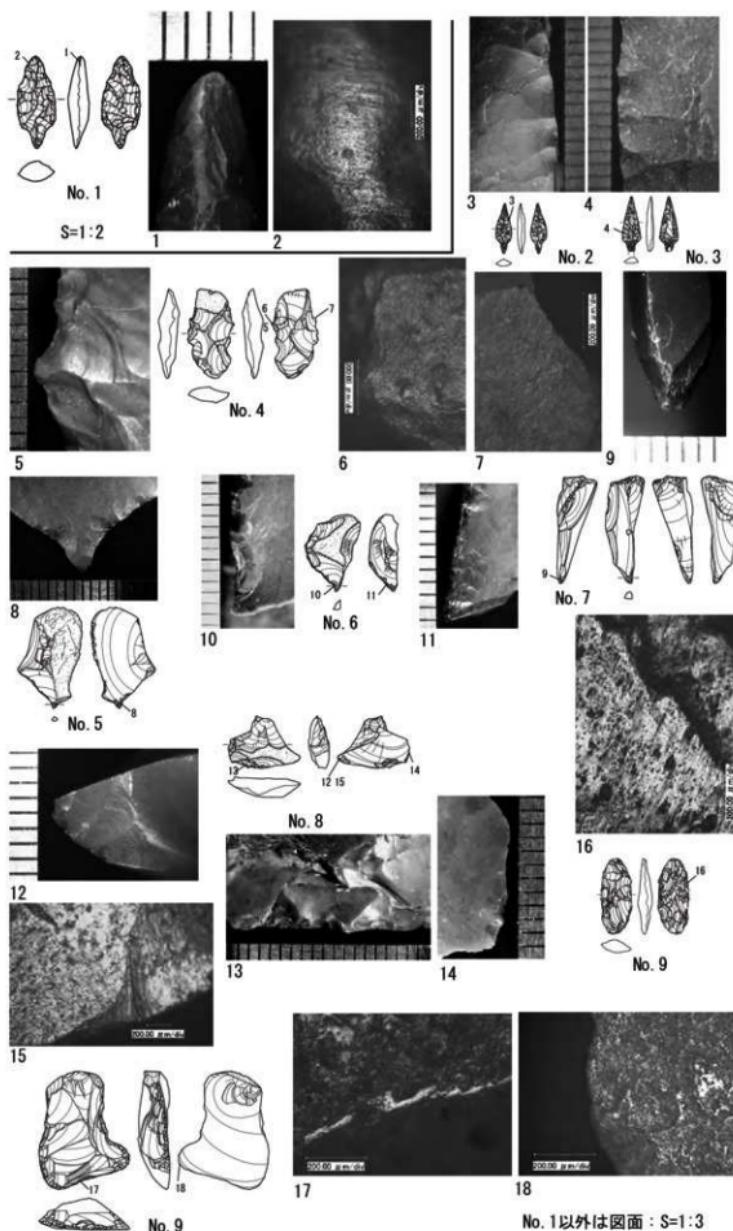


図100 観察部位と顕微鏡写真(1)

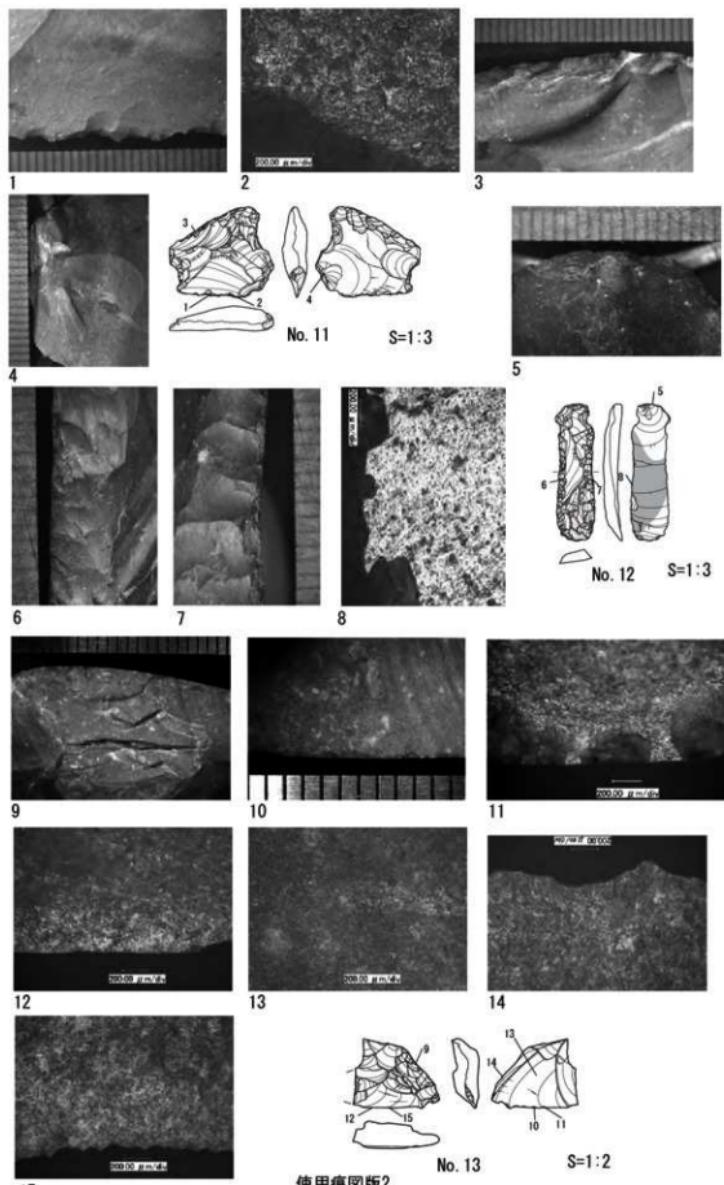


図101 觀察部位と顕微鏡写真(2)

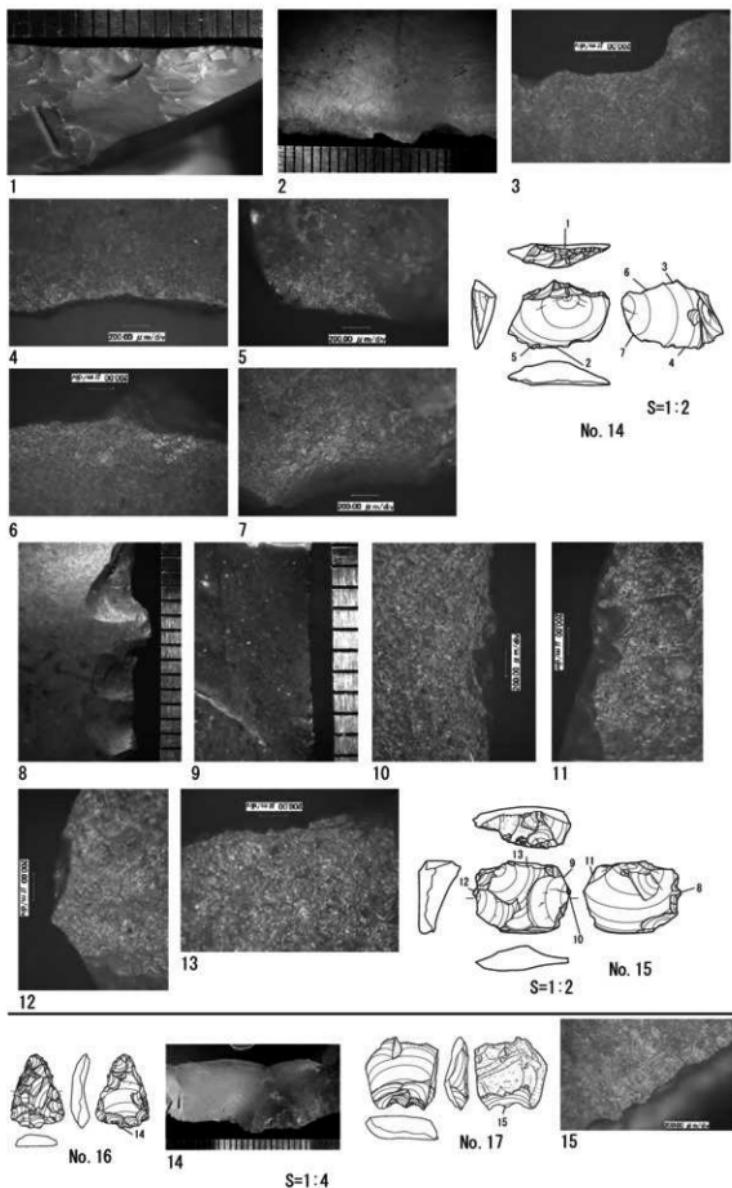


图102 观察部位と顕微鏡写真(3)

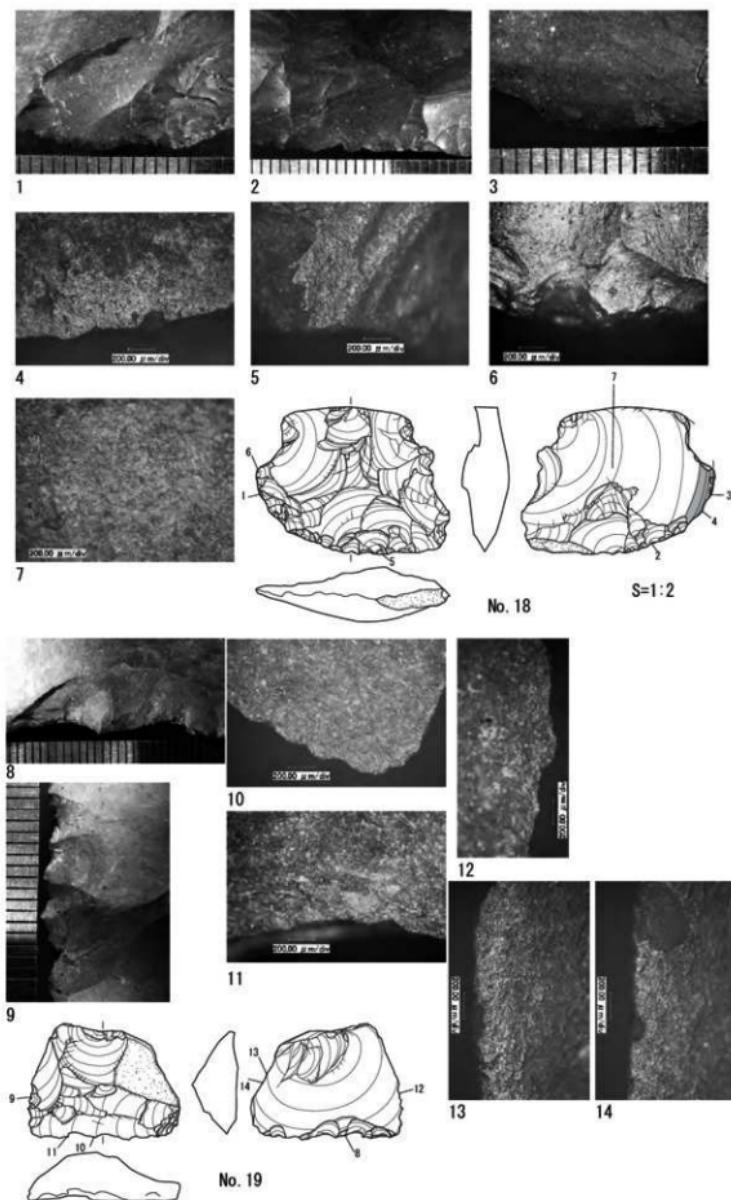


図103 觀察部位と顕微鏡写真(4)

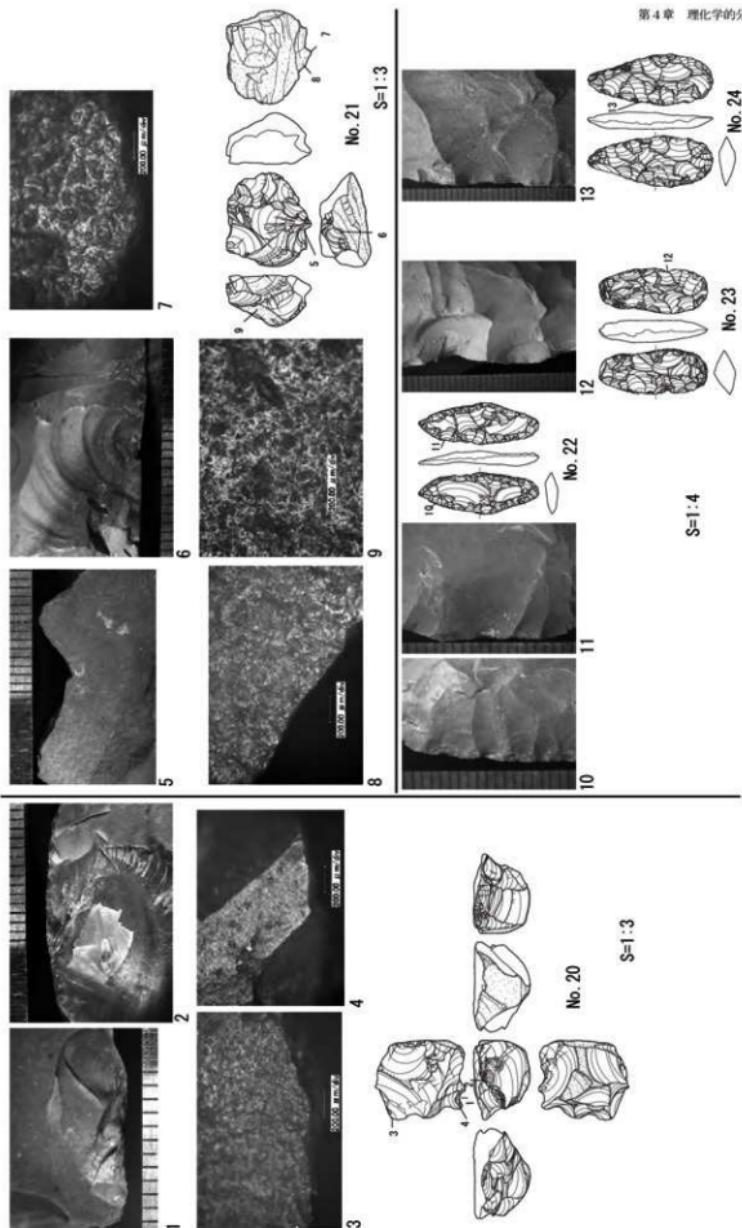


図104 観察部位と顕微鏡写真(5)

第5章　まとめ

平成19年度の調査成果を中心に、山田(2)遺跡の内容についてまとめる。

縄文時代

住居跡21軒、土坑17基、埋設土器遺構7基、焼土1基、配石遺構1基、性格不明遺構3基を精査した。住居跡の時期は円筒上層式期2軒、中期後葉～末葉1軒、中期末葉2軒、中期末葉～後期初頭10軒、中期末葉～後期前葉1軒、後期初頭2軒、時期不明3軒で、中期末葉～後期初頭が主体である。精査を行った住居跡は平成18年度（2007年度）の調査区に限定されるが、大半が削平を受けたと思われ、本来存在していた中期末葉～後期初頭の住居跡は検出数より多いものと思われる。中期末葉～後期初頭の住居跡で注目されるのは斜位土器埋設炉（小倉 1988）である。複式炉内に斜位に埋設された土器が起源で、後期初頭頃には岩手県北部で単独のものが作られるようになるという。この系統に属する炉は、青森県内では、階上町野場（5）遺跡、五戸町上蛇沢（2）遺跡、八戸市南郷区田代遺跡、八戸市蘿窪遺跡、八戸市新田遺跡で検出されているが、単独のものは、後者2遺跡で計5基検出されている。時期は不明瞭なものが多いが、確実に中期末葉に伴うものではなく、後期初頭に属する事例が1例ある（新田遺跡第2号土器埋設炉住居跡）。本遺跡では単体のものが4基（第10号・12号・20号・28号住居跡）、土器敷部を伴うもの1基（第26号住居跡）が検出されている。第10号が後期初頭と考えられ、その他も確実に中期末葉に伴うものはない。秋田県北部では、森吉町日廻平B遺跡で、斜位に埋設された炉体土器の軸線上のやや離れた位置に、正位の埋設土器を伴う例が知られており、第26号住居跡の炉B・Cに炉Dが伴う蓋然性は高いといえる。従って、第26号住居跡炉B～Dは後期初頭の所産と考えられる。

土坑は時期不明のものが多いが、住居跡に対応して、後期初頭～中期末葉のものが主体であると考えられる。なお、円筒下層d式の小破片だけが出土する土坑が若干ある。構築・使用時期を反映する可能性もあるが、小破片だけなので確実とはいえない。今後、規模や堆積土の状況など、他の属性とあわせて、他の時期の土坑と区別できる一群として認められれば、時期区分が可能になるかもしれない。埋設土器遺構として報告したものは、削平を受けた関係もあり、多くが土器上半部または下半部を欠失している。

遺物の上で特筆されるのは、石器、および石器制作に関わる遺物の出土量（表4・5：107・108頁）である。県内の他地域の遺跡と比較すると格段に多く、石器製作を行った遺跡であると考えられる。

平安時代

住居跡3軒を検出した。古代の降下火山灰は、削平の影響を受けてこともあってか検出されていないこと、土器の出土量が少ないとから、年代を比定する情報に乏しいが、おおむね10世紀前半～11世紀のものと思われる。第35号住居跡が西カマドで主軸方位はS-69-W、第11号住居跡北カマドで主軸方位角はN-9-W、第14号住居跡はN-30-Wである。第11号住居跡からは擦文土器が出土した。また、第14号住居跡からは火窯炉とともに、鉄滓・鍛造剥片・粒状滓が検出された。（中村・宮嶋）

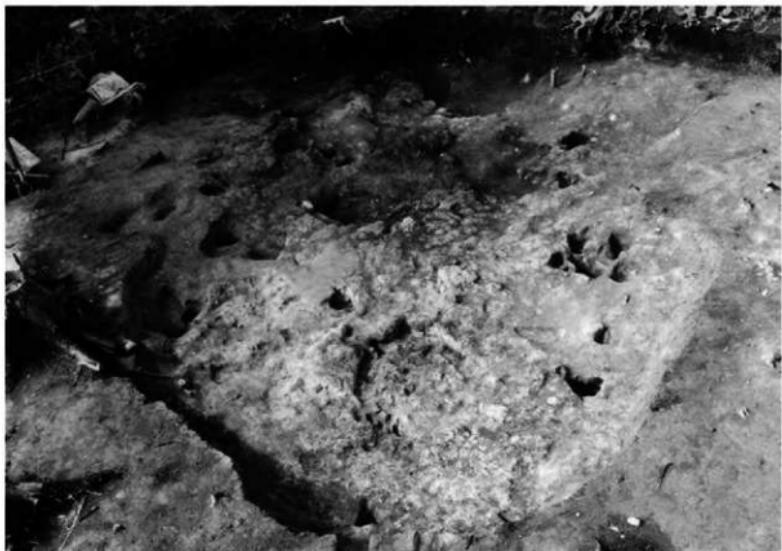
参考文献

小倉和重 「斜位土器埋設炉についての一考察」『奈和』36 奈和考古同人会

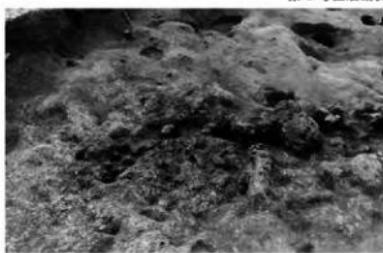
写 真 図 版



第6号住居跡土層堆積状況（西から）



第6号住居跡完掘状況（南から）



第6号住居跡炉完掘状況（東から）



第6号住居跡炉截割状況（南から）

写真図版 1



第6号住居跡炉北側焼土截割状況（南から）



第7号住居跡確認状況（南から）



第7号住居跡土層堆積状況（南東から）

写真図版2



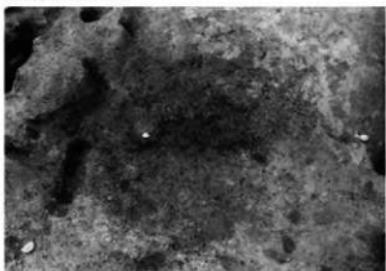
第7号住居跡完掘状況（北から）



第7号住居跡石囲炉完掘状況（北から）



第7号住居跡焼土検出状況（南から）



第7号住居跡焼土截割状況（南から）

写真図版3



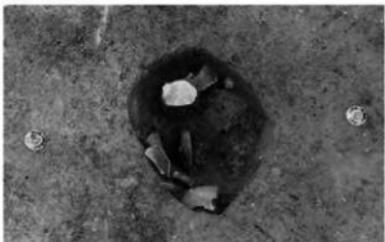
第8号住居遺物出土状況（南から）



第8号住居完掘状況（南から）

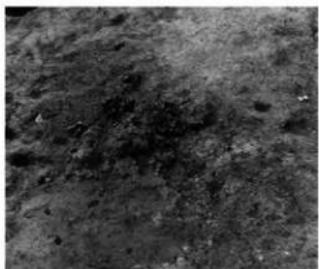


第8号住居跡片集積土層堆積状況（東から）



第8号住居跡片集積遺物出土状況（東から）

写真図版 4



第8号住居跡炉検出状況（南西から）



第8号住居跡炉剥離状況（南西から）



第9号住居跡確認状況（南から）



第9号住居跡土層堆積状況（南西から）

写真図版 5



第9号住居跡完掘状況（東から）



第9号住居跡炉完掘状況（東から）



第9号住居跡pit I 遺物出土状況（南から）

写真図版 6



第10号住居跡床截割状況（南から）



第10号住居跡炉検出状況（西から）

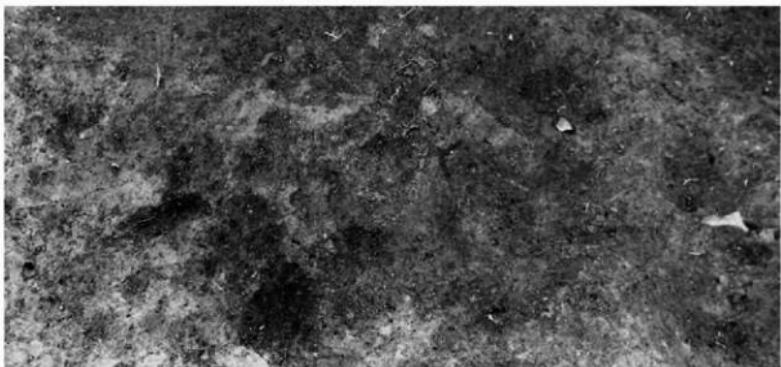


第10号住居跡炉土層堆積状況（南西から）

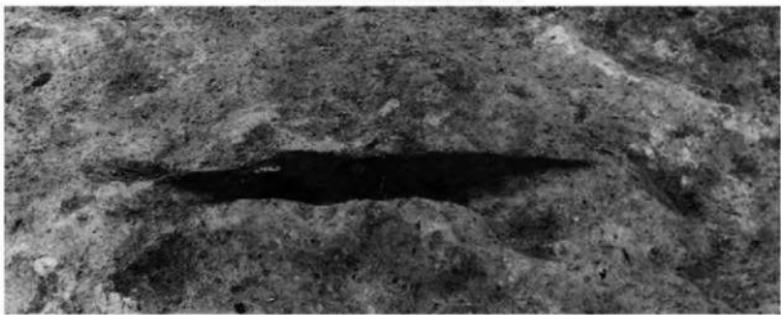
写真図版 7



第10号住居跡炉窓掘出状況（南西から）

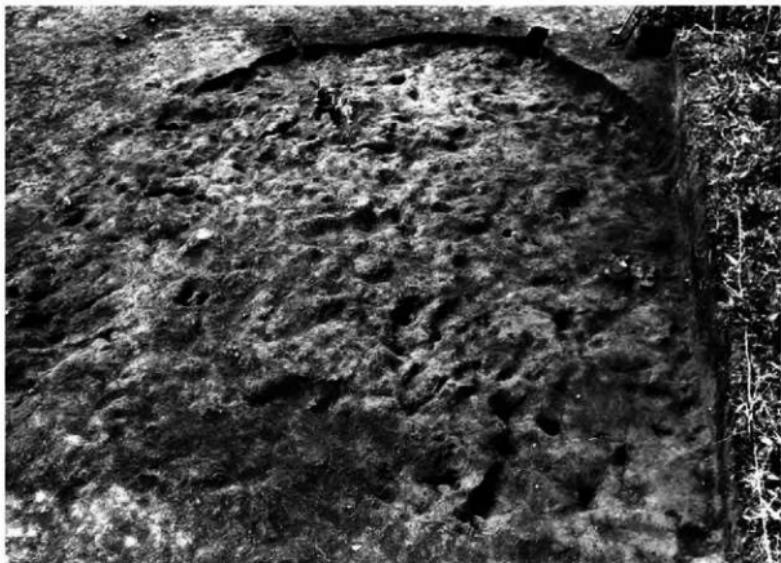


第10号住居跡焼土検出状況（北東から）



第10号住居跡焼土截割状況（北東から）

写真図版 8



第10号・25号住居跡完掘状況（北から）

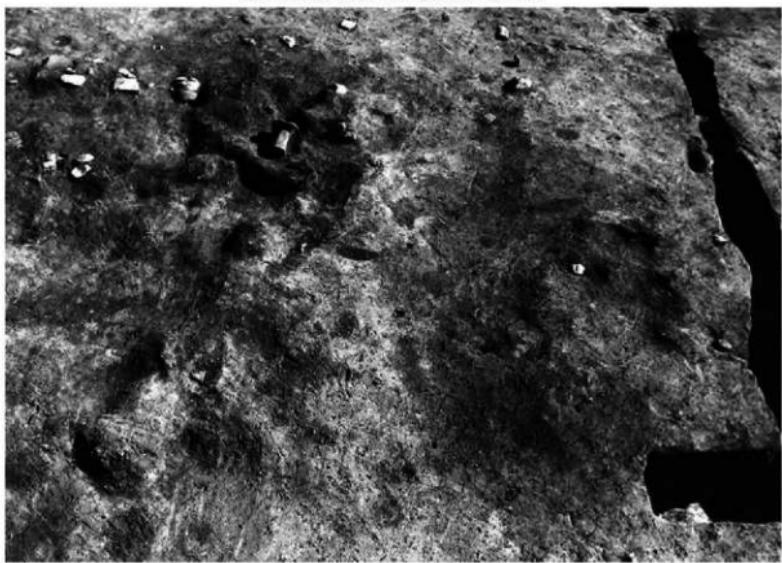


第10号・25号住居跡土層堆積状況（東から）

写真図版 9



第11号住居跡炭化材・焼土検出状況（北から）



第11号住居跡炭化材・焼土検出状況：南西部（北から）

写真図版10



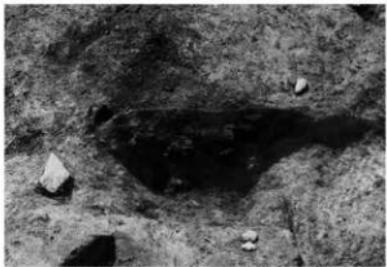
第11号住居跡カマド検出状況（北から）



第11号住居跡カマド土層堆積状況（北から）



第11号住居跡炭化材・焼土検出状況：東部（北から）



第11号住居跡 pit3 土層堆積状況（北から）



第11号住居跡 pit3 土層堆積状況（北から）

写真図版11



第11号住居跡 pit3 炭化材出土状況（北から）

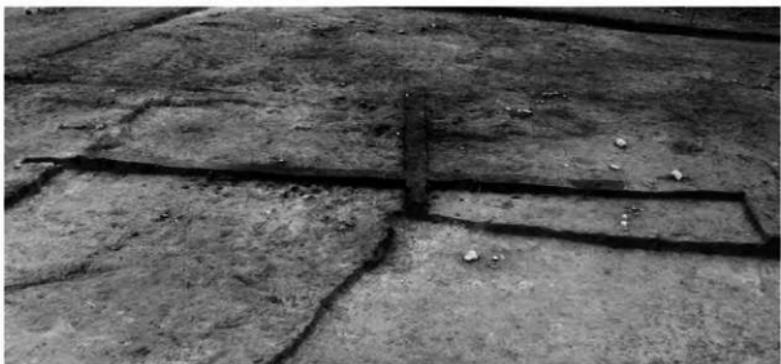


第12号住居跡炉完掘状況（南西から）



第12号住居跡炉截割状況（西から）

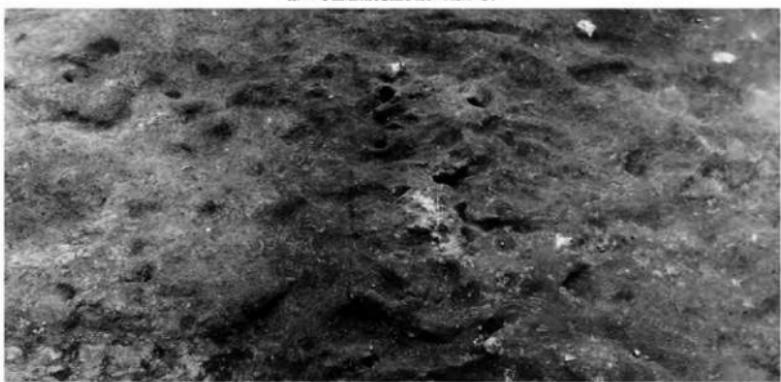
写真図版12



第14号住居跡土層堆積状況（北から）



第14号住居跡完掘状況（北から）



第14号住居跡カマド焼出状況（北から）

写真図版13



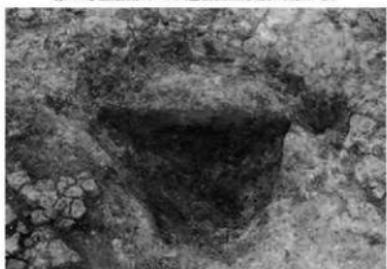
第14号住居跡カマド土層堆積状況（北から）



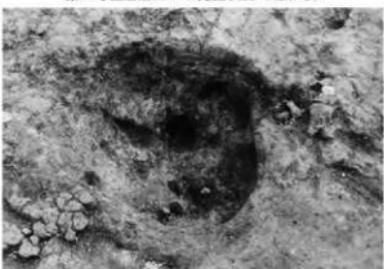
第14号住居跡カマド遺物出土状況（北から）



第14号住居跡カマド完掘状況（北から）



第14号住居跡pit5 土層堆積状況（西から）

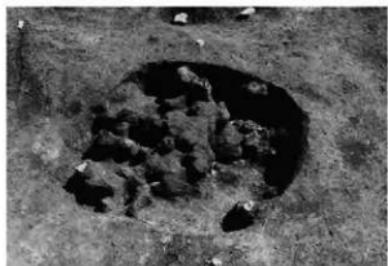


第14号住居跡pit5 完掘状況（西から）

写真図版14



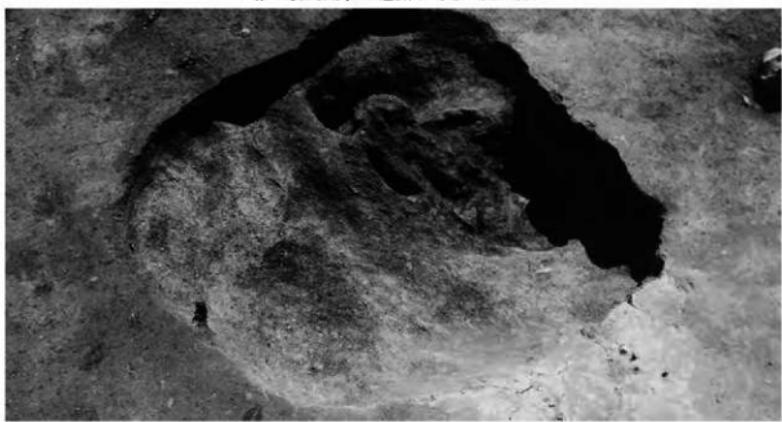
第14号住居跡 pit6 完掘状況（北から）



第14号住居跡 pit7 焼土検出状況（北から）



第14号住居跡 pit8 遺物出土状況（西から）

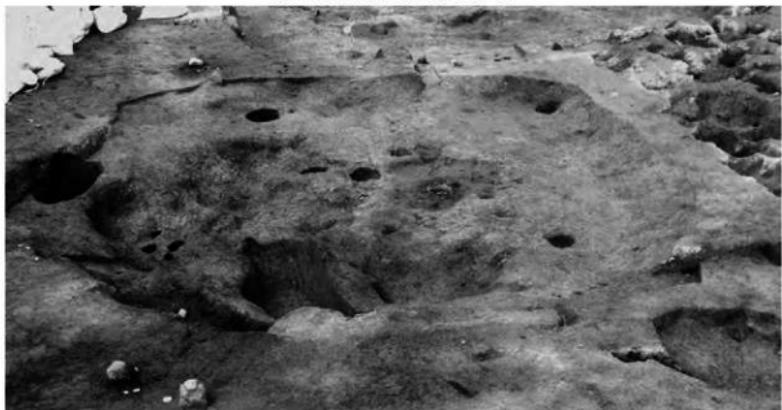


第14号住居跡 pit8 遺物出土状況 2（北から）

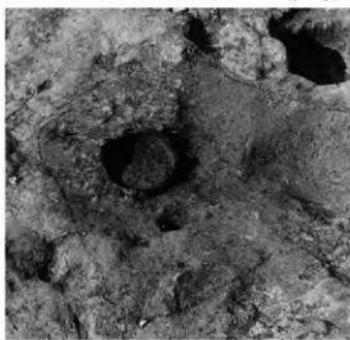
写真図版15



第16号住居跡土層堆積状況（南から）



第16号住居跡完掘状況（南から）



第16号住居跡炉 1 换出状況（東から）



第16号住居跡炉 1 土層堆積状況（東から）

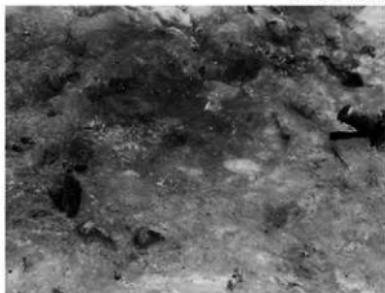
写真図版16



第17号住居跡土層堆積状況（西から）



第17号住居跡完掘状況（南から）



第17号住居跡炉検出状況（南から）



第17号住居跡炉截割状況（東から）

写真図版17



遺物集中 遺物出土状況（西から）



第19号住居跡土層堆積状況（西から）

写真図版18



第19号住居跡完掘状況（西から）



第19号住居跡土偶出土（図42-7）状況（北西から）

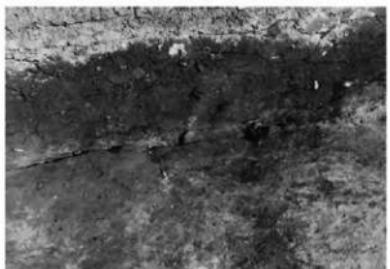


第19号住居跡土偶（図42-6 顔面部）出土状況（北西から）



第19号住居跡土偶（図42-6）出土状況（北西から） 左：全景 右：近接

写真図版19



第19号住居跡炉2截割状況（北西から）



第19号住居跡炉2完掘状況（西から）



第19号住居跡炉2炭化材検出状況（西から）



第19号住居跡炉2下層焼土検出状況（西から）



第19号住居跡炉3截割状況（東から）



第20号住居跡炉棟出土状況（東から）



第20号住居跡炉土器内土層堆積状況（南から）



第20号住居跡炉掘方截割状況（南西から）

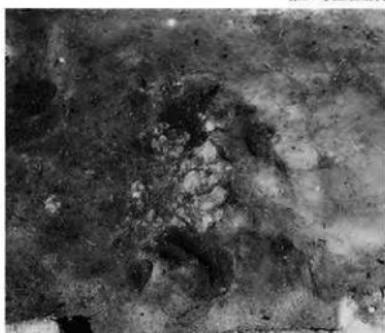
写真図版21



第21号住居跡土層堆積状況（南から）



第21号住居跡完掘状況（東から）



第21号住居跡跡炉検出状況（南西から）

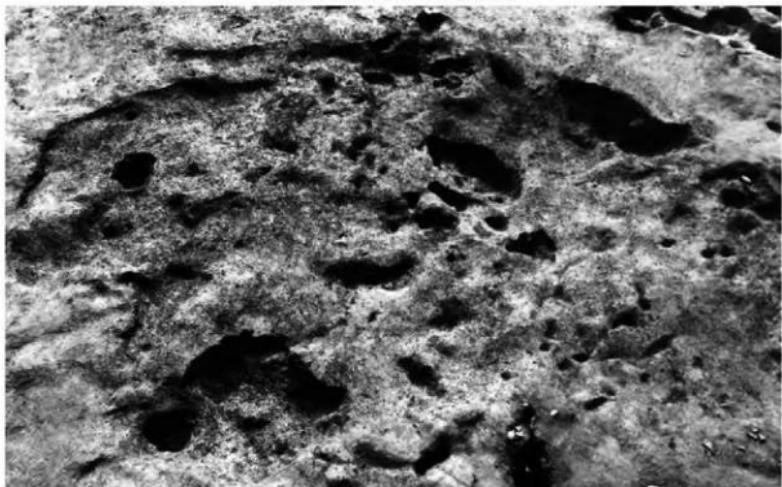


第21号住居跡跡炉截割状況（南西から）

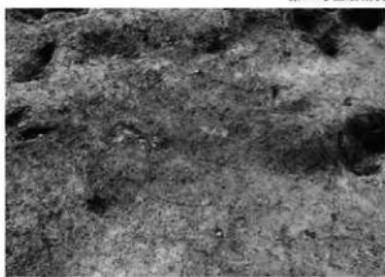
写真図版22



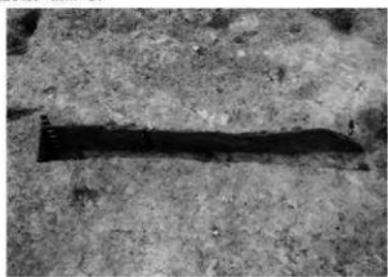
第22号住居跡土層堆積状況（西から）



第22号住居跡完掘状況（東から）



第22号住居跡炉検出状況（東から）



第22号住居跡炉截割状況（東から）

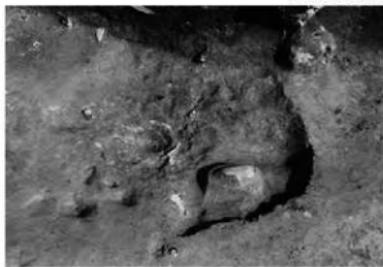
写真図版23



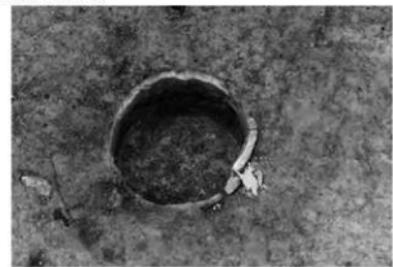
第23号住跡土層堆積状況（西から）



第23号住跡完掘状況（西から）

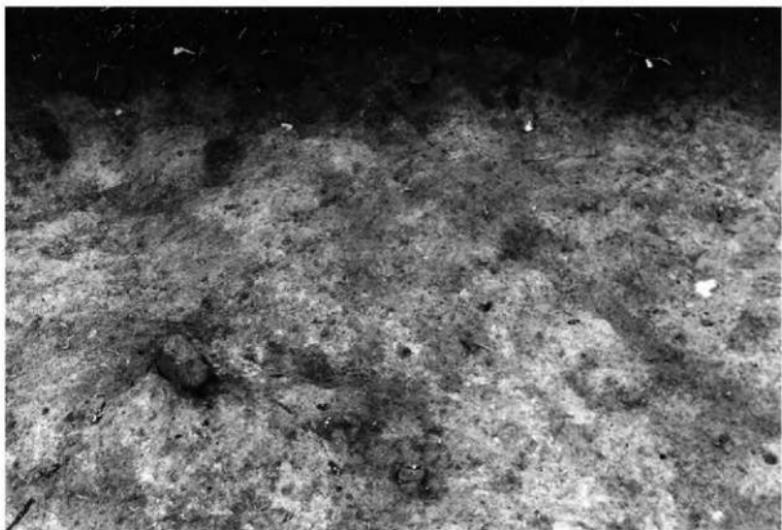


第23号住跡炉検出状況（西から）

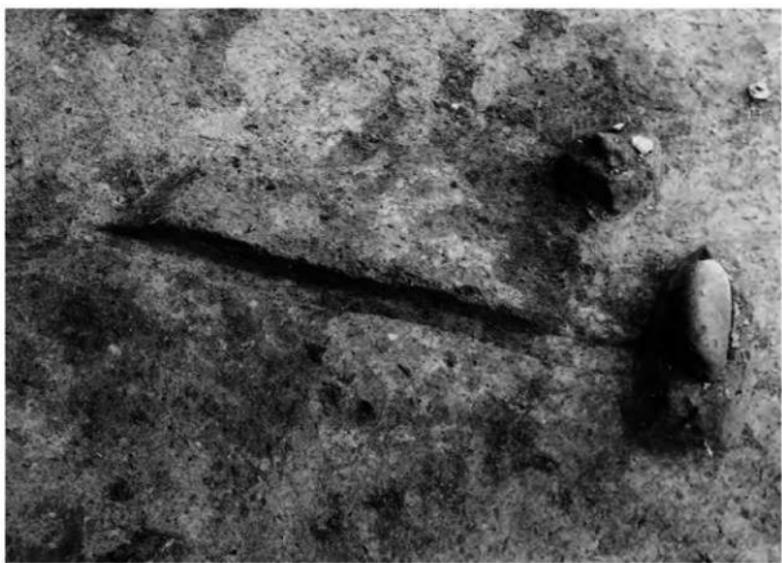


第23号住跡炉土器被熱状況（西から）

写真図版24



第25号住居跡炉棟出状況（東から）



第25号住居跡炉截割状況（東から）

写真図版25



第26号住跡土層堆積状況（東から）



第26号住跡炉棟出状況（東から）



第26号住跡炉A・B截割状況（南東から）

写真図版26



第26号住居跡炉A・B截割状況（北から）



第26号住居跡炉B検出状況（北東から）

写真図版27



第26号住居跡炉C・D検出状況（北東から）

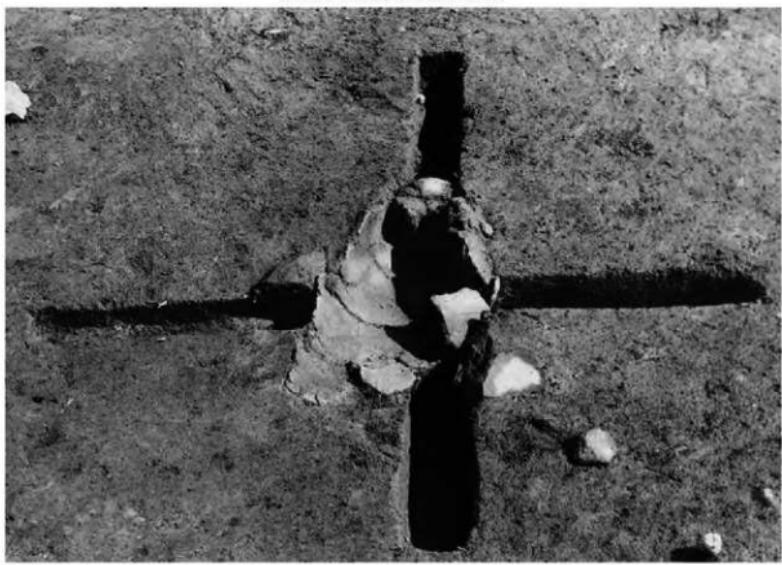


第26号住居跡炉D2層検出状況（北から）

写真図版28



第28号住居跡炉棲出状況（西から）



第28号住居跡炉完掘状況（西から）

写真図版29



第28号住居跡炉堀方截割状況（南から）



第29号住居跡完掘出状況（南から）

写真図版30



第33号住居跡土層堆積状況（南から）



第33号住居跡完掘状況（東から）

写真図版31



第35号住居跡土層堆積状況（西から）



第35号住居跡完掘状況（西から）



第35号住居跡カマド截割状況（東から）



第35号住居跡カマド土層堆積状況（東から）



第35号住居跡カマド遺物出土状況（東から）

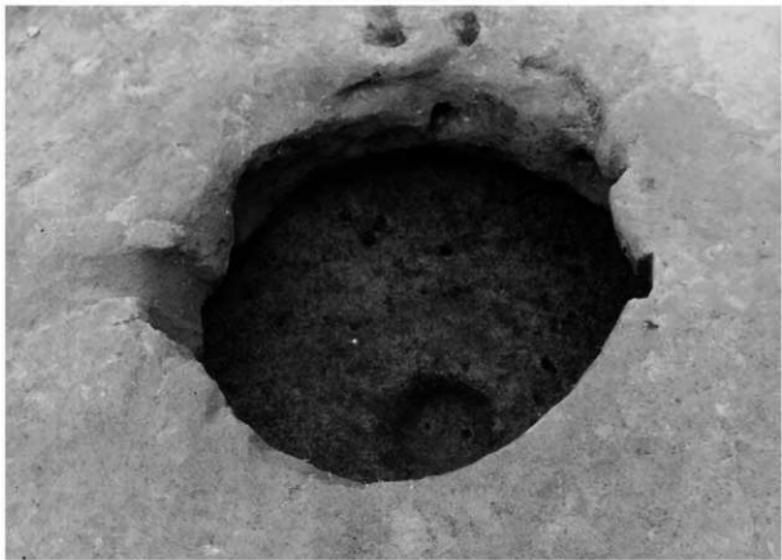


第36号住居跡土層堆積状況（北から）

写真図版33



第7・8・9号土坑完掘状況（南から）

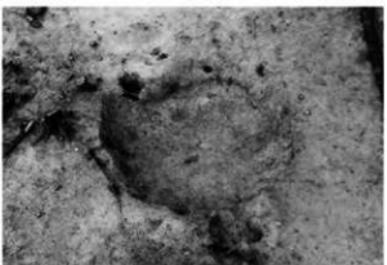


第11号土坑完掘状況（南西から）

写真図版34



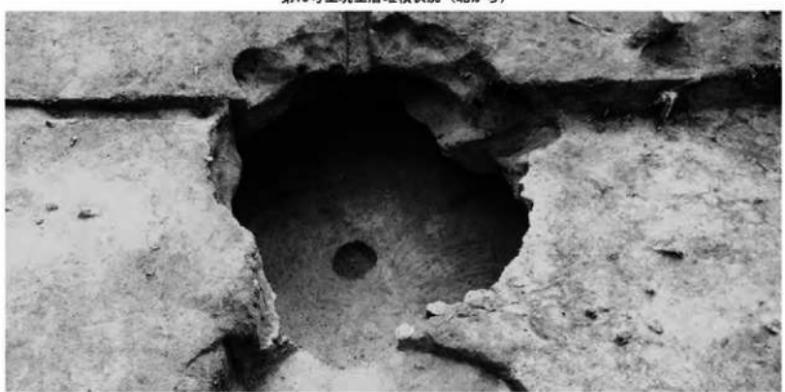
第14号土坑土層堆積状況（西から）



第14号土坑完掘状況（西から）



第15号土坑土層堆積状況（北から）



第15号土坑完掘状況（北から）



第16号土坑土層堆積状況（南から）



第16号土坑炭化材出土状況（北から）



第17号土坑土層堆積状況（南から）



第17号土坑完掘状況（南西から）



第18号土坑土層堆積状況（南から）



第18号土坑完掘状況（南から）



第19号土坑土層堆積状況（南から）



第19号土坑完掘状況（南西から）

写真図版36



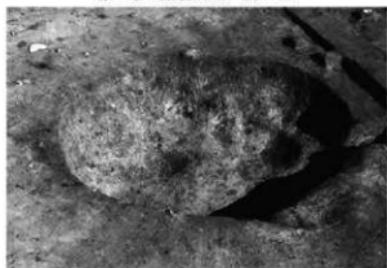
第20号土坑土層堆積状況（南から）



第20号土坑完掘状況（南から）



第23号土坑土層堆積状況（南から）



第23号土坑完掘状況（南から）



第24号土坑土層堆積状況（南から）



第24号土坑遺物出土状況（南から）



第25号土坑土層堆積状況（南から）



第25号土坑完掘状況（南から）

写真図版37



第1号埋設土器遺構検出状況（北東から）



第1号埋設土器遺構截割状況（北東から）



第2号埋設土器遺構検出状況（西から）



第2号埋設土器遺構截割状況（西から）



第3号埋設土器遺構検出状況（西から）



第3号埋設土器遺構截割状況（西から）



第6号埋設土器遺構検出状況（東から）



第6号埋設土器遺構截割状況（南東から）

写真図版38



第5号埋設土器遺構検出状況（南東から）



第5号埋設土器遺構截割状況（南西から）



第5号埋設土器遺構蓋部出土状況（西から）



第8号埋設土器遺構検出状況（南から）



第9号埋設土器遺構截割状況（東から）

写真図版39



第9号埋設土器遺構検出状況（南から）



第9号埋設土器遺構截割状況（南から）



第1号配石遺構検出状況（北から）



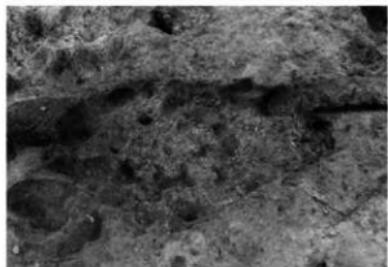
第1号配石遺構基底部確認状況（北から）



第1号性格不明遺構完掘状況（南から）



第3号性格不明遺構土層堆積状況（東から）



第3号性格不明遺構完掘状況（東から）

写真図版41



第4号性格不明遺構土層堆積状況（南から）



第4号性格不明遺構完掘状況（南から）



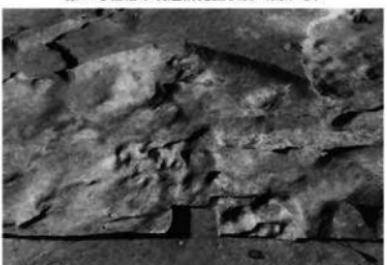
第5号性格不明遺構土層堆積状況（南西から）



第5号性格不明遺構完掘状況（南から）



第6号性格不明遺構土層堆積状況（南から）



第6号性格不明遺構完掘状況（南から）



SI-6
図7-8



SI-7
図11-1



SI-6
図7-6



SI-9
図16-2

写真図版43



図17-1



図17-2

写真図版44



写真图版45



写真図版46



写真図版47



ST-19
図 41-16



ST-19
図 41-22



ST-20
図 45-1



ST-20 付
図 51-1

写真図版48



写真図版49

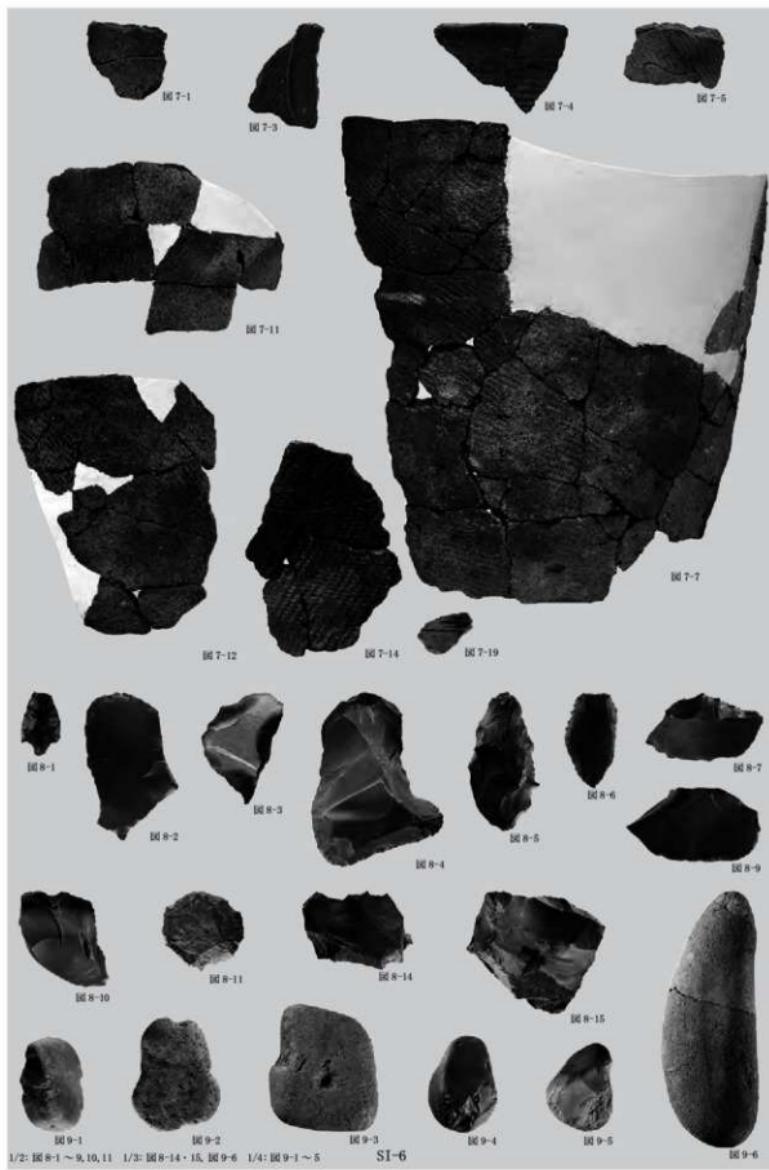


SH-9
图 84-7



造物集中
图 93-1

写真図版50



写真図版51



写真図版52



图 14-11



图 14-14



图 14-15



图 14-16



图 14-17



图 15-1



图 15-2



图 15-3

1/2: 图 14-15 ~ 18, 图 15-1 ~ 2
1/3: 图 15-3



图 16-1



图 17-8



图 17-11



图 18-1



图 18-2



图 18-3



图 18-5



图 18-6



图 18-7



图 18-8



图 18-9



图 18-10



图 18-11



图 18-12



图 18-13

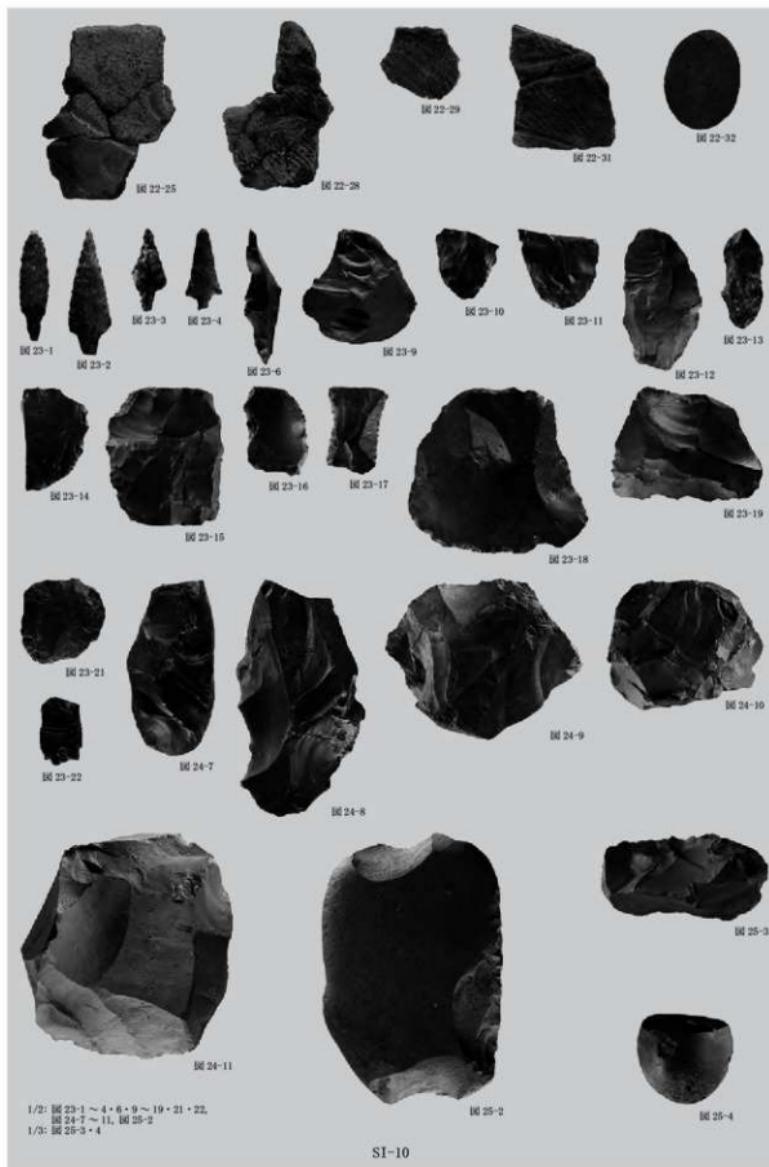
1/2: 图 18-1 ~ 3, 图 18-5 ~ 10
1/3: 图 18-11 ~ 13

SI-9

写真図版54



写真図版55



写真図版56



图 28-3



图 28-4



图 28-5



图 28-9



图 28-11



图 28-12



图 28-14



图 28-10



图 28-15



图 28-16



图 28-17



图 28-18



图 28-19



图 28-20



图 28-21



图 28-23

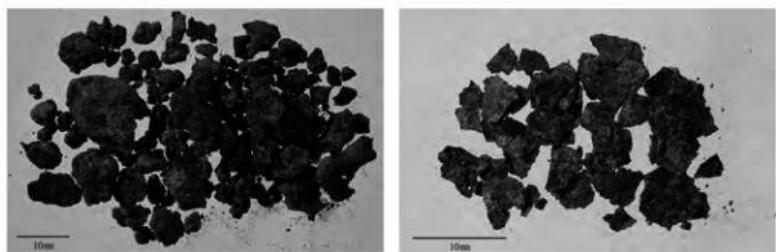
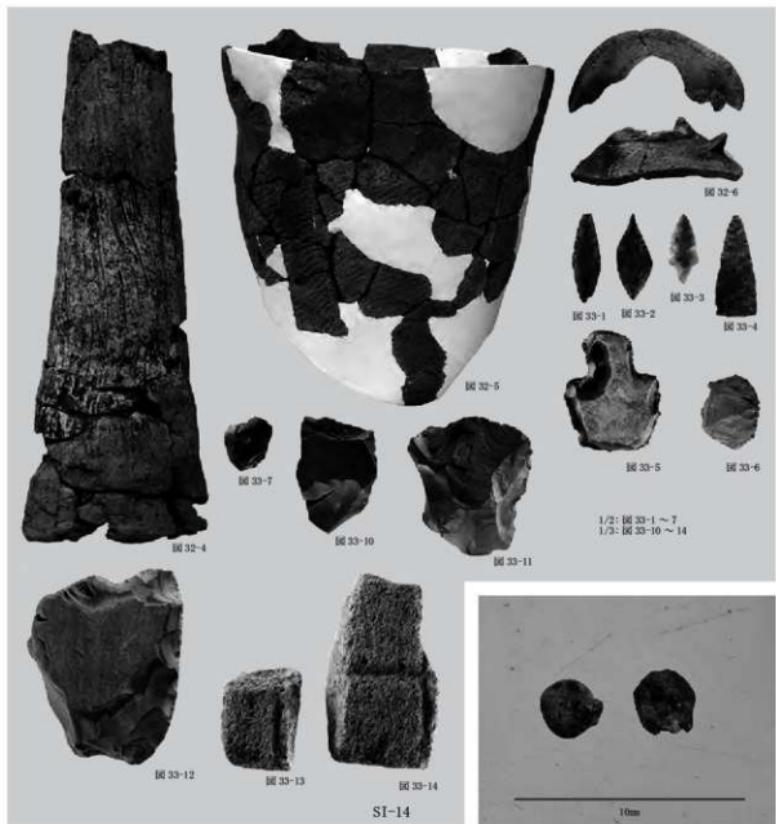


图 28-24

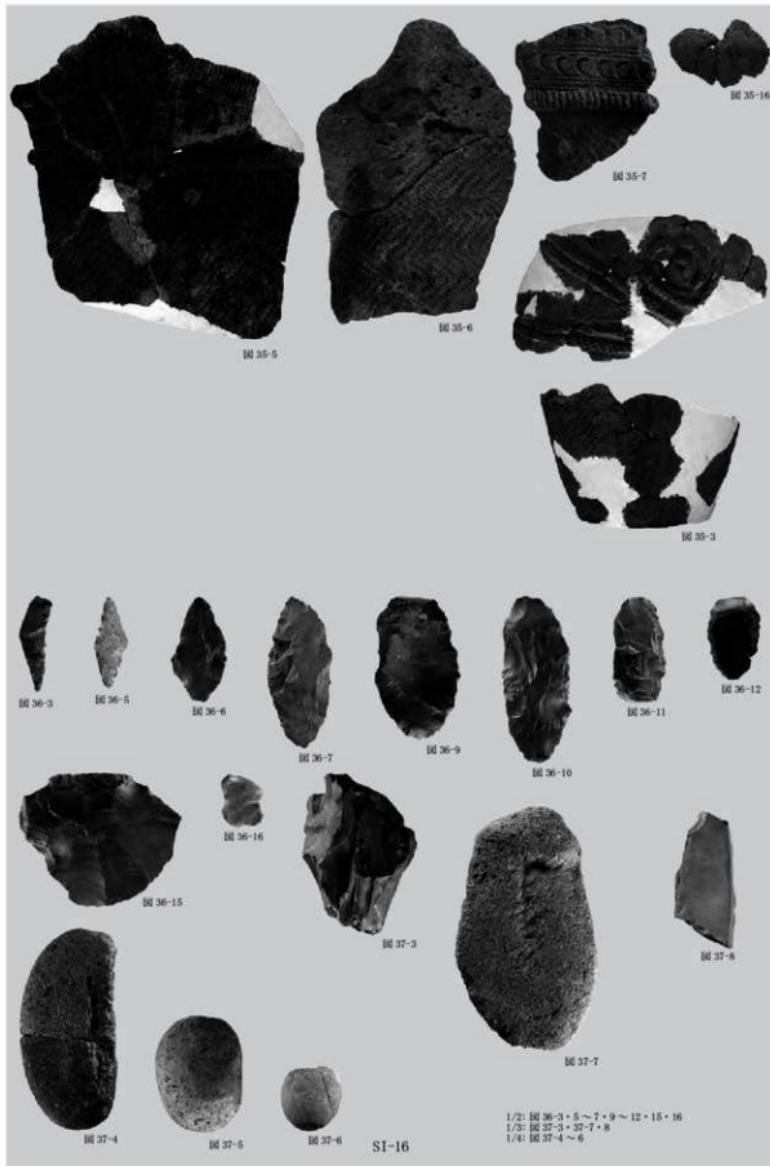
1/2: 图 28-15 ~ 21 + 23
1/3: 图 28-24

SI-11

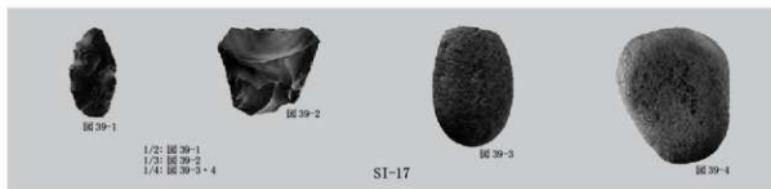
写真図版57



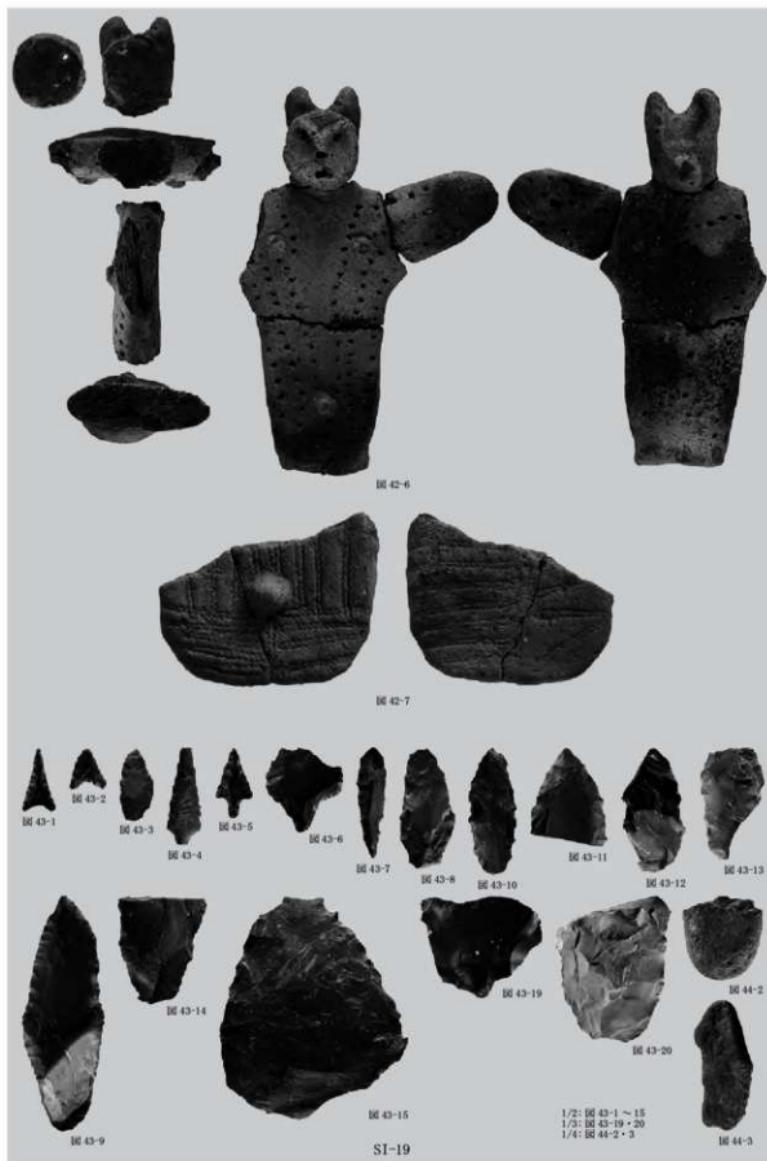
写真図版58



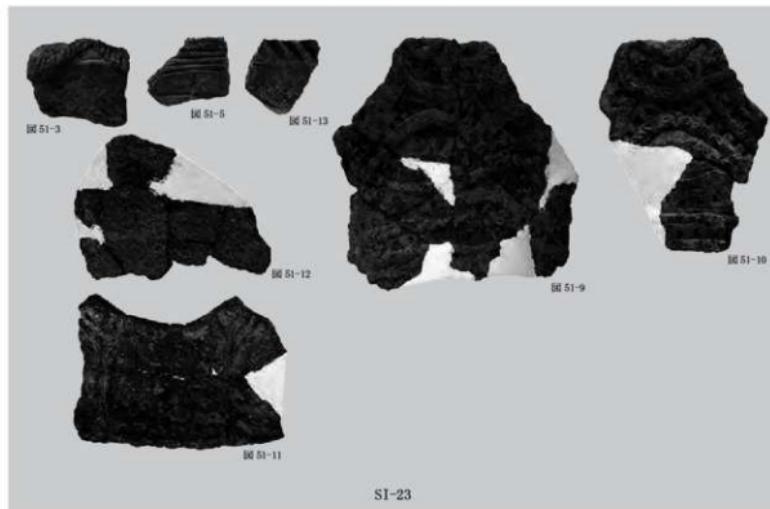
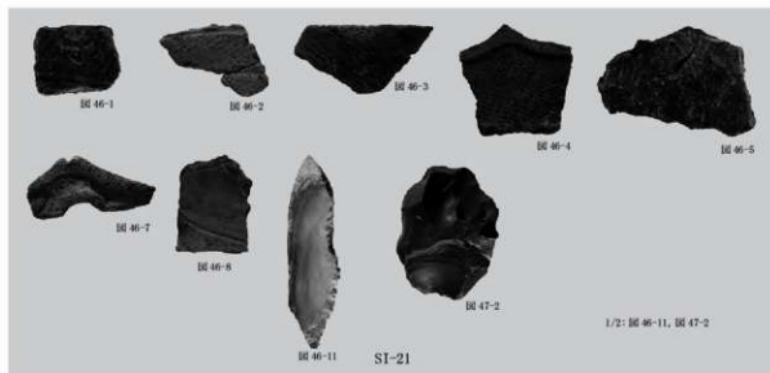
写真図版59



写真図版60



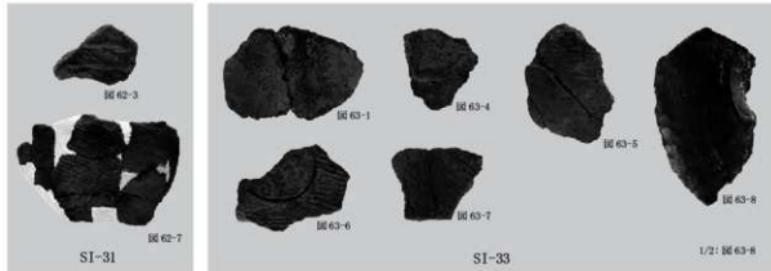
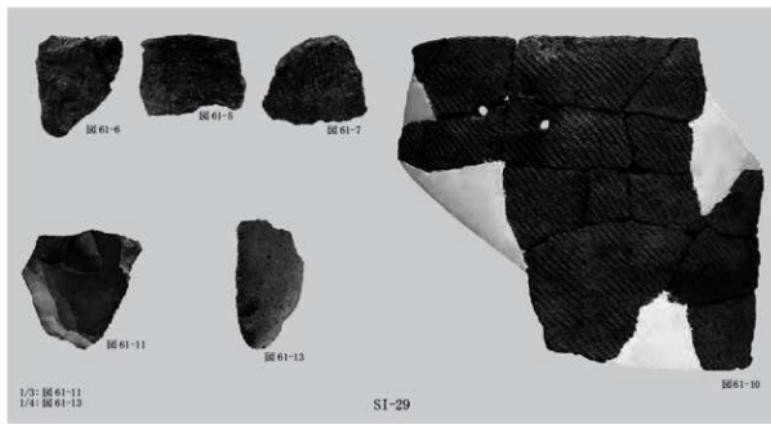
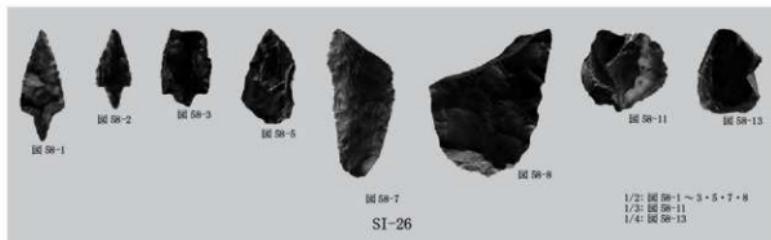
写真図版61



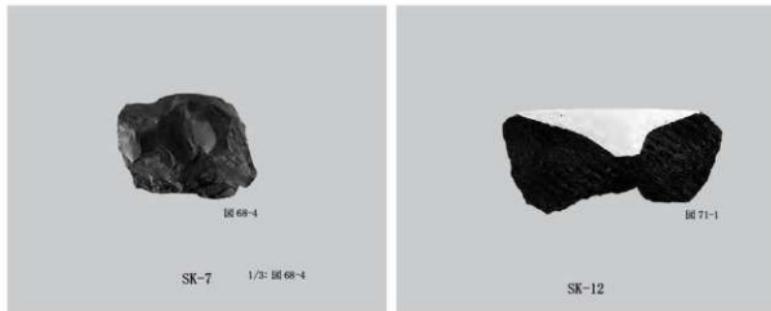
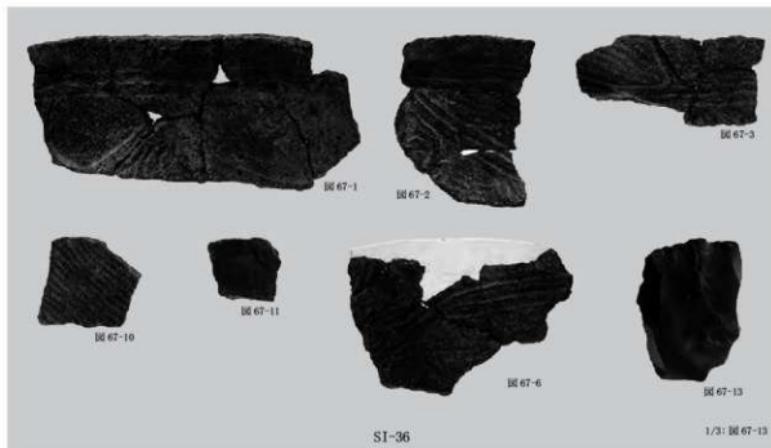
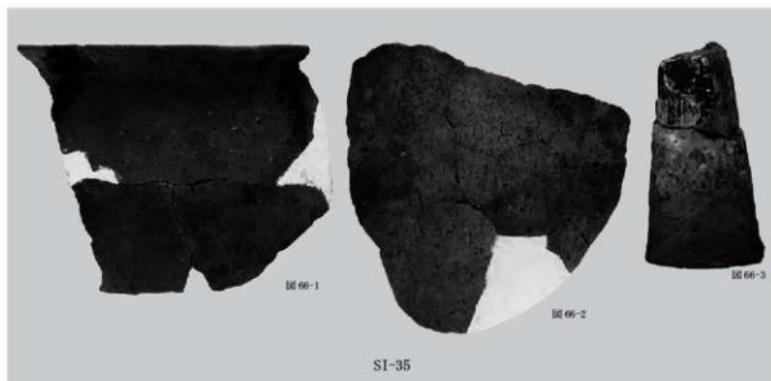
写真図版62



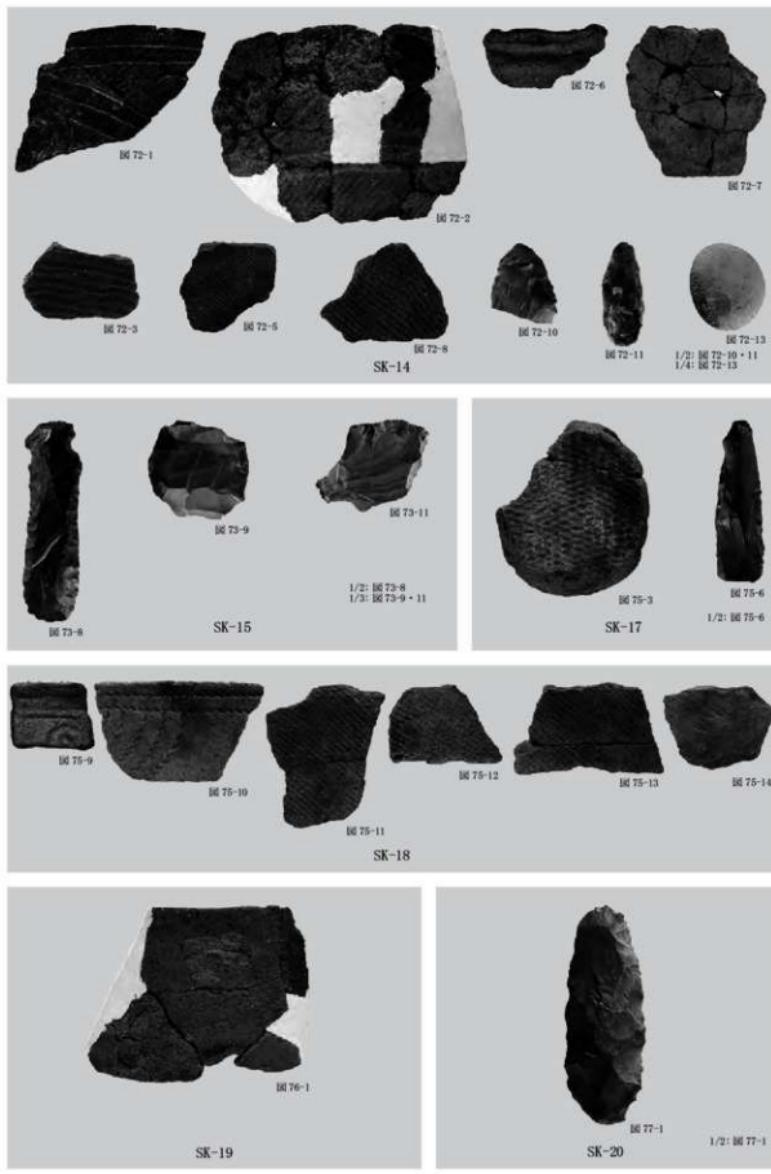
写真図版63



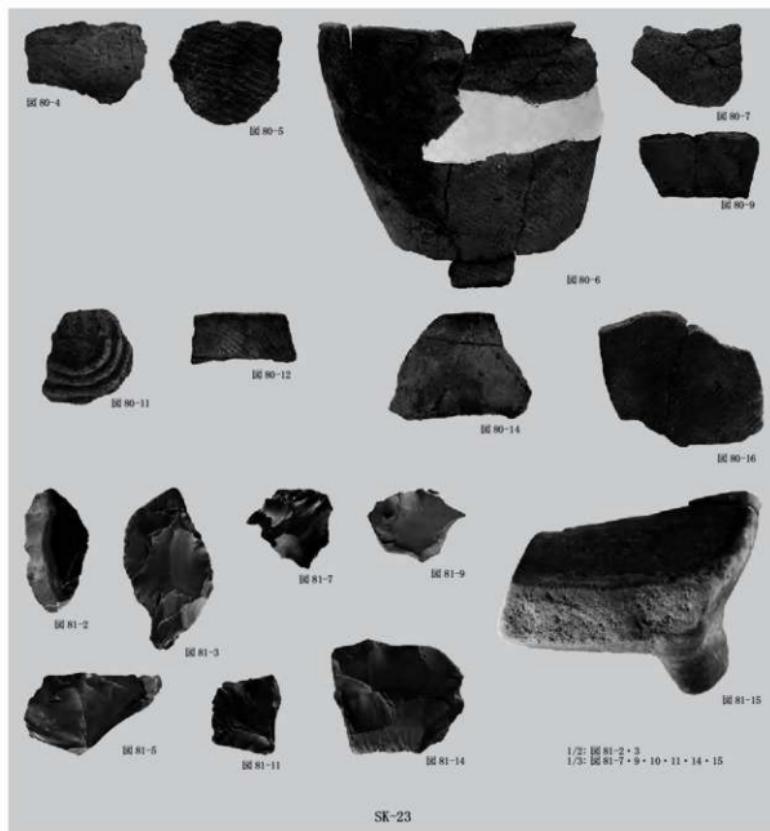
写真図版64



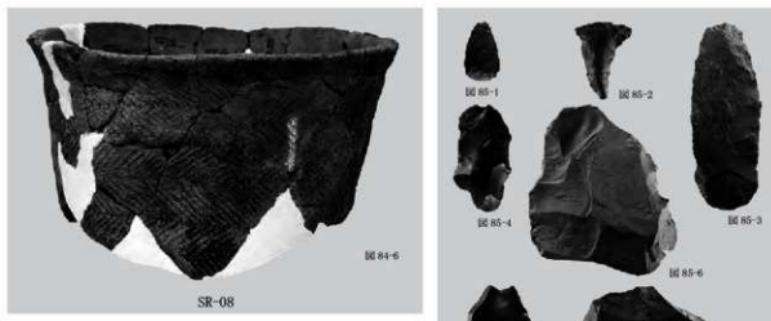
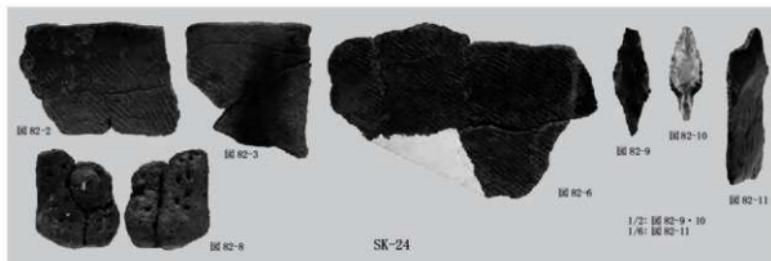
写真図版65



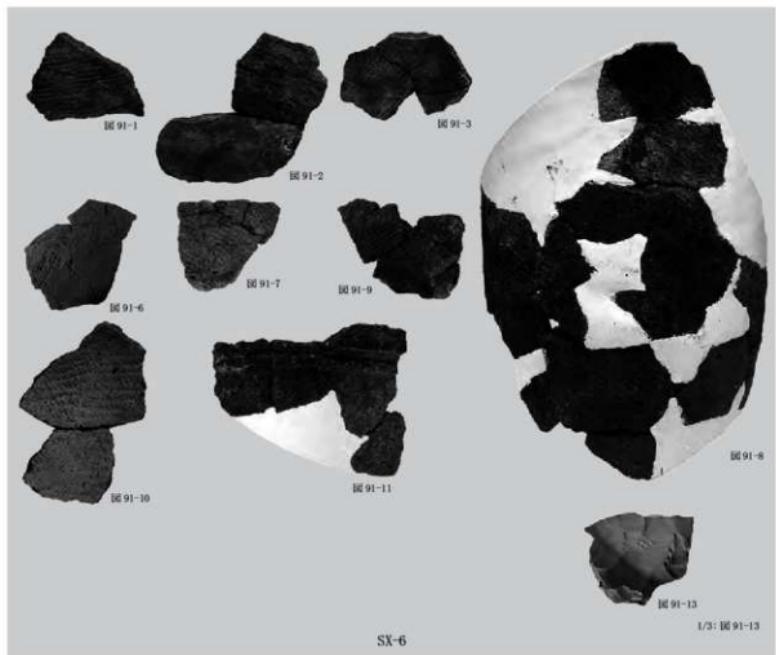
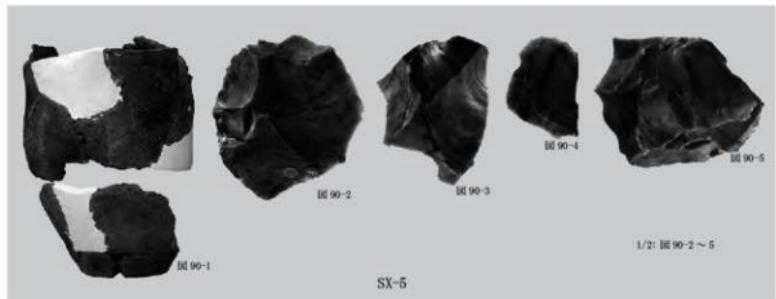
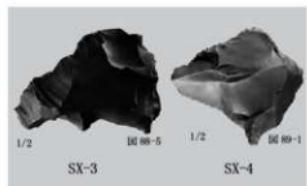
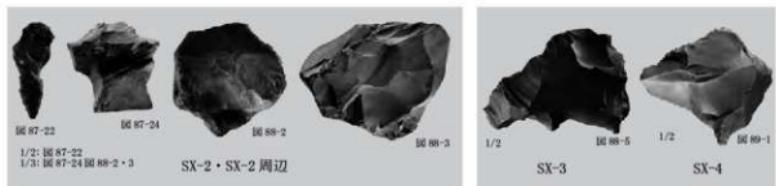
写真図版66



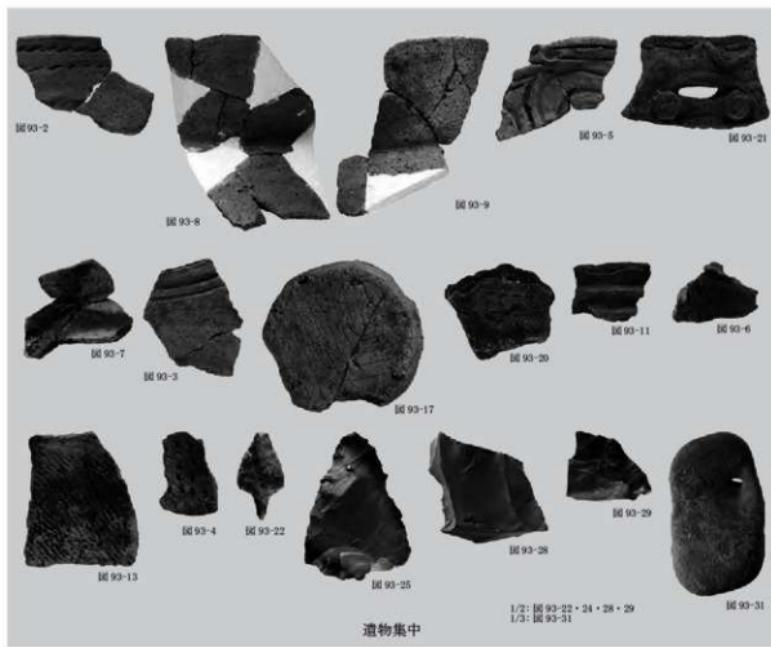
写真図版67



写真図版68



写真図版69



報告書抄録

ふりがな	やまだかっこにいせき							
書名	山田(2)遺跡							
副書名	国道280号道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第469集							
編著者名	中村 哲也、宮嶋 豊							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2009年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 番号	日本測地系 (Tokyo Datum)	調査 期間	調査 面積	調査 原因	
やまだかっこに 山田(2)遺跡	あおもりけんひがしづかの 青森県東津軽 ぐんえいとうきのけん 郡蓬田村大字 せきへにあおひだ 瀬辺地字山田 522、ほか	02304	12017	北緯	東経	20060530	620m ² 2,200m ²	国道280 号道路改 築事業に 伴う事前 調査
				40° 00' 19"	140° 38' 35"	~ 20060807		
				世界測地系 (JGD2000)		20070423		
				北緯	東経	~ 20071026		
		40° 00' 28"	140° 38' 23"					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山田(2)遺跡	集落	縄文時代 前期末葉	埋設土器遺構 2	縄文土器・石器	多量の石核・フレーク類が 出土した。石器製作を行った 遺跡であると考えられる。			
	集落	中期 (円筒 上層式)	住居跡 2軒	縄文土器・石器 埋設土器遺構 1基				
	集落	中期後葉～ 末葉	住居跡 1軒	縄文土器・石器				
	集落	中期末葉	住居跡 2軒	縄文土器・石器・ 土偶				
	集落	中期末葉～ 後期初頭	住居跡 10軒 土坑 3基 配石遺構 1基 埋設土器遺構 1基	縄文土器・石器				
	集落	中期末葉～ 後期前葉	住居跡 1軒 土坑 1基					
	集落	中期末葉か それ以降	性格不明遺構 1基	縄文土器・石器				
	集落	後期初頭	住居跡 2軒 土坑 5基 埋設土器遺構 1基	縄文土器・石器				
	集落	後期初頭か それ以降	性格不明遺構 1基 土坑 1基	縄文土器・石器				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山田(2)遺跡	集落	後期前葉	埋設土器遺構2基	縄文土器	
	集落	縄文時代 (時期不明)	住居跡 3軒 土坑 7基 性格不明遺構 1基 焼土遺構 1基	縄文土器・石器	
	集落	古代	住居跡 3軒	土師器・擦文土器・ 鉄滓・鐵造剥片	
		不明	性格不明遺構 2基		

要約

山田(2)遺跡は青森県東津軽郡蓬田村の海岸段丘に立地する。2006年・2007年度の調査の結果、縄文時代前期末葉から後期前葉、および平安時代の集落であることが明らかになった。

2006年度・2007年度の調査は、瀬辺地川に面した台地先端部付近を中心で実施した。

縄文時代の遺構は縄文時代中期末葉から後期初頭のものを中心として住居跡21軒、土坑17基、埋設土器遺構7基、焼土1基、配石遺構1基、性格不明遺構3基が検出された。遺物は土器・石器が主体である。石器は、石核・フレーク類が多量に出土し、石器製作を行っていた遺跡であると考えられる。平安時代の遺構は、住居跡3軒が検出された。うち1軒からは擦文土器が出土した。また、別の1軒からは鉄滓・鐵造剥片が出土した。

2006年度・2007年度の調査は遺跡のごく一部を調査したに過ぎず、今後継続して調査が実施される予定である。

青森県埋蔵文化財調査報告書 第469集

山田(2)遺跡

—国道280号道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2009年3月25日
 発 行 青森県教育委員会
 〒030-0801 青森市新町二丁目3-1
 編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
 〒038-0042 青森市新城天田内152-15
 TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702
 印 刷 株式会社 サンエイ
 〒030-0121 青森市妙見3-2-19
 TEL. 017-738-0040 FAX. 017-738-0880
